

街のお花屋さん

坂ノ下

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鎌倉の街の片隅に、小さなお花屋さんがありました。

目次

第1話	アマノ	1
第2話	繋がり	12
第3話	盟友	25
第4話	家族の形	39
第5話	初夏、甲州	53
第6話	過ぎゆくもの	67
第7話	遠藤亜羅椰について	80
第8話	続・遠藤亜羅椰について	
91		
第9話	続々・遠藤亜羅椰について	
107		
第10話	たくのみ!	124

第1話	小さな出会い	138
第12話	小さな恋路	152
第13話	抛って立つモノ	168
第14話	硝子きらめく中で	180
第15話	異郷	195
第16話	異邦人	213
第17話	暮らし街並み	229
第18話	街のお巡りさん	243
第19話	新時代の力	258
第20話	アーセナル	271
第21話	作り生み出す道	288
第22話	ふうふそれぞれ	303
第23話	受け継がれること	318

447	第32話	新人記者	二川二水	④	
434	第31話	新人記者	二川二水	③	
420	第30話	新人記者	二川二水	②	
406	第29話	新人記者	二川二水	①	
	第28話	思い出の花			391
	第27話	昔語り			371
	第26話	贈り物			356
	第25話	希望			344
	第24話	世界の行方			331

	第33話	千客万来			465
	最終話	日はまた昇る			479

第1話 アマノ

鎌倉の市街中心部から離れた並木道に沿って、多数の商店が並ぶ中に、木造平屋の小ぢんまりとした建物が紛れていた。

表の通りから見て開放的なその建物内で、多様な花が自らの色鮮やかさを誇る。鉢植えの中で、陳列棚の中で、ガラス張りのフラワーキーパーの中で。見る者の心と嗅ぐ者の鼻に、何かしらの情を訴えかける。

その建物とはフラワーショップ、花屋であった。

店内の奥まった所にあるカウンターに、一人の女性が立っている。腰まで届く白銀色の髪を後ろで一本に纏めた、少女とも見紛う童顔小柄な女性。白いカッターシャツの上から黒の胸当てエプロンを着けた彼女は店の従業員だ。

女性店員——樟美くずみはカウンターの内側から外の通りをぼうつと眺めていた。平日の15時で、天気は曇り空。来客は疎ら。有り体に言って、暇だった。

そんな樟美が奥の陳列棚に向かって作業をしていた時のこと。

「すみません」

ちよつとだけ間延びした女の子の声が入る。

樟美は作業の手を止めて振り向いた。

「いらつしやいませ……？」

誰も居ない。少なくとも視界に映る範囲には。

そこで樟美は少しの間考えた後、店の奥から店先へと歩いていく。

すると、やはり居た。鉢植えから伸びたデルフィニウムなど背の高い花に隠れ、お下げ髪の女の子が遠慮がちにこちらを見上げている。

小学校低学年といったところか。小柄だが20歳の歴とした大人である樟美に比べて、当然ながら背が低い。

少女がいつまでも用件を告げなかったので、樟美はその場で屈んで女の子と目線を合わせた。

「どんなお花が欲しいんですか？」

「あの、お母さんの誕生日で……それで、お母さんにお花をあげたいです……」

樟美は決して愛想が良い方ではない。それでも女の子はたどたどしくも、話し始めてくれた。

見て分かる通り、この小さなお客さんは引つ込み思案なのだろう。かつての自分を見ているようで、樟美は自然と頬を緩ませる。

「お母さんへのプレゼントですね。お金は持ってきていますか？」

「お小遣いで……」

女の子の予算を確認すると、樟美は折り曲げていた膝を伸ばして中腰を止めた。そうして店内を見回しながら考える。

母に贈る花と言ったら、定番は言わずもがなのカーネーション。だが母の日はもう少し先だ。それに女の子が「誕生日だから贈りたい」と言った以上、かぶらない方が良くかもしれない。

そこまで考えてから、樟美は陳列棚に置かれた透明なガラス瓶に目を付けた。そこには赤や白や桃色など、鮮やかな何枚もの花卉がギュッと重なった花が活けられている。

「薔薇はどうでしょうか」

「はーっ……」

「5月の誕生花なんですよ」

小首を傾げる女の子の前で、樟美が作業机の上に広げた厚手のペーパーに薔薇を横たえていく。ピンクの薔薇を主役に、赤やオレンジのものを添える。本数は、母の日ならば『最愛』を意味する11本が最適だろう。しかしここは予算を考慮して、『感謝』の意を持つ8本にした。

樟美の手の中に慎ましやかな花束ブーケが出来上がる。

「きかれ……」

その花卉の明るい色どりに、女の子は見入っているようだ。それから幾ばくもせず、8本の薔薇はお買い上げされる。

ブーケを受け取った少女のはにかんだ笑顔が印象的で、樟美はじつと見つめるのだ。た。

「ありがとうございます」

店先でそうお礼を言う女の子。

「お母さん、喜んでくれるといいね」

「はい！」

店の外、歩道の上を女の子が急ぎ足で歩き出した。

だんだんと遠ざかっていく小さな背中に、転ばないよう見送る樟美が小さく手を振る。

やがて見送りを終え、店の中に戻ろうかと思ったところ、後ろの方に気配を感じて振り返ろうとする。だができなかつた。背中から密着されて、脇の下から腕を回され抱き締められたから。

「ただいま、樟美」

「天葉姉様！」

樟美の銀髪に顔をうずめてきたのは、セミロングの金髪を後ろで束ねた女性。彼女、

あまのそらは
天野天葉はお店の主。フラワーショップ『アマノ』の店主だった。

「あの子、嬉しそうだったね」

店内のフラワーキーパーの中身を整理しながら天葉がそう言った。

ちなみに、フラワーキーパーとは花用の冷蔵庫。温度管理が求められる花はの中で活けられることになる。

「見てたんですか？」

「うん。声を掛けても良かったんだけど、折角の樟美の接客だし。外で見てたんだ」

天葉の言葉に恥ずかしくなったのか、陳列棚の拭き掃除をしている樟美が軽く俯いた。

実際、この仕事を始めてから樟美の人見知りは大分改善されている。ガーデンに居た頃、リリイだった頃に比べるとそれは明らかだ。流石にニコニコ愛想良く……とまではいかないが。天葉はこのぐらいで十分だと思っている。

「樟美も何だか嬉しそうだった」

「そう、かもしれせん」

「うくん、ちよつと妬いたなあ」

「ええ？ 子供に妬いたんですか？」

冗談めかしてそう言う天葉だが、全くの嘘というわけでもない。樟美が自然な笑顔を向けたことに、ほんの少しだけ妬けたのは事実である。

可憐な容姿に、儂げな雰囲気。身軀を差つ引いても魅力的な女性だと天葉は思っている。

時折、一瞬だけ、「宝箱か何かに大事にしまっておきたい」などと考えることがあった。だが勿論実際にはしない。天葉も樟美も、そんなことを本当に望んだりはしないのだ。

「ま、私がちゃんと見てるから、変な虫は寄つてこれないんだけどね」

「もう、姉様！」

天葉が横から小さな肩を抱き寄せ、頬と頬を擦り付ける。樟美もリリーの頃に比べて少しだけ背が伸びたが、天葉も同じく伸びたため、頭半個分という身長差は変わっていない。変わっていない。

変わらないものと言えば、呼び方もそうだ。ガーデンを卒業して今の関係になつてからも、樟美は天葉を姉様と呼ぶ。今更変えるのもしつくりこないのだろう。天葉も特に

不満はない。

そんな二人の関係を、近所の人間や常連客は大体知っている。殊更に喧伝しているわけではないが、隠してもいない。初めてここを訪れる者が見たら、似てないが仲の良い姉妹に映るだろうが。

天葉と樟美が居を構えているのは、お店から10分ばかり歩いた所。大通りから外れた閑静な住宅区にあった。

二階建てだが店と同じく小ぢんまりとした一軒家で、入り口横には業務用のミニバンが止まっている。二人で暮らす分には十分過ぎる環境だ。駅を利用する際に多少不便なのが問題なぐらいであろう。

「うん、まあ平日だし。売り上げはこんなものか」

一階のリビングにあるテーブルの席で、天葉はタブレット端末と見つめ合っている。お店の帳簿を付けているのだ。

以前は個人所有が珍しかったタブレットも、今ではそれなりに普及しつつあった。戦況好調につき、民間生産が回復している恩恵である。それはリリイとして活躍していた彼女らにとって誇らしいことだった。

「お店、厳しいんですね」

心配そうな顔を覗かせてくる樟美はテーブルの向かい側。彼女は彼女でタブレットではなく、紙のノートにペンで書き込んでいる。家計簿と献立表を作っているのだ。

「ああ、いや、店頭売り上げの話だから。本当に予想の内だよ」

「ほっ。よかった……」

事実、売り上げ先のメインは店に足を運ぶ個人客ではなく、大口の契約をくれる法人であった。

天葉の言葉通り、店頭売り上げは収入の主体になり得ない。それは店の性質を考えれば仕方がないことだった。店頭まで大量の客を呼び込めるのなら、話は別なのだが。

「ところで姉様、明日のお夕飯は何がいいですか?」

「もう明日の夜の話? うくん、特には。何でもいいかな」

『『何でもいい』が一番困るんです!』

「えーっ、本当に何でもいいのに」

樟美の料理には非の打ち所が無かった。天葉が元々好き嫌いしない性分なのを抜き

にしても、相当な腕前と言えるだろう。天葉はパン派、樟美は米派という好みの違いこそあるが、彼女の腕の前では些細な問題である。

「なら、あれ使つてよ。依奈と壱がお裾分けしてくれた鮭」

「サーモンですね。あれを使うならシンプルにお刺身と、マリネと、ホイル焼きと……」
天葉からの要望を聞くや否や、樟美は真剣な顔で献立表の上にペンを走らせ始めた。

こうなった樟美はちよつとやさつとでは止まらない。テーブル越しに右手を伸ばして樟美の頬つぺたをふにつと触ると、天葉は手を引つ込め自身の仕事に戻った。

彼女たちのような元リリイにとって、日々の食事はある意味で現役リリイ以上に切実な問題である。うっかり現役時代のペースで食べ続けると、忽ちお腹がラージ級ギガント級にランクアップしてしまう。20歳を過ぎると緩やかにマジが減退していき、それに伴い代謝もゆつくりと下がっていくからだ。

とは言え、流石に献立表を用意するほど厳密な管理は必要無い。樟美の料理に対する拘りがそうさせるのだろう。お陰で天葉は何の苦労もなく食事を楽しめているのだが。

「樟美ー」

暫く経つて、視線を手元のタブレットに落としたまま呼び掛ける。

しかし返事が無い。

「樟美ー？」

今度は呼び掛けながら視線を上げる。

すると目の前には、自分の腕を枕にして机上に突つ伏した樟美の姿があつた。耳を澄ませば、小鳥の寝息もかくやと、小さな音が漏れ聞こえてくる。

天葉は作業を終えて椅子から静かに立ち上がった。

「お疲れ様」

敢えて聞こえないであろう大きさの声でそう言うと、慎重に樟美の横に移動し、慎重に彼女の体を抱え上げた。

相変わらず、軽い。

そう思ったのも束の間。眼前に近付いた白く細やかな頬と、薄ら桃色の唇に、天葉は口づけを落としたくなる欲求に駆られる。

けれどもその欲求は、本日のところは我慢した。

「いつもありがとね」

代わりに耳元で感謝の言葉を囁いて、寝室に向けて歩き出す。二人は右手中指の代わりに左手薬指へ指輪をはめていた。

カーテンと窓ガラスの外側では、すっかり夜の帳が下りていた。そんな暗闇の中に、ぼつぼつと複数の灯が灯っている。人家と街灯の灯りである。

今、灯りの中の一つが消えた。その家の表札には住み処として二人の名が記され

ていた。

A
M
A
N
O
S
O
R
A
H
A
K
U
S
U
M
I

第2話 繋がり

鎌倉の街の小さなお花屋、フラワーショップ『アマノ』。いつもそこそこにお客が入り、そこそこに花が売れていくこの店が、何やら妙に騒々しい。

店に居る客は三人の若い男。三人が三人とも見上げるほどの長身で、筋骨隆々とした肉体を作業着の中に押し込めている。

彼らは各々お目当てのブツを手に、カウンターに立つ樟美へと詰め寄った。双方の体格差は歴然。正しく『大人と子供』という言葉そのものである。

「ヒヤッハッ……！ 新鮮なチューリップの苗だあ！ 水う！ 水をくれてやる！」

「おうおう店員さんよお！ 人数分のお花を包んでもらおうか！ ペーパーは赤と黄色とオレンジだぜえ」

「母の日のメッセージカードも添えてくれよな。頼むよー」

「お客様、店内ではお静かに願います」

「ヒヤハ……」

「すみません……」

「ごめんなさいでした……」

樟美に窘められたものの、買い物が無事に済ませた三人は意気揚々と店を後にした。

そんなお客の後ろ姿を店前で見送る樟美のもとへ、配達を終えて車を家に戻してきた天葉がやって来る。

「あれっ、あの三兄弟また来てたんだ」

「えっ、ご兄弟だったんですか？」

「桃園の誓いを立てたとか何とか言ってたから、兄弟みたいなものでしょ」

「ふーん……。百合ヶ丘のノルンみたいですね」

「いやー、それはどうかなあ」

軽く雑談を交わしながら、二人は店内へ入っていく。母の日の夕方とあって、これからまだまだ来店が見込めることだろう。

だがその間にも、樟美の思考は別件へ傾けられていた。

(天葉姉様に悪い虫が付かないよう、気を付けないと)

容姿端麗・明朗闊達な天葉は男女問わず人から好かれ易かった。ガーデン在学中もそうなのだが、大人になってお店を始めて以降、樟美はその事実を余計に認識するようになっていた。

(特に、週末に最低一度は訪ねてくる女子高生のグループ。あれは絶対、姉様狙い。女子高生が毎週毎週お花屋に来るわけない)

そんな花屋としてあるまじきことを考える。どこから虫が飛んで来るか定かでないので、樟美もおいそれと気が抜けないのだ。

もつとも、先程の件に関して言えば、大して危機感は抱いていなかった。

「……あの三人は大丈夫かな」

「樟美、何か言った？」

「何でもありません」

中等部時代の体験から、樟美は他人の心の機微に敏感になっていた。その彼女から見て、あの三兄弟は天葉に全く下心を持っていない。仕事での取引以外で男性が花屋を利

用するのは既婚者かそうなる予定の者がほとんどだろうが、違うのならば珍しい話である。ああ見えて所帯持ちの可能性も、あり得なくはないが。

ただ敢えて言うなら、天葉や樟美相手にはなくとも、花に対する執着は大いにあるようだった。

「じゃあ、もうちよつと頑張ろうか。母の日、せつかくの書き入れ時だしね」

「はい、姉様」

翌日、書き入れ時を過ぎた『アマノ』に馴染の客の姿があった。それも個人客ではなく、大口の契約先である。

「注文書わざわざ持って来てくれたの？ メールで良かったのにー」

「あつ、いえ！ 街に用事がありましたから。それに天葉様と樟美さんにも会いたかったので」

「そっか。まあちよつと座つてよ。狭い所だけど」

開店時間の10時まででは、まだ少し時間があつた。そんなお店の裏手、バックヤードと隣り合つた事務室で、セミシヨートの桃色髪を伸ばした女性が丸椅子に腰を下ろす。

樟美と同じく少女とも呼べる顔立ちの女性だつた。ただし樟美とは対照的に、お日様のように朗らかに笑う女性である。身に纏つてゐるのはゆつたりとした黒のレディーススーツ。彼女は天葉たちの母校である百合ヶ丘女学院の職員だつた。そして同時に、同校卒業の元リリイでもある。

「やっぱり凄いです、天葉様！ ご自分のお店を持てるなんてー！」

「あはは、現状維持で精一杯だけどね。梨璃リリイさんこそ、一年生寮の寮母さんになつたんだつて？」

「はい。けどリリイのまとめ役は寮長さんの仕事なので。私はただの雑用係なんですけどね」

梨璃の台詞も全くの謙遜というわけではない。百合ヶ丘の学生寮では現役のリリイから選出された寮長が生徒の生活指導を行なうため、職員から選ばれる寮母は施設管理者の面が強かつた。

とは言え、寮母に選ばれるのはリリイからもガーデン側からも信頼されている証なので、20歳の新米職員が抜擢されたのは大したものである。

「でも！ 後輩リリイのためですから！ それに大学出立での新米にも、できることは

あります！」

そう力強く宣言できるのは、希望に満ち溢れた若人の特権か。もつとも梨璃の場合はそれだけでなく、彼女自身の気質でもあった。

なお梨璃が出たのは二年制の短期大学である。彼女に限らず、ガーデン卒業後に短大を進路に選ぶリイは少なからず居た。

かつて、学歴社会化により一時は廃れた短大。今はそれも見直されている。対ヒューズ戦争がもたらした荒廃のために人手を欲する現代社会にとつて、少しでも早く働き手を育ててくれる短大は有り難い存在なのだ。

「相変わらずの頑張り屋さんだねえ。でも無茶はしないでね。夢結が心配するから」
「はい、気を付けます」

「そう言えば、その夢結も元気してる？」

「お姉様も変わりありません。よく『体がなまってしまふ』って漏らしてます」
「ははっ、本当に変わりないね」

梨璃もまた、かつてのシユツツエンゲル——擬似姉妹——をお姉様と呼び続けている。喧嘩別れしたわけでも疎遠になつたわけでもないのなら、むしろそちらの方が主流なのかもしれない。

話題に挙がった白井夢結は梨璃より一年早く母校の百合ヶ丘に務めていた。立場は

梨璃と同じくガーデン事務職員。その中でも教務課に属して試験の運営や講義時間割の作成等に携わっている。体がなまると言っているのは、屋内業務中心のため。それでも経理課などよりはマシだろう。

「生え抜きの子ならともかく、梨璃さんみたいな高等部編入の子がここまで関わられるなんて、実際凄いなと思うよ」

「そうでしょうか？」

「うん。いくらガーデン教職員が、元リリーの受け皿と言つてもね」

「自分ではよく分かりません。リリイじゃなくなつても、リリイへの憧れはなくなつてなくて。ただその気持ちのまま、やってきただけなんです」

さも当たり前かの如く言つてしまう梨璃に対し、天葉は眩しきで目を細める。大人になつても立場が変わつても、梨璃は梨璃なのだ。ガーデンに残つた者、ガーデンを去つて市井に溶け込む者、様々な生き方があるが、天葉と同じように感じる者は少ないだろう。

「あつ、お店あるのに長居しちゃいました。これ、注文書です」

「はい、確かにお預かりしました。寮と霊園に飾る花の換えだね」

「お願いします。私、樟美さんにご挨拶してお暇しますね」

梨璃から紙の注文書を受け取つた天葉は内容をざつと確認した。

それから慌てた様子で椅子から立ち上がった梨璃を見て、「ゆつくりしていけばいいよ」と軽く引き留めようかと口を開く。

ところが天葉が声を掛けるより先に、店の陳列スペースから樟美が戻ってきた。

「天葉姉様、お花の切り戻し終わりました」

「樟美さん！ ごきげんよう」

「梨璃さん、ごきげんよう。もしかして注文ですか？」

「はい。お二人に会いたくて来ちゃいました」

一度は立ち去る態勢を取った梨璃が樟美とのお喋りに花を咲かせる。

こういうところも変わっていない。そう思いながら、天葉は口元を持ち上げ静かに笑みを浮かべる。

「でも本当、夫婦ふうふでお店なんて憧れちゃいます！」

樟美との会話の中、興奮気味にそう主張する。そんな彼女の左手薬指では、指輪が柔らかな光を反射していた。

彼女は白井梨璃しらいりり。アマノの大手取引先、百合ヶ丘女学院との窓口であった。

陽が落ちて辺りの街灯が爛々と目立ち出した頃、アマノは店頭の鉢植えを中にしまつてシャッターを下ろす。

樟美が花瓶の水の交換や傷んだ花のチェックに勤しむ間、天葉は事務室で伝票の整理に当たっていた。

狭い空間内にある、書類や事務用品が所狭しと置かれた事務机。丸椅子に腰を下ろして紙の束をパラパラと捲る内、昼間に渡された注文書が天葉の目に留まる。

私立百合ヶ丘女学院。世界でも有数のガーデン。天葉たちの出身校であり、アマノが成り立っている理由の一つであった。

「百合ヶ丘様様だねえ」

誰に聞かせるわけでもなく、天葉は苦笑するように呟いた。

幾ら在学中に簿記やマーケティングを学んだとは言え、幾らガーデン卒業後に園芸専門学校に通つたとは言え、20代の小娘が独力でお店を開けるとは天葉自身も思っていない。

小さいながらも一国一城の主になれた訳とは、鎌倉府の個人事業主助成制度に加え、ガーデンという大口のお得意様が付いてくれたお陰であった。そしてそれはひとえに、

天野天葉がアールヴヘイムのリリイとして高い知名度を誇っていた恩恵と言える。

レギオン
LGアールヴヘイム——

百合ヶ丘トップレギオンにして世界最高峰のレギオン。撃破したネスト多数、屠った大型ヒュージは数知れず。メディアにも盛んに取り上げられ、国内外にその名を轟かせている。天葉は高等部時代、主将としてそんな集団を纏め上げていたのだ。

アマノが百合ヶ丘から契約を貰えたのはコネクションのお陰。社会に出立ての小娘といえども、それぐらいは分かる。ついでに言えば、鎌倉府庁や鎌倉市内の公民館から時折注文が来るのも、同じ理由だと考えていた。

しかしながら、天葉が現状を悪傾向と捉えているかという点、それは違う。

「お花のお手入れ済みました」

「ありがとー樟美。すぐ追い付くから、先に帰ってて」

売り場から事務室へやって来た樟美に労いの言葉を掛ける。彼女は天葉に促され、エプロンを外して帰宅の準備に入った。

天葉としては、花屋として名を揚げたいとか、縄張りを拡大したいとか、そんな大きな野心は抱いていない。ただ、大好きな花に関わる仕事を、大好きな人と一緒に続けていきたい。そんな想いから今のこの店の存在があるのだ。

勿論、花に関しては手を抜いているつもりはないし、益を増やす努力も止めてはいな

いのだが。

「あ、やっぱりちよつと待って」

急に思い出したかのように、天葉が呼び止める。

だが樟美は止められるまでもなく、大きめのトートバッグを肩から下げた状態で部屋の隅に立っていた。何か言いたげな顔で——傍目には無表情だが天葉視点ではそう映った——天葉の様子を見つめている。

椅子から腰を離して立った天葉はそのまま歩き出し、樟美の前で頭を軽く傾けた。

ふにとした感触が唇を押す。

樟美はそれに驚く風でもなく、当たり前のように受け入れる。それから踵を浮かせて背伸びをし、今度は自分から天葉の唇を求めた。

「……………んっ、んむっ、ねえさまっ」

桜の花弁みたいな小さな桃色が、天葉を離すまいとくつついてくる。その感触と熱を何度か味わった後、天葉の両手が華奢な両肩を掴み、そつと互いの距離を離す。

「姉様、どうしたんですか？」

「んー？ どうもしないよ」

「そうですか」

瞬きしながら自身の口に指先を当てていた樟美だが、何でもないという天葉の返事を

聞くと、先程言われた通り帰宅するべく事務室を出た。

本当に、特段何かあったわけではない。何となくそういう気分になって、然るべき時と場合を考慮した上で実行する。いつものことだった。二人は結婚しているのだから、何もおかしいことはない。

結婚。擬似でも、ましてやごっこ遊びなどでもない。生活を共にし、苦楽を分かち合うパートナー。正式に籍を入れ法的にも認められた関係である。

この国でも数年前の法改正によつて、天葉と樟美をはじめとしたリリイたちがそういった関係になることが可能となった。別に対象をリリイに限った改正ではないのだが、最も恩恵を受けたと思われるのが彼女たちだった。

全寮制の共同生活、戦場での命の預け合い、海外から留学してきたリリイとの交流。そういった環境下において、リリイ同士が惹かれ合うのは必然とも言えるだろう。

「でもまあ、私は私なんだよね」

もしも中等部で百合ヶ丘に編入しなかったら。リリイにならなかつたとしたら。樟美と結ばれることもなかつたのか。

そんな自分の姿、仮定だとしても天葉には想像がつかなかつた。それぐらい樟美との繋がりが当たり前になつていたので。そして恐らくは、天葉のよく知るリリイたちも同様だろう。

結局のところ、良きにつけ悪しきにつけ、かつてリリイだった縁ゆかりはそうそうなくなったりしないのである。

第3話 盟友

「それでね、各ガーデン……特に鎌倉のガーデンから教導官が出張する話が増えてるわけ。ま、ここは強豪校が多いから当然と言えば当然なんだけど。だから戦闘自体は少なくなっても、教導官の数は変わってないのよ」

先程からハキハキとした調子で天葉と樟美を相手に喋っているのは、艶のある桔梗色のロングヘアを長く伸ばした女性であった。年齢も体格も天葉と同程度だろうか。彼女よりはやや線が細かった。

天野家のリビングだ。三人がテーブルを囲っている場所は。昼下がりにこうしてのんびりしてられるのは本日がアマノの定休日であるがゆえ。それでも朝の内にお店の清掃は済ませておいたのだが。

「本州の脅威が減って、ガーデン縮小の話が出たでしょ？ 結局、縮小じゃなくて将来的な統合ってことになったけど」

「日本はよくても、よその国は普通にまずい状況だよね」

「そうそう、ソラも新聞とかちゃんと読んでるじゃない。実際日本も海上から攻めてくるアルトラ級だのギガント級だのに備えないといけないし」

「それで、統合?」

「昔みたいにあちこちガーデンを持つ必要は無い。でもリリーの数と質は維持したい。そのための統合。鎌倉の場合は百合ヶ丘ちを入れた5大ガーデンとアルケミラに絞るみたいよ」

かつては対ヒュージ戦の最前線の一国だった日本だが、本州においてはヒュージネストを撃破し続け順調に国土回復を達成していた。

しかし、ケイブというワープ手段を擁するヒュージにとって、戦線という概念は人間ほど意味を成さない。事実、日本での敗勢を挽回するかのように、他のアジア地域ではヒュージの活動が活発化しつつあった。

そして日本もまた、完全に後方となったわけではない。北方の大陸方面や南方の小笠原方面などから、依然として大型ヒュージの侵攻が確認されているからだ。実際に矢面に立つ者たちからすれば、ガーデン縮小など堪ったものではないだろう。

「それにしても、どこからそんな情報持ってくるんだか。依奈って昔からやたら顔が広がったよね」

「あんたが無頓着なだけじゃない? 確かに、私も突っ込んだとこまで聞くようにしてるけどね」

そこで話を区切り、客人——依奈はテーブルの上にあるお茶請けに手を伸ばした。固

い煎餅を噛み砕く小気味よい音がリビングの中に響く。

「依奈様、本当に教導官にならないんですね。意外でした」

天葉の隣、依奈の斜め前の席に座る樟美がそう言うのと、依奈は肩を軽くすくめる仕事を
をする。

「あー、そうね……。教えたいことは大体現役の頃に教え切ったつもりだし。あとは後輩たちに任せるわ。ていうか、色々私に期待し過ぎなのよ！」

しまいには荒げてくる依奈の声。別に樟美に対して怒っているわけではないのだが。

「燃え尽き症候群って奴かー。依奈もまだ20代なのに」

「違うわよ！ もうこれからは、私は私のために生きるの」

「私のためって、専業主婦が？」

「そう。忝に一生涯つてもらうんだから」

依奈もまた天葉たちと同様に既婚者である。ただし彼女の場合、百合ヶ丘卒業後に四年制の大学に進学していた。学生結婚というわけだ。

百合ヶ丘女子学院はお嬢様学校。家が元々裕福な者は多い。だがそれを抜きにしても、ガーデンを無事に卒業できたリイには余裕があった。リイには出撃報酬に加えてヒュージ撃破報酬なるものが与えられるからだ。

この撃破報酬、倒したヒュージが強大であればあるほど額も増えていく。世界トップ

クラスのレギオン、アールヴヘイムのメンバーならば累計の報酬額はかなりのものになるだろう。天葉と樟美が小さいながらもマイホームとお店を持てたのには、そのような理由があつた。

なお撃破報酬については国から支払われている。日本においてガーデン自体は私立校がほとんどだが、国防に関わるのでノータッチとはいかないのだ。なので時には「この御時世に破格の待遇」と槍玉に上げられることもあつた。

「いやー、ごめんなさいねえ。ソラと樟美が汗水垂らして働いてるのに、悠々自適で」
依奈は全く悪びれた様子も見せずにそう言うと、煎餅に続いて湯呑に入ったお茶を啜る。

だが本当は言葉通りに悠々とはしていない。天葉たちもそれは知っている。

ガーデンから講演に招かれたり工廠科に意見を求められたり、現役リリーの勉強会にオブザーバーとして参加したり。アールヴヘイムの司令塔だった依奈の名声は高い。それは母校の百合ヶ丘に限った話ではなかった。

「専業主婦も、悠々自適じゃないですよね。教導官目指してる壺っちゃんを支えているから、尚更です」

「そうだよ、樟美の言う通り。うちは樟美にご飯を任せっきりだけど、それだけでもかなり大変だと思う。だから、こうして毎日感謝してるんだよ」

「んっ、天葉姉様あ」

「はいはい、私をダシにイチャつくな」

腰掛けていた椅子から離れて隣の樟美に頬ずりする天葉。そこに呆れ顔の依奈が突っ込みを入れるまでが、かつてのアールヴヘイムの光景。リリイだった頃の彼女たちの姿であつた。

道は違えども、通じるものは確かにあるのだ。

「じゃーん、百合ヶ丘標準制服ー」

「ええー？ 講義が半ドンで終わって、その後わざわざうちに来たのって、もしかしてそれ見せるため？」

「勿論自作よ、自作。どう？」

「うーん……。似合つてると言えば似合つてるけど。でも気持ち的に、20過ぎて百合ヶ丘の制服はちょっときつくないかな」

「そうかしら？ 壺は喜んでくれたけどね」

「あつ、ふーん……」

「壺っちゃん……」

本来の鎌倉市街は海上からのヒュージ襲来に備え、内陸部への疎開が実施されていた。由比ヶ浜ネストが撃破されて危険度が下がった今でも、そこは空き家が並ぶだけの土地。一度捨てた地を復興させるより、疎開した新天地を拡充させた方が便利なこともあるというわけだ。

したがって現在、鎌倉の街と呼ばれているのは北鎌倉から大船駅周辺にある市街地のことを指す。百合ヶ丘の最寄り駅と線路で繋がっているこの街では、リリーの姿を見かけることもそう珍しくはない。当然アールヴヘイムのメンバーもよくお世話になっている。

そんな鎌倉市街の住宅区に幾つものマンションが立ち並ぶ。中には養生ネットに覆

われた建設途中のものもあった。

依奈と彼女のパートナーである壱が住んでいるのも、その内の一つ。比較的小振り。しかし防犯機能は充実したマンションだった。

マンションの一室、2LDKの間取りの中のキッチンにて、水の張られた鍋が調理されようとしていた。水の中には四角に切られた昆布。隣の調理台の上には小皿に乗せられたカツオ節とパツクの味噌が出番を待っている。

腰にエプロンを巻いて鍋の前に立つ依奈がコンロのつまみに手を掛けて……やっばり離した。

「お味噌汁は温め直すと風味が落ちてしまうので、できるだけ直前に作ってください。それか、味噌だけ後入れすれば出来立て同然のものが作れます」

昔に教わった樟美の言葉を思い出し、味噌を冷蔵庫にしまってから今度こそコンロのつまみを捻った。

電気によって生み出された弱火相当の熱が鍋を温め始める中、依奈はくすりと笑みを溢す。先程のやり取りが交わされた当時のことまで思い出してきたからだ。

実の所、当初から微妙だった依奈と壱の仲が急速に縮まった後も、依奈と樟美の関係は少しの間距離があった。後から知ったのだが、どうも樟美は依奈が天葉を狙っているのではないかと警戒していたらしい。

そんな二人のわだかまりが解消された切っ掛け。それはある日、依奈が樟美を呼び出した時のこと。

「和食の作り方を教えてちょうだい」

寮のキッチンでそんなお願いをした。

最初こそ目を丸くしていた樟美だが、すぐに了承してくれた。聡い彼女のことだからこちらの考えも察したのだろう、と依奈は思った。

今思えば「和食」などと、あまりに大雑把ではないか。しかし樟美は樟美なりに丁寧に、順を追って教えてくれた。その中でも特に力を入れたのが味噌汁である。何でも「味噌汁はご飯に次ぐ和食の顔」らしい。

鍋に視線を落としながら、依奈が物思いに耽る。

キッチンの小窓から見える空は既に真っ黒だった。

不意に、ガチャという金属音が鳴る。音のした方へと歩いていくと、玄関には依奈の待ち人が立っていた。

「ただいま帰りました」

「おかえり」

礼儀正しい帰宅の挨拶に、依奈が軽い調子で返事をする。

黒のビジネススーツとタイトスカートをきつちりと着こなした、ストレートロングヘ

アの麗人が靴を脱いで玄関から上がってくる。依奈の一つ年下の伴侶、田中^{たなか}_{かいち}の帰宅であつた。

壱は大学に通う傍ら、教導官資格の取得を目指している。本日も講義終了後、ガーデンでの実務研修を受けていた。

「もしかして、今日動き回ったりしたの？」

「臭いますか？」

「いや、臭わないけど。何となく」

「今日は工廠科とガンシップも見てきたので、そのせいでしよう」

「ああ、それで汗かいたのね」

ガーデンに所属する教導官の役割は、ガーデンによってまちまちである。百合ヶ丘のような強豪校の場合、リリィから上がってきたレギオン編成や訓練メニューを認可するのが主だ。しかし強豪でないガーデン、あるいは生徒の自主性が比較的低いガーデンならば、教導官が指導する場面が増えてくる。

とは言えどこのガーデンの教導官でも、一通り仕事がこなせなければ、いざという時に困るだろう。当然教導官資格の取得試験は、教導官の任務を広範なものとして想定している。

そういうわけで、壱の努力と苦勞が並でないのは容易に想像できた。

「先に食べてもらってて良かったのに」

「嫌よ。今日、ソラの所に行ってきたんだから。あの二人を見てきた後に一人でご飯なんて、虚しくなるじゃない」

「何ですか、それ」

「思わず吹き出して笑う壺。」

会話の間にも二人は玄関からリビングへと移動していた。

壺がスーツのジャケットを脱いでポールハンガーに掛ける。ジャケットの下のカットーシャツも、着る者の性格と同様にピシつとしていた。

壺自身と壺の仕事を、依奈は彼女の傍でまじまじと見る。レギオンを共にした時から既に壺の方が背が高かったが、百合ヶ丘の卒業時には更に差がついていた。

依奈は更に見つめ続ける。壺の横顔を。今日もガーデンで後輩リリイたちから熱視線を集めてきたであろう、意志の強そうな凛々しい瞳を。そうして依奈はあることに気が付く。

（元気が無い……？）

特に根拠は無いが、いつもと様子が違って見えた。勿論、身体的な疲労とは別の意味で。

二年間は共に暮らしているのだ。諸事情により樟美の成人を待つて籍を入れた天葉

たちとは異なり、依奈は壺の百合ヶ丘卒業後すぐに一緒になったのだから。なので多少は通じ合えてるつもりであった。

依奈はこう見えて、それなりの家格を持つたお嬢様だ。しかし壺の家はそれ以上。代々に渡り政府閣僚や高級官僚を多数輩出している名門だった。

そんな家の一人娘なのだから、壺が負っているプレッシャーや気苦労は相当なものだろう。

ただ幸いなことに、二人の結婚については反対されるどころか諸手を挙げて賛成された。これには少しばかり特殊な事情がある。名家の人間が率先して同性結婚を実践すれば、この国が法改正によって意識を新たにしたことを国内外にアピールできると考えたのだ。ある意味、ノブレス・オブリージュの体現と言えるだろう。

直接口には出さないが、壺はそんな理由で賛成された——無論それだけではないのだが——事実には不満を抱いていた。

依奈としては、理由はどうあれ祝福してくれるなら、それに越したことはないと思っている。少なくとも祝福されないよりは、ずっと良い。

ともあれ、壺には様々な重圧が掛かっている。

だがガーデンを訪れていた彼女がへこむ原因として思い浮かぶのは——

「後輩が、誰か亡くなった？」

声の抑揚を落として依奈が尋ねる。

その頻度が大きく落ちたとはいえ、相模湾から襲来するヒュージの迎撃は未だ百合ヶ丘にとつて重要な任務の一つだ。幾ら万全の体勢を整えても、絶対に犠牲者が出ないとは限らない。教導官の実務研修を受けていたなら、そのような情報に接していてもおかしくはないだろう。

だが依奈の予想は、喜ばしいことに外れていたらしい。

「違います」

「じゃあ何で辛気臭い顔してるのよ」

壱はその問いに沈黙したが、少ししてから口を開く。

「……疲れた」

「はい?」

「講義も研修も、疲れた……」

呟くような壱の言葉に、依奈は吹き出しそうなるのを堪えた。

しかしながら、顔がにやけてしまうのは堪え切れない。普段弱音を吐かない堅物の、愛しいパートナーの情けなく弱った姿を見れたから。口元と目尻が自然と緩んでしまふのだ。

「しょうがないわね。全く、世話の焼ける」

口先だけは呆れながらも、依奈は壱の腕を掴んでリビングから和室へと場所を移す。まずは依奈が畳の上に膝を崩して横座り。然る後に自身の太腿をポンポンと叩いて壱を誘う。

初め、壱は躊躇して立ち尽くしていた。

「ほら」

だが依奈に促されて素直に身を横たえた。

二つ隣り合った依奈の太腿の上、壱の頬が体温を伝えてくる。壱が身じろぎすると、彼女の髪が太腿を撫でてきて擦りたい。

お返しに髪を梳きながら頭を撫でてやると、壱はされるがままにその手を受け入れた。

依奈から壱の表情は窺えない。しかし些細な問題だった。この穏やかな時間の前では。

ところが、あろうことか依奈自身によって、場の雰囲気が一変してしまう。

「あつ、やつぱ。お味噌汁放つてた」

「ちよつと！ 何やってるんですか！」

「もー、仕方ないじゃない。あんたのために作ってるんだから、手伝いなさいよ」

ぎよつとして飛び起きた壱と共に、キッチンへと舞い戻る。そこには当然、味噌汁以

外の品も用意されていた。そのどれもが和食である。
和食は、壺の好物だった。

第4話 家族の形

花屋の朝は早い。

正確には、週三回開かれる花卉市場かきに向かう日の朝は早い。

仲卸業者が販売を開始する午前6時までには市場に着いておきたいところである。

「花のせりなんて、この仕事に関わっていないとちよつと想像できないよね」

「はい。お魚やお野菜ならイメージし易いでしょうけど」

「花は青果・鮮魚・精肉に並ぶ生鮮品なだけどなあ」

運転席でハンドルを握る天葉と助手席に座る樟美の会話。二人は業務用として保有するミニバンに揺られ、商品を仕入れるべくまだ薄暗い鎌倉の街を走っていた。

幅広の道路。だんだんと建築密度が低下していく車窓の光景。

程なくして、天葉たちは街の郊外にある卸売市場に到着した。

そこは広大なスペースを擁する活況の空間だった。四大生鮮食品——流通業の間では花卉も食品扱い——全てを取り扱っており、集積される物品は膨大な量に及ぶ。川崎市と厚木市に元々あった市場を統合して作られた、鎌倉府中央卸売市場である。

駐車場に車を停めた後、天葉は軽い伸びをしてからアスファルト舗装の上に降り立

つ。仕入れ予定の品を書き連ねたメモ帳を右手に携えて。

「優先するべきなのはバラにアヤメにスズラン、リモニウムとかだから。覚えてて」
「匂のお花ですね」

二人は連れ立って市場の敷地を歩いていく。

商品のせりが開かれているのは中心部にあるコンクリートの建物だが、天葉たちの向かう先はそこではない。実際に仕入れに行くのは、外縁部に立ち並ぶ小さな商店の列。彼ら仲卸業者から、アマノのような小売店は買い付けている。

何せ、せりで行引される物品の単位は大きい。花の場合、1ケース100本といった具合である。なので5本単位10本単位で小売りしている仲卸業者を利用するというわけだ。

「葉のへたり具合に、花粉の色具合……。目利きは難しいです」

「全部見比べてはもらえないからね。他の食料品よりは少ないけど、それでも結構な数だから」

市場がこれほど賑わうようになったのも極々最近のことらしい。天葉や樟美たちが現役リリイだった頃は、人も物もここまで集まりはしなかったとか。

もつとも、生産者以上に運送業が息を吹き返したことの方が奇跡かもしれない。鎌倉から横浜や横須賀、東京といった大都市圏ならともかく、それ以外の地域はヒュージに

よってズタズタにされた道路網の復旧が待たれている。特に甲州や静岡といった元陥落指定地域にとっては切実な問題と言えた。

天葉が車を業務用と割り切っているのもこの辺りに事情がある。今の御時世、オフロードカーでもない限り、車で移動可能な場所は存外に多くないのだ。

ともあれ店と市場の行き来ならば、ただのミニバンでも役に立つ。天葉たちは買い付けた花の束をトランクにしまう。後部座席を倒して拡充したスペースは色取り取りの切り花や鉢植えで一杯になった。

時刻は7時前。市場としてのピークはまだだが、既に天葉の目的は達成されていた。「ふああ……。眠い……。お腹減った……」

いざ車中の座席に着いて二人きりの空間になった途端、天葉が空気の抜けた風船みたいにだらけ出した。ついさつきまでテキパキと指示を出していた姿とはまるで別人。

しかし樟美は全く動じることなく、車内に持ち込んでいた籐のバスケットの蓋を開けて、こぶしに収まりきらないほどの握り飯を取り出した。

「お結び、作ってきました」

「食べるー」

「はい、どうぞ」

「食べさせてー」

そんな子供染みたお願いを聞き入れ、樟美の手が天葉の口元まで伸びる。

底面に海苔が巻かれた白米の丸い塊。製作者の手よりも明らかに大きいのが、形は良い。輪郭をちよつとずつ丁寧に握って作ったのだろう。

差し出されたそれに、天葉は遠慮なくかぶりつく。見た目通り内容もボリユーミーだった。ご飯の中に隠れていたのは鮭のフレーク、昆布、おかか。バクダンおにぎりである。

「塩加減、どうですか？」

樟美が味の具合を尋ねてくる。

それに対し、天葉は黙々と口を動かして、おにぎりを胃の中へ取り込むことで答えの代わりとした。

あれだけ大きかったバクダンおにぎりが、あつという間に平らげられた。

本人としては綺麗に食べたつもりでも、幾らかの米粒が零れ落ちている。おにぎりを保持していた樟美の指に。天葉の口から漏れた米粒が、樟美の指に。

その食べかすを樟美はあろうことか、自身の指ごと口に含んだ。

「んむっ、ちゅっ……」

米粒を食べて取り除き、指に付着した塩気を小さな舌で舐め取る。そんな行為を樟美はわけもなくやってのけた。

隣の天葉は樟美を横目でガン見していた。普段の樟美より5歳は大人びて見えた。

この二人、気分はいつも新婚同然。いつもとは違うあらゆる仕草が情動を動かしている。

おにぎりの後片付けが済んだ頃、天葉の眠気は綺麗さっぱり消し飛んでいた。

フラワーショップ『アマノ』は基本的に夫婦二人で切り盛りしている。店の規模からして普段はそれで十分だった。

だが幾ら小さくとも、繁忙期というものは存在する。先の母の日もそうだが、お盆や年末年始は特に法人からの仕事が増してくるのだ。

そういつたどうしても人手の欲しい時期、繁忙期でなくとも大口の仕事が舞い込んできた時などは、他の店と同様にアマノでもアルバイトを入れてる。

今、開け放たれた裏口からバックヤードを覗いている女の子こそが、そのアルバイトであった。

「ごきげんよう」

聞き知った声に、樟美はハサミを持つ手を止めて振り向く。

肩まで伸びた薄紫の髪は、前髪がぱつと切り揃えられていた。前髪の下のみりと丸い両の瞳は彼女の幼い雰囲気よりも引き立てている。

とは言え少女というのはあくまで形容。少なくとも戸籍上では、彼女は樟美と同じ年であった。

「ごきげんよう、結梨さん。今日はお買い物？」

「うん。お店開くまで待つてるね。それまでお仕事見てもいい？」

「勿論、いいよ」

樟美の許しを得て結梨が中へと入っていく。

折り畳まれ何枚も重ねられたダンボールや、まだ中身入りのダンボール。花の手入れや加工のための作業机。物に溢れて窮屈な印象のバックヤードだった。

丸椅子の一つに座り込んだ結梨は辺りをきよろきよろ見回している。バイト中に何度も出入りした場所ではあるが、それでも興味が尽きないのだろう。

「夢結様と梨璃さんへのプレゼントを探しに？」

「違うよ。今日は由比ヶ浜の、海に持っていくの」

「海？」

「うん、海」

意外な答えを聞いて樟美は首を傾げた。だが深くは踏み込まない。海に花と言つたら十中八九、鎮魂のためだろうから。

白井結梨。旧姓が一柳結梨。

彼女は極めて特殊な事情を持つリリイだった。ヒュージと認定され捕獲命令が出されたかと思うと、命令はすぐに撤回。直後、由比ヶ浜での戦闘で死亡認定を受ける。霊園にお墓が建てられ百合ヶ丘のリリイたちによる葬儀まで執り行われた。

その亡くなったはずの彼女が、暫くしてひよつこりと百合ヶ丘に戻ってきた。樟美や天葉など、当時のアールヴヘイムのメンバーに詳細は分からない。生徒会長たちや一柳隊ならば知っているのだろうが、何やかんやあつたのだろう。いずれにせよ、あの時のつびきならない状況に置かれていたのは想像に難くない。

そんな結梨も、出席日数が足りず一年留年するというアクシデントこそあつたが、無事に百合ヶ丘を卒業することができた。今では本業の傍ら、花屋のバイトをこなす程度には平穏な生活を送っている。

もつとも、その本業というのが中々に変わったものだった。

「この前のニュース、見た？ 紀伊半島にギガント級が上陸したって話」

「ええ。うちからも外征レギオンが出ていたっけ」

「あれ、私たちが倒したんだよ。私は、出番がほとんど無かったけど」

結梨は嘱託職員という肩書で百合ヶ丘に所属している。実際の彼女の仕事は、重要な作戦に予備戦力として同行したり、工廠科で試作チャームのテストに協力したり。結梨は通常よりもずっと、マジの減退が遅かったのだ。それこそ現役のリリイと肩を並べられるほどに。

「そう言えば、天葉お姉さんは？」

「家に忘れ物を取りに行ってる。朝の開店までには戻ってくるはず」

樟美たちが初めて彼女と出会ってから5年が過ぎた。

昔は見た目以上に幼かった結梨も、順調に成長しているようだ。一番分かりやすい変化は言葉遣いだろう。以前なら年上であろうが構わず呼び捨てにするところだが、今ではかつてのレギオンメンバーを除くと、立場相応の言動を取っている。

社会性・協調性を養い育てる。そのために結梨の保護者たちは、ガーデン外での彼女の労働を認めたのかもしれない。

「じーっ……」

先程から結梨は樟美の手元をじっと見つめていた。気が散るということはないが、少しばかりこそばゆい。

樟美は現在、商品である切り花の水切りに勤しんでいた。水切りとは、花の茎を切っ

て水分の吸収を助ける作業のことである。根を失った切り花は水を吸う機能が低下しているので、鮮度を保つためにはこうした手間暇が欠かせない。

パチ、パチ

会話の途切れた空間に、金属の小気味よい音が響く。剪定バサミの短く分厚い刃が、茎の下部を斜めにすっぱりと切り裂いていく。

見つめる結梨の瞳は輝きを放っており、尊敬の念すら宿っているように思える。樟美にとつてはルーチンワークの如く繰り返してきた作業だが、ああいった目で見られて悪い気はしない。

それに、樟美は元々地味な仕事に性にあっていた。彼女の得意な料理も、大抵の場合地味な部分が多くを占めている。

暫くして、樟美が何気なく首を回して視線を動かした。

その時、結梨と目が合う。

するとおもむろに結梨が口を開く。

「樟美お姉さんと天葉お姉さんは結婚してるんだよね」

「えっ？ うん、そうだけど」

「今は女の人同士でも子供が作れるんだよね」

「そう。東京の大学の研究チームとイルマ女子のラボが共同発表してたね」

「二人は、子供作らないの?」

予想外の質問が飛び出して、樟美は顔に表さずとも内心で面食らう。そして面食らった後、結梨もそういう話に興味が湧くようになったのか、とある種の感慨を抱く。

「お店を始めたばかりで、分からないことやバタバタすることも多いから。うちは、まだ。もう少し時間が経って落ち着いてから、かな」

「ふーん……」

樟美の返答を聞いた結梨はつぶらな瞳を二、三度瞬きさせる。納得したのか、していないのか。どちらにしろ、彼女の本題は直後に語られる。

「梨璃と夢結もそうなのかな」

「それは……」

「それとも、私に遠慮して作らないのかな」

結梨は梨璃と夢結の子供であった。戸籍上・法律上の子供というだけでなく、そうなる以前から、もつと本質的な意味での家族なのだ。

結梨の疑問を解消する術を、樟美は知らない。樟美も他人に語れるほど、家族について理解できてはいない。百合ヶ丘が全寮制であることを差し引いても、彼女は家族との関わりが希薄なのだ。

何と言ったら良いか、考えあぐねる樟美。

「結梨さん自身は、どう思ってる?」

気まずい沈黙を破ったのは、後ろの出入り口から聞こえてきた声だ。そこには自宅から戻ってきた店の主が立っていた。

「新しく子供ができたら自分のことを見てもらえなくなる。つて結梨さんは思ってるの?」

「ううん、思わない」

「結梨さんが思っていないのなら、あの二人なんか想像もしてないよ。だからきつと、遠慮もしていない」

いつも以上に穏やかな調子で天葉がそう言う。

夢結もまた、天葉にとって旧友の一人。疎遠になった時期もあるが、何かと気に掛けていた。

「よく考えたら、私、そんなに子供じゃない」

「それはまあ、樟美や梨璃さんの一つ下で卒業したわけだし」

いつもの元気が戻ってきたのか、結梨の表情に精彩な色が付き始めた。

大人へと成長しても、子供っぽい顔つきや仕草など、どこかしら昔の面影を残しているものである。

「梨璃と夢結に聞いてみるよ。私の妹、いつできるのか」

「フフツ。お手柔らかにしてあげてね」

「あ、その前に、花束買っていくよ！」

「はい、毎度ありがとうございます」

お店のオープン後、花束を抱えて元気よく飛び出していった結梨の背中を、天葉と樟美はカウンターの裏から見送った。

出生にどんな事情があろうとも、少なくとも身近な者たちからは、結梨の歩みが祝福されてきたのは疑いようがない。一度は悪意と命の危険に晒されながらも、真つ直ぐに育った現在の彼女を見れば一目瞭然だ。

「夢結と梨璃さんは、本当に幸せ者だね」

「は、い」

隣に立っている天葉の言葉に、樟美が小さく頷く。

百合ヶ丘の中ならいざ知らず、外において結梨たちの関係は奇異に映るだろう。同性

結婚だけでも議論の余地がある上に、外見年齢がほとんど変わらない訳ありの娘を養子にしたのだから、無理からぬことである。

だがあの三人は様々な問題を乗り越えて今の幸福を掴み取った。名実ともに家族となったのだ。それは樟美にとって、思わず目を伏せる程に眩しいものだった。

「羨ましい?」

「少し」

続く問いに対しても、樟美は頷いた。

天葉と共にある現状に不満があるのではない。ただ、やはり血の繋がった者からの祝福の有無は大きい。

樟美は北海道の実家と絶縁状態だった。天葉との結婚についても反応が無い。入籍を樟美の成人まで待っていたのは、彼女の両親から同意書を得られなかったからである。

一方で夢結の方と言うと、甲州の一柳家を訪ねて筋を通したらしい。あちらが梨璃の成人を待つて籍を入れたのは、結梨の養子縁組と合わせるためだとか。

眩しく、羨ましい。樟美は未だ顔を合わせに行く勇気が持てないというのに。

「いつか、会いに行けるといいね」

「……ごめんさい。私が弱いから」

「弱虫な樟美も好きだよ」

隣り合ったまま、樟美の左手は天葉の右手に包み込まれた。その温もりは特別寮に居た頃から変わっていない。樟美を甘やかし、同時に励ましもする天葉の温もりだ。

「そうだ。今度夢結に、甲州に行った時のこと詳しく聞いてみよう」

「ええ？ 話してくれるかなあ」

それから数日後、意外なことに天葉の提案は実現することになる。

第5話 初夏、甲州

「お義父様、お義母様。ご息女を私にくださいませ」

じめつとした夏の日のこと。

身に纏うスーツと同じ色の黒髪を深々と下げ、白井夢結は家族を得る儀式のための言葉を紡ぐ。

かつての陥落指定地域、甲州市。鎌倉府の北西に位置し、周囲を山々に囲まれたこの地に、一柳梨璃の生家があった。人類の勢力圏に帰してからも、仕事や金銭の関係で避難地区に留まる市民は少なからず見られたが、幸い一柳家は元の土地に帰還できている。

6月の半ば。この年に成人したばかりの梨璃は、伴侶になる約束を交わした夢結と、

娘あるいは妹同然に世話を焼いてきた結梨と共に、実家へと帰省した。

天然い草の匂いが香る畳の客間にて。縦長のローテーブルを囲って一堂に会していた。

夢結はテーブルから一旦距離を空けると、正座し、両手で形作った綺麗な三角形を畳の上に付けた。その両手のすぐ上では頭も一緒に下げている。お手本のような座礼であった。

「お義父様、お義母様。ご息女を私にくださいませ」

夢結から出てきたその台詞に、傍で聞いていた梨璃は気恥ずかしさと嬉しさで変な声が漏れそうだった。だらしなく崩れそうになる顔を引き締めるので一杯一杯だった。可能ならば、今すぐ自分の伴侶を自慢したい。

けれども梨璃は自重した。もう幼い子供ではないのだから、時と場合ぐらい弁えられる。自分の隣に座る結梨だって大人しくしているのだから。

一方、夢結が頭を下げる先、一柳家の面々は様々な反応を見せる。

梨璃は期待半分不安半分で、家族の顔を一人ずつ窺つてみた。

母は、「あらまあ」と呆気に取られた様子であった。

祖母は、何も語らず、ただ穏やかな面持ちで微笑むだけ。

地元の高校に通う弟は、「はえ〜」と大して驚いてなさそうだった。若いって、強い。

そして父は、ひっくり返っていた。

(いきなりだったし、皆びっくりしても仕方ないよね)

心の中で反省する。

梨璃も夢結とのことは、電話や手紙でそれとなく家族に示唆していたつもりであった。だがこの状況を見る限り、十分に伝わっていなかったのは明白。梨璃はもつと直截的に言うべきだったのだ。「女の人と結婚します」と。

「えーつとね……あつ！ この子、この子は結梨ちゃん！ 一柳結梨っていうんだけどね、ちよつと訳があつてそういう名前なんだ」

空気を变えるべく、梨璃が話題転換を図る。

「結梨ちゃんのことなんだけど、私たちが結婚したら、養子縁組しようと思ってるんだ。おねえ……夢結様と相談したんだけど、成人したら養親になれるから。あと、一日でも誕生日が遅かったら同い年でも養子にできるんだって！」

しかしながら、梨璃の試みは悪手と言わざるを得ない。ただでさえ結婚の話に困惑しているのに、幾ら童顔で小柄とは言え、いきなり歳のそう変わらぬ子供ができたと報告されたら、余計に頭を抱えてしまう。

梨璃は口に出してから己のミスに気付いたが、覆水盆に返らず。更にフオローを考えるはめに陥った。

そんな育ての親の苦勞を知ってか知らずか、当の結梨はいつの間にか席を離れて祖母の近くへ移動していた。

「おばあちゃん、これ何?」

「これはね、お手玉。お婆ちゃんの、そのまたお婆ちゃんから貰ったんだよ」

時代がかった巾着袋の中から布の玉が六個出てくる。梨璃もある程度大きくなると目にするこすらなくなつたが、確かに見覚えがあつた。

「最初は三個でやってみようか」

「うん」

祖母が両手を使って玉を宙に踊らせると、結梨も見様見真似で同数の玉を扱い出す。

元より、結梨は運動神経も学習能力も人一倍優れていた。現にお手玉も、二回ほど玉を落として以降、初心者とは思えないテンポで吸収・再現していった。

祖母はこんな所にどうしてお手玉を持ってきたのか。梨璃が連れてくる娘のことを、もつと幼いものと思つていたのかもしれない。何にせよ、助かつた。お陰で場の空気が幾分か緩んだ。

「梨璃、久し振りの故郷ふるさとなんだから、ちよつと見て回つてきたら? 夢結さんと結梨ちゃんを案内がてら」

「え? でも……」

「お互い考える時間が必要でしょう。特にこの人は」

そう提案する母の視線の先には、顎に手を当てて「うくん」と唸っている父の姿。座り込んだまま背中を丸め、目を白黒させている。傍目には面白いが、本人は至って真剣であった。

結局、梨璃は母の気遣いに感謝しつつ、実家を一旦離れることにした。

夏。実際の緯度以上に暑い、甲府盆地の夏。

すぐ横に並び立つ林のお陰で日影が差した小道を、梨璃たち三人がゆつくりと進んでいた。

観光なら市街が最適だが、そちらは鎌倉へ帰る前に、お土産をかうついでに向かう予定。そうなる、あと見るべきものは野山に田畑に川といったところか。少なくとも梨璃が思い付く範囲では。伊達に「田舎者」と自虐しているわけではないのである。

「無理もないわ。法制度が変わっても、人の心まではすぐには変わらない」

梨璃の隣に並んで歩く夢結が、前を向いたままそう言った。非難するでもなく、失望するでもなく、ただ淡々と事実を言葉にしたかのように。

大好きなお姉様とそういう関係になって、梨璃も梨璃なりに結婚について調べていた。

鎌倉や横浜や横須賀などの都市圏かつガーデンの影響力が強い地域では、同性結婚に対する理解はそこそこあった。そのため首都東京も概ね寛容だったが、地区によつては反対派が熾烈な抗議行動を行なつて世論が真つ二つに割れているとか。

しかし肝心なのは、ここ甲州。この地はお世辞にも都会とは言い難い。

「本当に、皆びつくりしてただけなんです。私がちゃんと言つてなかつたせいで。お母さんもお父さんも、きつと分かつてくれるはずですから」

梨璃は先程の一件について弁解した。どこか言い訳みたいになつてしまったのは、梨璃自身がここに来るまで楽観的に構えていたことへの反動である。

実際、梨璃の家族が特別保守的というわけではない。ただ、長閑で人の流入が少ない土地柄ゆえに、こういった劇的な変化に当惑してしまうのだ。

「勿論、責めているのではないわ。むしろ当然の対応よ。大事な娘の将来が左右されるのだから。親として慎重になるでしょう」

「は……」

「その上で、ご家族に認めて頂くためにここまで来たのよ。絶対に梨璃を貰って鎌倉に帰るわ」

「は、はい！ えへへっ。お姉様、私を貰ってくださいね」

梨璃がフニヤつと破顔し、少女のような笑みを浮かべる。夢結にそこまで言われたら、懸念することは何も無い。

「でも、お姉様のご家族の時はあつさり認めてもらえましたよね。いえ、勿論その方が良いんですけど」

「うちは、何人もリリイを輩出してきた家だから。リリイとなるのは名誉なこと。そしてリリイになった娘は、ガーデンの娘になったも同然。そういう考えだから、リリイだった梨璃と結ばれることに反対しなかったのでしょうか」

「それは、喜んでいい……ですよね？」

「そうね。祝福されないよりは、ずっと良いことだね」

二人して話し込んでいる内に、自然と歩みが遅くなっていく。

すると前の方を先行して歩いていった結梨が、二人の方へくると振り向いた。さつきまで遠くの丘陵地にある棚田を眺めていたのだが、興味の対象が移ったらしい。

「梨璃も夢結も、もう大人だから。自由に結婚できるんじゃないの？」

「ええ、できるわよ。だけど元々の家族との繋がりだって蔑ろにできないわ。どうせな

ら、憂いなく新しい家庭を築きたいじゃない」

「ふーん、そういうものかあ」

そんな夢結の答えに続き、梨璃が分かりやすく説明しようと口を開く。

「結梨ちゃん、お婆ちゃんと遊んで楽しかったよね」

「うん、楽しかったよ」

「これからもまた、ここに来て遊んだりお話ししたい？」

「したい」

「だったら、ちゃんとご挨拶して、何か大切なことがある時は話し合わないと」

「そっか。そうだよね」

結梨は納得したのか、軽く頷くと前に向き直った。

結梨の、三人の行く先にはまだまだ道が続いている。ここより先に広がっているのはブドウ畑。その香りは梨璃にとっても夢結にとっても、懐かしさを覚える香りであった。

夕刻を過ぎて梨璃たちが一柳家に帰ってきた時、父は依然として頭を悩ませているようだった。

「うーん……」

「あなた、そんなに難しく考えなくても。娘が二人増えると思えばいいじゃない」

「ええ……」

良く言えば懐が深い、悪く言えば大雑把な気質の母が、父を取り成そうとする。

だがそうそう上手くはいかない。父は良くも悪くも思慮深い方だ。

十人居たら十人に言い当てられるのだが、娘の梨璃は母親似であった。

「やり方を、間違えちゃったのかなあ」

しかし、お気楽な梨璃でも流石に不安になってくる。夢結と結梨を自分たちに宛がわれた部屋へ残し、一人になった梨璃は居間での両親のやり取りを盗み聞きしていた。

仕方ないことだが、結梨のことを全て話せないのはきつい。家族の信頼を得る上では大きなハンデと言えた。

結梨はその特殊な生まれから実験対象として捕獲されかけたり、戦闘で命を落としかけたりしている。実際、梨璃たちも一時は彼女の死を認めざるを得なかった。

今はこうして大手を振って暮らしているものの、やはり結梨が特別な存在であること

を否定はできない。彼女を白井の実家の養子ではなく、梨璃と夢結が直接養子縁組しようと考えているのも、実はその辺りに事情があった。

ガーデン職員同士の子供にしておいた方が、万が一の際に守り易い。ガーデン側からそう忠告されたのだ。特に拒否する理由も無いので、梨璃たちは忠告通りに家族計画を進めてきた。

「じゃあ、こう考えましょう」

唐突に、母が大きい声を上げた。

「あの子、夢結さんはあの百合ヶ丘女学院の職員で、おまけにご実家は裕福な家。そう考えたら、梨璃が苦勞しそうにないし、いいんじゃないかしら」

「……いや、それはその通りなんだが。お金とか生活の安定とか、身も蓋もないんじゃないか?」

「だって、どうせ難しく考えても答えは出ないんでしょ。二人の気持ちの問題って言うなら、あの子たちには分からないし。もしかして世間体がどうか言う気? それなら相手はお嬢様だし、社会的に何も問題ないわね」

煮え切らない父の態度にだんだんと面倒臭くなってきたのだろう。母の物言いが乱暴になるのが梨璃にも分かった。

「それなら、あの結梨って子のことは……」

「こんな時代だもの。事情のある子なんて珍しくないでしょう。百合ヶ丘が保護してる子なら大丈夫よ」

それつきり、父は深く詮索しようとはしなかった。代わりにまた、うんうんと唸っているようだった。

やがて居間から父が去った後、梨璃はそつと障子を開けて中へ入る。

娘の姿を見ても、母は驚いたりしなかった。盗み聞きもお見通しといったところか。

「お母さん」

「大丈夫よ、梨璃。ああは言ってたけど、父さんもその内分かってくれる。少なくとも、反対はしないはず」

「分かるの？」

「ま、夫婦だからねえ」

結局、母の予測は的中することになる。

この後、夕食後、父と母と夢結の三人で何やら話をしたらしい。梨璃にはその内容までは分からなかったが、戻ってきた夢結が穏やかな笑みを湛えていた事実が、母の正しさを物語っていた。

そして、甲州の夜が明ける。

翌日、梨璃たち一行は甲州市街での買い物を終えて帰路に就こうとしていた。

そんな中、鎌倉行き電車の足を運ぶ三人のもとへ梨璃の母がやって来る。わざわざ駅まで見送りに来てくれたのだ。

「この度は、大変お世話になりました」

既に一柳家を発つ前に述べていた挨拶を、夢結は改めて口にした。

「いえいえ。こんな田舎でよろしければ、いつでも来てくださいね」

母は余裕ある笑みでそう答えた。貫禄と言うべきか。流石は20年も母親をやっているだけのことはある。

その母が今度は結梨の方を向き、結梨の手を取って自身の右手を重ねた。そこにはある物が握られている。梨璃もよく知る、と言うよりも、ほぼ毎日の如く目にしている緑の髪飾りである。

「それ、私のと一緒だ」

「父さんからよ。結梨ちゃんにあげるって」

「ええ？ 自分で渡せばいいのに」

「あんな態度取ってしまったせいで、気まずいんでしょう。それに思ったよりも大きい子だったから、躊躇したのかもね」

母が意地悪っぽく父の気持ちいを代弁する。

確かに、大人になった今、梨璃もあの髪飾りは外して部屋の中に大切にしまっていた。サイドテールだった髪は下ろしている。多少は大人っぽく見えることだろう。

けれども、あの四つ葉のクローバーを模った髪飾りには単なる飾り以上の意味があった。それはかつて、梨璃が結梨と結んだ約束だった。

「梨璃と探し回っても見つからなかったのに」

結梨は受け取った髪飾りをじっと見つめて呟いた。5年越しに、ようやく約束が果たされたのだ。

「ふふつ、本当いつの間用に用意してたんでしょね。あの人、こういうところは抜け目な

いから」

やがて生まれてくるであろう娘の子供へ、孫へ渡すつもりのものであったのか。それを結梨に贈ったということは、つまりそういうことなのだろう。

結梨は大きくお辞儀をする。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

こうして、甲州帰省は無事に目的を達成して終わりを迎えることができた。

最後の最後で、予期せぬ幸運に見舞われて。

第6話 過ぎゆくもの

朝も早くから、白色塗装のミニバンが鎌倉の街を南に下る。大抵の家庭では朝食もまだであろう頃合。そのような時間に天葉が車を走らせているのは、何も商品の仕入れというわけではない。助手席に座る樟美と共に、店内の花の手入れだけして早々に店を発っていた。本日、仕事はお休みである。

最初は幅の広がった道路も、街から離れるに連れて狭まっていく。それに加えて舗装の状態も悪化していった。所々に亀裂が入っていたり、アスファルトが剥げていたり。

首都圏に近い鎌倉といえども、都市間道路でなければこんなものだった。他にリソースを優先すべき復興対象は幾らでもあるため、仕方ないだろう。

やがて、いよいよ道路の機能を果たせなさそうな様相を呈してくると、天葉は車を道の脇に停めた。本来なら業務用と割り切っていたことを考えると、十分役に立ってくれたと言うべきか。

「ここから先は歩いていこうか」

「はい、天葉姉様」

降車した二人は前進を再開する。天葉はリュックサックを背負い、樟美は大きなバス

ケツトを肩ひもから提げて。

天葉の格好はカジュアルな白シャツとジーンズ。それに対して樟美は純白のワンピース。加えてお揃いの麦藁帽で夏の日差しを避けていた。

そうして草原の中の朽ちた道を更に進む。車両は通行困難でも、徒歩ならば問題はない。

「……元から狭いんじゃないかって、だんだんと狭くなつたんですね」

「そうだね。この道、元々は府道……じゃなかった。当時は県道か。元は県道として南北に繋がつてたんだけど、ヒュージから避難していく中で放棄されたみたい。当然補修もメンテナンスもされなくて、割れた所から草がボーボーに生えていったんだね」

足元に視線を落としている樟美の言葉に、天葉が蘊蓄で応じる。もつとも、本当は依然や壺の受け売りなのだが。

旧県道の周囲は完全な大自然というわけでもない。先程から二人の視界には、ぼつぼつと民家らしき物体が映り込んでいる。

壁の至る所に蔦を生やしたもの。屋根を綺麗さっぱり失って吹き抜けと化したもの。柱が四本、天に向かって伸びているだけのもの。その光景は、さながら廃墟の展示会だった。

それから少々歩くと、また違った風景が広がってくる。平坦だった所から山がちな場

所へと出たのだ。

前方の道は、小高い丘をくり貫いた空洞に続いている。

「あそこで一息ついていこう」

天葉の指差す先、丘の下の空洞へ二人が足を踏み入れた。

朝でも暗い。天井に電灯は設けられていたが、メンテナンスされなくなつて久しいのか、生憎と灯りは灯っていなかった。

だが陽の光を遮る上に、時折空洞の中を風が吹き抜けていつて気持ちが良い。一見すると無機質なコンクリートの内壁も、冷涼な雰囲気は一役買っている。

それはトンネル代わりのボックスカルバートだった。

「樟美、疲れてない？」

「大丈夫、私も元リリイです」

カルバート内の日陰の下、天葉は樟美を案じながらも、その彼女からハンカチで頬の汗を拭き取られていた。

あくまでも10代後半という年齢はマギの最盛期を計る指標に過ぎない。なのでチャームを振るつての大立ち回りは無理でも、高い身体能力や体力は依然として健在だった。勿論、体を動かさなければそれも衰えていく。だが生憎なことに、花屋というのは中々に体力を使う仕事だった。

同じことが防暑・防寒面でも言えた。マジに守られたりリイは一般的な人間に比べて暑さ寒さに強い。全く影響を受けないというものではないが、少なくとも、夏場に外を動き回っても倒れない程度には強かった。

「もうちよつとだからねー。あとはこの道を上っていくだけだから」

「思つてたより近かつたんですね」

「あまり遠いと、お昼ご飯が遅れちゃうし」

休憩もそこそこに、天葉たちはカルバートの奥に向かつて歩き出す。

空洞をくぐり抜けて、ぐねぐねと曲がった坂道を上った先、丘の天辺こそが二人の目指す場所である。

「んーっ、着いたあ」

天葉は大きく伸びをして、鼻から取り込んだ自然の空気とそれに伴う解放感で胸を満たす。

彼女らが立っている所からは周囲の景色を一望できた。流石に山間部にある百合ヶ丘までは見えないが、感慨を抱くには十分な光景と言えるだろう。

まだ午前中。天葉の楽しみにしているお昼には早い。持ってきた敷物の上に荷物を置くと、二人は丘から見下ろす鎌倉の姿に改めて目をやった。

「あれは、湘南モノレール」

樟美が北西方向に見つけたのは、宙に伸びる細くて長い通路。この距離でおいそれと気付けるものではない。樟美は目がとても良いのだ。

「うん、途中で途切れちゃってるけど。本当は江ノ島まで繋がってたはずなんだよね」

「江ノ島。江ノ島も、行ったことありません」

幼稚舎から鎌倉府の百合ヶ丘に居る樟美でさえ、実際に足を運んだことは無いと言
う。

いや、少し前までそれが当たり前だったのだ。それだけ人類の勢力範囲が削られていたということなのだ。

「島の施設はほとんど内陸部に移転したままで、復旧したのは海保の基地と漁港ぐらいじゃないかな」

「そうでした……」

「あ、でもあそこは入れるかも。ほら、あの妙ちくりんな灯台」

「シーキャンドル、ですな」

「そうそう。あれ絶対眺めいいよー」

「でも、一般開放してたかなあ？」

実際問題、海沿いの地域が過去の賑わいを取り戻すには、まだ時間が必要だろう。たとえ直接的な脅威がなくなったとしても、ヒュージのルーツである海への心理的な恐怖はすぐには消えない。こればかりは少しずつ解決していくしかないのだ。

もつとも、それはそれとして、天葉と樟美はまるで近い将来の展望であるかのように語り合う。あながち皮算用とも言いきれない。彼女らリリイはそれだけの功績を成し遂げてきたのだから。

「……あつちは、何？」

樟美がふと別方向を向いて呟いたので、釣られて天葉も視線を移す。

それはモノレールとは違い、距離的には近くにあった。天葉たちの立っている丘の麓からも、そう離れていないはず。

それは赤茶けた長方形の物体で、薄らと緑がかっている。遠目なのではつきりとはしないが、恐らくは苔ではなからうか。ここに至る道中で目にしてきた廃屋と似たような物なのだろう。

「もしかして、バスじゃないかな」

「そう言えば、昔この辺りにバス会社の車両基地があったって聞きました」
「解体しきれなかった廃車が転がってても、不思議じゃないってわけね」

不思議なもので、一度バスだと思えば正体不明の物体も本当にバスに見えてくる。

今では鬱蒼と緑の生い茂ったこの土地にも、文明の営みが確かに存在していたのだ。
「ああいうのって、動物のねぐらになってたりするんだよねえ」

「……っ！」

「馬は居ないと思うよ？」

「わ、分かっています！」

動物好きの樟美が反応したので、天葉は軽く揶揄ってみた。動物の中でも特に好きなのが馬。樟美の実家は牧場なので、実際に見て触れたらしい。

「ところでさあ、そろそろお昼にしようよ」

「まだー1時を過ぎたばかりですよ」

「朝が早かったから、お腹空いちやって。早く樟美のハンバーガー食べたーい」

ついさつき揶揄われたばかりなので、樟美は当然むくれている。

しかし天葉が年甲斐もなくねだっていると、渋々といった様子で荷物の方へ歩いていった。

敷物の上に両膝をつき、樟美がバスケットから中身を取り出そうとする。その作業を

後ろで見ていた天葉は背後から樟美の腰に両手を回し、彼女の肩に自身の顔を乗せた。

「早くー」

「もう、姉様。お昼が出せないです」

体を左右に振るわせて形ばかりの抵抗をする樟美。彼女の手によって、大きな包み紙に包まれた大きなバンズが頭を覗かせる。

天葉は包み紙ごとハンバーガーを受け取った。そしてかぶりついた。

バンズは勿論、レタスもトマトもビーフのパティも大きい。現役時代ほどではないにしろ、彼女ら元リリイは大抵、健啖家だった。

一方、樟美も自身のお昼を手取る。こちらはハムや玉子などを挟んだサンドイッチ。例の如く、サイズは市販のものより大きめ。

「水筒に紅茶、入れてきましたから」

「うん、ありがとう」

青空の中、木陰の下で向かい合ってお昼を食べる。これこそハイキングの醍醐味、と天葉は固く信じている。無論、周りの景色も重要だが、彼女にとつて最上位に位置するのは食である。その点、樟美の手作り料理は文句を付けようのない満点だった。

そうして至福の時間が流れる中、天葉は水筒の紅茶に口を付けながら、目の前の光景に釘付けとなっていた。

それは、両手に持ったサンドイッチを樟美が小さな口を一杯に開けて中に入れ込む光景。咀嚼する度に胃の中へ消えるはずなのだが、減り方はとても緩やかだ。

「樟美、美味しい？」

「自分で言うのも何ですが、よくできた方かと」

「ふうん……。ねえ、ちよつと交換して食べてみない？」

「それは、構いませんけど」

了承を得るなり、天葉は樟美の手の中にあるサンドイッチに顔を近寄せ、一口。柔らかいパンの上から挟まれた具を噛んでいると、ハムの表面をコーティングしているマヨネーズの味が染み出してくる。

言うまでもなく、樟美の食べかけである。そのせいか彼女の顔には赤みが差している。この顔を見たいがために、天葉は交換を提案したのだ。決して食い意地が張っているだけではない。

「じゃあ今度は樟美も。はい、どうぞ」

「いい、頂きます」

お返しに自分のハンバーガーを樟美の前に差し出した。

樟美は遠慮がちに、肉とレタスのはみ出た部分へ齧りつく。

少しの間、口内を揺らして味わっていた樟美だが、中の物を飲み込んでから口を開く。

「味付けが、濃かった」

「えっ、そんなことないよ。普通だよ」

「次からもっと薄くしなきゃ……」

「いやいやいや、今のままで十分美味しいって！ 樟美のご飯は世界一！」

「ダメです。姉様の健康のためです」

「そんなー」

いつもと少し違った景色に囲まれて。いつもと少し違った空気を吸い込んで。気のせいか、食べる物まで少しだけ味が変わった気がする。

ただそれだけ。何か特別な施設で遊んだり、特別な買い物をしたわけでもない。だがハイキングとは、得てしてそういうものである。

天葉と樟美は空が夕焼けに染まるよりも早く帰宅していた。お店は休みでも、炊事に洗濯に掃除に、やるべきことは幾らでもあるからだ。

家事に一段落付けて落ち着けるようになる、二人はリビングでくつろぎ始める。夕食に取り掛かる前の、一時の憩いであった。

ソファに並んで腰を下ろし、適当にテレビのチャンネルを回す。

「明日は曇りだつてさ」

「降水確率20%……。洗濯物、どうしよう」

樟美が天気予報の数字を見て頭を悩ませている。お店としては、気温の上昇する快晴よりも客足が増えそうなので、そう悪い予報ではなかったが。

それはさておき、天葉はリモコンを手にチャンネルを更に変える。どうやら変えた先もニュース番組のようだ。

「本日正午、松江市に展開する九州・中国ガーデン合同部隊が宍道湖に営巣した松江ネストを撃破しました。これにより、中国地方に残るヒュージネストは島根県北部の出雲ネスト、並びに同じく島根県隠岐の島にある隠岐ネストのみとなります。記者会見にて内閣官房長官は『国内のみならず、いよいよ諸外国へも目を向ける時が来た』と発言。政府の国際協調路線を改めて示し――」

テレビから流れてくるのは女性アナウンサーの明るい声。話題が話題だけに、その喜びは隠しようもないだろう。

戦果もそうだが、天葉にとってもっと喜ばしいのはリリイが被った被害の小ささだ。

彼女たちの世代から普及し始めた連携必殺攻撃、ノインヴェルト戦術がリリーの損耗を抑えるのに一役買っている。ヒュージ側もマギリフレクターという防御障壁で対抗するのだが、ノインヴェルトに使用する専用弾の強化改良によってそれすらも打ち倒してきた。

「フフッ」

上機嫌になった天葉はソファの上で、樟美の膝を目掛けてゴロンと横になった。樟美の膝を枕にテレビを眺める。これ以上の贅沢がこの世に存在するだろうか、と問われたら、天葉は一瞬の迷いもなく首を左右に振るだろう。

樟美は樟美で、当然のように受け入れている。今日は樟美が枕だが、天葉が枕の日もあるのです、お互い様なのだ。

「天葉姉様、電話鳴ってます」

不意に、ボリウムを落としていた携帯からの呼び出し音と、樟美の控えめな呼び掛けに促される。

天葉は「うくん」などという締まりのない声を上げつつ、体を起こしてソファを離れる。ローテーブルの隅に置いていた携帯を手にとると、ディスプレイに見知った名前が表示されていることに気が付いた。

通話ボタンを押して電波越しに言葉を交わす。懐かしい……というほどでもないが、

顔を合わせる機会が中々ない。何せ相手は百合ヶ丘の卒業後、東京に移り住んでいたのだから。

暫くして通話を終えた天葉が、ちらちらと視線を送ってくる樟美よりも先に口を開く。

「今度、亜羅椰あらかやがこつちに来るんだって」

「亜羅椰ちゃんか？」

かつてアールヴヘイムで轡を並べた戦友の来訪。それはここアmanoに波乱の幕開けを予感させるのだった。

第7話 遠藤亜羅椰について

土曜日ということもあって、この日のアマノは来店するお客で賑わっていた。

ただ、フラワーショップとして賑わっているかと問われると、少々疑問が残る。今、店の中で話に花を咲かせている女子高生たちは、皆して店主の天葉を囲んでいたからだ。

鎌倉市内の、ガーデンではない一般高校の生徒。土曜なのに制服姿なのは部活帰りか、何かしらの登校日だったせいか。

(いつものグループ……)

樟美は天葉を中心とした人の輪を、花の水換えをしながら秘かに横目で窺っていた。聞こえてくるのは取り留めのない世間話を中心で、たまに花に関する話題が出てくる。元々コミュニケーション力が高く人付き合いの得意な天葉のお陰で、談笑は大層盛り上がっていた。

樟美としては、当然面白くはない。だが多少なりとも面白い物もしていくので無下にもできない。

(お仕事、お仕事)

樟美はそう自身に言い聞かせながら、今度は鉢植えにお昼の水やりをする。曇り空だが雨は降っていないため、店先の鉢にも忘れず水差しの口を傾けていく。

「店長さんって肌、綺麗ですよね」

「そう？　あまり焼けないように気は遣ってるけど」

「ファンデ、どこの使ってるんですか？」

近い、近い。

何人かが輪を狭めていく光景に、樟美は声を漏らしそうになった。

気持ちは分かる。一緒にケアグッズを選んでいるし、天葉のことを毎日すぐ近くで見ているのだから。

けれども、女子高生が天葉を覗き込むように顔と顔を近付ける絵面を目にして、心中やきもきとする樟美であった。

そんな騒々しいアマノに単車のエンジン音が近付いてくる。音はだんだんと小さくなって、やがて止まった。表の通りには車も結構走っているのだが、それでも店の前に停車したのは見なくとも分かった。

そして、新たな来店が一人。

そうかと思えば、闖入者は店内の花には目もくれず、女の子たちの輪の方へとあつという間に歩み寄っていった。樟美でなければ見逃していたところである。

「ちよつとよろしいかしら」

「へえっ？」

天葉に真正面から迫っていた女子高生は、不意に背後から声を掛けられ後ろに振り向く。

170近い長身から切れ長の瞳に見つめられ、見上げた女子高生の視線と体は固まった。

一方、話に割って入った側は相手の反応を意に介さず、屈み込むようにして動けない女子高生の顔に急接近する。

「邪魔してごめんなさい。綺麗な髪の子が見えたから声掛けちゃった」

「あつ、いえ……」

自らもさらさらのロングヘアを持つ女性が在り来たりな口説き文句を走らせる。

在り来たりだが効果はてき面だったようで、先程の姦しさが嘘みたいに女子高生の歯切れが悪くなる。天葉を囲む他の子たちも、水を打ったかのように沈黙して、友人と女性のやり取りに釘付けとなっていた。

「花、好きなの？」

「は、はい。最近フラワーアレンジメントの教室に通い始めて」

「ふうん。それで制服姿でお花の鑑賞。素敵ねえ」

生憎とタイプではないが、美人のパートナーを持つ樟美から見ても、その女子高生は可愛い子であった。明るい茶髪に軽くパーマをかけ、学校指定の制服をお洒落に着崩

し、スカートも裾上げして幾分か短く見せている。

そんないかにも垢抜けた女の子が、吐息の掛かるか掛からないかといった距離まで迫られて、主導権を譲り渡していた。

「このポーチュウラカの花、可愛らしい貴方にぴつたりね。お近付きのしるしにプレゼントさせてちょうだい」

「そんなつ、お姉さんこそ綺麗で素敵です！」

「本当ならお食事に誘いたいところだけど、初対面では流石に不躰だから。また次の機会の楽しみに取っておくわ」

女性は耳元に口を寄せて囁くようにそう言うと、女子高生の右手を両手で包み込んで握る。

その後、携帯を取り出した女子高生は女性と何度か言葉を交わすと、そそくさとお店をあとにした。成り行き見守っていた周りの子らも、慌てて追いかける。

「連絡先交換しちやつた……」

店の外の方では、その言葉に続き「キャツキャツ」と悲鳴とも歓声とも取れる黄色い声が響く。

そんな中で残された女性はと言うと、これまでのやり取りはどこ吹く風と言わんばかりに天葉の方へ向き直った。

「ご無沙汰しておりますわ、天葉様」

「はいはい、ごきげんよう。相変わらずね」

半ば呆れ気味な返事が戻ってくるものの、続いてカウンターの樟美に顔を向ける。

ところが彼女よりも樟美が物申す方が先だった。

「亜羅椰ちゃん、さっきのお花のお勘定」

「開口一番それ？ 樟美ったらつれないわねえ」

台詞に反して傷付いた様子のない遠藤亜羅椰がわざとらしく溜め息を吐いた。

「へー、本当に東京からあれで来たんだ」

辺りが薄暗くなった頃、お店を閉めた天葉と樟美は一度別れた亜羅椰と近所のカフェで落ち合っていた。

窓際の席、外の駐車場に横目を向けた天葉は久々に再会した後輩に感心する。東京からここ鎌倉まで、亜羅椰が足としたのは自動二輪車、バイクだった。それも排気量40

0cc超の大型バイクである。

天葉もバイクについては門外漢だ。しかし大きい分、それだけ乗りこなすのに技量が要るぐらいは想像がつく。

「様になつてるじゃない、バイク」

「亜羅椰ちゃん、スタイル良いもんね」

天葉と樟美が揃つて亜羅椰を褒めそやす。

彼女が身を包んでいるのはワインレッドのレザージャケットとレザーパンツ。体のラインがはつきりと浮かび上がるため、すらりとした、しかし出るところは出た彼女の魅力が十二分に引き立っていた。これでバイクなど乗り回そうものなら、落ちない女の子はまず居ないだろう。

ところが当の亜羅椰は賛辞を浴びても得意げにはならない。

「あくまでも移動手段。都内は二輪の方が、何かと便利ですから」

「そう？　でも女の子に受けそうだし、声を掛ける時にいいでしょ」

「これはこれで、考え物なのです。バイクに乗っていたら、着れる服が制限されてしまうので」

そこまで聞いて、天葉も亜羅椰の言わんとするところが分かってきた。確かに今しているようなパンツスタイルの格好ならバイクに馴染むだろう。だが逆に言えば、ひらひ

らのスカートみたいなフェミニン系のファッションは難しい。

「私は殿方の真似事で女の子と交際しているのではなく、女の子が好きだから女の子と交際しているんですわ」

「まあ、気持ちには分かる」

自信満々に言い切る亜羅椰に対し、天葉は苦笑しながらもその言を肯定する。自分にとつても決して他人事の話ではないからだ。

「でもさつき、その格好で口説いてたよ?」

「実際にエスコートする時は、相応の服で来るから」

「あれ、本気だったんだ……。お巡りさんのお世話になるのはやめてね」

未成年である女子高生に本当に手を出さないか憂慮する樟美。

とは言え、昔とは違う。高等部の頃よりも落ち着いているし、見境もつけるようになってる。天葉も樟美もそれを承知の上での軽口だ。

もつとも、相対的に落ち着いたという話であつて、亜羅椰の本質が変わってないのを見たままの通りなのだが。

各々がテーブルの上のカップを口に運び、会話が一旦途切れる。天葉がアイスココアで、樟美と亜羅椰はアイステイ。薄闇の時刻といえども、夏であるがゆえ、飲み物に冷たい氷は欠かせない。

「……で、真面目な話、東京そっちではどうなの？」

会話を再開させた天葉は、店に居た時から気になっていたことを聞いてみる。

「どう、とは？」

「亜羅椰、東京の芸術大学に通ってるんでしょ。そっちで『この子だ』って子見つけて、真面目なお付き合いはしないの？」

「私はいつも真面目だけど、仰りたいことは理解しましたわ」

遠藤亜羅椰という女は、百合ヶ丘に居た頃から浮き名の絶えない人物だった。ガーデン側は要注意人物として注視していたようだが、しかし実際に付き合った女の子が彼女を悪く言うのは聞いたことがない。同じレギオンメンバーである天葉たちが聞いてないのなら、そういった話は存在しないのだろう。

だからこそ天葉は気になった。新たな環境で心境の変化がなかったのか、と。

「お生憎様ですが、気が多い私に身を固める資格はありませんので」

「それ、かっこつけてるの？　そういうの似合わないよ、亜羅椰ちゃん」

「くーすーみー？　結婚したからって見逃されると思ったら大間違い。私は人妻でも構わず食つちまいますわよ」

そう言つて亜羅椰がテーブルの上で身を乗り出すと、樟美は隣の天葉にしがみついてわざとらしく怖がるフリをする。

自らを「気が多い」と称する亜羅椰だが、そんな彼女の本命中の本命が樟美と壺だったらしい。

本当のところは天葉には分からない。そもそも本命が二人という時点でおかしい話である。こうしてガーデンを出て社会人になった今でも、天葉はこの一つ下の後輩に色恋沙汰の機微で上回れるとは思えなかった。

だが幾ら気が多くても、幾ら浮き名が響いていても、天葉にとって信頼できるレギオンメンバーで可愛い後輩には違いない。

「まあ、花が欲しくなったらいつでも来ていいよ。樟美以外は何でも売ってあげる」「あらあ？ では天葉様なら頂けるんですね」

「だーめーですー。天葉姉様は完売済ですー」

カフェの席を立った三人は夜空の下へと出てくる。通りに面しているため、街灯や人家の光で歩く分には不自由しない。

自宅まで大した距離のない天葉たちは歩きだが、亜羅椰は乗ってきたバイクに手を掛ける。

「依奈と壱にも会っていくんでしょ？」

「ええ、勿論。アポは取ったので明日向かいます」

既に夕食時は過ぎてている。当然の判断だろう。

「結局、特に用事はなかったのね」

「とんでもございませぬわ。樟美と天葉様のお顔を見るのは、立派な用事でしょう」

「はいはい、私も亜羅椰の顔が見れて嬉しいよ」

おどけたように調子のいいことを言う亜羅椰に対し、天葉は肩をすくめて答える。

「それより亜羅椰ちゃん。お釣り受け取る時、店員の女の子の手を握るの止めて。次から来にくくなつちやう」

「フフフツ、あの子も初々しくて可愛かったわねえ。バイトの、大学一年生よ。多分」

「そんなこと聞いてないから」

樟美の口を尖らせての抗議も何のその。亜羅椰は目を細めて口角を持ち上げる。会計の直前に、「誘ったのは私だから」と伝票を有無を言わせず持っていったのは、まさかこのためなのか。

昔よりは落ち着いたと思っていたが、やはり亜羅椰は亜羅椰であった。

「本当に泊っていかなくていいの？」

「ご冗談を。婦婦ふうふうの時間を邪魔するほど野暮ではありません」

天葉の提案に対し、首を左右に振る亜羅椰。だが次の瞬間には、悪戯を思い付いた子供みたいにニヤリと笑みを浮かべる。

「それとも、私も交せてくれるのですか？ でしたら大歓迎ですわ」

「やっぱ来ないで」

掴み所の無い後輩は、最後まで天葉に掴ませることなく去っていった。

結局、天葉の質問ははぐらかされたまままで終わってしまう。しかし、そう遠い距離でもないのに顔を合わせる機会はある。なので天葉は亜羅椰の選択を気長に待つてみることにした。

誰か一人を選ぶとするなら、どんな娘を選ぶのか。いつも亜羅椰に振り回されていることを思えば、その程度の好奇心は許されるだろう。

第8話 続・遠藤亜羅椰について

芸術大学というものは、とかく個性的である。亜羅椰が通う東京の芸術大学も、例に漏れず。それは学ぶ対象が美術や音楽といった、創作色の強い分野であることに起因する。

しかしながら、彼ら彼女らの個性は勉学の中だけに示されるわけではない。学生が学生生活を謳歌するツールの一つ、サークル活動にも如実に表れていた。

校舎の前に広がる芝生の緑。その上を、黒装束の忍者が奇声を発しながら駆け抜けていく。

そうかと思えば、サークル棟の出入り口付近からダンボールがゆつくりと歩いて来る。否、正確にはダンボールではない。胴体と頭部と右脚と左脚、それぞれにダンボールを装着した人間だ。サークル『ロボット愛好会』のパフォーマンスだった。……新手的コスプレ研究会と言われた方が、まだしつくりとくるが。

大学のキャンパス内にあるカフェテラスの席で、亜羅椰が紅茶を片手に一息ついている。

こんな風変わりな学校ゆえに、元リリイという肩書程度ではさして気にも留められない。

い。良く言えば、好奇の目で見られない、ということだ。

とは言え、亜羅椰は別の理由で有名人となっていた。言うまでもなく、人並外れた女性遍歴のせいである。入学から半年の時点で、既に彼女へ声を掛ける男子学生は、ほぼぼいなくなっていた。

「ふう……」

その亜羅椰が紅茶のカップをソーサーに戻して溜め息を吐く。

頭に浮かんでいるのは、先週に連休を利用して鎌倉を訪れた際、かつての先輩である天葉からの質問。

「そつちで『この子だ』って子見つけて、真面目なお付き合いはしないの？」

亜羅椰にも「この子だ」と言える娘は確かに居た。だが、それは過去の話。今となつては詮無きこと。故に天葉に対してあのような答えを返したのだ。もつとも、あの答えも全くの嘘ではないのだが。

しかし、今更あの時のことが浮かんでくるとは思わなかった。これは一体どういうことなのか。

「あの二人が、羨ましい……？ 私か？」

ついつい言葉に出して自問自答する。

だがすぐに口元を歪めて自嘲した。あれこれと後ろ向きに思い巡らすのは自分らし

くない。自分ならば悩むよりも、まず行動に移すだろう。

思い立った亜羅椰は紅茶の残りをも胃の中へと片付けてから、テラスの席を立つ。ここで言う行動とは、無論ガールハントのことである。

夕刻に近付いたキャンパスの中。遠くサークル棟の方では、ダンボールの人型がバラスを崩して倒れ込むところであつた。

カフェテラスを離れた亜羅椰は中央棟にやって来た。文字通りキャンパスの中央にあるこの建物には講義室や事務室などが設けられており、学部や学科を問わず学校中の学生に利用される施設である。

ちなみに、亜羅椰は美術学部絵画科にて油彩画を専攻している。これは母から影響を受けてのものだった。

そんな中央棟の一室が、やけに騒がしい。そこは講義室の一つであつたが、講義中というわけではなかつた。講義中ならば、開け放たれた入り口の扉の周りに人だかりがで

きるはずもない。

亜羅椰はその人だかりの中に友人を見つけ、声を掛けるべく近寄っていく。

「これは一体、何のイベントなのかしら？」

「ああ、亜羅椰か。いや、ちよつと、揉め事みたいで……」

振り返った女子学生と亜羅椰は、入学したばかりの頃、一時期交際していたことがある。見た目と性格が好みだという理由で。交際期間は短かったが、今では普通の友人関係に収まっていた。その辺り、あとに引き摺らないさっぱりとした気性も、亜羅椰からは好ましく見えたのだ。

「中に居るのは、女の子ね。でも見ない顔。美術学部の子ではないわ」

「あんたが言うなら、そうなんでしようね」

亜羅椰の元カノは呆れつつも話を続ける。

「問題はあの子じゃなくて、相手の方」

講義室の真ん中。翠玉色の髪をアップスタイルで纏めた眼鏡の女子学生。彼女と相対しているのは五人ばかりの学生だった。先頭に立つ男子学生が代表として物言いを付けているらしい。

「あれ、どこぞの区議会議員のお坊っちゃんよ。おまけに学生自治会の会長で、何とかっていう政治サークルの代表もやってるって」

「へえー、うちにも自治会とかあったのねえ」

「そりやあ大学だからあるでしょ。本当、女の子以外興味ないのね」

「絵にも興味ありますわ」

亜羅椰が元カノ相手に軽口を叩く間にも、室内では議論の応酬が繰り広げられていた。議論と呼ぶには些か一方的な様相ではあるが。

「さつきも言った通りねえ、君が文芸サークルとして大学内で公表している部誌に対して、いかがなものかという意見が学生自治会の中で出ているんだ」

「で、ですが……大学側からちゃんと言いは頂いてますっ」

「大学側ねえ。事なかれ主義で、正しい判断を下せているとは思えないけどねえ。それに僕たちは規則の次元ではなく、良識や倫理の次元で物を話している。分からないかなあ」

話を聞く限り、女子学生がサークル活動で発行した部誌が抗議を受けているらしい。だがおかしな話である。学生自治会にそのような権限などあるはずがない。

そもそも高校までの生徒会とは違い、大学の学生自治会には全学生が加入するものと、関心のある学生のみが参画するものとに分けられる。亜羅椰がその存在を認識していなかった事実から分かる通り、この大学の自治会は後者である。なので尚の事、活動内容や範囲が限られてくるはずだった。

ところが自治会の会長は権限による命令ではなく、本人の自粛という形で要求を呑ませようとしているようだ。

「私の部誌の、どこが問題なんでしょうか？」

「内容がねえ。公序良俗を乱しているんじゃないかなろうかと」

「そんな……。確かに性的な要素を匂わせるような描写はありますが……。でも、そこまで言われるほど過激なものではありません」

「過激か、過激でないか。如何せん女性の物差しは当てにならないからねえ。いや、これは馬鹿にしてるんじゃないよ？ ただ一般論として、そうだと言っているだけで」

本来ならば、こんなクレームは無視するか、すぐにでも大学側に仲裁を訴えるべきだ。

しかし人柄が誠実なせいなのか、この文芸女子は真っ向から非難を受け止めている。誰がどう見ても、自己主張に乏しく大人しいタイプであろう彼女が。

亜羅椰は大層興味を抱いた。

「この際だから、本来なら言い難いことをはっきりと言わせてもらうが、我々はその部誌を有害図書に当たると疑っている」

「なっ！ 有害って……」

「学外からも人は来るんだから、部誌とは言え公表する以上は人目に付く。リリイ同士の恋愛小説？ そんなものを良識ある人が見たら、どう思うか。この大学をどんな目で

見るか。考えたことがあるのか、君い」

「どうして、どうしてそんなこと言うんですかっ」

両腕で抱えた部誌を胸の前で抱き締めながら、文芸女子が小さな声を震わせる。

その光景に、講義室の外で様子を窺っていたギャラリーからざわめきが起きた。

「相手が大人しい子だからって！ あつたまきた！ ちよつと行つて——」

いきり立つて室内に突入しようとする元カノの肩を、亜羅椰の右手が掴んだ。

「私が行くわ」

「えっ？」

「ちよつとここで見ていてちようだい」

「いや、でも、亜羅椰が乱入したら余計に拗れるんじゃない……」

後ろの方から聞こえてくる憂慮の声をよそに、亜羅椰は講義室の中を真っ直ぐに進む。

双方の間に割つて入るのではない。文芸女子のもとへ一直線に歩いていき、彼女の抱えている部誌の表題を横から覗き見た。

「これ、読んだわよ。主役の二人の、表向きの態度と内心の葛藤とのギャップ。描写が丁寧で惹き込まれてしまったわ」

亜羅椰は自分よりも低い位置にある両肩に、左右の手をそれぞれ乗せる。

不意に優しいな声を掛けられた方はというと、ビクツと体を揺らした。

背はそこそこあるが、しっかりと食べているのか不安になるぐらい華奢な体つき。牛乳ビンの底みたいな分厚い黒縁眼鏡。しかしそんな野暮ったい眼鏡の裏側には、清流の如く澄んだ瞳がパチパチと目蓋を瞬かせている。

亜羅椰は早くも、自らの勘が正しかったことを確信した。

「ふうむ？ 誰かと思えば、我が校の抱える問題児のお出ましだ」

人の神経を逆撫でする物言い。

亜羅椰は眼鏡の娘と見つめ合っていた視線を前方に向け直し、彼女を庇うように前へ進み出た。

桃色みたいに薄い赤毛をかき上げる、モデル顔負けの端麗な容姿。そんな女性が近付いてくれば、誰も目を奪われることだろう。

ところが、取り巻きの男子学生は皆、露骨ではないにしろ澁面を浮かべて目を逸らした。学内に広まっている亜羅椰の噂が、大好きな女だという噂が原因だろう。

しかしただ一人、彼らの長である自治会長だけは何食わぬ顔で亜羅椰と対峙する。黒髪で色白の肌の、一見地味だがよく見ると整った顔立ちをした線の細い青年だった。

「遠藤氏。本件は君に関係があるようで、実際はあまり関係がない。口出し無用に願いたいねえ」

「そうかしら？ 健気な女の子の、個性に溢れた創作が潰されようとしている。それだけで関係大ありですわ」

「君は単に、自分と同じ波長の者の肩を持つているだけだろう。普段の素行からして、そんな殊勝な考えを抱いているとは思えない。そうだろう？ 遠藤氏」

「確かに彼女の作品、私の好みに合うけれど。それよりも、癩に障るんでその馬鹿みたいな喋り方をやめてくたさらない？」

相對する会長を挑発しつつ、亜羅椰は横目で女の子の様子を窺う。

外見に違わず争い事が苦手なのだろう。口を結び、伏し目がち。だが時折、亜羅椰の方へ心配そうに視線を送ってくる。

彼女と目が合った瞬間、亜羅椰は軽くウインクする。すると相手は慌てて視線を真下に落とした。

大学生とは思えぬほどの純情さに、亜羅椰の胸は激しく高鳴る。もつとも、亜羅椰もそんな内心を態度には表さない。今は目の前の問題に対処しなければ。

「大体、公序良俗だの有害図書だの……。リライ同士の恋愛の何がそんなに気に食わないのやら。法改正をご存じない？ 山にでも籠つてらした？」

「笑止。お上から与えられた物をただ無批判に享受するなど、衆愚のやる事。悪法を糺すべく声を上げるのは、良心的市民の権利であり義務である」

旧世紀において、大学の学生自治会が政治活動に傾倒するのはよくある話だったらしい。だが現代において、それも自分たちの大学で遭遇するとは思ってもみなかった。

亜羅椰が頭を抱えていると、会長はその視線を再び眼鏡の女の子へと戻す。

「公序良俗の話を抜きにしても、この作品、果たしてどれほどの需要が見込めるのだろうか。とても労力に見合った報酬を得られるとは思えないが」

「べつ、別にお金目当てじゃありません。好きで書いてる部誌ですから」

「例えば……こういうストーリーはどうだろう？ 異世界からの来訪者である主人公が

その能力と人柄を見込まれ、世界で唯一の男性教導官として名門ガーデンに赴任。リイたちに戦いへの覚悟と命の重さを説きつつ絆を深めていく青春ラブコメディ。これなら中高生に受けること間違いなし」

「えっ、嫌です……」

「何で？」

「嫌です……」

女の子がより一層困惑を深めたので、亜羅椰は再び会話へ割って入る。

「本人が嫌がつているのだから。理想の妄想作品はご自分で執筆されたらいかががかしら」

「遠藤氏もしつこいな……。そこまで言うなら、僕が君たちの思い違いを順序立てて説

明してあげよう」

「は……」

自信満々の申し出に、亜羅椰は眉を擡めて怪訝な顔になる。

そして実際に話を聞くと、ますます混迷の度合いが増していく。

「君たちリリイ、元リリイは青春の重要な時期を戦いに費やしてきた。気の毒なことだ
と思う。そのせいで普通の女の子みたいな交際ができず、同性を恋愛対象として錯覚し
てしまった。そう、リリイ同士の恋愛というのは錯覚であり、代償行為である」

「はあ……」

「つまり遠藤氏、君の目はいつも女性を見ているようで、実は見ていない。錯覚による幻
想を見ようとするのは、何も見ていないのと同義と言える。君には目の前の現実が見え
ていないんだ」

「その根拠は？」

「それが人間としても生物としても、正常な在り方でないから。事情が事情なので、本当
に不幸な話であるが。だがしかし、自分たちの不幸に他人を巻き込んで良い道理など、
ありはしない」

「要は根拠のない妄想というわけね」

先程、亜羅椰が会長のご高説を妄想呼ばわりしたのは当てこすりのつもりであった。

ところが現実には彼女の認識を上回っていたようだ。

そもそも、確かに亜羅椰は学内で有名人にはあるが、会長とは今日まで面識がなかった。初対面の相手のことをここまで熟知り顔で語るなど、簡単にできるものではない。一組織のトップだけあって、中々の傑物と見える。

「そこで提案だが、遠藤氏も幻想を追い掛けるのは止めるべきなのは。君ほどの器量の持ち主であれば、素敵な男性と巡り合えるはず。代償行為などに溺れなくとも、きつと人並みの幸福を知ることができるだろう。異性への無理解と嫌悪感からも解放されるに違いない」

「私が言うのも何だけど、よくもまあそこまで他人の人格を無視した講釈ができるわねえ」

「間違いを間違いだと指摘できない社会なんて、健全じゃあない。正論を吐いているのだから、誰に憚る必要があるだろうか？ いや、ない」

遠まわしのナンパではないかと最初は疑った亜羅椰。しかし恐らくはこの青年、ナンパという行為を侮蔑するタイプの男だろう。いわゆる陽キャやパリピとは正反対の人種に見える。

「あ、あのっ」

突然のことだ。亜羅椰の後ろで、眼鏡の女の子が声を上げたのは。

「そう言う会長さんは、ご存じなのでしょうか？」

「何を？」

「男の人との幸福を、体験された上で勧めているのでしょうか？」

「……君は、何を言っているんだ」

意味を理解したのか、会長が啞然とする。

驚いたのは亜羅椰も同じ。本当に何を言いつ出すのか、と。

「君は僕に、自ら公序良俗を乱せと言いたいのか？」

「だって、おかしいじゃないですか。自分でも分からないことを他人に勧めるなんて。それじゃあ説得力も無いし、他人の心を動かさせません。せめてすぐ傍で見届けた経験でも無いと」

大人しい娘だと思ったら、全くとんでもない。

これは流石に、すかした調子の会長も怒り出すだろう。そう予想した亜羅椰だが、意外にも彼はじつと考え込んでいた。

「ふうむ……。言われてみれば、そうである」

「は？」

今度は亜羅椰が素つ頓狂な声を出す番だった。

「失礼」

そう一言だけ断って、会長はその場を足早にあとにした。

「か、会長ーっ！」

取り巻きの男子学生たちも慌てて講義室を出ていく。

残ったのは入り口で騒めくギャラリーと、懨然として立ち尽くす亜羅椰と、ホッと胸を撫で下ろす女の子だった。

「助けて頂いてありがとうございます」

「貴方自身で切り抜けたような気もするけど」

「あれは、つい咄嗟に、あんなことを言ってしまったって……」

講義室から場所を移動して、人目の少ない校舎裏で改めて礼を受け取る。

亜羅椰の言も半分ほどは謙遜ではなく、本当にそう思っていた。目の前の華奢な文芸女子は、やはり見かけ通りの人物ではなかった。

「ええと、遠藤亜羅椰さん……でよろしかったでしょうか？」

「よろしいわよ。名を知って頂けて光栄だわ。貴方がこの小説を書いた『尊とわとみ守まもり』先生なのね」

「は、はい。私の方こそ、趣味で書いた拙作を読んで頂いて光栄です」

先程の講義室内で部誌の小説を読んだと言ったのは、話に割り込むための方便などではない。好みの内容だったので、本当に記憶していたのだ。

自身の作品について触れられたため、女の子は心なしか嬉しそう。

「筆を執った本人も、お話しに負けず劣らず素敵な子で嬉しいわ」

「そんな、とんでもないですっ」

「ところで貴方の眼鏡、伊達よね？」

「えっ、はい。そうです」

「それからその髪、アップスタイルはうなじが見えて魅力的ではあるけど。でも貴方の場合、下ろしても似合うと思うわよ」

「えーっと、それはその、あのっ、目立ちたくないと云いますか目立ってはいけないと言いますか」

ももももごと、しどろもどろになる。ついさつき見せてくれた大胆さが？みたいな。どうやらこちらが平常モードのようだ。

興味深く女の子を見つめていた亜羅椰は、ふと今更なことに気付く。彼女の、ペン

ネームでない本名をまだ聞いていなかった。

そうこうしていると、相手も自己紹介してないことに思い至ったらしい。

「あ、すみません。名乗り遅れました。私、土岐紅巴ときくれはと申します」

第9話 続々・遠藤亜羅椰について

文芸サークル誌差し止め未遂事件はうやむやの内に収束していった。被害者である部誌の作者の方が穏便な解決を望んでいたからだ。

亜羅椰も多少は思う所があったものの、本人の意思を尊重する。それよりも、彼女の関心はすっかりその娘自身へと注がれていた。

後日、亜羅椰は改めて文芸サークル員の土岐紅巴をお茶に誘った。

「音楽学部の声楽科だったのね。道理で見かけないわけだわ」

場所は大学キャンパスの、いつも利用するカフェテラス。亜羅椰自身は講義をサボって会いに行っても良かったのだが、紅巴が放課後を希望したのでその通りにした。

「でも確かに、美しく澄んだ声。ずっと耳に入れておきたいぐらい」

「いえ、そんな大それたものじゃありませんから」

謙虚。と言うよりも、自己評価が低い。それはそれで美德ではあるが、しかしかえって変な存在に絡まれる要因にもなっているのではないか。

亜羅椰は紅巴という人物について更に知るべく、話の先を促した。

「確かに歌は好きですけど、仕事にするほどではとても……。それなのに奨学金まで

貰って芸術大学に入って、何となく時を過ごして」

「明確な目標を持ってず、後ろめたく感じているのね？」

「はい。ガーデンに居た頃の、レギオンの先輩方やお友達は夢に向かって頑張ってるというのに。私はこんな有様で。恥かしい限りです」

話している内に、ラウンドテーブルを挟んだ対面に座る紅巴は俯きがちになる。

真面目で、思い詰めるタイプ。土岐紅巴の姿が更に明らかになっていく。

女の子を攻略する上で初めに為すべきなのは、その女の子の実像に近付くこと。亜羅椰の持論である。

「じゃあ、その小説はどうかしら。趣味って言ってたけど、並大抵の熱意でそれは書けない気がするわ」

「私は、昔からリリイ同士、女の子同士の関係性を見ているのが好きで。それが高じて自分でもお話を書くようになったんです」

小説の話になると、紅巴は自信を取り戻したかのように明るい表情を見せる。好きこそ物の何とやら、というわけだ。

「貴方、この前の啖呵から察するに、さぞ経験豊富なんでしょうね」

「えっ？ えっと、何のお話でしょう？」

「フフツ、とぼけちゃって。そのお話の中でしているような経験よ」

「んなっ！ そそそつ、そんなことはっ！」

「だって『自分で実際に経験しないと説得力が無い』のでしょう？」

「いえ、それは勢いと言いますか、何と言いますか……。あ、でもつ、私の場合は幸いなことに、レギオン内で尊い関係を拝見できたので。それを少しばかり参考に」

「あら、貴方自身がその尊い関係を持つたりはしないの？」

「私は見守っているだけで十分ですから。私のような女は、苔むして巖となるのみ、です」

「国歌か何か？」

その後も暫くの間、二人は会話を弾ませた。

土岐紅巴という人物は、元々あまり会話が得意ではなかったのだろう。出会ったばかりの相手なら尚更に。

しかし、そこをどうにかするのが亜羅椰の腕の見せ所。下心云々を抜きにしても、女の子とお喋りするの楽しい。

やがて二杯目の紅茶を飲み干し、お茶菓子の皿を空にしたところで、歓談はお開きとなった。

時間で言えば、夕刻を過ぎて夜と呼んでも差し支えない。夏なので未だ空は明るい。

「あの、本当に先日はありがとうございますございました」

「どういたしまして。こちらこそ、今日は楽しい時間が過ごせたわ」

紅巴が席から立ち上がってペコリと頭を下げ、翠玉色の髪に囲まれたつむじを見せてくる。

無論、ここで黙っている亜羅椰ではない。

「もし都合が良ければ、今度の日曜、お昼を一緒に過ごさらない？　話を聞かせてくれたお礼にご馳走したいの」

「え？　助けて頂いた私をご馳走されるのは、違うのではないかと」

「まだ話し足りないのよ。貴方の小説のことも語り合いたいから。学校の外でゆっくりとね」

予想通りだが、紅巴は逡巡しているようだった。

「ええと、亜羅、遠藤さんは——」

「言い直さなくて結構よ。私も紅巴と呼んでよろしい？」

「は、はい。大丈夫です、亜羅椰さん」

亜羅椰はテーブルの上で幾分か身を乗り出し、切れ長の瞳で真っ直ぐと相手を見つめる。

見つめられた方は思わず視線を伏せ、しかしすぐ元に戻し、それから僅かに横へと逸

らす。

「学部が違うとはいえ、これまで紅巴のような子を知らなかったなんて。ちよつと自身に腹を立ててたところなの」

「私なんて知らなくても……」

「だからこれは、その埋め合わせでもあるってこと」

亜羅椰は早口にならないよう、なるべく紅巴のペースに合わせるよう努める。一気呵成に畳み掛けて、追い詰め過ぎるのは駄目だ。

「まあ色々理由をつけたけど。貴方とお近付きになりたいのよ、紅巴」

そこで、今まで考えあぐねていた紅巴が首を小さく縦に振った。

「お昼ぐらいなら、構いません。私でよろしければ、是非ご一緒させてください」
「フフフ、ありがとう。楽しみにしているわ」

猫みたいな亜羅椰の瞳が、豹のように細められた。

「えっ？ お夕飯ですか？」

「そう。この前いい店を見つけたのよ。と言つても、そんな肩肘張るような所じゃないわ。バス通りから外れた定食屋よ」

「定食屋……。亜羅椰さんでもそういうお店、行くんですね。あつ、別に、変な意味じゃありませんから！」

「そうねえ、フフツ。たまには良いと思つてね。で、どうかしら？ 私としては紅巴に一緒に来て欲しいんだけど」

「お夕飯ぐらいなら、はい、構いません」

「紅巴つてお酒は飲めるの？」

「お酒は、嗜む程度には。全然強くはありませんが」

「そう。なら今度、うちに来て宅飲みしない？ 外で飲むのもいいけど、そっちの方が気を遣わなくて済むでしょう」

「宅飲み、ですか」

「私も人に胸を張れるほど飲めるわけではないわ。ま、アルコールは話の肴みたいなもの。いつもみたいにお食事してお話ししましょうってところ」

「ふふつ、お酒が肴なんですか？ 分かりました。お邪魔させてもらいます」

亜羅椰の住居は、大学からやや距離があるマンションの最上階だった。間取りは1LDKと決して広くはない。俗に言うコンパクトマンションだ。ただ、防犯と防音に関してはしっかりとしていた。亜羅椰にとって、特に後者は欠かせない条件である。

夜、宴もたけなわといった頃。二人の姿はリビングではなく、奥の寝室にあった。

冷え性ゆえに夏でもカーディガンが手放せないという紅巴。そのカーディガンも、今は部屋の隅に立つポールハンガーに掛かっている。なので彼女が纏うトップスは、白と薄緑のチェック柄をしたブラウスのみ。

「あのっ……亜羅椰、さん？」

酒が入りほんのり赤に色付いた顔で、当惑した様子の紅巴が名前を呼ぶ。それもそのはず。現在の彼女はダブルサイズのベッドの上で仰向けに倒されているからだ。

紅巴がそうなったのは、勿論部屋の主のせい。彼女は紅巴の顔を挟み込むようベッドの上に両手をつけて、覆いかぶさるように上から見下ろす。亜羅椰の白い肌と、身に纏っている黒のキャミソールが、妖艶なコントラストを成していた。

「えっと、お酒飲んで、お話しするだけって……」

「あらあら。家までついて来ちゃって、本当にそれだけってことはないでしょう」「で、ですが」

「顔には出さなくとも、心のどこかでちよっぴり期待していた。違う？」

「それは、そのっ」

紅巴は目をぐるぐるすると動かし、ごにごによごによと口ごもる。度の入っていない伊達眼鏡は既に外されていた。大学では短く結っている髪も亜羅椰によつて解かれて、白いシートの上に翠玉色の花卉の如く広がっている。

少しの間その姿を黙って見ていた亜羅椰が動いた。ゆっくりと、紅巴を驚かせないよう、顔を下に下ろしていく。紅巴の顔に垂れそうになる長い赤毛を指先でかき上げて、触れ合う寸前まで顔と顔を近付けた。

「私は期待してたわよ。紅巴を私のものにできるって」

そう言つて口元にキスを落とす。目と一緒にキュツと閉じられた紅巴の口元へ。

口の先端同士が触れるだけの浅いキス。そこから、亜羅椰の舌が紅巴の唇を左右に撫でた。すると、おつかなびつくりといった調子で、閉じていた唇が少しだけ上下に開かれた。

水音が鳴り、互いの唾液が僅かに混ざる。

続いて亜羅椰は紅巴の上唇を舐め取るように口に含み、それが終わると同様に下唇の感触も堪能した。

本来ならば、更に深く苛烈に攻めるところ。だが今回はそうしない。そうせずとも、紅巴の瞳は朝露を湛えたように潤み、慎ましやかな胸を上下させ呼吸が荒くなっている。

「ふはっ。はあ、はあ……」

「メイクは控えめだけど、リップの手入れはきちんとしてるのね。美味しかったわ、紅巴」

「あううっ」

元から赤くなっていた紅巴の顔が、恥じらいで真っ赤な柘榴と化した。柘榴は亜羅椰の大好物である。

亜羅椰は一旦上体を起こしてから、紅巴のブラウスに両手を伸ばす。ボタンを上から

順に外していく。

一つ、二つ、三つ——

やがて、きめ細やかな柔肌が眼下に広がった時、ブラウスの合わせ目を掴んでいた亜羅椰の両手が軽く弾かれた。

「ややややつ、やつぱり駄目ですう！」

自身の体を両腕で庇うように抱き締める紅巴。

亜羅椰は驚くことなく微笑を浮かべたまま問い掛ける。

「私では、貴方のお眼鏡に適わなかったのかしら」

「ちが、違います！ そんなのでは全然ないです！ ……あの時大学で、私の小説を褒めてくれて、凄く嬉しかったですし」

噛みそうになりながらも、否定の言葉が返ってきた。

「ただ、こういうのは、もっと関係性を大事にするべきだと思っんです」

「関係性？」

「もっと時間を掛けて、一緒に過ごして。そうして関係性を深めて。それから、さつきみたいになるべきだと……」

たどたどしい説明だが、亜羅椰は十分に理解した。

いつもは電撃戦を仕掛ける亜羅椰が今回選択したのは——彼女の基準では——持久

戦である。しかし紅巴にとってはそれでも性急過ぎたらしい。

ここにきて、亜羅椰は更なる長期持久戦への移行を決定した。この判断の早さは彼女の強みであろう。今、目の前で体を震わせているターゲットには、そうするだけの魅力を感じられたのだ。

(ここ)まで純情な子がいるなんて。レギオンのお仲間によほど大切にされてきたのね)

一度拒絶されてなお、亜羅椰の心は沸々と燃え上がる。この娘を絶対に手に入れてみせると。

「それじゃあ、これからもつとお付き合いして、本質的な意味で寄り添えられたら、私の想いを受け入れてくれるのね？」

「お約束は、できませんが。善処しますっ」

通常、善処というのは遠回しの否定の言葉。しかしこの時ばかりは、少しも期待が陰らない亜羅椰であった。

「でも、紅巴との時間のために、今日明日と予定を空けていたのよねえ。代わりに何か面白いこと探さないか」と

ベッドに腰掛ける亜羅椰が思い出したように呟いた。

隣には、はだけたブラウスを元通りにした紅巴が同じく腰を下ろしている。

「でしたら、亜羅椰さんに少しお願いがあるのですが」

「なーに？」

「亜羅椰さんの、今までお付き合いされた経験談を、聞かせて頂きたい」と

遠慮がちに紅巴が頼んできた。

「ふーん、小説の題材にでもするってわけね」

「はい。実はこちらにお邪魔する前から、いつ切り出そうか悩んでいました」

紅巴の抱いていた期待とは、小説のネタに対する期待だったというわけだ。

若干肩透かしを食う亜羅椰だが、このお願いを聞いてあげることにした。お喋りは嫌いではないし、面白い趣向を思い付いたから。

「長くなりそうだから、ちよつと休憩してからね。飲み物用意してくるから、貴方はメモの準備でもしてるかいわ」

「あ、はい。ありがとうございます」

「フフツ、気分は千一夜物語だね」

「あつ、あの！ 亜羅椰さん？」

「何かしら」

「お話ししてくださるのは良いのですが。さつきから、当たっているんですが」

「何が、どこに当たっているの？」

「それは……ですから……」

「ちゃんと言ってくれないと、説明してくれないと分からないわ」

「うううつ、ですから！ 亜羅椰さんの、大きなお胸が！ 土岐の、鶏がらみみたいに貧相な体に、当たってます！」

「私、鶏がらつて好きよ。むしろぶりつきたいぐらいにね」

「ひいっ！」

亜羅椰が紅巴に寝物語を聞かせるようになってすぐの頃。大学の講義の合間の講義室で、亜羅椰は予想外の人物と再会した。

最初、それが誰なのか分からなかった。モヤシみたいに生白かった面影はなく、褐色に日焼けした姿はいかにも健康的。気のせいか、体格までワンランク上がったように見える。

「で、今更会長さんが何の用かしら？」

講義室内の席についたまま、亜羅椰が億劫な表情を微塵も隠さず問う。

一方、机を挟んで亜羅椰の前に立つ青年は気にした素振りも無し。手に持っていたスマートフォンを机上に置いて見せてきた。

「実はあの後、土岐氏の話ももつともだと思ひ、横須賀まで足を運んでね」

「横須賀って、あの横須賀？」

「関東地方、鎌倉府横須賀市の横須賀だね」

会長は平然と言う。

この東京から距離的にそこまで遠くなく、インフラの復興も比較的進んでいる。学生

でも気軽に行き来できる場所ではあった。問題は、足を運ぶに至った経緯と動機である。

また、それに輪を掛けて問題なのが、スマホの画面に映る写真。どこかのハンバーガーショップだろうか。画面中央、店内の席に座る会長。そして彼を囲むように集まっているのは、白人に黒人にアジア系のムキムキマツチョなおじ様お兄様方。笑みを浮かべてピースサインを作っている点が、皆に共通していた。

「えっ、何、それは……」

「在日米軍横須賀基地、海軍^{セー}兵士^{ラー}の皆さんだ。共に酒を飲んで横須賀バーガーを食べて、お国の話で盛り上がりすぎてきた」

「それだけのために、横須賀まで？」

「ついでに異文化交流も兼ねようと思って」

「いや、交流し過ぎでしょ。と言うか、よく交せてもらえたわね」

「人徳う、かな」

「やかましいわ」

更に話を聞くと、横須賀から帰京した後、会長は紅巴に対して部誌の差し止め要求の件を謝罪したらしい。遅きに失した感はあるが、しないよりマシだと亜羅椰は溜め息を吐く。

「それなら、紅巴の作品のことも認めたわけね」

「いや、全然」

「はあ？」

「それとこれとは話が違うんだよなあ。内容が不適切なものは、不適切。ただ、差し止めはやり過ぎたし、君らにこれ以上何を言っても無意味だと悟っただけで」

さつきまでの話の流れは何だったのか。亜羅椰はこめかみに青筋を浮き立てそうになる。

しかしながら、これ以上紅巴に絡んでこないならそれで良い。そう思い直して矛を収めた。

「そうそうそれから、学生自治会の会長職は辞しておいた。僕としたことが、まだまだ知らないことが山ほどあったから。土岐氏の言った通り、何事も経験してみないと。そのためには時間が幾らあっても足りないのですね」

去り際、会長改め元会長は最後にそんなことを言っていた。

亜羅椰は遠ざかる背中を見送りつつ、彼の心中を見透かす。

（殊勝なことと言ってたけど。さては、パリピの楽しみに目覚めたわね）

見ず知らずの外国人の輪に飛び込んでいく方もブツ飛んでいる。だがそれを受け入れ、政治活動の闘士を等身大のただの学生へ変えた彼らも大概だ。

何という懐の広さ。米海軍のおじ様方と、ついでにハンバーガーの力には脱帽するばかり。

自由の国って、凄い。つくづく思う亜羅椰だった。

第10話 たくのみ!

キッチンの小窓から見える空は、完熟したトマトの如く夕焼けに染まっていた。小窓の位置は樟美の背よりも若干高い。覗き込みでもしない限り、そこから外の詳しい様子は分からないが、直に暗闇が訪れることは明白だった。

お店で使っているものとは違う明るい色合いのエプロンを付けて、樟美が台所に立っている。今夜の食卓を飾る品々、その下拵えのために。

透明なボールの中に茹でたほうれん草とクリームチーズ。緑と白の混ざりあう中へ、樟美が醤油の黒を小さじで投下していく。三色を更に菜箸で混ぜ合わせて、まず一品完成。出来上がった和え物は、一旦ラップに包んで冷蔵庫へと仕舞った。

そうして次に、揚げ物で使う天ぷら鍋の油の様子を見る。

ちょうどその時、玄関の方から扉が開かれる音が聞こえてきた。

「樟美ー、帰ったよー」

最後までお店の方に残っていた天葉の帰宅。彼女は樟美の後ろまでやって来ると、小さな両肩に手を乗せて銀髪の上から口づけする。

「何を手伝おうか」

「じゃあ、厚揚げに使うお豆腐を切って、それから枝豆を出しておいてください」
「うん、分かった」

基本、天野家の炊事は樟美が引き受けているが、天葉とて何もしないわけではない。特に今日のような日、これから始めることを思えば尚更だ。

「依奈たちはいつ頃来るんだっけ？」

「多分もうちよつと。七時までには着くつて」

「そう」

まな板の上で木綿豆腐を角切りにしながら、天葉は横に立つ樟美と話を続ける。

「依奈に聞いたんだけどさ。この件、樟美と壺の提案なんだつてね」

「はい、そうですか」

「そっかー。いやあ、私たちも果報者だねえ」

「大袈裟です……」

気恥ずかしさに、否定の言葉を口にする樟美。だがそんな彼女も、依奈が果報者である点には同意した。自身の親友で幼馴染の想いを知っているからだ。

会話の最中に樟美は熱した油の中へ食材を投下する。中でも衣をたつぷりと付けた鶏肉は今宵の準主役と言っても過言ではないだろう。

ただし、あくまで準。主役にはなり得ない。何せ今回彼女らが集ったのは、皆でお酒

を飲むため。宅飲みのためなのだから。

程なくして、天野家の玄関から呼び出しのチャイムが鳴る。

樟美の言葉が証明されたのだ。玄関に向かった天葉の声に混ざって、樟美のよく知る二人の声がキッチンまで聞こえてきた。

「お邪魔するわよー」

「天葉様、樟美。本日はお招き頂きありがとうございます」

依奈が気さくに、壺が折り目正しく、家の主と挨拶を交わす。

自分にとっても樟美にとっても旧友である二人の客人を、天葉が敷居を跨がせ家の中へと招き入れた。

「暇人の依奈はともかく、壺とはあんまり遊べないから、楽しんでいってね」

「はい!」

「……人から言われるのはやっぱり癪ね」

軽い憎まれ口を叩き合いながら、リビングまでやって来る。ここではテーブルを挟んでソファが二つ向かい合っていた。机上には人数分、即ち四人分の箸や小皿などが綺麗に並んでいる。

肝心の料理はまだ見えない。ただし、キッチンから漂う香りだけはその存在をしつかりアピールしてくる。鼻腔を通って空腹を刺激し、食欲をそそられる香りだ。ほとんど毎日嗅いでいるはずの天葉でも、その誘惑には抗し難い。

「私、樟美を手伝ってきます」

「いいから、いいから。壺たちはお客さんだから、座つてて」
「でも」

「うちの料理長からの指示だから。ね？」

「はあ、そういうことなら」

天葉は今にもキッチンへと駆け出しそうな壺の制止に成功した。本当は、樟美から特に何か言われたわけではないのだが。しかし長い付き合いから、それぐらいのことは察せられる。

なお料理長というのは、百合ヶ丘時代の樟美が渾名された称号である。この家においても、天葉は密かにその渾名を使っていた。

「そうそう、料理はプロに任せて。それよりも他に大事なことがあるでしょう」

「あ、そうだった。すぐに出しますね」

依奈に促され、壺は肩から提げていたクーラーボックスの蓋を開ける。中に詰められていたのは缶。多種多様なお酒の缶。今宵の主役たちである。

壺がテーブル近くの適当な場所にクーラーボックスを置いたところで、樟美がお盆に乗せて何枚かの平皿を運んでくる。それを何往復か繰り返し、天葉と共同でテーブルの上に皿を並べていく。夕餉にして、酒の肴となるものだ。

こうして全ての準備が完了すると、天葉は全員に着席を求めた。

「え、今日はお忙しい中で集まって頂きありがとうございます。ささやかながら……あつ、これ謙遜だからね? 樟美の料理は豪勢だから」

「ほら、似合わない前置きなんていいから、早く」

「もー、依奈はせっかちなあ。それじゃあ、かんぱーい!」

「乾杯!」

「乾杯」

「乾杯」

皆が口々に唱和して、小さな宴が幕を開ける。

唐揚げに天ぷらに佃煮に和え物に。皿に盛られたおかずの多くは樟美の手料理だった。中には依奈たちが道中で購入して持ち込んだ惣菜もあるが、量としては少ない。

「壺、味付け海苔はともかく、こんな時まで納豆なんか持つてきてどうするのよ」
「私が食べますから」

半ば呆れた様子の依奈に、ムツとする壺。

実際、夕食会も兼ねているので、パツクの納豆ぐらい構わないのだが。

「壺っちゃん、ご飯もちゃんと炊いてるよ」

「ありがとう、樟美。やつぱりお米が無いと始まらないわよね！」

そうは言いつつも、やはり飲み会なので加減はする。肝心のお酒が入らなくなつては本末転倒だろう。

「缶ビールをグラスに移すとか……。謎な行動ね、ソラ」

「いや、こうしてビールを出すバーがあるんだよ」

「嘘おっしやい」

「本当だつて」

酒というのは不思議なもので、一人で飲む時よりも友人たちと飲む方が酔いの回りが早い。グラスを傾けるペースが自然と上がっているせいかもしれないが。

しかし何にせよ、この場の四人にもアルコールが確実に染み渡り始めていた。

「タイムリングが合えば、亜羅椰も呼べただけどねえ」

「あいつなら女の子と二人で飲みたがりますよ」

「今まさに部屋に連れ込んでたりして。あはははっ!」

天葉と壺のやり取りに依奈が食いついてくる。

依奈は酒が入るとテンションが上がるタイプであった。絡み酒、と言っても良いかもしれない。お姫様の^{ブランセス}二つ名はどこへやら。今も遠慮なしに笑い声を上げている。

一方、騒々しい依奈と対照的なのが樟美だ。お手洗いや戻ってきてソファの上に腰掛けてから、五分と経たない内に、うつらうつらと船を漕ぎ出した。やがて完全に意識を手放したのか、隣に座る天葉の肩へとその頭を投げ出した。

「樟美、樟美い」

「シールドル一本で潰れちゃいましたね」

「相変わらず弱いなあ」

横から天葉が呼び掛け、向かいのソファから壺が覗き込んでも、起きる気配が全く無い。それどころか小さな寝息まで聞こえてくる。

樟美は今日の集まりを——言葉にはせずとも——楽しみにしていた。なので起こさうかと思つた天葉だが、口をもごもごと動かす寝顔がどうしようもなく可愛くて、躊躇してしまふ。

その時、天葉に悪戯心が湧き起こる。彼女は樟美の肩を掴んで揺さぶる代わりに、彼女の耳元で口をゆつくりと開く。

「樟美、早く起きないと食べちゃうわよ〜」

そんな冗談めかした台詞に反応したのは、残念ながら樟美ではなく依奈だった。

「ちよつと、ソラお婆ちゃん！ 樟美なら毎日食べてるでしょ〜！」

「流石に毎日は食べてないよ!?!」

「ええ〜? ほんとお〜?」

「……まあ、隔日、ぐらいかな」

「この、お・お・ぐ・ら・い♪」

普通なら絶対口に出さないようなことを、割とあっさり口走る。どうやら天葉も酔いが回っているらしい。

「依奈つたら自分のところが倦怠期だからって、うちに当たらないですよ」

「失礼ね。うちの壱はもう凄いのよ? 最初こそキャンキャン鳴く可愛いワンちゃんだけど、ついついやり過ぎてスイッチ入れちゃうと、『天狼』に早変わりするんだから」

「知りたくなかった、そんな情報……。て言うか、お下品な話は止めてよね」
「あんたが始めたんでしようが」

酒のお陰でふわふわとした心地のままに、天葉たちは取り留めの無い話を繰り広げていく。あつちに行ったり、こつちに行ったり、順序も纏まりもあつたものではない。比喩ではなく、本当の意味で取り留めの無い会話であつた。

「でさー、結局売つたら私のこと、お姉様つてあまり呼ばなかつたわよねえ」

「今更いいじゃないですか。こうして結婚したんだし」

「良くないわよ！ それとこれとは話が別でしょ！」

依奈が缶チューハイ片手に、隣のパートナーの肩へ寄り掛かる。ついさつきまで惚気ていたかと思うと、今度は眉を吊り上げて愚痴を吐く。

その様子を天葉は始め、フライドポテトを齧りながら他人事のように眺めていた。始めだけは。

「もういいわ！ 頑固な老の代わりに樟美をお嫁さんに貰うから！」

いきなりそんなことを言い出して、席を移動し樟美の傍へ近付く依奈。

無論、黙つて見過ごす天葉ではない。

「成る程、成る程。それはお目が高い、賢明な提案だ。……この天葉わたしが認めないつて点を除けばねえーっ！」

憤然として依奈の真ん前に躍り出る。

「このつ、樟美から離れなさいっ！」

「いやー！　うちに連れて帰るのー！」

寝ている当人のすぐ前で、子供染みた掴み合いが始まった。高等部時代の頃を含めても、ここまで大人気無い二人は珍しい。げに恐ろしきは、酒の力か。

「樟美を起こしちゃいますよ」

ただ一人、忝だけは部屋の惨状とは無縁かの如く、平然とした顔でグラスの日本酒を啜り続けていた。

「ふあ〜っ……」

天葉が口元を右手で覆いながら気の抜ける声を出す。

庭先で夜風に当たり、水をコップ一杯飲み干し、大分酔いが醒めてきた。

そうしてリビングに戻ってきたところで、天葉は忝と鉢合わせする。

「お布団、使わせてもらいました」

「うん。樟美の方は後で私が運んでおくから」

樟美に続いて酔い潰れた依奈は、パートナーの手によって宅飲み会場から運び出されていた。来客用に空けてある、普段は使わない和室へと。今頃は真つ白い布団の上で寝息を立てていることだろう。

「壺はお酒強いね。けろつとしてる」

「体質、だと思えます。家柄的には都合がいいんでしょうけど」

顔を薄らと赤く染めてるものの、壺は足取りも思考も明瞭としているようだった。結構な量の日本酒や焼酎を飲んだはずなのだが、二十歳でこの強さなら、確かに体質と言えらるだろう。政治家・官僚一家にとって、酒が幾らでも入るといえるのは便利な体質である。

「天葉様、今日は本当にありがとうございます」

「改まって何？ お礼を言うべきなのは、こっちも同じだよ」

壺がソファに腰も下ろさず居住まいを正してそう言ってくる。

「だって、依奈様がとても楽しそうだったから。こんなにはしゃぐことなんて、最近じゃ滅多にありません」

神妙な顔つきで、視線を幾分か落として話を続ける。

そんな姿を見ている内に、天葉は壺の気持ちは何となく分かってきた。

「自分と一緒に居るより幸せなんじゃないか。そう言いたいのか？」

「いえ、別にそこまでは……」

「でも似たようなことは思ってるんでしょ」

「それは、はい。そうです」

田中壺という後輩は、元来真面目で小難しく考える傾向があつた。それは美德にも欠点にもなり得るもの。往々にして、この手の性格は多少の年月では変わらない。壺は今でも壺らしいというわけだ。

そこで、天葉も自分らしい持論を語ることにした。

「あのねえ。依奈だつていつもいつもはしゃぐわけにはいかないでしょう。特に壺の前では、年上とか先輩とかの面目もあるんだし」

「結婚して、一緒に住んでいるのに。それでもですか？」

「それでも、よ。好きな人に良い格好したがるのは、結婚したつて変わらないものだから。壺にもそんな経験、あるんじゃない？」

「言われてみれば、あるかも」

全寮制のガーデンで、レギオンも一緒に。そういう環境にあつた彼女らは、世間一般の夫婦に比べると同居へのハードルが低いだろう。しかしそれでもやはり、迷いや悩み

は少なからずあるものだ。むしろ、全く無い方がおかしいと天葉は思う。

「それから、壺は私のこと羨んでいるのかもしれないけど。私は壺のことが羨ましいって思う時があった」

「天葉様が、私を……? 嘘だ」

「ほんと、ほんと」

天葉が普段は胸の内に仕舞っている想いを口にする。まだ完全に酔いが抜け切っていないのもあるが、何より腹を割って本音を吐き出した壺に做いたくなつたから。

「壺は五人組、幼馴染の中でも樟美と特に仲が良かったし。ルームメイトだし。私の知らない樟美を知っているのが、羨ましい」

あの頃は、上級生だとかレギオンの主将だとか、立場があつて表に出し難かつた想い。事によつては嫉妬とも見なせる気持ちも、今だからこそ天葉は明かす。

「私だつてそんなこと考えてたつてわけ」

「はあ……」

「……つと、これ、ここだけの話だから。樟美にも依奈にも、誰にも言わないでね」

「分かつてます。私の話も、皆には内密に」

それまで真面目腐つた顔をしていた二人が、顔を見合わせた後、どちらからともなく吹き出して笑い合う。お互いに、自分とは違うタイプだと思つていた相手が、自分と似

たようなモヤモヤを抱えていたのだと知ったせいだろうか。

本当に今だからこそ話せたこと。旧友の別の一面を垣間見れた。お酒のお陰である。「すっかり酔いが醒めちゃいましたね。天葉様、せつかくだから二人で飲み直しましょうか！」

「いや、私はもういいかな……」

「ええ、そんなー」

第11話 小さな出会い

夏、お盆の時期。大抵の花屋は忙しくなるこの時期は、アマノもまた繁忙期である。なので前日からアルバイトを入れて店舗業務を回しているところだった。

現在、店主の姿は無い。車で配達に出ているからだ。店に残った従業員は陳列棚で清掃に勤しむ樟美と、カウンターに立つバイトの結梨である。

その結梨の前、カウンターの上に厚手の布が敷かれ、更に布の上へ球根が一つ置かれていた。球根を持ち込んだ人物は、身の丈が180cmを越えようかという巨漢の三人組、その内の一人である。

「おうおう、店員さんよお。この球根、大丈夫だよな？ 来年にまた花を咲かせるよな？」

チューリップは多年草の球根植物であるため、複数年に渡って花を付ける。ただし、それも条件があつてのこと。相応の手入れをしないと、たとえば花が咲いても以前と同じ大きさ美しさは保てない。

結梨は球根を見つめながら軽く掴み、それからおもむろに問い掛ける。

「球根は、いつ掘り上げましたか？」

「今月の頭ぐらいだな」

「遅くても7月までには済ませてください」

そのシーズンの開花を終えたら、土から球根を取り出し、茎より上を切除して養分が球根に回るよう仕向ける。それが掘り上げ。掘り上げを適切に行なうことで、次のシーズンも見応えある花が期待できるという寸法だ。

作業着に包んだ筋肉を震わせ、スキンヘッドの厳つい顔に不安の色を浮かべる彼も、掘り上げについては知っていたのだ。ただ、時期を逸してしまった。これでも咲かないことはないが、見栄えが相当落ちてしまう。

「何とか、何とかならないのかよお……。苗から大事に育てたんだよ……」

巨漢からの懇願を受け、結梨は自身の顎に指を当てながら少しの間考える。

「来年、新しいものをお買い求めください」

「そんな……」

無慈悲な宣告に、男はがつくりと膝を突いた。

後ろでハラハラしながら見守っていた男の連れ二人が、すかさず両脇から駆け寄っていく。

「兄者っ」

「しっかりしてくれ、兄者」

男は泣いていた。涙は流さず、嗚咽は漏らさず。しかし泣いていた。僧帽筋が、三角筋が、上腕筋が、そして大腿筋が悲しみに打ち震えて泣いていた。

結局、三人組は失意のまま店を後にした。別件の買い物をちやっかり済ませてから。人の世話を受けているとは言え、自然の中に生きる草花の世知辛さを、彼らも身に染みて感じたことだろう。

「さつきはよくできました」

棚の掃除を終えた樟美が褒め言葉を掛けた。

褒められた結梨はと言うと、「当然」と言わんばかりに澄ました顔。しかしながら、頬が微妙にふるふる震えている。破顔するのを堪えているのだろう。大人になっても、こういったところに彼女の正直な気質が表われているようだった。

「結梨さん、もうカウンターも大丈夫、かな」

「うん。よっぽど難しいこと聞かれない限り、大丈夫」

実際、結梨の上達は大したものだ。元々物覚えに優れているので、業務自体に支障はない。懸念だった言葉遣いも、大人になった今では及第点。多少の粗は、持ち前の明るさで帳消しにできるレベルだった。

問題になり得るとすれば、よほど捻くれた客か、初めからクレーム目的の人間ぐらいだろう。ただしそういった手合いが花屋をターゲットにする確率は、飲食店などより低いのは間違いない。その意味で、保護者である梨璃と夢結がアマノに結梨を送り出したのは正解と言える。

もつとも、あの二人のことだから、業種云々以前に信頼できる人間の元でないと預けられないのかもしれないが。

「じゃあ、私バックヤードと事務室を整理してくるから。ここ、任せていい?」

「いいよ、樟美お姉さん」

「何かあったら、呼び鈴、鳴らしてね」

「うん、分かった」

若干の迷いを残しつつも、樟美は決断した。

売り場からバックヤードへ向かう途中、一度振り返ってカウンターの方を見る。そこに立つ結梨の姿から意欲と頼もしさを認め、樟美は安心して店の奥へと進んでいった。

「今日のお夕飯、結梨さんも一緒だし。冷しやぶにしようかな? 夏野菜のカレーなん

ていいかも……」

安心したせいか、意識はすっかり今晚のメニューへと移っている。

先々の献立表を用意している樟美だが、勿論いつも予定通りにいくわけではない。取り分け、今日みたいにゲストを招いた日は色々工夫したくなる。

天葉が百合ヶ丘卒業後に園芸専門学校へ入ったのと同じように、樟美は調理師専門学校に入っていた。近い将来、天葉の店が上手くいかなかった場合に備え、手に職を付けるためだ。そうして得た調理師免許は現在の所、幸運なことに天野家の中でしか活かされていかない。

五年前、結梨は由比ヶ浜沖から生還した後も暫くの間——具体的には一年とちよつと——その生存が秘匿されていた。情勢が彼女にとって好転するまでの間、ガーデン内、あるいはガーデンが保有する限られた敷地の中にずっと隠されていたわけだ。なので隠遁中、結梨が交流できたのはガーデン上層部の人間と生徒会三役、あとはガーデン直

轄の特務レギオンぐらいである。

結梨が退屈していないか、寂しい思いをしていないか。そう気を遣ってくれたのだろう。当時、生徒会長の一人だった秦はたまつり祀は一柳隊の活躍を結梨に語り聞かせてくれた。中でも特に結梨が惹かれたのは、梨璃たちが学外のレギオンと共闘した話であった。

結梨が街でのアルバイトを望んだのは、梨璃たちへの羨望からくる冒険心と、ほんの少しの反抗心が原因だったりする。

「あつ」

ふと結梨はお客の来店に気が付く。

いつの間にか店内に入っていた。考え事はしていたが、上の空ではなかったはずだが。

その客、高校生ぐらいだろうか。ノースリーブの白シャツと黒のスカートを着た女の子だ。色素の薄い、ともすれば茶色にも灰色にも見える長髪が左右に跳ねている。彼女は先程から店内をきよるきよると見回していた。

何かお探でしょうか、と声を掛けようと考えた結梨。ところが口を開こうとした直前、偶然に女の子と目が合った。

どこか眠たげな様子で、しかし爛々と輝きを湛えた黄金色の瞳。その瞳に結梨の視線は釘付けとなる。

「きれーい……」

思わず口を吐いて出た感嘆。

それは相手の耳にぼつちり届いていたようで。女の子がカウンターの方へ近寄ってくる。

「なに？ お姉さん、もしかしてナンパ？」

「ちっ、違うよー！」

女の子が瞬きしながら聞いてきたものだから、恥ずかしくなった結梨は慌てて否定した。

結梨の言葉を信じたのか信じてないのか、その子はじろじろと無遠慮に見つめてくる。二人は見た目の年齢も同じぐらいなら、身長もほぼ一緒だった。

「ふーん……」

女の子は更に距離を詰め、カウンターのの上に両手を付いて結梨の顔を覗き込んだ。き

目と鼻の先まで接近したことで、当然結梨からも相手の顔がよく分かる。白くきめ細かい肌、やや幼いながらも端正な顔立ち。そんなのが間近に迫ってきたものだから、結梨はますます決まりが悪くなってしまう。

「うん、いいよ」

「えっ?」

覗き込むのを止めた女の子が突然そう言ってきた。

「お姉さん可愛いから、携帯の番号交換してもいいよ」

「ええっ?」

結梨は目を丸くして驚いた。ナンパと誤解されたのは、揶揄われただけだと思ったのだが。

しかし若干の戸惑いを抱えたまま、結梨は相手の提案を受け入れた。携帯を取り出して、番号を交換したのだ。

本来、業務中にこのような真似は御法度である。だが結梨は彼女ともっと話がしたいと、不思議とそう思ったのだ。

「あ、私、佐々木藍ささきらんっていうんだ」

「私は白井結梨。こう見えて二十歳はたち」

「二十歳? なーんだ、同い年か」

意外に思ったのは結梨とて同じ。この藍という女の子、容姿も言動も高校生程度に見えたから。結梨自身も他人のことは言えないのだが、彼女の場合は出生が特殊なのである。

それから結梨は藍と、互いのことを話せる範囲で話し合った。

聞けば、藍もまた元リリイであり、現在はガーデンと提携するラボで手伝いをしてるのだとか。研究職には見えないので、体を動かす仕事だろう。そうなると、彼女は強化リリイなのかもしれない。投薬や外科手術で能力を引き上げられた強化リリイは、マギの減退が特に遅い。結梨も似たような存在だから、今でも工廠科や稀に前線でも仕事があるのだ。

ちなみに現在、藍は連れの用事で鎌倉に來ているそうだ。こつちに知り合いが居るらしい。

「それで藍、お花は買わないの？」

「買うんだけど、連れが来るまで待つて」

「電話したんだ」

「してない」

「してないのに、来るの？」

「多分大丈夫。多分」

のほほんど答える藍。根拠など無いのは明らか。

結梨は内心で首を傾げるが、同時に、まだこの子と別れないで良いのかと喜んでもいた。た。

とは言え、現在はお昼前。まだまだ客は来るだろう。なので残念ながら、藍の相手ば

かりするわけにもいかない。

そんなことを考えていると、ちょうど図ったかのように来店する者がいた。

「ちよつと藍！ 搜したんだよー！」

「おー。結構早かつたね、一葉^{かずは}」

駆け込むように店へ入つてきたのは、青みがかつた黒髪をショートカットにした凛々しい女性だった。体力があるのか体を鍛えているのか、急いでいた割りに息を切らしていない。眉を上げて藍を叱る姿は外見年齢の差もあつて、さながら姉と言つたところ。

「すみません、お騒がせして。花を見させてください」

「はい、ごゆつくりどうぞ」

申し訳なさそうに謝罪してくる一葉と呼ばれた女性に、結梨はお仕事モードへ切り替える。

藍の連れということは彼女もガーデン関係者なのだろうか。だとしたら、このお盆の時期に花屋へ来たのは霊園に供える花のためだろう。

結梨が見ている中、一葉は少しばかり時間を掛けて欲しい物を選んだ。

カウンターの上にキクヤリンドウ、ユリといった花々が束となつて置かれる。色は赤・黄・紫・白と様々。法事に使う花は淡い白や紫が一般的だが、墓前に供える物に關してはむしろ彩り豊かな方が好まれるのだ。

結梨はそれらの花を五本ずつの束にして、丁寧に包装していく。それから、お代とお釣りのやり取りを交わした直後、一葉がゆっくりと口を開く。

「貴方、どこかでお会いしましたか？」

「……いいえ、会ってませんけど」

身に覚えのない結梨は首を左右に振った。

それでも一葉は顎に手を添えてジツと考え込んでいる。考えられるのは、彼女の方が一方的に結梨を見たことがあるというケースだろう。

「あーっ！ 一葉もナンパだ！」

「ちよっ、ちがつ！ 何言うの藍！」

「さっきのはどう考えてもナンパの常套句だよ。一葉ったら、もー」
「違うってば！」

藍が割り込んだことで、その場が一気に賑やかになった。

二人の掛け合いを、結梨はきよんとした顔で眺めている。

「恋花れんかに言い付けてやるーっ」と

「藍！ ……あつ、では失礼します。お花、ありがとうございます。……こらっ、待ち

なさい！ 藍っ！」

二人して慌ただしく店を出ていく。

見えなくなった彼女らの背中に対し、結梨は聞こえないと分かっている、お決まりの挨拶をする。

「お買い上げ、ありがとうございますございました」
心の中に名残惜しさを残して。

その日の夜、結梨は天野家にて夕食の御相伴に与っていた。

白く平らな器に盛られたご飯とカレー。カレーの中に浮かぶ玉葱に茄子に南瓜など、夏野菜の数々。それらを前にしても、結梨の手が握るスプーンの動きは今一つだった。

「結梨さん、味、合わなかった？」

「ううん、違うよ。カレーは美味しい」

心配する樟美の問い掛けを否定する。

だがこのままでは心配させ続けるばかり。そこで結梨は思い切って、胸の内を二人へ明かすことにした。気恥ずかしさはあるものの、自分一人では解決できそうになかった

から。

「今日、お店に来た女の子のことが気になってて」

「それってもしかして、お昼に話してくれた元リリイの子？」

「うん」

結梨は天葉の予想を肯定した後、一つ一つ思ったままを話していく。己が心情を、声に出して自分自身で確かめるかのように。

「その子の顔を見てたら、話をしたくなって。話をしてたら、もつとその子のことを知りたくなって。その子がお店を出る時、また来て欲しいなって思った」

「その子と話してる時、結梨さんの胸の中はどんな感じだったのかな？」

「暖かいけど、ふわふわして不思議な感じ。梨璃とも夢結とも少し違う」

「そっか」

結梨の答えを聞いた天葉は横目で隣の樟美と頷き合ってから、再びテーブルの向かいに座る結梨に向き直る。

「それはずばり、恋だね」

「……やっぱり」

天葉の口からその単語を耳にしても、特段驚きはしなかった。結梨だってもう何も知らない子供ではない。第一、すぐ近くに、これ以上ないと言つていいほどの実例が存在

するのだから。

問題は、この感情をどう持っていくか、どのように叶えるかということ。
結梨にとっての、ちよつとした試練の始まりである。

第12話 小さな恋路

百合ヶ丘女学院嘱託職員の肩書を持つ結梨は、学院内の職員寮に一人で暮らしていた。鎌倉の市街に家を持つ保護者たちから離れたのも、彼女の冒険心から来るもの。それと同時に、新婚二人に気を遣うてのこともあった。

自宅のベッドの上で、結梨は考える。お店で出会った女の子、佐々木藍のことを。

『まずは結梨さん一人で、じっくり考えてみようか』

天葉からは、そう言われていた。なので自宅の天井を仰ぎながら結梨は考える。気になる女の子にどうアプローチするべきか。

とは言っても、全くの独力では思い付きそうにない。そこで、まず初めに身近な人物で想像してみる。

「あのっ！ 好きです！」

「梨璃……」

「お姉様……」

「梨璃……」

「お姉様……」

「梨璃♪」

「お姉様あ♪」

（駄目だ、参考にならないよ）

結梨は気落ちするものの、今度は別の組で想像し直す。

「樟美」

「天葉姉様」

「くすみ♪」

「姉様♪」

「くーすーみー♪」

「姉様あ♪」

(あれえ? おかしいな、あまり変わらないや)

結梨の頭の中のイメージは、答えを教えるはくれない。この二組の場合、既に出来上がった関係なので無理もないのだが。

結局、何度試しても同じだったので、その内結梨はまどろみに負けることとなった。

言い付け通りに一人で考えても分からなかった。であるならば、他の誰かに助力を求めなければならぬだろう。言うまでもなく、その道に詳しい人間が望ましい。

翌日のお昼休み、結梨はお店の近所の喫茶店で携帯電話を手を取った。掛ける相手は、ついこの間鎌倉に遊びに来ていた旧友だ。

「もしもし。亜羅椰お姉さん」

「あらあ? 結梨から掛けてくるなんて、珍しいわねえ」

「今、お話しできる?」

「長くなるのかしら」

「うーん、長くなるかも」

「それじゃあ、ちよつと待ってて」

亜羅椰が断りを入れると、一旦声が途切れる。だがすぐに電話の向こうから小さな話し声が聞こえてきた。話し相手は、控えめだが澄んだ声。やはりと言うべきか、女性であるようだ。

「……」めんなさい。それでお話しというのは？」

「うん。昨日会った女の子のことが気になって」

結梨は一部始終を包み隠さず伝えた。その間、亜羅椰は興味津々といった声色で、話の合間合間に相槌を打ってくる。

昨日の今日なので話す内容は少ない。時間にしてもそう経ってはいないはず。更に結梨自身にとっては、実際の時間以上にあつという間に話し終えた感覚がする。

「成る程ね。つまり、結梨はその子と付き合ってみたい、と」

「そう、なるのかな？」

「迷っているなら、そうすべきよ」

自信ある亜羅椰の言葉に、結梨もだんだんとその気になってくる。

そうすると次に思案すべきは具体的な手段である。そちらの方が、より難問に思え

た。

「取りあえず、その子の特徴を教えてちょうだい。見た目とか性格とか」

「見た目……」

「可愛い子？ 綺麗な子？」

「顔は可愛いと思う。でも、目はキラキラ輝いてて綺麗だった」

「じゃあ性格は？」

「んーつと、悪戯が好きみたいで。だけどちよつと大人っぽい雰囲気もあって、ドキドキすることもあった。あつ、でもやつぱり子供っぽいかも」

「……つまりはミステリアス系ね」

いまいち要領を得ない結梨の説明を聞いて、亜羅椰が大よその見当を付ける。

「その子、鎌倉には三泊だけ泊まっていくのよね？」

「うん。ただ、その間は時間あるらだつて。観光しようか買い物しようか、特に決めてないって」

「そう。だったら映画に誘いなさい」

「映画？」

予想外の単語が出てきて、結梨の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

映画鑑賞などしては、二人で話す機会が大幅に減ってしまう。初めてのお誘い

で、これから仲良くしようという相手に対し、悪手ではないか。恋愛経験の無い結梨でもそれぐらいの懸念はできた。

しかしそんな結梨の疑問はお見通しなのか、亜羅椰が話の先を続ける。

「話を聞く限り、その子も貴方に興味がある。だから焦る必要はないわ。最初は軽く様子見も兼ねて、顔合わせ程度に考えなさい。鎌倉と東京、そこそこ離れているけど、どうにもならないって程の距離でもない」

「そういうものなんだ……。それで、映画って何の映画？」

「結梨の好きなものではないわよ、最初はね。変に肩肘張ったものではなく、直感で選んで構わないわ」

正直な所、結梨には亜羅椰の話が半分近く理解できなかった。

だがそれでも、普段より抑揚を落とした亜羅椰の語りには、人の身を引き締める力が籠っているようで。深く深く思考する内、彼女の案に乗ってみても良いのではないかと思えてきた。

電話の先の相手には見えないにもかかわらず、結梨はその場で大きく頷く。

「分かった、ありがとう。でも二回目からはどうしよう」

「二回目は、何をするにも相手の好みに合わせてあげなさい。何ならストレートに聞いてみてもいいから。恐らく、その子は気を悪くせず答えてくれるはずよ」

「交代制かな」

「ま、そんなところ。あと忘れちゃいけないのが、ある程度親しくなったら好意は素直に伝えなさい。結梨ならその辺り、心配要らないと思うけど」

亜羅椰の助言に、結梨はまたしても疑問を覚える。

「えっ？ でも、女の子に興味ない素振りをした方がモテるって、何かの本に書いてあったような」

「……それは、余程のお金持ちでもない限り、一生恋人ができないパターンだから。結梨はそうなつては駄目よ？」

「うん、それは嫌」

「魚心あれば水心って言うでしょう。自ら何もアプローチしないのに他人から好かれたいだなんて、虫が良すぎる話。無償の愛を注いでくれるのは、自分のお母様とお父様ぐらしいのものよ」

結梨は素直に亜羅椰の言葉を信じる。ここまでくれば、疑うはずもない。初めて聞くようなことばかりで衝撃的だったが、面白いと感じさせる弁舌が伴っていたからだ。

亜羅椰がモテる理由が何となく分かる気がした。

「ありがとう、亜羅椰お姉さん」

「どういたしまして。吉報を期待しているわ」

そうして結梨はこの後、早くも電話で佐々木藍と約束を取り付けた。初陣は翌日。戦場は助言に従い、鎌倉市街の映画館である。

「へえー、それじゃあ今日の朝からデートしてきたんだね」

天野家の食卓。結梨の報告を聞いた天葉が感心して相槌を打つ。その行動力を称賛してのことだ。

お盆のバイト期間は昨日の時点で終わっていたが、せっかくなので結梨を夕食に招待していた。

本日のメニューは冷しゃぶ。皿一杯に敷かれたレタスの更の上、半月状に切られたトマトに囲まれ、サツと火を通された薄切り豚肉が食欲を掻き立てる。

以前のカレーの時よりも、結梨の箸は動きが良い。天葉と樟美に概要を話し終えた途端、豚肉と野菜とご飯を順繰りに慌ただしく口の中へ入れている。

お行儀が悪い。だがそれを宥めようとする意思より、結梨の晴れやかな顔を見て和む

気持ちの方が勝る天葉であった。

「今後はどうするの？」

「今度は、私の方が東京に遊びに行くことになったよ。美味しいお菓子のお店、連れてつてくれるって」

結梨の咀嚼が一段落したところで、天葉は会話を再開させる。やはりお相手の子について、もう少し聞いてみたい。

「その子が良い子みたいで良かったよ」

「えーつとね、藍って普段は普通だけど、興奮すると自分のこと『らん』って名前で呼ぶんだ。子供っぽいよねえ」

「そうかな？ でも結梨さんだって、ちよつと前まで同じだった気がするけど」
「ええー、同じだったかなあ」

満更でもなさそうに、はにかんで笑う結梨。

天葉にとつて、このような初々しい恋模様を間近で見るのは懐かしいことだった。高等部時代、アールヴ Heim の後輩である弥宙みそらと辰姫たつきの交際が発覚した時以来だろうか。本当に懐かしく、こそばゆい。

もつとも、端から見たら新婚同然の天野家も大して変わらないのだが。自分自身のこととは中々客観的に判別できないものである。

「ちなみに、一緒に見たのはどんな映画？」

「外国の、昔の映画だね——」

樟美に尋ねられると、結梨はそのタイトルと簡単なあらすじを紹介した。

それはガンアクションが売りの洋画だった。妻と別居中の、いまいち冴えない中年刑事が、高層ビルや空港を舞台にテロリスト集団と死闘を演じるという内容である。

「デートにしては、渋いチョイス……」

「でも藍も楽しんでいた」

どうやらお相手の女の子は、言動だけでなく趣向もエキセントリックらしい。やはり結梨とは合いそうだ、と天葉は思う。

「ところで今日の映画館デートは誰の発案なのかな」

「亜羅椰お姉さん」

天葉の質問に、あっさりと答えが返ってきた。その名前が出てくるのは少しばかり予想外。高等部の頃も卒業後も確かに交流はあったが、まさか恋愛相談をするほど仲良くなっていったとは思わなかったのだ。

（たまたま相性が良かったんでしょ。そういうこともあるよね）

天葉の場合はそう納得して済んだ。

だが一方で樟美は訝しむように目を細める。あからさまな懷疑の念を宿して。

「不安……。適役だけど、不安……」

「大丈夫だよー」

「結梨さん、何かおかしなこと言われなかった？」

「別に何も。『好意を素直に伝えなさい』とか、『自分の自慢話ばかりしたら駄目』とか。そんなこと言われただけ」

至極真つ当なアドバイス。そのまま世間一般でも通用するに違いない。

普段の素行からは想像し難いが、亜羅椰は哲学論議が好きだった。時折、レギオンのミーティングルームで語っている姿が見られた。亜羅椰の恋愛観は、そんな彼女の哲学に基づいたものなのかもしれない。

『恋愛をすると馬鹿になるってよく言うけど、本当に馬鹿になるんじゃないわよ。目的達成のためには戦略的に考えないと』

亜羅椰のそんな台詞を思い出し、天葉はくすりと笑う。いかにも直感に従って生きてそんな彼女が持つ意外な面が表われている。

アールヴヘイムにも、亜羅椰の持論を真面目に聞く者が居れば、話半分に聞く者も居た。その正誤は天葉からは何とも言い難い。しかし少なくとも、今日の結梨にとっては正解だったらしい。

会話を中断し、結梨が再び卓上の夕食に集中し始めた。

天葉もメインディッシュの冷しやぶを頂こうと、平皿に向けて箸を伸ばす。

薄切りの豚肉でレタスの一束を包み、小皿に満たされたタレに浸けて口の中に放り込む。シャキシャキと小気味良いレタスの食感と、あっさりとした豚肉の食味。それら二つに加え、醤油と砂糖と酢から成るタレによつて甘辛い刺激が天葉の口内に広がっていく。

咀嚼し、飲み込んで。間髪入れずに今度はご飯を箸ですくつて口へと運ぶ。ほかほかの白米に、未だ口の中に残ったタレが染み込んで、この上ない調味料として機能する。

「天葉姉様、電話」

樟美の指摘を受け、天葉の箸が止まる。本来なら豚肉を摘まむはずの二本の棒は、直前で宙に静止した。

気付いていた、樟美に言われなくとも。ただ本能が「もっと寄越せ」と箸を持つ手を急かしていたのだ。

「はいはい、今出ますよー……つと、梨璃さんからだ」

仕方なく箸を置いて携帯の所に向かった天葉はディスプレイから相手の名前を確認した。

通話ボタンを押す。すると、申し訳なきさそうな、同時に焦っているような女の子の声
が天葉の耳に飛び込んでくる。

「あのつ、夜分にすみません天葉様」

「梨璃さん、どうしたの?」

「えっと、ですね……。あの、その、結梨ちゃんに、恋人さんができたって本当なんですか……?」

梨璃に質問された途端、天葉は無言で樟美に視線を送る。

天葉と目を合わせた樟美は黙って首を左右に振った。やはり彼女が話したわけではないようだ。

一体どこから聞いてきたのか。疑問ではあるが、電話の向こうの梨璃が不安に駆られてはいけないので、天葉はすぐに気を取り直して対応する。

「うん、まあ、恋人というかガールフレンドというか……」

若干言葉が濁しながらも、天葉は事実関係を認めた。認めてしまったのだ。

この時、梨璃に正直に明かすかどうか、当事者の結梨に確認を取るべきだった。もはや過ぎた話だが。

「やつぱり、本当だったんだ……。お姉様、お姉様あー! どうしましょう!? ……そうだ、お赤飯。お赤飯炊かなきゃ!」

「落ちちゆきつ、落ち着きなさい梨璃! まずは相手のご家族にご挨拶よ!」

「そうでした。……あの、不束な娘ですが、よろしくお願ひしますっ!」

「天葉に挨拶してどうするの！」

電波を通して愉快なやり取りが伝わってくる。

天葉が苦笑しながら結梨の方に顔を向けると、彼女は眉間に皺を寄せてご飯を掻き込むように食べ始めた。

結梨に冒険心のみならず、独立心まで芽生えるわけだ。天葉はそんな白井家の家庭の事情を察してしまった。

夕食後、キッチンに並んで立つ天葉と結梨。料理を拵えた樟美に代わって二人で後片付けに勤しんでいた。シンクの前で天葉が食器を水洗いし、それを受け取った結梨が乾拭きして水切りラックに並べるといふ按排で。

「天葉お姉さん、もしかしたら来月はバイトに來れないかも」

隣に立つ結梨が皿を拭きながらそんなことを言ってきた。

「もうお盆も終わりだから、うちは大丈夫だけど。どうかした？」

「もうちよつとしたら忙しくなるんだって。百合ヶ丘が」

天葉は表情こそ変えなかつたものの、考え込む。結梨のガーデンにおける役割とは、一つは工廠科での新装備試験。そしてもう一つが重要な作戦へ予備戦力として参加すること。色々と規格外である彼女はガーデンにとってのスーパーサブと言えた。

その結梨が忙しくなる――

それは百合ヶ丘にとつて歓迎できない事態に陥つたということではないか。

天葉の考え過ぎかもしれないが、しかしあり得ない話ではない。日本における戦況は確かに優勢ではあるが、いつ何が起きるか分からないのがヒュージとの戦いだ。

「そつか。どこか遠くに行くの?」

「まだ分かんない。取りあえずはガーデンの中に待機かな」

詳細は職員である結梨にも未だ知らされていない。ならば、今や部外者となつた天葉に知る術は無いだろう。どうやら本当に、大掛かりな作戦か何かが控えているらしい。

そこまで考えて、天葉はハタと気が付いた。部外者の自分が随分気にしているものだ、と。

しかし気になるものは気になるのだから仕方がない。無関係な職に就いても、縁が切れたわけではないのだから。隣の結梨という存在が、その縁の最たる例だ。

「結梨さん、話せる範囲でいいから何かあつたら電話してね」

「うん」

「あつ、勿論、何もなくても電話していいからね」

「うん、分かってるよ」

願わくば、縁ある者の壮健を。

それはリリイたちにとって、片時も忘れたことのない願いだった。

第13話 扱って立つモノ

極熱の8月が終わった。暦の上では秋となったが、それですぐさま過ごし易くなつたかというと、そんなことはない。残暑と呼ぶには些か暑過ぎ、今夏が未だ終わつてない現実を無情に突き付けていた。

開店間近のアマノの店先にて、天葉が水で満たしたプラスチックのじょうろを抱え、その口を店頭に並ぶ鉢植えに向けて傾ける。水はシャワー状となって鉢の中の土へと降り注いだ。そこに生きる花にとつて、恵みの雨となる。

天葉は土に続き、葉っぱにも忘れずに水を掛けた。葉から水が蒸発するのを抑えるために。何せ今彼女が世話しているキク科の花——ダリアは真夏の暑さに弱い花なのだ。店頭といつても日陰の位置にくるよう調整してもいた。手間は掛かるが、ダリアは9月の誕生花なので欠かせない。

「天葉姉様っ」

作業中の天葉のもとに、店の中から樟美が歩み寄つて来る。若干責めるような声色で。右手には水差し、左手にはマグボトルタイプの水筒を持って。

「家から水筒持っていくの、忘れてますっ」

「あれ、そうだった？」

「お花より先に、姉様が干からびちゃいますよ」

休憩所を兼ねるバックヤードには小さな冷蔵庫を置いてあるが、今は確か飲み物を切らしていたはず。なのでたちまち今日は水筒を持参しようと考えていたのだが、うつかりしていたらしい。

「ごめんごめん」

「じょうろの水は、飲んじゃいけません」

「飲まないよう。それ、ちようだい」

天葉は樟美から水筒を受け取って、中身の麦茶を喉奥に流し込む。天葉の水筒が家にあるということは、これは樟美の水筒だ。

後程、樟美の分も含めて飲み物を補充しなければならぬ。まあ、近所の自動販売機まで足を運べば良いだけなのだが。

「あ、やっぱりアイスも欲しい。コンビニに行こう」
思いついたように呟く天葉。

一方、水筒を手放した樟美は水差しを使って屋内の花に水をやっていた。

余談だが、じょうろと水差しの違いはサイズの大小によって決まる。小さいじょうろを水差しと呼ぶのが一般的だった。

水を浴びる花々と、水筒に飛びつく人間。花も人間も、何とか暑さを紛らわせようと必死なのである。

「あの、ごめんください」

開店から間も無く、早速アマノにお客さんがやって来た。店先からおずおずと遠慮がちに中を窺う若い女性。肩まで伸ばした艶やかな黒髪と物静かな雰囲気、大人っぽさを引き上げている。

天葉は少しだけ思案した後、その女性について思い至った。

「もしかして、雨嘉ゆいしあさん？」

「はい。お久しぶりです、天葉様」

天葉に覚えてもらえていて安堵したのか、整った顔に浮かんだ固い表情が僅かに緩む。

彼女、王雨嘉わんゆうじあは梨璃の率いた一柳隊のメンバーの一人。天葉たちアールヴ Heim と

交流があつた。どちらかと言うと、テラリウムという共通の趣味で意気投合した依奈と仲が良かったのだが。

「故郷のアイスランドに帰つたつて聞いてたけど」

「用事で、暫く日本に居ます」

「そう……。勿論梨璃さんたちには会つたよね？」

「はい。梨璃と夢結様と、結梨には挨拶に行つてきました」

雨嘉を日陰の店内に招いて軽く立ち話する。

「どうやら花を求めていたところ、梨璃の勧めでここにやつて来たそうだ。」

「ご自分のお店……凄い……」

「あはは、ありがとう。雨嘉さんは、今は何を？」

「アイスランドの大学で、海洋物理や海洋環境を専攻しています。そつち関係の仕事に就きたくて」

思い掛けない雨嘉の発言に、天葉は瞬きする。意外だったからだ。王家と言えば、欧州でも指折りのリリーの名門一族。なのでガーデン関係の仕事を目指すと思つていた。

そんな天葉の心境を察したのか、雨嘉が慌てて説明する。

「私はっ、教官官とか向いていませんから。向いてないことを無理してやるより、他のことを頑張つてみようかと」

天葉は静かに耳を傾ける。そうしている内に、自分が先程抱いた疑問を思い直すようになった。

よくよく考えてみれば、雨嘉の選択はそう不思議なものではない。海洋調査技術者の任務は測量や環境調査、気象・海象調査など多岐に渡る。その中でも今現在、最も需要がありそうなのが危険物調査、取り分けヒューズ関連調査である。

「確かに、元リリイならヒューズ関連の知識を持つてるし、何よりヒューズと戦ってきたから覚悟もできてる」

「はい。未だに海を恐れている一般人の人は、少なくありませんから」

天葉の言葉を、幾分か力強くなった雨嘉の声が肯定した。

アイスランドもまた、日本と同じく海に囲まれた島国である。ヒューズの住み処である海への恐怖が同じなら、海が果たす重要な役割も同じ。故に海洋調査の必要性は日本で暮らす天葉にもストンと理解できた。

「雨嘉さん。缶だけど、どうぞで」

「あつ、ありがとう……樟美さん」

店の奥から引つ張り出した椅子と、いつの間にか外で調達してきたアイスティーを渡し、樟美が雨嘉を持って成す。

プルタブを押し開けて、開いた飲み口からごくごくくと冷たい紅茶を飲んでいく。

「ふう」と小さく漏れた吐息は、雨嘉の体が如何に水分を欲していたかを如実に物語っていた。

そうして一息つく彼女の視線が不意に固定された。その先を辿っていくと、樟美の左手薬指に行き着くことが分かる。視線は時折、天葉の指にも注がれた。雨嘉を惹き付けた物とは、二人の薬指にはめられた指輪である。

紅茶の缶を両手で包むように保持したまま、雨嘉は何を言うでもなく、ぼーつと二人をの方を眺めていた。

やがてそんな雨嘉が弾かれたように椅子から立ち上がる。

「くつろぎ過ぎちゃった……。お花、買いますっ」

「もっとゆつくりしても良いんだけどねー。それで、どんな花をご所望ですか？」

「えっと、泊まってるホテルの部屋に飾りたくて。少し、殺風景だから」

少しは涼めたであろう雨嘉と、天葉が商談を開始した。

ホテルの部屋に花瓶で飾ろうという試み。買うべき花の数は決して多くはなかったが、どんなものを選ぶか当人は両の目を細めて真剣に考えているようだった。

お店を閉めて、帰宅してから家事をこなし、天野家に婦婦水入らずの時間が訪れた。夜が更けつつある頃合、寝巻姿となった二人は寝室のベッドに腰掛けている。

部屋にベッドは一つだけ。しかし一人で使用するには明らかに過大。言わずもがな、ダブルベッドである。

「天葉姉様、海洋調査って色んなお仕事があるんですね」

「そうだね」

「色んな動物とも、関わるんでしょうか」

傍らに座る樟美が問い掛けてくる。澄まし顔に努めているようだが、口元は綻んでいた。声も心なしに弾んでいた。期待を膨らませているのは明白だ。

そんな伴侶の姿を見て、天葉は胸の中を温かくする。しかし残念ながら、その期待には答えられそうにない。

「雨嘉さんが言っていたのは多分、海洋動物調査じゃなくて港湾海洋調査の方だと思うよ」
「港湾？」

「漁業や海運を復活させるにしても、危険が残っていないか確かめないといけないでしょう。ヒュージの体液の影響とか、戦闘で海岸の地形が変わってないかとか」

「それで今、需要があるんですね」

樟美が肩を落とす。小さな肩が更に小さく見えた。

「今朝の話で、海、行ってみたくなつたの？」

「はい」

「でもこの前、由比ヶ浜に行つたばかりでしょ」

「クラゲしか見れませんでした！」

「ふふつ、まあこの時期多いからねえ」

眉を吊り上げ不機嫌顔になる樟美。その顔を天葉は横から右手で抱き寄せ頬ずりする。しつとりと湿り気を帯びた樟美の銀髪から、シャンプーの仄かな香りが鼻をくすぐってきた。

二人きりの時間。普段は控え目な樟美が我が儘になるこの時間が天葉は好きだった。どんな樟美も好きなのだが、自分に対し我が儘を言う樟美が特に好きだった。

「じゃあ今度、水族館に行こつか」

「行きますつ。姉様の好きなハンバーガー作っていきます」

「ハンバーガーもいけれど、どっちかと言うとホットドッグって気分かな」

「えーっ？ 姉様我が儘」

「あつ、言つたなー」

天葉はベッドに腰掛けている樟美の両脚を左腕で支えようと、お姫様抱っこしてベッドの中央まで運んでいく。そうしてゆっくりと仰向けに寝かせ、逃げられないようそのまま樟美の上から覆いかぶさった。

「ん〜っ!」

フカフカのベッドと天葉の温もりに挟まれた樟美は、首を左右に振って形だけの抵抗を見せる。すると樟美の口元を目掛けた天葉のキスが狙いを外し、左の頬に命中する。薄桃色の果肉が白い柔肌につつきり、微かな吸着音を立てて密着した。もう一度キスを落とすと、今度は右の頬にぶつかった。

5〜6回そんなことを繰り返した後、天葉は自分も仰向けとなつて樟美のすぐ横に寝っ転がる。

「実は私も今朝、思ったことがあってさ」

「……姉様?」

急に改まった物言いをしたことで、樟美が疑問の目を向ける。

「お店を出す時、樟美にも話したけど。私の、次の目標」

「はい、勿論覚えてます。フラワーアレンジメントの教室」

もつとお店に客が増えて、花に興味を持つてくれる人が増えたら、フラワーアレンジメントを教えたい。場所はお店の一部を改装するか、あるいは自宅を利用するのも良い

だろう。

事業拡大……などと言うほど大袈裟なものではなかった。教室と呼ぶのも些か大仰。ただ三人ずつでも四人ずつでも、受けてくれる人が集まれば嬉しい。

今朝、雨嘉が目標を定めていることを知り、天葉も改めて自身のことについて思い巡らせたのだった。

「そのためにはまず、お花がもつと売れるようにならないと、ですね」

「うん。できればもつと人を雇えるようになって、余裕が生まれるといいね」

二人して将来を展望する。それは幾分か皮算用の混ざったものだった。だが今はそれで良い。焦る必要は無いのだから。

「……でもそうになると、樟美と一緒に時間が減っちゃうかも」

「それは嫌っ」

「んー、だけどよく言うじゃない？ ずっと四六時中傍にいる夫婦はギスギスしてくるって」

「そんなの出鱈目です、僻みですう」

一度は機嫌を直した樟美がまたもやへソを曲げる。

だから天葉もまた樟美の上にかぶさって、彼女の顔を両手で挟み込むように包む。

「私も、出鱈目だと思っ」

今回は逃げられないため、否、逃げるつもりがなかったため、樟美の唇は天葉によって容易く捉えられた。

「んむっ、ねえさまっ」

互いに互いの薄桃色をした果肉を求め合う。僅かに開いた口と口の隙間から、チュツと水気を含んだ吸着の音が鳴る。

二枚の舌は最初こそ先っぽを軽く撫で合うだけだった。だがいつしか上下左右と忙しなく絡み合い、やがては互いの舌を区別できなくなるほどに、感覚が麻痺し脳が蕩ける。

二人の舌と唇が再び二つに別れた時、どちらも息を荒げていた。

「はあ、はあ、はっ、くすみい」

「ふう、ふうっ……んはあっ……ねえさまあ」

下ろした髪が汗で頬に張り付き、焦れたい。

吐き出された呼吸が鼻に掛かって、こそばゆい

首に回された樟美の両腕は、その細さから想像もつかないほどの力を込めて、天葉から離れまいとしがみつく。だがその痛みも息苦しさも、今の天葉にとっては感情をより昂らせるためのスパイスに過ぎない。

「ありがとう」

昂った感情とは裏腹に、凧の如く穏やかな天葉の声。

「一緒になつてくれて、ありがとう」

リリイとしての務めを終えて、ガーデンを出て。その先も同じ生き方、同じ道を選んでくれた。それがどれだけ幸せなことか。

天葉は感謝を言葉に表す。

樟美は潤んだ瞳をそつと閉じ、額同士でキスをすることで返事とした。

第14話 硝子きらめく中で

広大で開放的な空間。その空間全てを漏れなく照らさんばかりに、天井から煌びやかな照明が明かりを放つ。

十分な間合いを取って、そこかしこに円形のパーティーテーブルが置かれていた。机上に並ぶのは絢爛豪華な洋風料理。市井では手を出すのに躊躇しそうなその饗膳は、頭上の照明にも負けないぐらいの輝きを宿している。

そして、そんな天井と机上の煌めきの合間合間に、大勢の人。美しく凛々しく着飾った彼女らもまた、この場に華を添える輝きであった。

ここは東京、赤坂。

とあるホテルの中のパーティー会場での出来事。

その日、その夜、田中壺は複雑な内心を隠し、眼前に広がる華やかな光景を眺めていた。

壺の瞳に映る周りの景色は本当に眩しい。眩し過ぎて、思わず目を伏せてしまいそうなほど。勿論そんな真似、実際にはしないのだが。

かく言う壺自身も本日はめかし込んでいる。スカートの裾が足のくるぶしまで隠す、黒一色のシツクなパーティードレスに身を包み。ロングヘアを短くシニヨンに纏め、気品と落ち着きを際立たせる装いだった。

「本日は私どもの祝賀会にお越し頂き、誠にありがとうございます。御父上にはどうぞよろしくお伝えください」

「こちらこそ、お招き頂いて光栄に存じます。若輩者ですが、父に代わって御礼申し上げます」

タキシードのスーツに蝶ネクタイを締めた初老の男性が壺と挨拶を交わした。彼はこのパーティーの主権者。与党に属する有力議員の一人である。

この日この場所に壺が立っているのは、父の名代として、田中の一人娘として。家を背負ってここに居るのだ。

現役のリリイだった時は社交の場と無縁でいられたのだが。しかし、今はそうも言っていない。たとえガーデンの教導官を目指していようとも、家の事情と全く無関係

とはいかなかった。

(それにしても、本当に気合入ってるわね)

主催者が他の来賓へ挨拶回りに向かった後、壱は改めて周囲に目をやった。

一昔前ならば、これ程のパーティーを開こうものなら「不謹慎だ」と叩かれること間違いない。ところが現在は少しばかり事情が変わっている。このように派手で華やかな催し物は、戦災復興の景気付けとして容認される空気があった。

「あの、壱さん。お久しぶりです」

「壱さん、今は大学に通いながら教導官のについて学ばれているとか。中々お会いできないわけですね」

数人の女の子がやって来て、壱を中心に半円状の輪を作る。彼女らもまた壱と同様、良家の子女だ。ドレスにも会場の空気にも上手く馴染んでいるように見えた。少なくとも、壱よりは。

当たり前だが、壱はあらかじめ列席するお歴々の名に目を通している。その中で思ったのは、「幾ら父の名代とはいえ自分が顔を出すのは場違いではないか」ということだった。

流星に大臣こそ居ないものの、政務官クラスがちらほらと見受けられた。また複数国の大使館からは幹部職員たる参事官が出席している。礼服に付けた勲章の金色が目立

つのは、防衛軍と在日米軍の高級将校たち。

そして今回、最も壱を驚かせたのは、台湾外交部が外交部次長という大物を送り込んできたという事実。表向きは、別件で来日していたついでとのことだが、無論額面通りに受け取る者はいないだろう。その別件とやらのために、色々と顔を繋いでおきたいのではないか。

「今日は皆さん、ご立派な方々ばかりですね。私などは気後れしてしまいます」

「あら、何を仰いますの。お父様は政府閣僚の一員、叔父様は警察庁の長官。そんな田中家を代表しているのですから、委縮する必要などございません」

「それに、壱さんご自身も、幾つものヒュージネストを討つて日本を救われたお方。この場の誰よりも尊敬されるべきだと思います」

周りの令嬢たちが口々に壱をフォローする。

これらの言葉を、おべっかななどではなく、素直な褒め言葉と受け取れるだけの自負が壱にはあった。正しくは、自分を含めたアールヴヘイムに対する褒め言葉として。

「もしもガーデン卒業から早々にご結婚されていなければ、今頃縁談の話で持ち切りだったことでしょう」

「ところで壱さん、その奥様……パートナーの方がまだお見えでないようですが」

ご令嬢の一人が疑問を口にするると、他の者たちも次々に頷く。本当は先程から気

なっていたのだが、話の流れで自然に聞けるまで待つていたのだろう。

「ええ、少々遅れていまして。直に参ります」

困惑の念を伏せて壺が答える。本来なら隣にあるべき依奈の姿が見当たらないのは、訳があつたのだ。

別々に、少し遅れて出て頂くというのはどうでしょう——

それは主催者からの提案だった。場を盛り上げるための、ちよつとした演出だとう。

初め、その意図を何となく理解した壺は賛同しかねた。だが結局はこうして提案通りにしている。当事者の依奈が乗り気だったからだ。

噂をすれば影が差す。

会場の出入口、豪華な扉が開かれて、壺を憂鬱にさせていた演出がスタートする。

あちこちから聞こえていた歓談が、一瞬途絶えた。

桔梗色の長い髪をサイドテールにした上で、三つ編みに編んで纏めている。その髪色とよく似た薄紫のドレスが大人らしさを上品に引き上げている。

コツコツと床を叩くヒールの音は決して大きくはなかったが、周囲の静寂のせいで実際以上によく響く。やがて音は壺のすぐ傍まで来て止まった。

「ほう」

彼女の姿を遠巻きに見ていた大人たちは、一言感嘆の声を上げる。こんな場所に集まるような人物だけあって、じろじろと無遠慮に視線を送る真似はしない。その内、元々していた歓談や雑談を再開し始めた。

「台湾の件について、未だ世論の反応は半々のようです」

「それに関しては外務省に腹案があるようですよ」

「大体の察しはつくけれども……。さて、劇薬にしなければいいが」

「どうやら大人たちは大人の話で忙しいらしい。」

だがその一方、ご令嬢たちは彼女に釘付けとなっていた。優雅な足取りでやって来て、たおやかな微笑を浮かべる彼女に対し、お喋りも忘れて熱視線を注ぎ続ける。

（あまりじーつと見るんじゃないわよ！ 減る！ 減る！）

そのような益体も無いことを、壺が心の中で盛んに訴える。周りの人間に通じはしない。そもそも声はおろか表情にも出していないのだから、伝わるはずがない。

不意に、壺の左腕が柔らかい感触に包まれた。横から近寄ってきた彼女が腕を組んできたのだ。

「どうもー、田中の妻です」

先程まで纏っていた雅な雰囲気から一転、茶目つ気を見せる。

すると周りの空気が緩んでいく。ある種の緊張状態だったものが、ほどけて自然体へ

と還る。

壺を囲んでいた女の子たちが再び姦しく話し掛けてきた。これも彼女、依奈の親しみやすい氣質が持てる業だった。

「機嫌直った?」

隣の依奈が壺にそんなことを聞いてきた。声色と目がどこか楽しそうなのは、壺の気のせいではないだろう。

「別に、機嫌が悪かったわけじゃないです」

「そう」

返ってきた答えに異を唱えるでもなく、依奈は右手でワイングラスを小さく揺らしつつ、中で水面が波打つのを見つめている。

ちなみに二人は既に歓談の輪から抜け出し済み。壁際の、他に人の居ないスペースままで移動していた。

「ただ、教導官になるのにこんなこととしてもしょうがないとは思いますが」
「それを不機嫌って言うんじゃない」

すかさず依奈に突っ込まれ、壺は本当に不機嫌になる。

しかし不機嫌にさせた当人はどこ吹く風と、グラスを一口傾けた。場所が場所だけあつて、流石に量はセーブしているようだ。

「じゃあ、折角だからプラスに考えましょう」

飲み始めたと思つたら、今度は突然の提案。

「将来、壺が教導官を円満に引退して、その後政界に入つて。運良く総理になれたとする。そうすれば私はファーストレディってわけ」

「ええ……」

「パーティーに出るのはそのための布石だとすれば、有意義に思えてくるでしょ」

「それプラスになつてるの、依奈様ですよね？」

「まあね」

依奈が胸を張つて堂々と言い切るものだから、壺はおかしくなつてクスクスと笑い声を漏らす。意識することなく、自然と顔が綻んでいた。

壺の様子を見た依奈もまた、満足そうに笑みを浮かべる。

「うん、やっぱりそっちの方がいい」

そう言つて壺の両頬を、両手で挟むように包み込む。

「お澄まししてるより、そうやって笑つてた方が壺には似合つてる」

「……急におかしなこと言わないでください」

「あ、へソを曲げてる顔もいいわねえ」

壺が口をへの字に曲げると、依奈がぐにぐにと頬を撫で回してくる。首を左右に振つて払い除けようとする、依奈はあつさり手を離す。

「他の子とばかり話してて悪かつたわよ」

「仕方ないです。依奈様は人気者ですから」

「なーに言つてるのよ。先に女の子を一杯侍らせたのは壺じゃないの」

「はっ、侍らせてなんていません！」

ムキになって否定する。

すると依奈はくすくすと笑い出し、くるりと向きを変えて壺に背を向けた。揶揄われたのだ。冷静になつて考えればすぐに分かりそうなものだが。

またしても、してやられた壺。依奈の背中から感じられる余裕綽々の態度。壺はだんだん腹が立つてきた。腹が立ったので、やり返すことにした。

「ちよつ、何!?!」

無防備な依奈の背中へ肉薄し、彼女の肩の上から両腕を回して抱き締める。華奢な依

奈の体は、パズルのピースがはまるかの如く壺の中に綺麗に収まった。

力はあまり入れてない。それにもかかわらず、壺は体から汗が噴き出す感覚に陥る。

二人が居るのは広い会場の隅、人の輪から離れた壁際だ。しかしそれでもご令嬢たちは二人を遠巻きに窺っていたようで。ちよつとしたざわめきが起こり、先程よりも熱を増し湿り気を帯びた視線が降り注いでくる。

「ばかつ。何考えてるのよ、こんな所でっ」

首だけ振り向いた依奈が小声で必死に抗議してきた。壺は聞こえないフリをした。

赤くなっている依奈の横顔に気付き、心の中で「しめた」と笑みを浮かべる。そんな壺の方と言うと、耳まで真っ赤に染まっていた。

場所が場所だけあって、流石に大人たちは眉を顰めるのではないか。

やってしまった後で憂慮する壺。だがそれは要らぬ心配になりそうだった。

「先日、娘から『もう中等部に上がるからチャームイリイなんて見ない』と言われてし

まっつて」

「それは、何とも……」

「せつかく娘が喜ぶと思つて、主題歌と振り付けまで覚えたというのに」

「ご愁傷様です」

「しかし弱つた。今度のライブショー、気になつていたのに。中年の男一人でアニメ

キャラのショーは、流石にきつい」

「ふうむ、そういうことなら私がお供いたしましょう」

「男二人で、チャーミーリリイを？」

「はい」

「問題の解決になつていないのでは？」

「では、お一人でチャーミー・サイリウムを振りに行きますか？」

「むむむむむっ……背に腹は変えられんか」

どうやら大人たちは大人の話で忙しいらしい。

「ねえ、樟美ー。ちよつとこれ見てよー」

花咲き誇るお店の中に、天葉の快活な声が響く。

開店前の朝。今日は市場へ花の調達に行く日ではないため、比較的ゆったりとした時間が流れていた。

そんな中、カウンターの上が拭き掃除する樟美の傍へ、天葉が携帯片手に歩み寄る。

「これは、依奈様から？」

「そうそう。昨日の夜、壺と一緒にパーティーだつて言つてたでしょ」

携帯のディスプレイには、どこぞのパーティー会場の風景が映し出されていた。まさか参加者がパシャパシャと撮るわけにはいかないもので、会場スタッフが撮ったものをデータで貰ったのだろう。それを今朝になって、天葉の携帯へメールに添付して送ってきたわけだ。

写真越しでも伝わってくる煌びやかな空間。その中で薄紫のドレスに身を包んだ依奈が微笑を湛えて佇んでいる。

「依奈様、お姫様みたい」

「これは猫かぶつてるところだねえ。社交界だから仕方ないかな」

「……あつ、こつちの写真」

切り替わっていく画像の一つに樟美が反応する。それは依奈と壺が腕を組んでいる場面だった。静止画でありながら、ぐいぐいと引つ張ろうとする依奈と困惑する壺の姿がありありと感じられる。そんな躍動感溢れる写真。同じ笑みでも、こちらは弾けるような笑顔であった。

写真に釣られるかのように、天葉と樟美も眦を下げて顔を綻ばせる。

「それにしても。うわ〜やっぱいいもの食べてるなあ」

再び画像を切り替える。

天葉が感慨深い声を上げたのは、テーブルの上に並べられた数々のご馳走を目にしたから。洋風であるところも彼女の好みに合致する。ただ一つ、一つだけが致命的な不足点を述べるなら、それは「樟美の手料理ではない」という部分であろう。

一方、樟美は開店の準備のため店の奥へ入っていく。あと残っている作業と言えば、消耗品の在庫チェックぐらいだろうか。それとて今すぐ急ぐことではない。

一人になった天葉はカウンターのの上に肘を突き、携帯のディスプレイを眺め続ける。依奈が送ってきた写真は結構な数だった。ここまでくると、微笑ましさを通り過ぎて「自慢か!」と突っ込みたくなってくる。

そんな時だ。奥の事務室に行ったはずの樟美が戻ってきたのは。

「天葉姉様、これ……」

それぞれと落ち着かない様子の樟美が持ってきたのはタブレット端末だった。店の業務管理は大体これを使ってやっている。

発注ミスか何か見つけたのか。最初はそう考えた天葉だが、どうも違うらしい。

タブレットには帳簿の類ではなく、ニュースの映像が映し出されていた。国営放送に加え、民放でも急遽番組が変更されて特番が組まれたとか。それ程の大事が発生したということだ。

「結梨さんが言っていた待機任務って、このためだったんだ」

天葉は先月に自宅で結梨と交わしたやり取りを思い出す。その時は百合ヶ丘が忙しくなるという話だったが、実際は百合ヶ丘どころか関東全体に関わってくる事態であった。

「姉様」

「大丈夫。きつと大丈夫だから」

タブレットの画面を覗き込みながら天葉の腕を纏るように掴む樟美。彼女の小さな手を、反対側の手で包み込む天葉。しかしそんな天葉自身の顔も、硬さが抜けていなかった。

百合ヶ丘自体に課せられたのは、本当に待機任務だった。ただし外征任務を請け負った近隣ガーデンの戦力低下を補うべく、平常時より活動範囲を広げている。

ガーデンは違えど、その武運を祈らずにはいられない。天葉も樟美もリリイだったから。ガーデン間の垣根も現役・退役の別も、彼女らにとつては小事なのだ。

二人はタブレットが流す音声を、原稿を読み上げるアナウンサーの言葉を、一句たりとも逃すまいと固唾を吞んで聞き入るのだった。

「番組の途中ですが、予定を変更して緊急速報をお伝えしております。昨日の隠岐ネスト並びに出雲ネスト撃破により、九州・中国ガーデンは中国地方解放を完遂したと宣言しました。これを受けて本日早朝、日本政府はかねてから検討していた台湾の陥落指定地域奪還作戦『海峽作戦』への支援を正式に発表。既に日本国内7つのガーデンから12隊のレギオンが参加を表明しています。なお本件に関しては、北海道東端、小笠原諸島、南西諸島など、依然としてヒュージネストが健在な国内地域を差し置いての海外遠征という点から、一部の野党が激しく反発。内閣不信任案提出も辞さない構えを見せており、今後は政局の混迷が予想されるでしょう」

第15話 異郷

台湾本島南部に位置する港湾都市、高雄カオシユン。台北がヒュージの侵攻で陥落して以降、経済・文化・軍事面において台湾の中心都市として発展してきた街だ。

沿岸部の北側は軍港であり、岸壁に多数の艦艇が錨を下ろしている。小振りな国産コルベットの群れに紛れた、日本産の大型フリゲートが存在感を放つ。頭上を見上げれば、遙か上空に米国製の戦闘機がジェットの爆音を轟かせている。

沿岸部の南にはアジア屈指の巨大コンテナ港。そしてそこから距離を置いた開けた土地に、地元ガーデンが所有するガンシップの発着場がある。

発着場で羽を休めた一機のガンシップから、一人の女性が降りてきた。緩くウェーブがかつた亜麻色のロングヘアを風に靡かせる、美しい女性。身に纏うレディーススーツは気品だけでなく、軍服の如き威風ささえ感じさせる。

彼女は耐熱処理の施されたアスファルトの上をゆつくりと、しかし力強く進む。途中、数人の人間が駆け寄ってくると、足を止めてにこやかな顔を向けた。

「日本中央放送局の者です。郭神琳くおしえんりんさん、お忙しいところすみません」

「存じております。遠路はるばる日本から、ご苦労様です」

神琳が笑みを向ける相手とは、女性リポーターとやや後ろに居るカメラマン。そしてカメラの更に向こうの、もっと大勢の人間たちであった。

「早速ですが、今回発動される軍事作戦について概要を教えてくださいますか？」

「はい、勿論。まず本作戦、海峡作戦の主目的はその名の通り、台湾海峡の確保にあります」

リポーターからの質問に対し、原稿でも呼んでいるかの如くすらすると答える神琳。

だがこの光景、よく考えればかなり特異なことだった。神琳は現在、台湾の大学に通いつつ教導官資格の取得を目指す身。未だ正式な教導官ではないのだ。そんな彼女が台湾の外交部とガーデンからの依頼によって、日本のメディアに対応する。幾ら神琳が元リリイといえど、普通ではありえないことだった。

「作戦は大きく分けて二つの段階で構成されています。まず前段作戦、台北奪還作戦。

台北近辺に蔓延るヒュージ群と、淡水河たんすいがに営巢されたネストを撃破します。地形上、大規模な支援砲撃が望めないため激戦が予想されるでしょう。しかし成功すれば、台湾本島からヒュージネストを完全に駆逐することに繋がります」

「リスクに見合った価値があるわけですね」

「仰る通り。そして後段作戦ですが……これは大陸に程近い金門島の奪還を図るものです」

「金門島……」

「驚かれるのも無理はありません。ですが彼の地を奪い返し、大陸から迫る大型ヒュージへの防衛拠点を築くことが、海峡と台湾本島の安定化には不可欠なのです」

そこまで話し終えると、神琳はにこやかな表情のまま、カメラからリポーターの顔へと無言で視線を移す。次の質問を待っているのだ。

「郭さんは台北のご出身だそうです。やはり自ら前線に立てないことを、悔やまれているのでは？」

「そうですね、思うところが全く無いと言えば、嘘になります。ですがリリイでも教導官でもない以上、実際の戦闘で役に立てることはありません。ならば、わたくしはわたくしの舞台で貢献するまでです」

まさに今受けている取材こそが、神琳の言う舞台の一つ。これは故郷の台湾のみならず、日本でも知名度のある彼女に打って付けの役割だった。

「日本では、国内に陥落指定地域を残したままの台湾外征に対し、厳しい意見が少なからず存在します。その点についてはどうお考えでしょうか？」

神琳は「遂に来た」と内心で身構える。

実の所、質問の内容は事前に打ち合わせ済み。質問に備えた応答もあらかじめ用意している。

だがそれでも、神琳の身は引き締まらずを得なかった。この問い掛けが、台湾の今後の展望を左右し得る重大事だと理解していたから。

「生まれた土地を奪われる痛みは、わたくしたちも身を以って知っているつもりです。ですが、本作戦が成功して台湾海峡が安定した暁には、東アジアのみならず南シナ海を隔てた東南アジアとの連携も強化できるでしょう。それは長い目で見ると、日本にとっても有益と言えます」

神琳は真剣な眼差しで、カメラのレンズに向けて訴える。

「わたくしたちは日本の皆様方に受けた御恩は忘れません。どうか隣人として手を取り合い、共にこの難局を乗り越えましょう」

静かだが強い感情を込めた語り口で幕を下ろす。

その余韻を残したまま、カメラは神琳の整った顔を捉え続ける。それも数秒を過ぎると、マイクを握り締めたリポーターの顔へと照準を移した。

「以上、郭神琳さんでした。現場は台湾、高雄よりお送りしています」

「いや、お疲れ様でした。お陰で素晴らしい特番になりそうです」

テレビ局のクルーたちが去った後、神琳の前にスーツ姿の女性が歩み寄って来た。愛想よく笑みを振り撒く彼女に対し、神琳も同様に愛想よく微笑む。

女性は手に携えたタブレット端末を操作し始め、それからまた神琳に向き直る。

「局のリアルタイム調査によると、先程の郭さんの会見以降、始めは拮抗していた台湾外征への世論が賛成に傾きかけているそうですよ？」

「そうですか。お役に立てたのなら重畳です」

「我々としても、総務省と折衝した甲斐がありました」

女性は日本の外務省職員だった。国営のテレビ局が台湾に対し、郭神琳に対し取材を敢行したのは、彼女ら日本国外務省による差し金である。

その意図は明白。あからさま。台湾外征をスムーズに遂行するため、国民世論へ訴え掛ける分かりやすい象徴を欲したのだ。

とは言え、神琳はそのこと自体を悪し様に言う気は無い。むしろ彼女自身、これまで似たような狙いを持って行動してきたところがある。

「今回の外征、本来なら地理的に近い九州のガーデンが赴くべきですが、生憎と中国地方解放戦が終わったばかりで疲弊しています。それで比較的余裕のある関東のガーデン

が出ることになったわけです」

神琳も既に把握している事情を、女性は確認するかのように説明する。

「たとえば、鎌倉からはメルクリウスと相模女子から二隊ずつ。東京の御台場女学校からも二隊。数としては少数ながら、歴戦の外征レギオンと聞いてますねえ」

「はい。そして外征に参加しないガーデンも、低下した戦力を補うため警戒態勢に入っています。かつてわたくしが在籍した百合ヶ丘も、その一つ」

本州からネストを駆逐したとは言え、依然として海を渡って襲来する脅威に備えなければならぬ。ガーデン間の守備範囲に関する制約が緩和された今、地域を跨いだ連携が容易なのは大きな強みである。

「これは私の素人考えなのですが……。あれだけの戦力を集められた時点で、奪還は成功したも同然ではないでしょうか」

「油断しているわけではありませんが、わたくしも同意見です。そう、奪還だけなら」ということはつまり、問題は奪還した後、ということですね」

女性がそう問うと、神琳は頷いて肯定した。

奪還後の維持。それを容易にするため、大戦力による完全勝利を目指すのだ。受ける被害が大きくなれば、防衛も覚束ないだろう。

「我々日本国は戦闘だけでなく、金門島での防御施設構築でもお役に立てるかもしれま

せんよ?」

「……(´)厚意、有り難く思います」

神琳は相手の意図を察し、差し障りの無い返事をする。

日本の防衛軍工兵科やゼネコンが、対ヒュージ要塞や防御陣地の構築において高い技術を持っているのは有名だった。彼らの協力があれば、以後の戦闘の難度もかなり変わってくるはず。無論、彼ら自身にとつても旨味がある話なのだろう。

乱麻の如く複雑に絡み合った大人の思惑。それを?み込んだ上で、神琳は微笑み続ける。

「では、これで失礼します。お引止めして申し訳ありません」

「いえ、お気になさらず」

「ところで、郭さんはこの後ガーデンに行かれるのですか?」

「いいえ。昼までには高雄を発つつもりです。東京に向けて」

「ああ、確か民放でも特番に出演されるのでしたね。落ち着く間もなく、大変ですねぇ」
そうして女性と別れた神琳は早くも次の予定に思考を巡らせる。

台湾と日本。何の気負いもせず行き来するには、少しばかり遠い距離だった。

郭神琳出演の特番放送直後。インターネット某掲示板、某スレッドにて。

【外交・軍事】日本政府、台湾海峡作戦支援を正式表明 各ガーデンも外征レギオン派遣を決定

1：極東情勢

日本政府は本州のヒュージネスト殲滅を機に、台湾ガーデンによる海峡作戦への参加を正式に表明した。

これにより台湾海峡を安定化させ、東アジア及び東南アジア諸国との通商を活発化させる狙いがあると思われる。

既に新佐世保港から護衛艦6その他支援艦艇8からなる特別支援艦隊を高雄に派遣、合同訓練に励みながら作戦開始を待っている。

しかしながら国内には依然としてヒュージネストを抱えた地域が存在する。

取り分けインフラを破壊されて奪還後の維持防衛が困難とされる沖縄本島近海では、有力なヒュージ群の活動が絶えない。

国内領土より海外を優先する決定に一部の野党は猛反発、国会前では小規模ながら反政府デモも実施された。

また、レギオンを派遣する関東の各ガーデンでは警戒レベルが引き上げられ、未だ対ヒューズ戦争が終わっていない事実が突き付けられることになった。

夕日新聞朝

刊一面より

2：新常態の名無しさん

何だこの中国女!?

3：新常態の名無しさん

申し訳ないが中学生以上のおばさんはNG

4：新常態の名無しさん

ふざけるなよクソが

緊急速報のせいでニチアサが中止になったじゃねーか

死ね、氏ねじゃなくて死ね

5：新常態の名無しさん

ニチアサ……『超人キャバリアRZ』の一時間スペシャルか

6：新常態の名無しさん

30過ぎてキャバリア、キャバリア

どうかと思うね僕は

7：新常態の名無しさん

>>>6

お前も死ね

8：新常態の名無しさん

キャバリアニキ落ち着いてくださいあ…

9：新常態の名無しさん

しかし真面目な話おかしくね？

前から台湾台湾言つてたのつて政府じゃなくてリイとかガーデンだよな
私立のガーデンが国の戦略に影響与えるとか許されるのか？

10：新常態の名無しさん

正直、対ヒュージ戦略の決定プロセスつてよく分からん
教えてエロい人！

11：新常態の名無しさん

俺はエロくはないが：

基本的に国定守備範囲内の対ヒュージ戦略は担当のガーデンに一任されてる
ただし複数ガーデンに跨る大規模作戦とか特別な作戦の場合、国が音頭をとるのが普
通だな

あと俺はエロくはない

12：新常態の名無しさん

>>11

五年前まではそれで合つてると思う

五年前東京に特型ヒューズが大量発生した事件

あの事件以降ガーデン同士の連携云々を口実に好き勝手やり始めてる

13：新常態の名無しさん

そもそも女しかまともに使えないとかいう欠陥兵器でイキつてて笑っちゃうすよね

14：新常態の名無しさん

その欠陥兵器に守られてるんですが、それは…

15：新常態の名無しさん

>>>14

そんなの他に手段が無くて仕方ないからだろ

超人キャバリアが実在したらあんなメスガキどもにデカイ顔させずに済むのに

16：新常態の名無しさん

キャバリアニキまだ引き摺ってたのか

おいたわしや

17：新常态の名無しさん

何かさつきからスレに女さんが紛れ込んでますねえ

こんな便所の落書きで工作したってしょうがないでしょう

貴女自身のためにもなりませんよ？

女子供はチャーミーリリイでも見てろ（豹変）

18：新常态の名無しさん

おっさんが

チャーミー見たって

いいじゃない

字余り

19：新常态の名無しさん

>>18

きめえw

20：新常態の名無しさん

別に戦略的に正しいなら文句ないんだがな

でもあの郭っていうの日本のガーデン出身だろ

コネで援軍呼んだんでしょ

21：新常態の名無しさん

>>>20

百合ヶ丘女学院とかいうお嬢様学校(笑)だな

22：新常態の名無しさん

外人で女さんで上級国民とか

嫌な予感しかない

23：新常態の名無しさん

やつばガーデンだのリリイだのに大局観や戦略眼があるとは思えんわ

あれならまだ俺が指揮した方がいいんじゃないか？

24：新常态の名無しさん

>>23

戦争のプロ来たな：

25：新常态の名無しさん

>>23

戦い方を教育してきそう

26：新常态の名無しさん

>>23

野球中継見てくだを巻くオヤジかよ

27：新常态の名無しさん

見せてもらおうか

H O I と C i v で鍛えた>>23の戦略眼とやらを

28：新常态の名無しさん

お前ら好き放題言ってるけど

もしかしたら>>23は韓信の生まれ変わりかもしれないだろ！

29：新常态の名無しさん

>>28

中国に転生してやれよ

30：新常态の名無しさん

結局、国がガーデンの手綱を握れてないのが原因でおk？

31：新常态の名無しさん

おk

32：新常态の名無しさん

テレビで簡単に騙される低所得者層に選挙権与えた末路だよ

33：新常態の名無しさん

>>12 >>22

問題の本質はこころへんなんだよな

百合ヶ丘だか薔薇ヶ崎だか知らんが外国からリリイをホイホイ入れて

スパイが交じってたらどうする気だ

34：新常態の名無しさん

スパイでなくとも日本に帰属意識がないから沖縄ほつといて台湾外征とか言い出す

35：新常態の名無しさん

あの郭なんとかさん見た目は良いから

色目にやられてるやつ多そう

36：新常態の名無しさん

>>35

まあ俺は女に興味ないから通じんが

37：新常態の名無しさん

>>36

ホモかな？

38：新常態の名無しさん

自国より他国を優先するその姿勢、度し難し

もはや現政府に統治能力認められず

この国の民主主義は死んだ

我々真の日本国民は愚劣なる政府と無知蒙昧なる諸ガーデンに対し、猛省を促すものである

第16話 異邦人

「雨嘉さん?」

神琳がその声を掛けると、掛けられた方はビクツと肩を震わせる。

すぐ横に近付かれるまで気付かなかったのだらうか。猫背気味に座つてホテルデスクの上のノートパソコンにかじり付いていた王雨嘉は、慌てて神琳の方を向く。

場所は鎌倉市街にあるホテルの一室。時刻はまだ夜になったばかりだが、宿泊客である二人は既にホテルのガウンに身を包んでいた。

「顔が強張っていましたよ」

「そうかな? 神琳の気のせいじゃない?」

「いいえ、気のせいではありません」

雨嘉が誤魔化そうとしてきたので、なおも踏み入つていく。

すると口を引き締めて目を少しだけ細める雨嘉。非常に些細な変化だった。けれど、これはムキになっているのだと、神琳には手に取るように分かった。

「顔が怖いのは元からだから」

「雨嘉さん」

「……………めん」

真顔で見つめてみると、やがて根負けした雨嘉はバツが悪そうに謝罪した。

雨嘉が素直になるのを待つてから、神琳は彼女が見ていたパソコンのディスプレイを覗く。そこには横書きの文字が何列にもわたって書き込まれていた。とある匿名掲示板の、とあるスレッド。大よその中身に関してはスレッドのタイトルから察しが付いた。

「台湾外征について、ですか。日本の中では賛否が分かれていたので、議論になるのは当然でしょうね」

「そういうことじゃあ、ないっ」

軽く流そうとする神琳と対照的に、雨嘉は我慢がならない様子。

そこでスレッドの内容を詳しく見ていくと、憤りの理由が分かってきた。

書かれていたのは、神琳個人に対する言及だ。それも大概はネガティブなものだった。

元々、神琳はリリイ関連雑誌に載って知名度があった。それを利用し、メディアに出演して台湾外征への支持を訴える。外征反対派からは当然の如く目の敵にされるだろう。

「雨嘉さん、匿名掲示板とはそういうものよ。肩肘張って見るようなものじゃない。話

半分程度に受け止めないと」

「だからって、こんなの……っ！ 神琳は腹が立たないの!？」

「雨嘉さんの怒っているお顔を見てたら、毒気が抜けてしまったわ」

そう言つて神琳は後ろから雨嘉の両肩に手を乗せる。

雨嘉は椅子に座つたまま、首を回して横顔を向けてくる。

まだ何か言いたそうな彼女の唇を、神琳は不意打ちで塞いでしまう。

「んんっ……っ！」

始めは驚いてのけ反ろうとする雨嘉だが、神琳の手の平に頬を包まれると、途端に大人しくなった。目を閉じ、力を抜いて、その身全てを神琳へ委ねる。

5秒か、それとも10秒ほど過ぎただろうか。互いに顔に掛かる鼻息が荒くなつてきたところで、神琳は唇を離れた。これ以上は自制が利かなくなりそうだったから。

台湾とアイスランド。百合ヶ丘を卒業してから二人の道は別れた。それでも長期休暇などを利用して会う度に、空白の時間を埋めるかのように肌を重ねていた。

勿論本日もそのつもり。神琳は取材やテレビ出演の合間を縫つて、二人の時間を作つたのだ。

だが、今この時は自制した。雨嘉の想いを有耶無耶にするべきでない、途中で思い止まった。

「わっ、私は！ 真面目に話してるのに！」

「申し訳ありません、つい」

真つ赤な顔の雨嘉に怒られて、素直に謝る。

その後、彼女の息が整い落ち着くのを待つてから、神琳は改めて口を開くことにした。

「自国の土地を後回しにされた点を非難するのは、無理からぬことです」

自身も椅子を持ってきて雨嘉の隣に座り、神琳がゆつくりと説き始める。二人きりの時の碎けた調子から、外での丁寧な口調に戻っていた。

「わたくしとて台北を捨て置いて海外に外征などされたら、心穏やかにはいられないでしょう」

「それは、そうかもしれないけど」

「その上で、日本の政府とガーデンが台湾支援を選択したのは、台湾海峡の確保による利益と南西諸島奪還に掛かる負担を斟酌した結果に他なりません」

国内領土であり地理的にも要地である沖縄本島。だがこのヒュージネストを攻略しようと思ったら、満足な地上支援抜きで降下作戦を実施しなければならぬ。たとえ奪還できたとしても、大陸方面や小笠原方面、更にはマリアナ方面からのヒュージ襲来に備える必要がある。

それに対して、台北は現地のリライたちが陸路を確保済みなので部隊展開が容易だった。金門島は難所だが、現状こちらのヒュージ群は台北や沖縄のものより戦力が低い。奪還後の防衛は無論台湾、ガーデンの役目なので、戦力を長期間拘束されない点も大きいだろう。

先に成功の可能性が高い台湾外征を終わらせ、然る後に腰を据えて南西諸島奪還に乗り出すというのが日本政府の目論見なのだ。

「台湾を支援することの利点を、これまで様々な手段でアピールしてきました。台湾政府もガーデンも、そしてわたくし自身も。わたくしの場合、雑誌モデルなども務めさせて頂いているので、軽薄な印象を持たれたのかもしれないですね」

話を聞いた雨嘉はすっかり押し黙っていた。未だに納得したとは言い難い表情だが。抗議の言葉を探しあぐねているのだろう。

（その怒りも、苦悩も、わたくしのためなのね）

感情表現の不得手な彼女の精一杯の情動が、神琳の胸を打ち心を震わせる。

それと同時に神琳は疚しさも覚えていた。平静な顔に一欠片も陰りを差せない、些細な疚しき。しかしながら、神琳の中から完全に消え去ることもなかった。

今さつき雨嘉に向けた説明には要点が抜けている——

それは神琳が敢えて触れなかったせいだ。台湾外征に関する舞台裏について。敢えて物事の一面を語るだけで、雨嘉を宥めようとしたのだ。

成る程、確かに台湾海峡の安定化は日本にも益になる。だが果たして、日本のガーデンが戦力を出すほどのことだろうか？

日本にとって、貿易相手は多少距離が離れていても、東南アジアや豪州に米国と選択肢はある。それだけの海軍力と海運力を何とか保持しているのだ。

その一方、台湾にとっては事情が異なってくる。無数の大型ヒュージが跋扈する混沌の地と化した大陸。その大陸に代わって通商保護とヒュージ撃滅を担ってくれる者が、日本ぐらいしか存在しない。

(即ち、台湾と日本の関係は相互互恵のように見えて、実際は片務的。日本にはまだパートナーを選ぶ余地があるけれど、台湾には無い)

神琳は自身の故郷が置かれた現状を、残酷なまでに正しく把握していた。

(では何故日本が台湾を支援する選択肢を選んだかという点、それは台湾側のロビー活動の結果)

これまでガーデン同士の交流について、台湾はかなりの力を入れてきた。高雄に日本のリリイたちを招き、見た目麗しい台湾美人のリリイが応対し、わざわざ日本人向けに薄口のアレンジした台湾料理でもてなす。無論、戦術勉強会や工廠科の技術交換など、実利的な交流もばっちりだ。

そこまでのからだから、同じリリイ同士、関係が深まらない方がおかしいだろう。実際、恋仲に発展する者も出るぐらいだった。

ガーデンだけでなく、一般市民に対するアピールも忘れてはいない。その中で神琳は重要な役割を果たしてきた。

幼少期から日本で暮らし、ネイティブと遜色ない日本語を操り、更には日本の文化に精通している。そんな女の子が「奪われた故郷を取り戻したい」と必死に訴える姿を見て、心を動かさないでいることは難しいだろう。よほどの捻くれ者でない限り。

神琳は自身の強みを正しく理解していた。

(二度味方と判断した者に対しては、どこまでもお人好しになってしまう。良きにつけ悪しきにつけ。それが日本人というもの)

幼き日の神琳が「郷に入りては郷に従え」の次に覚えた諺が「魚心あれば水心」であった。今の台湾に対する日本の姿勢がまさしくそれだと言える。

利だけでもなく、情だけでもなく、その二つが絶妙なバランスで混ざり合って考慮さ

れた。その結果の台湾外征。

しかし日本側の事情はともかく、神琳たちが相手の情に付け込んで支援を引き出そうとしたのは事実。故に、掲示板で為された批判にも一定の理はある。故に、雨嘉が心を痛める必要など無い。

沈黙を続けている雨嘉へ、神琳が念押しを図ろうとする。

「匿名の掲示板でここぞとばかりに不満を吐き出しているようですが。逆に言えば、この掲示板の外では吐けないとも取れます。現に特番以降は外征賛成が多数派になっていきますから」

「うん、分かっている……」

「だから本当に、雨嘉さんが気にする必要は無いのですよ」

そう言つて雨嘉を諭す。これで納得してくれば重畳。

しかし、そんなに都合良くはいかないことを、神琳はどこかで察してもいた。

「でもつ、やつぱり、おかしい」

静かに言い放たれた雨嘉の言葉。そこに万感の思いが込められていることは、神琳ならば手に取るかのように分かった。

「神琳のこと何も知らないのに、好き勝手言つて。神琳が今までどんな思いで戦つてきたか」

だんだんと熱を帯びてきた言葉が堰を切つて溢れてくる。

「なのに、それなのに！　こんな……スパイとか、色目とか、こんなこと！」

普段、自分から何か主張することも感情を露わにすることも少ない雨嘉。そんな彼女が眉間に皺寄せ、目の中に涙を溜めている。他の誰でもない、神琳のために泣いている。彼女にここまでされて、昂らない女がいるだろうか？

高揚と幸福感と罪悪感と、様々な感情が胸の中でない交ぜとなりながら、神琳は真つ直ぐに雨嘉を見つめ続ける。

「わたくしは、雨嘉さんに分かつて頂けるだけで十分だわ」

「……また誤魔化そうとしてない？」

「いいえ、本心です。望もうと望ままいと、誰にでも自分を取り繕わなければならない場面が必ず存在する。それは動かし難い現実でしょう。だから、身近な人が素顔を知つてくれるだけで十分なのです」

神琳がそう言い切ると、反論を試みようとしていた雨嘉は口をモゴモゴとさせただけで沈黙する。少々強引かもしれないが、涙を止めることはできたようだ。

「それに、重ねて言いますが、誰だつて自分の故郷は大切なもの。その利害が相容れないのなら、分かり合うのは難しいと言わざるを得ません」

いかにも正論ぶつた物言いだ。論ず神琳だが、これには自分自身に向けた戒めが含まれ

ていた。

現状、極東と欧州という遠距離に隔てられた状態でそれぞれ暮らしている二人。百合ヶ丘に居た頃から恋人関係が続いている。

だが神琳は晴れて教導官になった暁には、一緒になるよう雨嘉へ告白するつもりであった。今の曖昧だが心地好い関係から、世間に認められる正式な関係へとステップアップするのだ。

ここで一つ、重要な問題が発生する。神琳は台湾で教導官として戦うのが目標。言うまでもなく、台湾から大きく離れる気はない。それでも雨嘉と一緒になるということは、彼女の方に「故郷から離れろ」と要求するようなものである。

『私も、本当は故郷を守りたい。役に立ちたい。百合ヶ丘で強くなつて、いつかきつと』
かつての一柳隊のメンバーなら誰もが知っている雨嘉の想い。リリイとしてはともかく、他の形で叶えられそうな願い。それを捨て去ることになるかもしれない。神琳が自らの想いを通してというのなら。

そして神琳は本質的には、一柳隊リーダーと似て欲張りな女だった。

夜が深まった頃、灯りを落としたホテルの部屋。神琳は一人デスクの前に座り、タブレット端末の上で指を走らせている。

ベッドでは、雨嘉が背中を丸めて寝入っていた。起こさないよう気を遣う神琳の配慮が無意味だと言わんばかりに、まどろみの中へ深く深く落ち込んだみたい。よつほど疲れたのだろう。その寝顔を目にできるのは、神琳を除くと、部屋の隅で花瓶から顔を出している百合の花だけだった。

一方で雨嘉を熟睡するまで疲れさせた張本人はと言うと、タブレットを操作して極東をはじめ世界各地のニュースに目を通してしている。教導官候補としても、台湾をアピールする象徴としても、国際情勢のチェックは欠かせない。

そんな中、ふと神琳の手が止まる。

頭の中に浮かぶのは、涙ぐむ雨嘉の顔と彼女の口から絞り出された悲痛な言葉。

「雨嘉さんには、ああ言ったけど。やつぱり収まらないわね」

小さく眩きながら、ベッドの雨嘉へ視線を向ける。

つい小一時間ほど前まで、声が掠れんばかりに神琳の名を叫んでいたその口も、今では穏やかな寝息を立てるだけ。

「わたくしのことはともかく、雨嘉さんを悲しませるなんて」

その代償を支払わせないと――

真顔で剣呑な思考を始める。

だが実際に実行しようと思つたら、不可能に近いことも分かっている。

何せ相手はインターネット上の匿名掲示板に残された書き込みなのだ。これをどうこうするのは中々難しい。幾つかの条件を満たした事例を除けば。

神琳は改めて例のスレッドを開いてみる。

906：新常态の名無しさん

僕も百合ヶ丘に交ざりたいお！

907：新常态の名無しさん

ミキサー車持ってきたから

>>906は生コンとまぜまぜしましょうね

908：新常态の名無しさん

明治初期まで混浴は珍しくなかったんだ

混ぜったり挟まったりしても何も問題無いな

909：新常态の名無しさん

百合に挟まろうと百合ヶ丘目指したら

鎌倉駅でガタイのいい兵隊の兄ちゃんに挟まれたんだが

910：新常态の名無しさん

>>909

wwwwwwww

911：新常态の名無しさん

>>909

それ連行されてるんじゃない？

912：新常态の名無しさん

新たなシュツツエンゲルの誕生である

913：新常态の名無しさん

>>912

嫌だよガチムチのお兄様なんて！

何度か新しいスレッドに移り変わりながら、相変わらず目を覆いたくなるような文が並ぶ。

いや、「相変わらず」というのは語弊があつた。当初は腐つても政治談議だったものが、今では明後日の方向へと変質していったのだから。

「……あら？」

神琳の目が、とある書き込みを見て止まった。

それは正に『幾つかの条件を満たした事例』に合致するものだった。本当にそんな書き込みが都合良く出てくるとは、神琳も流石に予想できない。

あくまでネタ。愛のある弄り。書いた本人は深刻に考えてはいないのだろう。しかしながら、それと社会がどう受け取るかは別の問題なのである。

973：新常态の名無しさん

明日の朝8時に百合ヶ丘女学院初等部で百合の花を摘み取ります
摘み取って押し折ります

押し折って頂いちゃいます

「インターネット掲示板の書き込みによって鎌倉府のガーデンの活動を妨げたとして、東京都在住自称フリーターの男が威力業務妨害の容疑で逮捕されました。男は取り調べに対し『職場で叱られてムシヤクシヤしてやった。本気じゃなかった。こんなネタにマジになってどーすんの』などと供述しています。捜査関係者によると、押収したパソコンからは他にも警察や社会を挑発するような書き込みが確認されており——」

ラジオ代わりのタブレットから流れてくる本日のニュース。

店のカウンターに立つ樟美が、陳列棚の花瓶を整理する天葉に向けて不安そうな声を

上げる。

「天葉姉様、犯行予告だつて……」

「うーん、怖いなー。有名過ぎるっていうのも考えものね」
「ですね」

第17話 暮らし街並み

その日、開店準備のため店先に出てきた天葉は異変に気が付いた。店の前に走る道路、縁石によつて車道と歩道に隔てられた内、歩道の方に問題が発生していたのだ。

嫌な予感を覚えつつ、天葉は詳しく確認しようと近付いていく。自分たちのお店から見て、斜め前。縁石に程近い場所だった。

「……あつ。あちゃー」

アスファルト舗装の下から水が漏れ出ている。注意して見なければ分からない程度の勢いだが、時間を経たせいか、ちよつとした水溜まりになっていた。

「雨も降つてないのに、おかしいと思つたよ」

天葉は溜め息を一つ吐くと、お店の準備を一旦中断して店内の樟美へ呼び掛ける。

「樟美ー、ちよつとー!」

「はーい」

「漏水してるー。電話してー」

「ええつと……市役所で良かったですか?」

「府の水道局だよー」

アスファルトを小刻みに激しく叩く音がする。音を発しているのは、電気ので上下運動を繰り返して地面を転圧する大型工具。いわゆるランマーである。

ランマーはある一定の範囲を転圧すると、電源を切られて沈黙した。そこには周囲のアスファルトよりも明らかに色の濃い舗装が出来上がっていた。

土で汚れた周りの歩道がホースの水で洗い流され、そこでようやく作業完了となる。

既に昼前。早朝から始まったことを考えると、予想以上に大掛かりな工事であった。

「取りあえずレミで固めておいた。今週中には舗装屋が本舗装に来ると思う」

「はい、お疲れ様でした」

中肉中背、丸顔に黒眼鏡を掛けた50代ぐらいの男性作業員に、天葉が労いの言葉を掛けた。彼らは水道局の要請を受けて出動した水道配管工である。

ちなみにレミ——レミファルトとは常温でも保管可能なインスタント・アスファルトとも言うべき舗装材。主に小規模・緊急の舗装に用いられる。

「この辺りは市街の再開発地区に比べると、インフラの更新が遅れてるからなあ。漏水が起きてても不思議じゃあないぜ」

「でもそのお陰で、安い値段で店を持てたんですけどね」

部下に仕事道具を片付けさせている間、男性は天葉と世間話染みた会話を始めた。

商売をやっている者にとって、他業種の人間から話を仕入れて損することはない。自分の知らない街の姿が見えてくるからだ。

もつとも、天葉の場合は単純に人とのコミュニケーションが好きなのだが。

「うちの三馬鹿がよく行く花屋ってのは、ここだったのか。確か、昔はケーキ屋か何かあった気がしたが」

「あのケーキ屋さんなら中央区の方に引っ越しましたよ」

「そうか。よっぽど繁盛してるんだな」

「まあ、雑誌に取り上げられるほどの人気店だし」

「けど、繁盛するのも良いことばかりじゃあない。わしも元はただの土工だったが、まさか人手が足りないからって配管工やらされるとは思わなんだ」

「どこも大変なんですなあ」

アマノが店を構えるこの地区とて、決して寂れているわけではない。人通りも多いし、周りには多数の商店が軒を連ねている。ただ、やはり住宅区としての面が強く、

シヨッピングモールなどの大規模商業施設や遊興施設のある市街中心部に比較すると、活況さでは勝てない。

その市街だが、未だに拡張工事が続けられていた。かつてヒュージとの戦いの中で、住み処を追われたり自主的に避難してきた人々によつて街の住民が増大したからだ。平和になつても、すぐのすぐ今の住み処と暮らしを手放すのは難しい。

話を聞き限り、この配管工のおじ様もそんな避難民の一人なのだとか。

「わしの故郷もヒュージどもから奪還されとる。本当ならすぐにも帰るべきなんだろう。しかし鎌倉こっちの社長には世話になつたし、あの三馬鹿たちもまだまだ半人前だから、しごいてやらにやあならん」

黒眼鏡で目元が隠れたおじ様の表情は読み取り難い。だが声を聞けば、複雑な心中は窺える。寂しさと困惑と充実感が混ざり合ったような、葛藤ジレンマ。彼みたいな天葉の倍以上生きた人間でも、迷う時は迷うのだ。

「でもそれって、故郷が二つあるようでお得じゃないですか」

「お得う？ わははつ、嬢ちゃん底抜けにポジティブだなあ」

天葉の言葉に、機嫌を良くしたらしい。

彼の中の葛藤がほんの少しでも緩んだのなら幸いだ。

午後からの天葉は比較的忙しかった。車で花の配達に何件か回り、お店に帰ってきてからは納品の受け取りとその確認。

幸いなことに——商売的にはむしろ不幸だが——店頭の方は暇だったので、樟美にも確認作業を手伝って貰っている。

「ええっと、ビニールポット3パック300個に、無機肥料10kgが5袋。あとは、消毒液のボトルが1ダース……」

お店のバックヤードにて。

天葉が伝票の内容を読み上げて、樟美がダンボールから取り出した品物をチェックしていく。

ビニールポットは苗を植えて販売する入れ物であり、花屋には必要不可欠。プラスチックの鉢などに入れて売っていたら、コストが馬鹿にならないからだ。

肥料は言うまでもない。

そして消毒液だが、これは主に剪定バサミを消毒するためのもの。花の茎は清潔なハ

サミで裁ち切らないと、雑菌にやられて駄目になってしまう。生花店には衛生管理も求められるのだ。

「……全部あります、天葉姉様」

「そっか、ありがとー。肥料とビニールポットは私が仕舞っておくから、消毒液だけ片しておいて」

「分かりました」

チエツクは済んだ。あとはタブレット端末を開き、在庫管理の表に補充分を付け足しておく必要がある。

しかし今は広げた備品の収納が優先だ。

「そう言えばさ」

「はい」

「あのケーキ屋さん、最近行ってないよね」

バックヤードの収納スペースに仕舞い込みながら、天葉は朝の話題を思い出していた。

「お店を開く前は、時々買いに行っていました」

「今は本当、寄らなくなっちゃねえ」

「よく行列ができるし、人気のケーキはすぐに売り切れちゃうみたいです」

「それは大変。でもうちは樟美の手作りお菓子があからなあ」

樟美の得意分野は和食だが、別に洋食や中華も不得手ではない。菓子に関しても和洋問わず作れる。流石に本職のお店には敵わないものの、少なくとも天葉の舌にとつては不足はなかった。

とは言え、樟美がお菓子を自作できることと、お店で買うかどうかということは別の話である。

「久しぶりに、食べたくなってきた」

「え？」

「うん、食べよう。買いに行こう」

あの店のケーキを食べようと決めた。今、決めた。そして食に関して一度決めたことは中々譲らないのが、天野天葉という女であった。

「中央区まで行くんですか？」

「そう。今日、店を閉めてからね」

「えーっ？ 今日行くんですか？」

「思い立ったが吉日ってこと。て言うか、思い出してたら待ち切れなくなっちゃった」

天葉は想像力豊かな女でもあった。既に彼女のお腹はケーキを受け入れる態勢へと移行済み。

真つ赤ないちゴが乗った王道のショートケーキ。舌触りはふんわりと、しかし甘さはずっしりと重厚なモンブラン。あるいは控えめな大人の味、チーズケーキ。

今にも鼻歌を歌い出しそうな心持ち。

そんな天葉の心境を見透かしたのか、樟美が目を細めてジトツとした視線を向けてくる。

「姉様のお夕飯、ケーキでいいですね」

「えっ、ご飯とケーキは別腹なんだけど……」

「お夕飯、ケーキでいいですね」

「ごめんごめん！ 樟美のお菓子が一番美味しいからー」

樟美が声のトーンを下げ、そっぽを向いた。天葉は後ろから樟美をギュっとして、どうにか機嫌を取ろうとする。

好き嫌いの無い大食家なのも考えものだ。

それはそれとして、結局ケーキ屋には出向くことにした。

鎌倉という街は少々紛らわしい街である。

本来の鎌倉市街と呼ぶべき鎌倉駅周辺では、ヒュージとの戦闘を考慮して住民を避難させていた。ネストが撃破された今でも状況は変わらない。

その避難民を受け入れたのは北鎌倉駅の近辺。人が増え、家が増え、物品の需要が増す。鎌倉新市街と言うべき街の誕生である。

そういうわけで現在、鎌倉の街といたら一般的に北鎌倉の地を指す。天葉たちの世代からしたら当たり前の話だが、年配の人々にとっては未だ違和感のある呼称らしい。

夕方、閉店後。天葉と樟美は街の中央区へと足を運んでいた。

交通手段は業務用のミニバン……ではなく路線バス。震災で都市間の道路網は打撃を食らったが、代わりに都市内での交通網は充実することとなった。実際、遅い時間でもバスの本数は少くない。避難民を加えて街が膨張していくのは、鎌倉のみならず全国あちこちで見られる光景だった。

「あの、先にデパートに寄りませんか？」

「近くだからいいけど。何か買いたい物？」

「包丁、新しいものが欲しくて……」

バスから降り立った二人は行き先について話し合う。

天葉の言う通り、目的のお店から程近い所にデパートがある。デパート以外にも、飲食店や銀行など様々な施設が集まっていた。

そんな都会の真つ只中に店を移せたのだから、件のケーキ屋が如何に人気店であるかが分かるだろう。

背の高いコンクリート建築群に沿って伸びる幅広の歩道。その上を多数の人が行き交う。

仕事帰りの大人。学校帰りの学生。入り用な物の調達か、遊びに来たのか、はたまた通り掛かっただけか、何にせよ鈴生りの人間たちによって街角にちよつとした雑踏が生まみ出されていた。

そんな雑踏の中を縫って、天葉たちは地上10階建ての高層建築の前に向かって来る。天葉はともかく、樟美は食料品にしる雑貨にしる専門店を好むのだが、利便性からデパートの方にも時折足を運んでいた。

「キッチン用品は2階だったよね。だったらまず1階に行こう」

「お肉売り場には寄りません」

「まだ何も言っていないのに」

「姉様、ケーキ買うんですよね？」

「ケーキとご飯とお肉は別腹だよ！」

入り口の前で軽くお喋りしつつ、天葉は前に歩き出して自動ドアをスライドさせた。ところが、中に踏み入らずその場に立ち止まる。隣に並ぶはずの樟美が付いて来ていなかったからだ。

入り口の外、歩道に樟美が留まっている理由はすぐに判明した。いつの間にか彼女の目の前に、まだ小学校にも上がっていないであろう小さな女の子の姿があった。

「貴方、どこから来たの？」

「……………」

「お母さんは、デパートの中？」

「んーん……………」

自分の胸元よりも背の低い女の子へ、腰を屈めて尋ねる樟美。

しかし、女の子は俯き立ち尽くしたまま。二つ目の質問も、黒髪のお下げを左右に振って否定される。そのためデパート内の迷子センターに預けることも躊躇われた。

「……………姉様、どうしましょう」

「これは、お巡りさんに任せるとしかなさそうだね」

すぐさま保護者を探し出せるのなら、それに越したことはない。だが保護者が出入りした店舗すらも分からないし、そもそも本当の保護者かどうかを確かめるのも難しいだろう。やはり本職に託すのが正解だ。子供自身にとつても、天葉たちにとつても。

「幸い警察署はここから近いし。電話してから連れてってあげようか」
「そうですね」

二人で話し合つて対応を決める。

それから樟美は再び女の子に向き直り、努めて平静を装つて目を合わせた。

本当は樟美自身も不安に違いない。それでも、女の子が最初に樟美の元へやつて来た以上、天葉は直接の対応を取りあえず彼女に任せることにした。

「今から、お巡りさんの所に行つて、お母さん呼んでもらおうね」

「んーっ」

「すぐ、そこだから」

怖がらせないようゆっくり話しかけても、女の子は俯いたまま。首を縦に振る気配は見られない。これは思った以上に手強そうだ。

その間、苦戦する樟美を横目に天葉は携帯で警察へと一報を入れる。当たり前だが相手は手慣れたもので、状況を聞き取った上で迷子への対応のお願いをしてくる。

「すぐに現地に向かいますので、子供が車道に近付かないよう見ていてください。それでも危ないようなら付近の建物の中へ入るように」

落ち着いた声で出された女性警察官の指示は妥当なものなのだろう。

しかし妥当ではあるが、誰にでもできることではない。天葉たちは女二人だからこう

して見ず知らずの子供に対応できているが、そうでなければ中々ハードルが高い行為であった。

とは言え、やはり天葉たちにも限度はある。この場で女の子に泣かれでもしたらお手上げだ。

「んんっ、ひっぐ、ぐすっ……」

思った矢先に、女の子が鼻を噉り始めてしまう。涙が落ちるのはこらえているようだが、決壊は時間の問題だろう。

「えっと、んっ……餡でも持つてくるんだった」

樟美が小さく唸って困惑を露わにする。彼女もお店の接客で子供の扱いにはある程度慣れているはず。だがこの子は流石に小さ過ぎた。

そろそろ樟美とバトンタッチしようかと考え始める天葉。もともと、天葉とて確実に子供を宥められる自信は無い。

取りあえず、女兒向けアニメ『変身魔法少女チャーミーリイ』の話題でも振ってみようか。

天葉がそんなことを検討していると、視界の端に待望の人物が写った。歩道の外側の自転車通行帯を駆ける銀色の自転車。その自転車に跨っている警察官。

「……ちですよー」

天葉は片手を高く上げて呼び掛けた。すると自転車は速度を増し、怒涛の勢いでこちらとの距離を詰めてくる。

近付くにつれて自転車の乗り手が見る見るうちに大きくなっていく。ブレーキ音を響かせ、飛び下りるように地面へ着地し、天葉たち三人のもとに駆け寄って来る。

実を言うと、天葉は途中でその警察官がよく知った顔であることに気付いていた。

明るい空色の夏用制服と濃紺のスラックスを身に纏い、後ろで一本結びに纏めた茶髪に略帽を被っている。

その警察官は女性警察官だった。そして天葉の後輩であり、樟美の幼馴染でもある。

「うおおおおおおおっ！ 現着——っ！ 迷子はどこですか!？」

やかましい程に明るい声が、夕暮れの市街地に轟いた。

第18話 街のお巡りさん

茶色の髪を一本結びに縛った女性警官。目一杯自転車を漕いできたにもかかわらず、息一つ切らさず天葉たちの前に躍り出た。

「……つて、天葉様とくすみん！」

「あはは、相変わらず元気だねえ」

オーバーな仕草で驚く警官へ、天葉は気さくに声を掛けた。

高須賀^{たかすが}月詩^{がつし}。百合ヶ丘卒業後に警察学校へ入り、ここ鎌倉で警察官となつた元アールヴハイムの一員である。

「月詩ちゃん、この子」

「おお！ その子が迷子ちゃんだねー！」

月詩の幼馴染で同輩である樟美が迷子の女の子を託す。

いきなり現れて大音量を発する月詩の前に、女の子は完全に固まってしまった。無理もない。たとえ大人でも、初めて出会った人間は呆気にとられることだろう。

「こんにちはー！ いや、もう『こんばんは』かな？ こんばんはー！」

月詩が膝を折って女の子と視線を合わせ、元気よく挨拶をする。

やはりと言うか、女の子は硬直したまま。その上、プルプルと震え始めた。月詩の勢いとテンションに怯えているのは明らか。

「ねえ、お姉ちゃんと一緒にお母さん捜そうね〜」

「んっ……」

「大丈夫だよお。お姉ちゃんお巡りさんだから。お母さんすぐに見つかるよー」

反応が芳しくなくても、へこたれずぐいぐいと相手の懐へ向かっていく。こういうところはリリイ時代から変わっていない。

縮こまる子供に対してこれは逆効果ではないか。そう思わないでもないが、しかし天葉は黙って見守っている。

「お姉ちゃんとお話しようよ。お姉ちゃん面白い話いっぱい知ってるんだ。お化けのお話ー」

「お化け、いやっ」

「嫌かー、そっかー。じゃあ、喉渇いてない？ お外に居たからジュース欲しいよねえ」

月詩が朗らかに話し掛け続ける内に、ちよつとだけ会話が成立するようになった。恐らくは、狙つてのことではないのだろう。だがそれはそれで大したものである。

「あつ、そうだ！ ラッシーがいいよ！ お腹も空いてるでしょうから、ちようどいい。署に戻ったら作ってあげるね！」

「警察署で何やってるの」

すかさず突っ込む樟美。月詩のあの様子だと、いつも作ってそうだ。

「……らっしーって何？ チャーミーリイに出てくるの？」

女の子が興味を持った。

言うまでもないが、ラッシーは女兒向けアニメの登場キャラクターなどではない。語感はそのっぽいが。

「ラッシーはねえ、ヨーグルトとミルクとお砂糖を混ぜたジュースで、とっても甘くて美味い。そこにバナナやマンゴーや桃も入れちゃったりして」

「お姉ちゃん、作れるの？」

「作れるよ。お姉ちゃんのお姉ちゃんが作るの上手で、みっちり特訓したからね」

「……欲しい、らっしー」

女の子のか細い声を月詩は聞き逃さなかったようで、ライトに灯りが灯ったかのようにパツと明るい笑顔になる。

それと時を同じくして、現場にもう一人女性の警察官が到着する。こちらは月詩と違い、多少は息が上がっているようだ。

「まつ、待って、高須賀さん……」

「迷子発見、保護しました！ これより署に帰還します！」

今度は子供が一緒なので、自転車で爆走することはないはず。あれに比べれば、まだ30kmの速度制限が課せられる原付の方が安全かもしれない。

「それでは天葉様！ くすみん！」

「うんうん、お仕事ご苦労様。あとは親御さんに来てもらうだけだね」

「帰るまで事故しないでね、月詩ちゃん」

「大丈夫、自転車押して帰るから」

市民がお巡りさんの心配をするなんて、おかしな話である。けれどもかつてのオールヴヘイムにとっては、極々当たり前の光景だった。

「はあ……。自転車は私が二台とも持って帰るから、高須賀さんはその子をしっかりと見てあげて」

「はい、了解です！」

月詩の同僚、というより先輩なのだろう。彼女に促され、月詩は女の子の手を取って歩き出す。

取りあえずは、一安心。

天葉たちが中央区に着いた時から、既にそこそこの時間が過ぎていた。辺りも薄暗く、歩道に立ち並ぶ街灯の灯も目立つようになってきている。

ところが今更ながら、二人は本来の目的を果たせていないことを思い出す。

「天葉姉様、ケーキ、売り切れてるかも」

「あっ」

結局、樟美の包丁は手に入ったが、ケーキは数少ない売れ残りから選ばざるを得なかった。

迷子の身元はその日の内に判明し、すぐさま両親が警察署まで迎えに来ることとなった。

女の子が署に留まった時間は僅か。それでも彼女にとって、そこでの一時は濃密だったらしい。

「わたし、お姉ちゃんのお嫁さんになるっ！」

「だ、駄目だよお。お姉ちゃんもう、お嫁さんに貰ってくれる人がいるんだよ？」

「やだ！ お嫁さんになるのー！」

当初の怯えはどこへやら。女の子は月詩にべったりで、署内でまた一波乱あったと

か。

しかし、どうあれ無事に解決したのは何より。ケーキ屋訪問が遅れただけのことはあつた。

ところで、天葉がその後の顛末を知れたのは、人伝に話を聞かされたから。天葉に教えてくれた人物は今、天野家のリビングでソファに腰を下ろしている。今日は店がお休みなので、家主の天葉もテーブル越しに向かい合つて座る。ただ、樟美は非番の月詩と一緒に買い物につき、残念ながら不在であつた。

「ふふつ、ふふふふつ。月詩らしいね」

「笑い事じゃないわよ、ソラ」

「将来のお嫁さんを取られないように気を付けないと」

「まったく、他人事ひとごとだと思つて……」

話を聞いて笑い声を漏らす天葉と、溜め息を吐く天葉の旧友——渡邊茜わたなべあかね。艶のあるセミロングの黒髪と、前髪の合間から覗く憂いを宿した瞳が、より一層彼女の大人っぽさを引き立てる。現在大学生である茜は月詩と一つ違いだが、それ以上に歳の差があるように見えた。

「心配性と言うか、過保護と言うか。茜つて昔はもつと大らかな教育方針じゃなかつた？」

茜と月詩は樟美や壺と幼馴染であると同時に、百合ヶ丘時代にシュツツエンゲルの契りを結んだ擬似姉妹でもあった。ガーデンを卒業した今でも懇意にしており、一つ屋根の下で生活を共にしているぐらいだ。

「やっぱりガーデンに居た頃とは事情が違うのよ。私が傍でフォローしてあげることもしかないし」

「うーん。見た感じだと、上手くお巡りさんやれてると思うんだよね。まあ、大分個性的ではあるけれど」

「一見すると、そう感じるかもしれないわね。だけど結局あの子、警察学校の寮でも散らかし癖が完全に治らなかつたみたいなの」

百合ヶ丘時代から、月詩の汚部屋は有名だった。事あるごとに茜や樟美が片付けを手伝っていた。

当然ながら、警察の寮にまで茜が手助けしに行くことは不可能。そこで矯正できないならば、今後難しいと言わざるを得ない。

「敢えて距離を取ってみたけど、甘かったわ」

「せっかく心を鬼にしたのにな。と言うか、茜の方が『心配で心配で堪らない』って感じだったような」

「弁解しようもありません」

過去の話を持ち出され、茜は神妙な様子で天葉の指摘を認めた。

月詩が警察官を志したのは、元を正せば茜の勧めによるもの。月詩の生活態度に良い影響があればという思惑もあったが、勿論それが主ではない。体を動かし人と接する事が、彼女に適していると思つたが故に勧めたのだ。

実際、月詩にとって警察官の仕事は性に合つていたらしい。若干危なっかしい面もあるが、評判はよろしいのだから。

しかしそれとは別に、茜が何か気を揉んでいるように天葉の目には映つた。

「紅茶のお代わり、要る？」

「いいえ、遠慮しておく。ありがとう」

「はあく樟美はまだ帰つて来ないしな」

天葉は茜へ直接尋ねる真似はせず、取り留めの無い話を始める。

「茜も夢結みたいになつちやつて」

「そうね。夢結には立派な姉ぶつたところばかり見せてた気がする。それがこんな有様じゃあ、ね……」

「でも、それでいいと思う。シュツツエンゲルって言つたつて、一つしか違わないわけだし。私だつて今では樟美が居ないと生きていけないしね！」

「堂々と言うのもどうなの」

茜が呆れつつも、目を細めてくすくすと笑う。それからカップを手に取り、残り少なくなつた紅茶を飲み切つた。

そうしている内に踏ん切りでも付いたのか。茜は緩んでいた表情を引き締めて、天葉と正面から目を合わせた。

「何が本当に月詩のためになるのか、悩んでて」

「それって、警察官になつたこと？」

「そうではないの。……ソラはあの子が生活安全課に配属されてること、知つてたわよね？」

「うん。迷子の保護とか未成年犯罪の対策とか、地域社会への啓発とかやるんでしょ？」

天職じゃない」

実際の職務はもう少し多岐に渡るのだが、何にせよ月詩の性格を考えたら適材適所に思えた。

「それがね、府警では月詩を警備部に転属させようと考えているみたいで」

「警備部？」

「それも、警備部の機動隊」

天葉は予想外のことで、一瞬言葉に詰まつた。交通課や広報ならまだともかく、機動隊とは思ひも寄らなかつた。

しかし、よくよく考えてみると、ガーデン時代に体力の錬成や集団行動、上意下達を叩き込まれた元リリイにはお誂え向きかもしれない。月詩は元々運動神経も抜きん出ているので尚更だ。

「確かにびつくりしたけど……。茜は反対なんだ」

「ただの機動隊員ならここまで悩んでないわ。だけど」

茜は一呼吸置いてから、言葉が続ける。

「鎌倉府警は東京の警視庁に倣って、女性機動隊を新設する予定なの。それで将来の隊長候補に月詩が挙がってるのよ」

「隊長って、そんな簡単になれないでしょ」

「ええ、勿論。だからまず、管区警察学校に入らないといけないわ」

「普通の警察学校とは違うのね」

「管区の方は、新人じゃなくて現任の警察官が通う訓練校よ」

話を聞く内に、天葉は茜の悩みに合点がいった。勉強が苦手な月詩をもう一度学校へ、幹部候補の養成所へ送ることを躊躇しているのだろう。

確かに月詩はお嬢様学校の百合ヶ丘を無事卒業できただけあって、一般的なラインより学力はある。そもそも、ノインヴェルトを始めとした集団戦術やチャームの整備などは無学な者には難しい。あくまで百合ヶ丘の中では勉強が不得手というだけである。

しかしながら、月詩本人が勉強を嫌っているのも事実。出来る・出来ない、好悪はまた別の問題なのだ。

「月詩の望み通りに、自由にさせてあげたい。でもあの子が評価されてもつと上に行けるのなら、後押しすべきかもしれない。どちらが本当に、あの子のためになるのかしら」
天葉へ答えを求めているのか、はたまた自問自答か。茜は静かに問い掛けた。

リリイとしての茜は、年少者にとつて良き相談相手だった。そんな彼女自身の悩みを聞くのは専らレギオン内で同学年の天葉と依奈の役目であった。

もつとも、実際に茜の力になれたかは甚だ疑問である。現に今も、天葉はそれらしい答えが浮かんでこない。

両者沈黙して静寂の時間が流れる。

その中で、天葉は空気を変える意味も込めて、先程から気になっていた違和感について触れる。

「ちよつと待つて。さつきから、やけに話が具体的なんだけど」

一応、茜は部外者のはず。その彼女がどうして人事に関わる内部事情を知り得たのだろうか。

「これは、ここだけの話よ。ソラだから話すの」

「うん」

「実は……府警の方からそれとなく話をされたの」

「直接？ 茜に？」

「そう、直接」

今度こそ、天葉は心底から驚いた。

茜はただの大学生。難関と言われる鎌倉府庁職員を志望し、学力面と人格面と百合ヶ丘卒業生という経歴面から内定確実とされていても、現状ではただの大学生に過ぎない。そんな茜に、府警も随分と思いつつたことをしたものだ。

「そもそも、警察組織は警察官の結婚前の同棲を良しとしていないわ。捜査情報の漏洩を防ぐためにね。例外は、相手が信頼できる人間の場合。警察官同士のカップルぐらい」

「つまり茜と月詩の関係が認められてるのは、茜を身内同然と見做してるってことか」

ガーデンは教育機関であると同時に軍事養成機関でもある。故に、元リリイであることと自体が身元の保証となり、学力や体力を裏付ける要素となる。

ガーデンと関係が微妙な軍が元リリイをほとんど採用しない一方で、地方政府や警察は積極的に勧誘を掛けていた。そこには公然の秘密として、地元の有力ガーデンと友好を深めたい意図が存在する。鎌倉府警の茜たちへの対応も、そういった事情が関わっているのだろう。

もつとも、ガーデンの影響力を快く思わない者からは、地方公共団体とガーデンの結び付きはしばしば「軍閥化」と槍玉に上げられてしまうのだが。

「警察つて、面子や体裁に五月蠅いだろうに」

「府警はそれをかなぐり捨ててきた。だから、私も月詩も真剣に向き合わないと」

「ちよつと大袈裟だなあ。断ったらクビってわけでもないでしょう」

「そうかしら？ 何にせよ、いざという時は私があの子を一生養っていくつもりだけど」
「覚悟が決まり過ぎてる……」

旧友の意思を知って、天葉は畏敬にも似た思いを抱く。改めて、自分と樟美が職場を共にしていることの幸福を噛み締めた。

「ただいま帰りました」

「帰りましたー！」

控えめな声と威勢の良い声が天野家の玄関に響く。

随分と長い買い物だった。既に昼の3時に達しつつあった。

「ごめんなさい。月詩ちゃんがおやつ中々決められなくて」

「だってー、くすみんが二つだけって言うんだもん」

「おやつなら、うちで作るのに」

「くすみんの手作りとお店のものは別腹なのだ」

二人が玄関からリビングへと歩いてくる。子供時代のような応酬を繰り返しながら。

月詩に対して口を尖らせる樟美は左肩から大きなトートバッグを提げている。買ってきた品物の詰まったそのバッグが下ろされるより早く、天葉は正面から樟美の体を包み込んだ。

「天葉姉様？」

「何か茜に負けた気がして」

「はあ……」

抱き締めて、頬ずりして、満足げな天葉。

一方の樟美は訳が分からないといった様子でキョトンとする。しかし全く抵抗する素振りもなく、天葉の好きにさせていた。

そしてそんな二人を物欲しそうな目で眺める者が。

「あかねえ、あかねえ」

「駄目よ。ああいうのは家に帰ってからね」

「でも天葉様はやってるよ！」

「ここはソラたちの家でしよう？」

「あつ、そつかあ……」

形の違う二組のカップルは、夕日が赤く染まる頃まで語り明かすのだった。

第19話 新時代の力

内陸深くを湾曲しながら外洋に向けて河川が流れる。河の兩岸には屋根を丸ごと剥ぎ取られた家屋や、ひび割れて緑の蔦にデコレーションされたコンクリートの構造物。かつて人の居た痕跡こそ顕著だが、今現在の人の営みは微塵も感じられない。それは正しく廃墟であった。

そんな朽ち果てた街の跡に、場違いな岩石が幾つも鎮座している。街の只中を走る道路の上に、列を成すように。

否、それはただの岩の塊などではない。全体が鈍い銀灰色で、巨大な二本の腕と太く短い三本足を生やし、不気味に瞬く青の単眼を備えている。そして何より、緩慢ながら動いているのだ。アスファルトの舗装の上に亀裂を増やしながら。

ヒュージ——人類に代わってこの台北の街に君臨する存在。その中でもミドル級のバスター種、トリスケリオン型と呼ばれるタイプだ。

陥落指定地域にヒュージの群れが存在するのは何も不思議なことではない。

不思議なのは、彼らの様子だった。道路に沿って移動しながらも、時折建物と建物の狭間で立ち止まったり、一体ずつ列から分離して脇道を窺ったり。まるで何かを警戒す

るかのような動きを見せていた。ここは彼らのテリトリーのはずだというのに。

やがて、ヒュージの不可解な行動の理由が判明する。突然、列の最後尾を進んでいたトリスケリオン型から爆炎が噴き出したのだ。次の瞬間には、大きく無骨な右腕が地響きと共に路上へ落ちた。

群れは一齐に進軍を止めて辺りを警戒する。山型の三角形をした単眼を左右に走らせ、同属の仇を捜す。

そうしている内、今度は列の先頭で爆発音。三本あるトリスケリオンの頑健な足が、三本同時に弾け飛んだ。支えてくれるものを失ったことで、全高5mの体躯が重力に従い落下する。

最後尾と先頭の脱落は、もはやヒュージたちに安全な場所など無いことを意味していた。完全に袋の鼠と化したのだ。

群れのあちこちで爆炎が吹き荒ぶ中、ヒュージにとつての阿鼻叫喚を生み出した元凶が姿を現す。廃墟の空を翔ける鋭角的な金属片たち。その先端が煌めくと、白色の光線がヒュージの装甲を貫いた。

トリスケリオンも剛腕を振り回し、小さな襲撃者を叩き落とそうとする。だが不規則な軌道で高速を以って舞うそれらを、鈍重な化け物が捉えることはできなかつた。

さながらミニマムサイズの戦闘機。

そんな戦闘機群を操る者たちも、遅れて戦場に姿を見せる。河の対岸の、そのまた向こう。過去の台北の繁栄を偲ばせる高層ビルの天辺に、複数の人影があった。

「ヴェズルフエルニルの編隊を組み直して。個別戦闘から編隊戦闘に移行するわ」

青の制服を身に纏った御台場女学校のリリイたち。彼女らの内、四人は腰の回りに鋭角的な金属パーツを五つ装着している。これこそが、ヒュージを攻撃した物体の親機と呼ぶべき装置。一つの主機と四つの副機で構成されたチャームなのだ。

敵に気付いたヒュージ側も手をこまねいたりはいはしない。岩山の如き胴体を真ん中から上下に開き、体内に格納していた砲を突き付ける。バスター種と呼ばれる所以、高出力レーザー砲。黒ずんだ砲身が螺旋状に渦を巻くその凶器は、戦車の正面装甲さえ一撃で破壊する。

トリスケリオン自慢の砲に高濃度のマギが集まっていく。標的は無論、遙か遠方に陣取るリリイである。

その時、チャームの子機の内の一部が編隊から離脱して、トリスケリオンの眼前を掠めるように飛んだ。子機は先端から光線を撃ち出す代わりに光の刃を放出していた。

数秒の後に、ビルの天辺目掛けて仰角を上げていた砲が爆発する。

続いて、子機からの一斉掃射により、生き残っていたヒュージの隊列が忽ちビーム弾幕に包まれた。

横薙ぎに降り注ぐ光の雨が止んだ時、川沿いの大通りに展開していたヒュージは路上に散乱する残骸と化していた。

「ヴェズルフエルニルは上空で警戒。アタッキングブロンタテアカルゼー A ZとT Zは残敵を確認してちようだい」

主将の指示により、前衛と中衛のリリイたちが河を跳び越え、敵の隊列があつた場所に展開する。そこで、数回の発砲音が鳴り響いた。しかしそれ以上の問題は起きず、御台場のレギオンは戦闘態勢から警戒態勢へと移行した。

「お姉様、大同区の制圧、完了しました。隣接する中山区も台湾のレギオンが確保しつつあります」

「そう。この辺りでの戦闘も、終わりね」

チャームの子機を周囲に分散させたまま、主将のリリイが後輩から報告を受ける。

報告の内容自体は喜ばしいものだった。何せ勝っているのだから。しかしレギオン内には不満を抱く者も居るようで。

「はーっ……。結局、ほとんどB Zだけで片付いたじゃないですか」バックゾーン

「仕方ないでしょう、ミドル級ばかりなんだから。それより覚悟しておくのね。河を北上して海に近付くにつれ、大物が増えてくるわよ」

「ははっ。それでこそ、私ら御台場の舞台に相応しいでしょ」

制服の上に羽織った濃紺の外套をはためかせ、御台場の戦乙女が次の戦地に向かう。

街を取り戻すための戦いは佳境に入ろうとしていた。

その中で、海を渡ってやって来た異質なチャームは敵の風を打ち消し、味方にとつての追い風となっていく。

「へえー、やっぱり実戦で見るとまた凄いねえ」

リビングの椅子の上で、天葉が薄型テレビの映し出す映像に感嘆の声を上げた。

天葉の隣に樟美が居るのは当然として、テーブルの向かい側には依奈と壱が。ここは依奈たちが暮らすマンションの部屋である。今晚は天葉と樟美の方が、夕飯のご相伴に与ったというわけだ。

四人が見入っていたのは台北での市街戦を撮った記録映像である。実際は既に台北は勿論、金門島まで奪還済みなのだが、機密上の理由からニュースで公開されたのはこれが初めてだった。

「GC-30 ヴェズルフエルニル。史上初の制式量産された第4世代チャームです

ね」

「アレを思い出すようで懐かしいわー。……と言うか、正にアレの後継機なんだけど」

壱が映像の中のチャームについて触れると、依奈は感慨深そうに大きく頷いた。

「ああ、百由もゆと一緒に色々は無茶してたよね」

「文字通り、血反吐はいてたわ。あの頃は私も意地っ張りだったから。今、同じぐらいの無茶しろって言われても、できっこない」

「後悔してる?」

「まさか。あの時の……エインヘリヤルの経験があつたからこそ、第4世代の普及があるんじゃない」

天葉からの試すような問いに、依奈は明確な否定を示す。

過去に依奈が携わった第4世代実験機のテスト。その延長上に、先程テレビで見た戦勝があると言っても過言ではないだろう。

「依奈様のエインヘリヤル、ちよつとだけ見たことあるけど。今のチャームとはやつぱり違うね」

「そうね。魔力負荷の強かったエインヘリヤルと違って、ヴェズルフエルニルはマジクリスタルコアのAIに子機レビット操作の多くを補助させているの。だから強化リリイでなくとも、精神へのダメージを負わずに扱えるってわけ」

樟美の言葉を肯定した壱が詳細を説明する。流石に教導官を指摘しているだけあって、現行機の情報にも耳聡い。

「テレビに出てた御台場のレギオン、四人のBZ全員にあれを装備させてたね。あんなのが16機も襲ってきたら、ミドル級以下は一溜まりもないよ」

「強豪ガーデンは軒並みヴェズルフエルニルを採用しています。間違いなく、リリーの死傷者が激減した理由の一つですよ。海外のガーデンも導入し始めてるみたいだし」

「壱だったらどう使う？」

「そうですね……。手堅く小型ヒュージの漸減に使います。随伴する小物を遠距離から安全に殲滅できれば、大物へのノインヴェルト戦術が楽に実行できますから」

天葉は壱へ、教導官として戦術にどう活かすか尋ねてみた。

映像を見て分かる通り、この新型チャームの利点は操作するリリーを矢面に立てる必要が無いこと。そして単独でも高い殲滅力を発揮できること。

大型のヒュージ相手だと、こうも上手くはいかないだろう。それでも取り巻きの数を減らせる意義は大きい。物量こそ、ヒュージの最も厄介な点の一つである。

「ビットを標準で4機かあ。私のエインヘリヤルの時は、円環の御手を利用して5機が一杯一杯だったわ」

「ヴェズルフエルニルも適性があれば5機とか6機とかに増やせるんでしょ？ 若い頃

の依奈なら8機とかいけたんじゃない？」

「うーん、AI操作と円環の御手は噛み合わないと思うのだけど。あと、私は今も若い」
依奈が過去の自分と比較し始めたので、天葉は彼女を励まそうとフォローする。いまいちフォローになっていないフォローだ。しかし「依奈にはこのぐらいがちょうど良いだろう」と思つてのことだった。

そんな天葉の思いが功を奏したのかどうかは定かでないが、依奈はいつも通りの呆気らかんとした態度になる。

「まあ何にせよ、やっぱりあの二人は天才つてことね。色んな意味で」

尊敬と呆れの入り混じつたような、複雑なニュアンスを感じられる依奈の物言い。ヴェズルフエルニルはその二人による共同開発だった。依奈が手放して褒めようとしていないのは、やはりかつての実験において色々とあつたからだろう。

「我らが聖学工房の魔術師と、天津の御令嬢か。随分と懐かしい気がするね」
湯呑から食後の緑茶を頂きつつ、天葉は彼女らの顔を思い浮かべる。

天葉も依奈も二人とは友人同士だった。それだけでなく、当時のアールヴ Heim 自体が二人と関りがあつた。中でも印象的なのは、新潟外征での共闘である。

天葉が「懐かしい」と言つたのは彼女らの事情に原因があつた。前者は大学を早期卒業後、母校の百合ヶ丘女学院に研究者として所属していた。チャーム開発は勿論、マジ

やヒュージ関連の研究にも携わり、学生時代から変わらず多忙を極めている。

後者は実家のチャームメーカーの開発部に身を置きながらも、各地を渡り歩いて現場を直に見ているのだとか。

要するに、二人と会う機会が中々得られないのだ。特に流浪人同然の後者とは。

「あつ、百由様なら昨日お会いしましたよ」

「本当？ もー、たまには顔を出すように言っといてよ」

「いえ、廊下ですれ違っただけなんですけど。百合ヶ丘で開かれたマジ応用理論の講演会に行つた時に」

膨れる依奈に対し、壱がすぐさま訂正する。講演を聞きに来た者と、講演の壇上に立つ者。講演の前後で鉢合わせしただけならば、「会つた」と称するには少々無理があるだろう。

「ちなみに、今日は百由様、京都のガーデンでヒュージ分類学の講演だそうです」

「京都って……」

これには依奈も言葉を失つた。どうやらそう簡単に同窓会というわけにはいかないらしい。

無論、天葉として残念ではある。しかし予想がつくことではあつた。

「仕方ないよ、依奈。昔から百由って引つ張りダコだつたでしょ」

「引つ張りダコというか、自分から首突っ込んだというか……。ほら、他校の子が珍しいチャーム使ってたら、よく食いついてたし」

「ああ……言われてみれば、合同訓練の時も——」

天葉たちは在りし日に思いを馳せ、昔話に花を咲かせる。言うほど昔でもないのだが、リレイとして戦ってきた日々は毎日が濃密で。従って、平和な今の彼女たちからすると、当時のことはそれなりに昔のように感じられたのだ。

「でもまあ、百由は仕方ないとしても麻嶺まれいには顔を見せてもらわないと。うちの後輩たちを預けてるんだから」

再び愚痴つぼくなる依奈。もう一人の天才は他校の出身ではあるが、天葉と依奈の戦友と呼べる人物だった。

とある昼下がりに。どんよりと鉛色をした曇り空の下、花屋の仕事は変わらず続く。

店内では天葉が花の茎から傷んだ葉や花弁を取り除き、商品の手入れに励んでいた。

除去したものは、ひとまずビニール袋の中へ纏めている。店中の花を手入れしていたので、結構な量が集まった。

地道で細かな作業が好きかと問われると、そうでもない。しかし大好きな花や土いじりに関しては例外だ。作業が膨大でも苦にならないと、天葉は自信を持って言えた。

店の中の作業机で集中していると、店先から話し声が聞こえてきた。外では、樟美が外に陳列している鉢植えを手入れしているはず。来客があつたのだろう。

「店員さん、ミントはあるかしら？」

「はい。どのようなミントでしよう……」

聞き覚えのある女性の声だった。直後、樟美の声が不自然に止まった点から考えて、天葉の予想通りの人物らしい。

樟美から呼び掛けられた時には既に、天葉は店先に向かって歩き出していた。

そこに立っていたのは、銀髪ロングの長身の女性。白いシャツブラウスに包まれた体のラインと黒いスカートから伸びる二本の脚が、スタイルの良さを物語っている。

案の定、天津麻嶺あまつまねいだった。

「おひゃい」

「本当、久し振りだよ。連絡も寄越さず、いきなり来るんだもん」

「その方が感動もひとしおでしょう」

「こんなことで感動させなくてもいいって」

麻嶺は切れ長の瞳を更に細め、不敵な笑みを浮かべる。

彼女こそ真島百由ましまゆに並ぶチャーム開発技術者であり、世界有数のチャームメイカー天津重工の総帥令嬢である。

「さすがの人が鎌倉に居るってことは、やっぱりチャーム目当て？」

「ご名答。そのついでに寄つたのよ」

「ついでって、はつきり言うなあ」

依然と変わらぬ直球な物言いに、天葉はちよつぱり嬉しくなってきた。

「あとで依奈のそこにも顔出すつもりだけど。どう？ 寂しがってた？」

「うんうん、寂しがってたよ。もう泣いちゃうぐらい」

「それは私も、罪なことをしてしまったわね」

二人して、依奈本人が聞いたら断固抗議してきそうな与太話をする。実際、天葉よりも依奈の方が麻嶺との付き合いは長いのだが。

「で、買い物してたんじゃ」

「そうだった。樟美さん、ミントをくださる？」

「はい。ミントは観賞用でしょうか？ 料理やハーブティーにも使われるのなら、こちらのペパーミントがお勧めですが」

「そうか。香り目的だったけど、お茶にするのもいいわねえ」

樟美が麻嶺に示したポリポットには、小さな花と大きな葉を付けたミントの苗が収まっていた。

ミントはそこいらに生えている雑草以上の繁殖力を持つ。しかし下手に自宅の庭へ植えようものなら、忽ちミントに他の植物を駆逐され占拠されてしまう。それに強い香りは虫も沢山呼び寄せることだろう。故に花屋で買い求める需要が存在するのだ。

「そうね、じゃあペパーミントと、あとは——」

麻嶺は居並ぶ苗の列を吟味するように覗き込む。

ところが不意に、視線を持ち上げて天葉へと向き直った。

「いけない、あの子たち連れて来てるんだった」

「あの子たち?」

麻嶺の言葉に天葉は首を傾げた。だがすぐに、心当たりが気が付く。

ちようどその時、店前に伸びる歩道の先から、人影が二つアマノに向かって駆け寄ってきた。

第20話 アーセナル

「お嬢様っ!」

「おじよーさまー!」

フラワーショップ、アマノの店先に新たな客人が二人現れる。彼女らは麻嶺の前までやって来ると、もう逃がすまいと言わんばかりに仁王立ちした。

そんな二人に対し、麻嶺より先に天葉と樟美が反応する。

「ごきげんよう。やっぱりだ。麻嶺の付き添いで来たの?」

「ごきげんよう」

百合ヶ丘お決まりの挨拶をすると、相手の方も返してくる。

「ごきげんよう、天葉様、樟美。まあ、そんなところですよ」

「ごきげんよう。もー、散々走り回ったわよ」

肩で息をし、眉を吊り上げている方は金箱^{かなばこ}弥宙^{みそら}。マイペースに愚痴を零しているのは

^{もりたつき}森辰姫。共にかつてのアールヴヘイムに所属した、天葉の後輩である。

「それより、お嬢様。一人でフラフラしないでください」

「その呼び方は止めてって言ったでしょ、弥宙ちゃん」

「捜す身にもなつてくださいよ。これから百合ヶ丘に向かうつていうのに」

小言めいた抗議の声を上げる弥宙に対し、麻嶺は飄々としたもの。応えた様子は見られない。ひよつとして、いつもこんな調子のやり取りを繰り返しているのだろうか。

弥宙と辰姫は麻嶺の実家、天津重工開発部に勤めている。現役時代、新潟外征で共闘した縁で、アールヴヘイムのアーセナルだった二人を天津側がスカウトした形になる。麻嶺は二人にとって上司というわけだ。

「その百合ヶ丘の件だけど。私は顔を出すだけ出したら、すぐにお暇するつもり」「チャームを見ていかないんですか？」

「相模の方にも行くこうと思つてるのよ。そこで、百合ヶ丘については弥宙ちゃんと辰姫ちゃんに任せるわ」

突然の麻嶺の発言に、彼女の部下は色めき立つ。

「たつ……私たちが好きに見ていいんですか？」

「いいわよ。使用感やら改善点やら、思うままに調査してきてちょうだい」

「やった！」

「フフツ、やる気があつてよろしい」

大のチャーム好きである辰姫は諸手を挙げて喜んだ。上司抜きという点も、奔放な彼女にとっては嬉しいことなのだろう。

しかしながら、もう一人、弥宙は冷静に麻嶺へ質問する。

「報告の方はどうします?」

「勿論、あとで提出してもらおうよ。調査報告書、レポート用紙60枚」

「ろくじゅう!?!」

辰姫は目を見開き、口をあぐりと開ける。一方の弥宙は予想していたのか、諦めたように首を左右に振った。

「原稿用紙60枚より簡単でしょ」

「ムリ、ムリです……」

「やればできる。気合よ」

「そんな……」

辰姫の懇願も虚しく、指示が下された。

普段の飄々とした態度で忘れられがちだが、麻嶺は剛のガーデン柳都女学館のリリイだった人物だ。少なくとも仕事に関して、甘い話があるはずもない。

「私が相模から戻るまでに纏めておきなさい。宿はもう取っているから。ま、里帰りみたいなものだと思って」

弥宙と辰姫は止む無くといった様子で頷いた。

そんな二人に天葉も同情するが、他にできることと言ったら、街の変化を教えてあげ

るぐらいだろうか。ゆつくり散策する暇があれば良いのだが。

だが何はともあれ、今は麻嶺だ。彼女は彼女で忙しい。

「ゆつくりしていけないんだ」

「悪いわね、ソラ。まあ、縁なんてそのうち巡ってくるでしょう」

「忙しくて、依奈には会って行ってね」

「分かってるわ。泣かれちゃあ堪らないから」

天葉と麻嶺で軽く笑い合っていると、店の奥から樟美が戻ってくる。樟美が両手に抱える紙袋の中には、ポリポットに植えられたミントの苗が幾つか入っていた。

「お買い上げ、ありがとうございます。また、いらしてください」

「ありがとう、樟美さん。ソラのことお願いね」

「はい」

そうして麻嶺はお気に入りのミントの香りに上機嫌になりながらアマノをあとにする。後ろに憂鬱気味な二人の部下を従えて。

翌日、アマノ店内。

「二人とも、レポートはいいの?」

天葉が心配してそう尋ねた。つい昨日、上司から無茶ぶりを振られた後輩たちが店で油を売っているのだから、至極当然の反応だ。

「開き直って鎌倉観光することにしました」

「うちは観光名所じゃないんだけどなあ」

得意げに宣言する辰姫に、天葉は頬を掻きながら苦笑した。

「すみません、天葉様。営業中に押し掛けるのは止めなさいって言ったんですが……」

「ああ、それは別に構わないよ。今日は暇そうだしね」

弥宙の謝罪を手で制する。実際、本日は朝から続く雨のためか客足は少なかった。今は午後三時だが、晩まで止みそうにはない。

「今日は由比ヶ浜で釣りの予定だったのに」

「仕方ないでしょ、この天気じゃあ」

「釣り糸を垂らしたら考えが纏まって、レポート30枚ぐらい進みそうなのに」

「あんたに限ってそれはない」

遠慮ない弥宙の突っ込みが辰姫に刺さる。この彼女らの余裕綽々な調子だと、時間自

体はたっぷりありそうだ。最終的に完遂できるかどうかは置いておくとして。

麻嶺も相模からすぐに帰って来ることはないはず。何だかんだ言って、本当に里帰りさせてやりたかったのかもしれない。無論、レポートの件も本気だろうが。

そんなわけで、再びアマノの暖簾をくぐった二人。店の奥から持ってきてもらった椅子に腰を下ろし、売り場の隅っこの方で駄弁っている。営業中の店としては、如何なものかと思う人間もいるだろう。

しかしアマノに限って言えば、特段弥宙たちが問題視されたりはしなかった。店の雰囲気も常連客も店主も、それぐらい気にしない程度には緩かったのだ。

あえて問題を挙げるとするならば、口を閉じていれば美人の辰姫が来店者の目を惹いたことか。人見知りな辰姫は他人に対して大人しくなるため、尚更知らない人の目にはお淑やかな女性に映っただろう。

「それで、レポート60枚はともかくとしても、チャームは見に行くんでしょ」

「はい。早速明日の朝から百合ヶ丘の工廠科に行つてきます」

「何だか随分とスムーズだね。やっぱり、麻嶺もただフフフラしてただけじゃなかったか」

「お嬢様……麻嶺様は昔からあちこちのガーデンを渡り歩いて交流を持ってましたからね。百合ヶ丘もその一つです」

「うん、よく知ってる」

弥宙と天葉が昔を思い出すかのように語る。

麻嶺の交流範囲の広さは、天津重工開発部のコネクションの広さとなっていた。伊達にさすらいアーセナルなどと呼ばれていたわけではない。

「じゃあ弥宙と辰姫は？ 何か変わったことあった？」

「何もありませんよ？ ……ああ、辰姫が他人のチャームも弄るようになってきましたね。ま、やらなきやクビになるんだけど」

「弥宙は本当に何も変わってないわ。身長も。もつとたくさん食べないと」

「これ以上食べても横にしか成長しないわよ」

軽口を叩き合う後輩たち。それはかつてと変わらない光景で、当時のアールヴヘイムの控室を呼び起こさせるものだった。主将を務めた天葉にとって、懐古の念は人一倍である。

しかしながら、この二人に関しては、天葉もただ懐かしんでばかりもいらなかった。変わってもらわないと困る点があったのだ。

（これは、もしかして、進展してないのかな。してないんだらうなあ……）

弥宙たちのやり取りを見て、天葉は内心残念に思う。弥宙と辰姫の関係が、良くも悪くも変化していないように感じられたから。

彼女らが交際を始めたのは高等部二年の頃だった。かれこれ四年の月日が経つ。

別れたとも聞いてないので、そこまで心配する必要は無いのかもしれない。だがいい加減、何か進展して欲しいという気持ちもある。完全に天葉のお節介なので、口に出したりはしないのだが。

「弥宙ちゃん、辰姫ちゃん。自炊はしてる？」

不意に、カウンターに立っている樟美が話を振ってきた。天葉の心境を察し、話題の転換を図ってくれたに違いない。

「うっ……あまりしてないかも。忙しいと、つい出来合いのもので済ませちゃって」

言葉を詰まらせかける弥宙。樟美が食に拘りを持っていることは、元アールヴヘイムならば当然知っている。

「辰姫は自分でちゃんと作ってるわよ。釣ってきた奴を捌いたりして」

「あんたは魚だけでしょ」

一方で自慢げに胸を張る辰姫。弥宙の突っ込みも気にしていない。一人称が「辰姫」になっているのは、周りが友人ばかりで安心してしている証拠である。

確かに、プロでもないのに釣りも魚の調理も全て自分で出来るというのは自慢になるだろう。特にヒュージ出現後の世界においては尚更だ。魚だけという点は些か不安になるが。

「二人とも、会社の寮の部屋、隣同士なんだよね？ 一緒に作ったら楽になるのに」
樟美のナイスアシスト。心の中で天葉はサムズアップする。

「あー、ダメダメ。辰姫ったら本当に魚だけなんだから。アジの刺身ばかり大量生産したり。アユの丸焼き何尾も出された時は、どうしようかと思つたわ」

「何よ。アユの丸焼き、定番でしょ」

「せめて塩ぐらい振りなさいよ！」

「弥宙なんて、スーパールの総菜コーナー頼りじゃないの」

「またもや口喧嘩が始まってしまう。」

「思惑が外れた樟美はどうすべきか分からないのか、天葉の方へチラチラと視線を送ってくる。しかし残念ながら、天葉にも良い手が思いつかなかつた。」

「ただ、何のかんと言つて互いに料理を持ち寄っている事実は微笑ましい。今はそれで良しとすることにした。」

「まあ仕事も頑張りつつ、鎌倉観光も楽しむといいよ。何なら今日の夕食、うちに食べる？」

「いえ、いきなり押し掛けてそれは流石に……。樟美のご飯は次の機会にしておきます」

「そう。残念」

「それに、ちよつと気になる所があるんで」

天葉からの誘いを遠慮した弥宙だが、どうやら既に夕飯の当てがあるようだ。もつとも、すぐ横で辰姫が目をパチクリとしているので、彼女の方は初耳らしい。

「えーっ？ イタリア料理い？ そんな小洒落たものより、辰姫はもつと腹持ちしそうなものが食べたいわ」

弥宙から話を聞いた当初、辰姫はあからさまに不平不満を訴えていた。

とてもお嬢様学校出身者とは思えない発言である。確かに辰姫は本来お嬢様ではないし、弥宙とて壱や依奈ほどのお嬢様でもない。だがしかし、幾ら何でもこの発言は如何なものか。

「騙されたと思って付いて来なさいよ。たまには変わったものを食べるのも良いでしょう」

「おお、コンビニのカップ麺買ひ込んでる人間の言葉とは思えない」

「一言多い」

ぶつくさ言い合いながらも、二人の足は同じ方角へと進む。

時刻は宵の口、場所は鎌倉市街の中心部。この頃になると雨は止んでおり、弥宙たちも持っていた折り畳み傘は仕舞っていた。

街を行き交う人々の中を掻い潜り、やがて目的の地へと到着する。そこは、辰姫が想像していたであろう雰囲気のお店とは趣を異にしていた。

「最近首都圏で勢力を伸ばしてきたイタリア料理のお店なのよ。チェーンの」
「チェーン店？」

「そう。だから肩肘張らずに食べれるってわけ」

意外そうに目を丸くする辰姫を尻目に、弥宙はすたすたと店内に入っていく。

夕食時ということもあって、客の入りは結構なものだった。だが幸いにも座る席が見つからない事態は回避でき、弥宙の先導で店内の奥まった箇所へと歩き出す。

「樟美に自炊してるか聞かれたばかりなのに」

「自炊は、まあ、明日やるわ」

「明日って、いつの明日？」

「明日は明日よ」

「弥宙ってばダメ人間みたい」

「あんたに言われたくない！」

賑やかなやり取りの中、簡素な座席に座った弥宙は辺りを見回してみる。事前に下調べしてきたとはいえ、実際に利用するのは弥宙自身も初めてなのだ。

値段が高くなりがちなイタリア料理を比較的リーズナブルに楽しめる。そのコンセプトが復興期の日本において見事にはまり、若年の女性や家族連れを中心にヒットしたのだとか。現に今も、視界に入る他の客は女性の割合が多かった。

しかし急成長した存在にはやっかみも付き物である。

安っぽい人間が行くような安い店——

SNS上ではそういった営業妨害紛いの誹謗中傷も見られた。

けれども、それが虚しい虚勢であることは、店の繁盛ぶりを見れば明らかだろう。いつの世も商売の世界では、数字こそが明確な正義である。

ともかく実際に口の中へ入れればはつきりするはず。弥宙は辰姫をせっつき、テーブルに備え付けのメニューを開かせるのだった。

弥宙は別に、食通などではない。何しろインスタントのカップ麺を好んで食べるほどである。ジャンクなフードに抵抗があるどころか、むしろ利便性も含めて評価していた。

そんな庶民的な舌だから、というわけではないが、弥宙にとってこの店の料理は満足できるものだった。無論、高級店の品に及ぶほどではない。しかし、下手に奇をてらわないスタンダードで濃いめの味付けが、弥宙の好みに合ったのだ。

予想以上の収穫。

だがそれにも増して予想以上なのは、辰姫の反応だった。先程まで弥宙相手に文句を垂れていたその口で、一生懸命料理にバクついていたのでから。

「美味しそうね」

「おいしくっ」

皮肉交じりの視線と共に声を掛けても、辰姫は全く意に介さずにスプーンとフォークを動かし続けている。底の深い皿の中に、タラの切り身やアサリにミニトマト等々。魚介類をオリーブオイルやトマトと一緒に煮込んだナポリ料理、アクアパッツアである。手頃な価格が売りのこの店では、コストが嵩みがちな魚料理は売れ筋とは言い難いらしい。それでも魚好きの客からのオーダーはある。ちやうど今の、辰姫のように。

「ほんと、美味しそうに食べるわね」

弥宙自身はボローニヤ風ミートソースの Pasta をフォークに絡ませつつ、向かいの席の食べっぷりを鑑賞する。

顔を綻ばせ、大きく口を開き、尖った八重歯を覗かせて。言葉にせずとも、料理に対する感想を雄弁に語っているようだった。

そこで弥宙はふと気付く。自分たちのテーブルが周囲からちよつとした注目を浴びていることに。原因は十中八九、辰姫だろう。

(ま、無理もないけど)

弥宙にとつては驚くべきことではない。それは辰姫の豪快な食べっぷりのみならず、彼女の見た目に理由があつた。

セミロングの銀髪に、釣り目がちな三白眼の弥宙。そんな弥宙は樟美と大して変わらぬ背丈であり、年齢不相応な華奢な体型もあつて、しばしば高校生に間違われる。酷い時にはそれ以下にも。

それに比べて、モデル張りのスタイルを持つ亜羅椰や麻嶺ほどではないにしろ、辰姫は背が高い。色素の薄いさらさらの髪に、透き通つた白い肌。黙つていけば、人形と見紛う美しい容姿だ。黙つていけば。

加えて、今は暦の上では秋に間違いないが、気温的に厚着をするにはまだ早い日々が続いている。したがつて辰姫も薄着。薄手のシャツブラウスの上から、弥宙とは対照的

な豊かな胸が威容を誇っていた。

店内の客層は女性が中心。数少ない男性も家族連れやカップルばかりなので、じろじろ見てくるような者は居なかった。しかし近くの女性客に限って言えば、辰姫のことが気になっているようだった。

(……何の心配してるんだ、私は)

弥宙はそう心の中で自嘲した。

こんなことを考えてしまう原因は分かっている。天葉や樟美とのやり取りだ。

別に、直接自分と辰姫との関係について触れられたわけではない。だがそれでも、気を遣われているのだと何となく分かってしまった。「何かしら進展はないのか」と。

勿論、弥宙と辰姫が付き合っていることは間違いない。一緒に買い物に出掛けたり、食卓を囲んだり、そんな気分になったら寝床を共にしたり。

しかし、そこで止まっているのもまた事実。その関係のまま、先に進む気配が全く見られない。そして何より、弥宙自身がこの状態を心地好いと感じていたのである。

(樟美や壺つちゃんや月詩やあかねえとは大違い)

幼稚園からの幼馴染たちと比べてしまう。他の四人は形は違えど、先に進んでいる。自分たちだけが取り残されている。弥宙にはそう思えてならなかった。

「食べないの?」

不意にそう言われて、弥宙は思考を現実に取り戻す。

フォークを皿に横たえたまま、手が止まっていた。真正面では、辰姫がいかにもクエスチオンマークを浮かべてそんな表情でこちらを見つめていた。

「食べるわよ」

短くぶつきら棒に弥宙が答えると、辰姫は再び自分の食事に集中し始める。

フォークで突き刺した魚肉を口の中で頬張って、何度も噛み締め味わってから飲み込む。その度に、まるで花が咲いたかの如く笑みを湛えていた。

本当に美味しそうに食べる。本当に幸せそうに食べる。

そんな辰姫を見ている内に、小難しく考えていたことが馬鹿らしくなってきた。

「そうよ、そもそも樟美や壱ちゃんが早過ぎるのよ。まだ二十歳じゃない」

ぶつぶつと独り言を漏らしても、辰姫の耳には届いていないようだった。その代わり、辰姫は弥宙の視線が気になったらしい。

「ずっとこっち見て……。さては、弥宙も欲しいのね?」

「はあ? 要らないし」

「素直じゃないわねえ。仕方ない、辰姫のを一口分けてあげよう」

フォークごと突き出されたタラの切り身を、弥宙の口は避け切れなかった。まさか吐き出すわけにもいかないのです、そのまま渋々ながら咀嚼する。

「……美味しい」

気のせいかな、タラに染み込んだトマトソースがやけに甘かった。

弥宙たちの席から少し離れたテーブル。友人同士でダイナーに来たのだろう。大人のお姉さんが二人向かい合って座っていた。

「見て見て、あの子たち」

「食ばさせてもらってる、可愛い。中学生かな？」

弾んだヒソヒソ声が弥宙にも聞こえてくる。トマトほど真っ赤にはならなかったが、弥宙は眉間に皺を寄せ口をへの字に曲げた。

一方で辰姫には聞こえていなかったようだ。それがまた弥宙の不機嫌を強める。

「弥宙のパスタも頂戴よ」

「絶対イヤ」

「けちー」

第21話 作り生み出す道

百合ヶ丘女学院、一年生寮の裏手にある花壇の前で、一仕事を終えた天葉は大きく伸びをした。

「ありがとうございます、天葉様」

「切り花の方も結構な数だけど、梨璃さんだけで大丈夫？」

「何人か手伝いに来る子がいますから。あとで花瓶に入れ直しておきます」

桃色髪で人懐っこい笑顔を浮かべた白井梨璃。彼女は寮母として、花を納入しに来た天葉へ礼を言う。

天葉はまず鉢物を花壇の土に植え替えて、その後に円筒の容器に活けられた切り花の束を並べた。鉢物にしる切り花にしる、今回納めた品はかなりの数に上る。

花壇に花を植えるのは当然のことだろう。では大量の切り花はどうするかと言うと、近日開かれるイベントで使うのだ。

「もうすぐだね、ハロウィン」

「はい。部屋の飾り付けとか料理とか、本格的なパーティーになるみたいですよ」

百合ヶ丘のリリイが準備を進めているハロウィンパーティー。その会場を彩るのが

花たちの役目であつた。生徒でない梨璃は準備の準備を引き受けているに過ぎない。

もつとも、梨璃が生徒以上に心待ちにしているように見えるのは、天葉の気のせいではないだろう。たとえば直接参加しなくとも、やはりお祭り事は気分が上向くものである。

「天葉お姉さん。あつちの花壇、終わったよ」

「はい、ご苦労様。じゃあこれで本当に終了だ」

アマノのバイトとして同行する結梨が足早に歩み寄つてきた。

天葉は土いじりしていた軍手を脱ぎ、ここまで大事な花を運んで来たミニバンのバックドアを勢いよく閉める。

「結梨ちゃんもありがとうだね。そろそろお昼だから、しつかり食べるんだよ？」

「もー、分かつてるよ」

口を尖らせた結梨にちよつとだけ邪剣にされつつも、梨璃は気にした様子もなく天葉たちへ別れの挨拶をするのだった。

台湾外征へ赴いた関東の各レギオンが凱旋帰国を果たし、百合ヶ丘を始めとした不参加のガーデンも警戒レベルを平常時へと戻していた。百合ヶ丘の嘱託職員である結梨は再び暇ができたので、こうしてアマノの応援に入っているというわけだ。

百合ヶ丘のみならず、世間ではハロウインを間近に控えてお祭りムードが高まりつつ

ある。花の需要も一時的に増していた。

それに加えて10月から11月はブライダルシーズンである。こちらと同じく花の需要が増える一因だった。結婚式場と契約してないアマノには直接影響はないのだが。

しかしどちらにしろ、もう少し忙しい日が続きそうだ。

百合ヶ丘から鎌倉の街へと至る道を、白い塗装の車が走る。路面の状態は良好とは言い難く、起伏も相まって四輪のタイヤに小さくない衝撃が加わっていた。しかし幸いサスペンションは良いものを装備しているので、天葉と結梨のお尻は酷いことになってはいない。少なくとも、急降下するガンシップの座席よりはずっと快適と言えた。

周囲に他の車両は見られない。この辺りは要地保全法に指定された土地であり、ガーデン関係者以外は許可を得た者でないと入れないのだ。

要地保全法とは、ガーデン周辺地域における一般人の立ち入り、築造物の変更、地形の改造などを禁止して対ヒューズ戦闘を円滑に進めるためのもの。現代の要塞地帯法

とも呼ばれている。東京など都市部のガーデンはともかくとして、百合ヶ丘のように人家から離れた激戦区——かつての話だが——においては重要な法律である。

中には法を犯して侵入を試みる者も存在するらしい。何にせよ堅気でないのは確かだろう。

「……あつ、あれ！」

突然、助手席の結梨が声を上げた。彼女はフロントガラスの向こうを、ミニバンの左前方に見える山の斜面を指で指す。

天葉は元から大して出てなかったスピードを更に落とし、のろのろと徐行運転に切り替える。そうして結梨の指す方に目を向けると、山間の道なき道を進むシルエツトを発見した。

それは人ではない。四肢こそあるが、3メートルを超す背丈と首の無いずんぐりとした胴体。そんな胴体から直接生やした左腕に巨大な削岩機を装備していた。所々を土で汚した黒と黄土色の肌は、それが機械である事実を物語る。

「へー、LACC^{ラック}かあ。この前の大雨で崩れた所でも直してるのかな」

天葉が珍しい物でも見たかのような声を出す。リリイだった彼女にとつて、本当ならそこまで珍しくはないはずだが。しかし久し振りに直で見ると、こんな声も出るというものだ。

リリイズ・アーマード・キャバリア、通称LAC。

それ自体が一機のチャームとなるパワードスーツ。土木建設用の作業機械に武装を施した、ガーデンの支援兵器である。搭乗リリイズのマジを全て防御面に回しているの
で、攻撃手段は通常兵器に頼っていた。それ故にミドル級以下しか撃破できないという
欠点がある。しかしその生存率の高さから、撤退戦や防衛戦において真価を発揮する兵
器だった。

結梨が見つけた二機のLACは縦列で進軍している。先頭の機体は削岩機、後ろに続
くもう一機はエンジンを抱えて。状況に応じて様々な装備に換装できるのが、LACの長
所の一つであった。

「最近大活躍ね。台湾にも外征レギオンと入れ替わりで何部隊か派遣されたっていう
し」

「百合ヶ丘の工廠科でも、機体が増えたから整備が大変って泣きそうになってたよ」

「あれ、運用に相当お金が掛かるって聞いたけど。私らの時代では」

「技術の発達と量産効果で安くなったんだって。ユグドラシル社の人が、そんな話して
た」

不安定な山道をLACたちは二本の脚で危なげなく歩行する。その姿を車内で眺め
ながら、天葉は時の流れを実感していた。

二人の話の通り、近年LACの作業機械としての出撃は増加する一方だった。それは、ヒュージ出現に備えるという理由も勿論あるだろう。

だがもっと切実な事情がある。戦災復興に当たる防衛軍の工兵部隊や民間の土建業者の手が足りていないのだ。それだけ国土を傷付けられたというわけである。

そのため、ガーデン周辺の土地や戦闘地域ではLACが活用されていた。ただでさえ手が足りない状況下で台湾にまで派遣するには、例によって例の如く賛否両論あるのだが。

元々何かを作るために生まれた存在が、武器を持ち戦いに身を投じ、そしてまた何かを作る道へと回帰する。LACとしては本懐と言つても良いだろう。もしも物に魂が宿り意思が存在するならば、そう思うのではないだろうか？

天葉たちが眺めている中、LACが減速して足を止めた。ミニバンとの距離は幾分か縮まっており、丸みを帯びたシルエットは先程よりも大きく見える。

疑問に思っていると、LACの背部でコクピットのハッチが開いた。中から出てきたのは工廠科制服のリリィ。彼女らは軽やかにLACの肩へ飛び移ると、こちらに向けて大きく手を振ってきた。

「おーいー」

いつの間にやら助手席の窓を開け、結梨も手を振り返す。

ガタゴトと揺れる車体。タイヤに蹴られて跳ねる路傍の小石。

ミニバンとLACでのやり取りは、結梨の姿が山道の起伏によって隠れるまで続いた。続いた。

学院での仕事を終えた天葉と結梨は昼前にお店へと戻ってきた。一人で店番をこなす樟美の元へ、足早にのれんを潜った結梨の後に天葉も続く。

結梨は樟美のすぐ傍まで移動しており、昼食について頻りに尋ねていた。今日のお昼ご飯は樟美の作ったお弁当であった。テンションが上がるのも無理はない。

樟美が結梨の相手をしながら、後からやって来た天葉と目を合わせる。二人は言葉交換することなく互いに目を細め合う。

そこで、天葉の注意が下方に向いた。カウンターの前に立つ樟美の下、机上看見えない無言の注意が置かれていたからだ。天葉は結梨の話が終わってから樟美に聞いてみる。

「その丸っこいの、ぬいぐるみ?」

「あ、はい。今朝、常連の女の子から頂いたんです」

樟美がそう答えると、結梨も興味を示したようだ。

「これ、何のぬいぐるみなの?」

「LACだよ」

「ええー?」

結梨は目を丸くして半信半疑といった様子。

デフォルメされ、実物よりも更に丸みに磨きが掛かったその姿は、確かにロボットやパワードスーツのイメージからはかけ離れている。

「アニメ化やプラモ化は知ってたけど。まさかぬいぐるみまであるなんて」

「意外に、LACって女の子からも人気あるんですよ。丸くて、可愛いって」

「かわ、いい……?」

天葉は啞然とした。決してLACのことが嫌いなわけではないし、悪く言うつもりもない。しかしながら、可愛いという形容詞が浮かんでくるとはとても思えなかった。LACが可愛いのなら、外国の童話に出てくる卵の怪物だって可愛いと言えるだろう。

「今や、チャーミーやエーデルロイヤルコーンに負けにくいぐらいの人気キャラになります」

「そこまで？ て言うか、マスコット枠なんだ……」

その三者を同列に扱うことも甚だ謎である。マスコット枠と言うより、ゲテモノ枠とした方が適切かもしれない。

勿論、違和感があるのはLACをマスコットとして見た場合だけだ。ロボットとして見た場合、人気が出るのは理解できる。実際、LACを題材としたリアルロボットアニメは好評を博している。

「あの女の子、私たちがリリイだったこと覚えてて。それで、これをくれたみたいです」
「そう。なら大切にしないとね」

「はい」

その気持ちは純粋に嬉しい。小さな子供にとつて、ぬいぐるみは値段を抜きにしても手放し難いものだろう。それを贈ってくれたのだから、如何に自分たちのことを好いてくれているのか分かる。

「このまま、カウンターの脇に飾っておきましょう」

「そうだね、そうしよう」

樟美と天葉が話し合ってそう決めると、両手で持ち上げてしげしげと見つめていた結梨は、ぬいぐるみを元の場所へと戻すのだった。

茜色の空の下、夕焼けよりも赤い炎が広大な基地のあちこちで噴き上がっていた。兵舎が、倉庫が、ヘリポートが煙に巻かれる。基地の管制塔は今しがた、爆音と共に根元から崩れ落ちた。

業火の向こう側に、丸い影が幾つも映り込む。球状の胴体から三本の脚を生やした巨大な金属塊。脚の先端が地面に振り下ろされる度、コンクリートの舗装が抉られていく。この惨状を生み出した直接の元凶、ヒュージだ。

悠々と我が物顔で基地をのし歩くヒュージの集団に、立ちはだかる者がいた。黄土色と黒色の体を煤で汚した機械の人型、L A C。

L A Cの姿を認めたヒュージたちは、その外見に似つかわしくない機敏な動きで襲い掛かる。

ヒュージの突撃とほとんど同時にL A Cの左腕も動いた。左腕は、五指を備えたマニピュレーターの代わりに、ガトリング砲と一体化した武器腕であった。

次の瞬間、ガトリングの砲口が光を灯す。巨大な電動ノコギリが唸るかの如き重低

音。旋律も何もないその音楽は、ただひたすら破壊を生み出すのみ。大量の鉄の礫が音を遙かに超える速度で以って、ヒュージの銀灰色をした装甲を穿っていく。

やがて、弾の切れたガトリングの銃身が空回りする頃には、辺りに立っているヒュージは皆無となっていた。

「はあ、はあ、はあ……！」

LACのコクピット内、操縦者は肩で息をする。

連戦、疲労、緊張。とうに限界を迎えていてもおかしくない状況で、しかし操縦者であるチャーミーは正面のモニターを食い入るように見つめ続けている。

「残弾、ゼロ……！」

これまで既に多くのヒュージを屠ってきた。にもかかわらず、LACのセンサーは周囲から敵の反応が途絶えそうにない現実を突き付けてくる。

もっと上手くやれたはず。チャーミーは心の中でそう悔やむ。だがこの行動自体を後悔する気は微塵も湧いてこない。

「まだだっ！ まだ戦える！」

それは強がりなのか。チャーミーが自身に言い聞かせるように気迫を吐き出しつつ、操縦桿のスイッチの一つを押した。すると左腕部横に装着されたガトリングが半回転して銃口が後ろに向く。それに代わって、巨大な二本の鉤爪を思わせるクローアームが

左腕の前方に突き出される。

そうして次に討つべき敵を探そうと、チャーミーは再びセンサーに目を向ける。だがその顔はすぐに驚愕へと染まった。戦場のご真ん中を、ヒュージとは異なる新たな反応が猛然と突つ切ってきたのだから。

「速い、普通のLACの三倍速い！ こいつはっ——」

チャーミーの眼前に流星が落ちてくる。

それはLACだった。全身を真っ赤に塗装したLACであった。

咄嗟に振り上げたクロウが振り下ろされた相手のクロウと激突し、マジの閃光が辺りに迸る。

LACを通して操縦者にも衝撃が襲ってきた。体の中の綿を吐き出しそのような感覚。チャーミーはそれを無理矢理に押し止め、相手のLACへ吠え掛かる。

「エロコーン！」

「何をやっている、チャーミー！」

背中のバックパックに装着したブースターを噴かし、赤いLACは後方に着地した。

「チャーミー、私は言ったはずだ。あの少女を、ヒュージの姫を仕留めなければこの攻勢は終わらないと。それなのに、何故こんなところで油を売っている？」

「そんなこと、できるわけじゃないか！ 体質なんだ、ヒュージを呼び寄せてしまう

のは！ 好きでやってるわけじゃない！」

咎めるようなエーデルロイヤルコーンの正論に、チャーミーは真つ向から反抗する。それが呑めないからこそ、彼女はこうして綿を吐きそうになりながら戦っているのだ。

「ではどうするつもりだ。このヒュージの波を」

「全てやつつけなければいい！ 僕と、僕のLACが！」

「何をふざけたことをっ！」

赤いLACが駆け出す。両膝を折り曲げ、脚部のローラーで重厚な機体を疾駆させ、またしてもそのクローをチャーミーに向けた。

今回も何とかクローで受け止めるチャーミーの機体だが、衝撃でフラフラと後ずさる。更に二度三度、追い打ちの手刀を叩き込まれ、ついには膝を突いてしまう。スピードもパワーもマジも、何もかもが及ばなかった。

満身創痍といった黄土色のLACを見下ろす赤いLAC。だがエーデルロイヤルコーンはそれ以上武器を振るおうとはしない。

「見てみる、今の貴様を。矢弾尽き、傷だらけで、マジだつて残り僅か。その様でどこまで戦える？」

「それでも、やれる。やらなくちゃあならない！」

「現実を見る！ ヒュージの姫を消すことが、最も確実な道だ！」

「そんな大人の理屈う！」

「理想に殺されるぞ！」

痩せ我慢だった。機体の状態など指摘されるまでもなく、自分自身が一番よく分かっている。果たしてあと何回戦闘に耐えられるだろうか。

だがそれでもチャーミーは歯を食い縛り、意地を張り続けた。彼女という存在は、そうしないではいられなかった。

「諦めるなんてできない。皆の笑顔を守らなきゃ……」

「一体何が、貴様をそうさせる!？」

「だって僕は、チャームの妖精だから」

答えになつていない答え。しかしチャーミーにも、彼女の半身であるLACにも、それで十分だった。

黄土色の機体が淡いマジの光を発し、見る見るうちに自らの全身を包み込んだ。乗手の意志にリンクしているかのように、LACのマジが増大していった。

「死中に置かれて、活を生み出すか。何とも単純な奴だ」

呆れた声のエーデルロイヤルコーン。だがもはや、チャーミーを止める気はなくなつたらしい。

「マジが溢れてくる……。こんなこと初めてだ。これなら……」

「フン、あれだけ大口叩いたんだ。そうでなくては困る」
「やれる。あの子の笑顔も、皆のことも、僕が守るっ！」
「やって見せろよ、チャーミー！」

テレビの画面の前で、困惑した天葉が傍らの樟美へ問い掛ける。

「ええ……。チャーミーリリイって、こんなアニメだった？」

「機動魔法戦士チャーミーキャバリア。コラボ企画のスピノフ作品、だそうです」
「ゲテモノ過ぎる……」

第22話 ふうふそれぞれ

鎌倉の街のお花屋さん、アマノは今日も開店営業中。いつものようにぼつぼつと来店があり、ぼつぼつと切り花や鉢物が売れていく。いつものアマノの光景だった。

ただ少しばかり普段とは異なる点がある。樟美や結梨の姿が見えない代わりに、本来店員ではないはずの人間たちが天葉と同様にお店の黒いエプロンを身に付けていた。

「何だかうちの店が溜まり場になってる気がする」

椅子に座りカウンターの上で頬杖を突く天葉が懨然とした顔で愚痴を零した。

「いいじゃないの。こうして仕事を手伝ってるんだから」

反論したのは依奈だ。彼女は手に軍手をはめ、陳列棚や鉢植えから落ちた花卉や葉を集めて処分している。

「ソラ、伝票纏めておいたわよ」

店の奥から茜が出てきた。アマノの業務用タブレット端末を抱えて。

如何に親友といえど、普通は店の帳簿を部外者に任せない。彼女らがただの親友以上の関係であることを表していた。

「それは、手伝ってくれるのは有り難いけどさ。でも、こんなこと言うのもアレだけど。」

大学生って暇なの？」

若干の妬みも込めて天葉が問う。平日の昼下がりに二十歳過ぎの女が集まっているのだから、疑問に思うのも当然だろう。

「今日は講義が昼までなのよね」

「私は、もう必要な単位は大方取ってるから」

依奈と茜がそれぞれ答えた。大学をさっさと早期卒業した百由ほどではないが、この二人も大概優秀である。

ヒュージと戦いながら学業もこなさなければならぬガーデンにおいて、単位の取り方は柔軟に対応されていた。昨今、その傾向は一般の学校にも浸透しつつある。社会がより多くの人手を必要としていたからだ。「学生から学習する機会を取り上げることが繋がらないか」と危惧する声もあるのだが、そこは「生涯学習の機会充実」でバランスが取られることになったとか。

「それに、私たちのお陰で樟美がご飯の準備できてるでしょ？」

依奈の言う通り、本来ならカウンターに立っているはずの樟美は天野宅に居る。樟美だけでなく、依奈と茜のパートナーたちも樟美の手伝いに回っていた。この日、六人で夕食を共にしようとしていたのだ。

元オールヴヘイムヘッドライナーのメンバーの内、彼女ら鎌倉残留組で予定を合わせ

るのはそこまで難しい話ではない。だが他の面々——東京に移った亜羅椰や風来人の付き添いをやってる弥宙と辰姫を含めるとなると、気軽にはいかなくなってしまふ。

「うん、まあ、ご飯が更に豪華になるのは嬉しいよ。でもそのために樟美と離れ離れの時間が増えるっていうジレンマが」

「あのねえ、普段から家でも仕事でも一緒でしようが」

依奈が溜め息を吐き、肩をすくめて突っ込みを入れた。

しかし天葉にとっては何もおかしいことではない。現に今も、溜め息を吐かれて心外だと顔で表している。

そんな二人の様子を見た茜がクスリと微笑む。

「樟美と相変わらずのようで、安心したわ。お店の中でも仲良しさんなのかしら？」

「あー、茜が心配してるようなことはないから、大丈夫。ちゃんと時と場合は弁えてるから」

天葉が質問の意図を察し、指で頬を掻きながら答えた。仲が良過ぎるあまり、羽目を外していないか釘を刺してきたのだろう。

「本当かしら。どうもソラの感覚はちよつとズレてるのよね」

「そう言う依奈のところはどうなの？」

「うちは節度を守ってるから、ご心配なく。相方が真面目っ娘なもので。でもまあ、あの

子が外で見せつけたいのなら、私は別に付き合っただけでもいいけれど」「とか何とか言っちゃって。本当に壺の方から迫られたら焦りそう」

依奈に言い返した後、天葉は茜の方を向く。

「そっちは……聞くまでもないか」

「そうね。仲が良いのは素敵なことだけど、周りのことも考えるように」

「オーバーだなあ。変なことするわけじゃないのに」

苦笑する天葉。

一方で茜は少しだけ考え込んでから、改めて口を開く。

「ソラ、まさか仕事中に店先やカウンターで、キスとかしてないわよね？」

「私のこと何だと思ってるの。毎日するのは、おはようとして行ってきますとお休みのキスぐらいだから」

当たり前のように言い切る天葉へ、すかさず依奈が割り込んでくる。

「ちよつとちよつと。同じ職場なのに、行ってきますのキスってどういうことよ?」

「ええ? どういうことって、どういうこと? 仕事場に行くんだから、行ってきますの

キス、するでしょ」

「どうして私が『何言ってるんだ』みたいな顔されなきゃならないの……」

親友以上の盟友にも、相容れない物の一つぐらいはあるものだ。

夕日が西の空に沈み出した頃、買い出しを終えた樟美たちは天野家に帰還した。それぞれのパートナーがアマノで働いている間、彼女ら三人は家で夕飯を支度しておくという寸法である。

樟美に売に月詩。同じレギオンメンバーというだけでなく、幼稚舎からの幼馴染でもあった。

三人は買い出しの成果をキッチンに置くと、リビングに集まった。夕食を作るにはまだ早い。時間まで、樟美の淹れた紅茶で一息つくことにした。

女三人集まれば、話す話題には事欠かない。服飾がどうの、テレビの番組がどうの、スイーツのお店がどうの。中でも一番盛り上がるのは、それぞれのパートナーに関する話であった。

「うちは大体依奈様が料理担当だけど、私も時々作るわよ。食の好みも少し違うし」
「うちも、私が米派で天葉姉様はパン派だよ」

「樟美ほどの腕になると、好みとかあまり関係なくなる気がするのよねえ」

各々の家庭における炊事情について。料理は外食や出前を利用しない限りは毎日こなさなければならぬので、重要度は大きい。食の好みの違いが破局に繋がるというケースも往々にしてあるものだ。

「私もあかねえの手伝いをよくしてるよ！ ……手伝いだけ」

「うん、それが無難ね」

「その方がいいよ」

「二人とも酷いよお」

壺と樟美が深く頷いた。

人は誰しも得手不得手を持っている。月詩にとつて炊事は不得手な方になるが、そんな彼女も菓子類は得意だったりするので、世の中分らないものである。

「ところで、さ」

話題を転換したいのか、壺が間を置いて口を開いた。

樟美はお茶請けのクツキーをポリポリと食べながら、視線だけ壺の方へと動かした。

「天葉様、積極的よね。百合ヶ丘時代以上じゃない？」

随分と今更な話である。

だが樟美はすぐに、壺が何について言っているのか気が付いた。今日、三人で買い出

しに出発する直前、店を発つ樟美が店に残る天葉に店先で抱擁されたことを指しているのだろう。

「うん。人前は、ちよつと恥ずかしいかな。嫌じゃないけど」

樟美は思うところを、偽りなく答えた。特段隠すようなことでもない。幼馴染の壺や月詩だけしかいないので尚更だ。

「壺っちゃん、羨ましいんだ」

「いや、別に羨ましくはないわ。月詩こそどうなのよ?」

「私は羨ましいなあ。あかねえは、ああいうの厳しい時があるから」

「それは厳しいんじゃないかと、すっかりしてると言うの」

二人のやり取りを、樟美は相槌を打ちながら聞いていた。皆それぞれパートナーとの接し方はどこかしら違う。当たり前だ。幾ら同年代の幼馴染といえど、十人十色である。

「人前じゃなかったら、いいんだけど。お風呂とか」

「わかる。私もお風呂であかねえによく髪のお手入れしてもらおうし。……壺っちゃん
の所はそういうの無いか」

「それはまあ、うちだつてたまには一緒に入るわよ」

「ほほーう……」

「ふーん……」

「何よ？ 二人して」

月詩が感心したような顔で、感心したような声を上げた。純粹に、壺の答えが意外だったのだろう。

一方、樟美は更に裏を読もうとする。壺と依奈、どちらがどういった経緯で提案したのか、と。

「依奈様の方が誘って、壺っちゃんも満更じゃないってところかな」

「そうとは限らないでしょう」

「違うの？」

「違うないけど……」

ぼつが悪そうに言葉を濁す壺。結婚して既に一年以上経っているにもかかわらず、彼女のこういうところは変わっていない。あるいは、変わっていないからこそ、未だに百合ヶ丘時代のような初々しい付き合ひ方ができるのだろうか。

樟美は若干自身のことを棚に上げつつ、そんなことを考えていた。

やがて三人の話題は更に深く、突っ込んだものへとなっていた。具体的には、パートナーとの夜の営みについて。

「私は、いつも天葉姉様にリードしてもらってるよ。朝起きるのも、大体姉様の方が先。

隣で優しく起こしてくれる」

「流石、天葉様」

「ありありと想像できるわね」

樟美の言葉に、月詩と壱が相次いで感嘆の溜め息を漏らす。百合ヶ丘でもトップクラスの実力者かつ、アイドル的な人気を誇った天野天葉。その彼女の睦むつみが気にならないはずがない。

「うちはね、誘うのは私とあかねえ半々ぐらいなだけどね。でも外ではともかく、夜二人きりだと、あかねえってすつごく情熱的なんだよ。……ふへっ、ふへへへへっ」

「月詩ちゃん、不気味」

顔をへにやりと歪ませて思い出し笑いを始める。

そんな月詩に樟美が直球をぶつけるが、全く効いてないようだ。

「壱ちゃん和依奈様は、どっち?」

「どっちって?」

「とぼけちゃって。どっちが先に手を出すの?」

樟美に意地悪くそう問われると、壱は口をへの字に曲げて沈黙する。

だがそれも束の間。このような場で、こんな面子なので、普段は腹の中に収めてる物を、壱もさらけ出す気になるのだろう。

「私からが、多いかも」

「ふーん……」

「ほほう……」

樟美と月詩が意味深に唸ると、壱は慌てて言葉を続けようとする。

「でもっ！ それは、そうなるように依奈様が仕向けてるのよ。別に私が特別、がつついでるわけじゃないから」

「つまり、依奈様は誘い受けてことだね！」

「月詩ちゃん、ストレート」

「何だよ、くすみんが言い出しつぺじゃないか」

二人の物言いに壱の口元が引き攣った。

「あれ？ でも確か、依奈様の方がリードしてるんじゃないか？」

「分かってないなあ、くすみんは。攻めがころころ入れ替わるカップルだっているんだよ。いつも天葉様にしてもらつてるから、思いつかないのかな」

「むっ。月詩ちゃんにそんなこと、言われるなんて……」

やいのやいのと言いつ合っている内に、壱のこめかみまで引き攣ってくる。「あんた達ねえ……」と静かな怒りの声が聞こえてきたことで、樟美は引き際だと悟った。

そうして次に話の種となったのは、今ここには居ないもう一人の幼馴染。本来なら、

一番この手の話を想像し難い人物だ。

「前に、弥宙ちゃんから聞いたんだけど。弥宙ちゃんのところは、ほとんど毎回、辰姫ちゃんが攻めなんだって」

「へえ、意外。辰姫ってそういうの、淡泊なイメージがあったわ」

「うん。でも、本当に淡泊だったら、そもそも付き合ったりしないと思う」

「それもそうね」

壱も乗り気になってきた。これまで弥宙から夜の事情について聞くようなことがなかったのも、興味が湧いたのだろう。

壱だけではない。樟美もまた、弥宙本人から話された時は興味津々で聞いていた。その際、壱や月詩に同じ話をしてもらいたいか、ちゃんと確認済みである。「あの二人ならば」ということで、弥宙の承諾は得られていた。渋々といった様子ではあるが。

「それとね、辰姫ちゃんって結構、かなり、ぐいぐい来るらしいよ。弥宙ちゃん、反撃しなくても全然できないって言ってた」

体格でも腕力でも体力でも、弥宙は辰姫に及ばない。ハード面にそれだけ差があれば、技術面で多少勝っていたとしても、形勢逆転は困難だろう。

他の二人に聞いたままを語りつつ、樟美は頭の中でその場面を想像する。もうそう

ベッドの上、白いシーツへ仰向けに放り出される小さな体。

そこへ二回りほど大きな辰姫の体が覆いかぶさってくる。

「ちよつと！ 今日はずもう疲れてるんだってば！」

釣り目を更に釣り上げて、弥宙が拒絶の言葉を吐き出した。しかし、それ以上は続かない。

弥宙の薄く可愛らしい胸元に、辰姫の重量感ある胸が振ってきた。真上から押し付けられ、圧迫され。それだけで身動きできなくなってしまう。どうにか胸を押しつけて抜け出そうと藻掻く弥宙だが、両手を呆気なく辰姫に掴まれた。

眼前に、辰姫の赤い瞳。興奮で血走って赤くなった瞳が、吐息の掛かる至近距離から弥宙を見下ろしてくる。直視していると興奮がうつつてしまいそうで、弥宙は思わず目を逸らした。

「何よ、そんな顔したって……んむっ?!」

虚勢を張った口が、辰姫の口に覆いかぶされた。

それはキスと呼ぶにはあまりに粗放で。まるで雛鳥が親鳥の口から餌を強請るかのよう。もつとも、雛の方が親よりもずっと大柄なのだが。

唇を、歯茎を、そして口内を辰姫の舌に撫で回された後、弥宙の口は解放される。

再び釣り目で睨みつける弥宙。しかしその瞳はすっかり潤んでいた。二人分の唾液が混ざり合つた雫によつて、口の端から細い筋が伸びていた。

ここでようやく弥宙は観念する。

「……見えるところに、痕つけないでよね」

弥宙が消え入りそうな声でそう言った途端、シャツのボタンに辰姫の両手が伸びてくる。あつという間に白い素肌を晒されると、胸元に辰姫の口が吸いついてきた。

弥宙の言い付け通り、普段は服の下に隠れて見えない部分を狙い、辰姫の舌と唇がチュツチュと水音を鳴らす。

「都合のいいところだけ、話、聞いてるんだからっ」

悪態を吐く。

だがその悪態も、辰姫の八重歯に甘噛みされることで、悶えるような悦楽の響きに変わるのだった。

「……………」

リビングの椅子に腰掛けたまま、樟美は想像もっとうに浸る。

隣の壺も、似たようなものなのだろう。神妙な顔をして押し黙っていた。対面に座る月詩もまた、目を爛々に光らせてゴクリと息を飲み込んだ。頭の上ではハートを模ったアホ毛が振り子の如く揺れている。

「辰姫ちゃんって指が長いし、アーセナルだから絶対器用だね」

月詩の生々しい発言。

それを受け、樟美は自分と天葉に当てはめて更なる妄想を展開し始める。

彼女らを現実に取り戻したのは、目の前のテーブルが勢いよく叩かれる音だった。

「はい、やめやめ！ 終了ー！ よその家のを想像するのはおしまいっ！」

漂う微妙な空気を掻き消すように、壺が声を大にして主張した。

これに月詩も樟美も揃って口を尖らせ、冗談めかして不満を訴える。

「壺っちゃん、お利口ぶりっく」

「壺っちゃん、ムツツリ」

「うるさいわよ！」

そんなやり取りを続けていたものだから、うっかり夕餉の支度を忘れかける三人であつた。

第23話 受け継がれること

陽が傾く前、定時より少し早めにお店を閉めて、天葉は鎌倉の街を車で走る。横の助手席には、店から連れ来たつてきた樟美がちよこんと座っていた。これから向かう先で仕事手伝ってもらうために。

車——ミニバンの後部スペースには例の如くたくさんの花を積んである。ただし、今回の仕事というのは、ただのお花の配達というわけではなかった。

「オフィス街？」

車窓から外を見つめる樟美が不思議そうに声を上げた。

陽の光を遮るかのように立ち並ぶビルの列。その足元で、ちらほらと行き交うスーツ姿の人々。確かに、アマノが配達先としてあまり寄らない場所ではある。

「今日のお仕事はね、飾り付けなんだ」

「お花で、ですか」

「うん。今晚、団体さんがお店を貸し切つてパーティーするつて言うんで。店内を飾り付けて欲しいってわけ」

「そんな依頼も、あるんですね」

「大抵は造花で済ませちゃうものだけどね。でもその団体さんが太つ腹みたいで。お店も『どうせなら本物にしよう』って、うちに声を掛けてくれたのよ」

天葉がハンドルを握りながら上機嫌で語って聞かせる。

件のお店とは前から取引はあった。しかしそれは配達に限った話であって、今回のような依頼は初めてのことに。故に天葉の気分は浮き立っていた。

「フラワーアレンジメントみたい」

「そう、そうなんだよ！ 店頭でもお客さんにアドバイスぐらいできるんだけど。やっぱり自分の手で飾り付けしたいからね」

ただ花を売るだけが花屋ではない。それを証明できる仕事である。

「それで、そのお店っていうのが……」

天葉の足がブレーキペダルに力を加え、車を徐々に減速させていく。目的の場所に着いたのだ。

助手席の樟美は窓の外を見て首を傾げている。お店と聞いて、一戸建ての商店を想像したのだろう。しかし実際に天葉たちが訪れたのは、オフィス街にありがちな10階建てのテナントビルだった。

肌寒い時節。車外へ出る前にコートを羽織り、天葉と樟美はビルへと向かう。まず前方へ顔を出し、それから飾り付けに使う花を持ち込む算段である。

このビルは1階から3階までが商店・飲食店となっており、それより上階に企業のオフィスが入っていた。

目的地は3階。エレベーターで上がり、降りた先の扉を先頭に行く天葉が開ける。

そこはバーだった。準備中のため客の姿はないが。眩し過ぎない控えめな照明が程よく中を照らす。カウンターは年季の入った木製で、その奥のボトル棚と併せて店の雰囲気を出すのに一役買っていた。

そのカウンターで一人の男性がグラスを磨いている。ワイシャツに黒のベストという一般的なバーテンダーの装い。広い肩幅に厚い胸板と、服の上からでも鍛え上げられた体躯が分かる。30代半ばの容姿からは年齢以上に落ち着いた雰囲気が出されていた。あえて俗っぽく表現するならば、ナイスミドルというのが相応しいか。

男性は天葉たちの存在に気が付くと、手を止めて顔を上げた。その所作もまた、一つ一つに渋味がある。

そして開口一番――

「あら、いらつしやい！　ご無沙汰じゃないの天葉ちゃん！」

これでもかというほど愛想の良い笑み。

その光景を前に、樟美は天葉の傍で硬直して目を白黒させている。

「ね、姉様つ。こつ、こつこつこつ、この方――」

「うん、オネエさんだね」

「~~~~~つ!？」

田舎生まれ、百合ヶ丘育ちの樟美には刺激が強過ぎたようだ。

「あら〜？　そちらの子が天葉ちゃんのお嫁さん？」

「そうそう。可愛いでしょう？」

「成る程、自慢したくなるわけねえ」

男性が天葉に続いて樟美へと目を向けた。

肩をピクリと震わせるものの、樟美はどうにか視線を合わせて口を開く。

「は、初めまして……。天野の妻の、樟美と申します……」

「こんにちは。私のことは『ママ』って呼んでね」

「はあ……」

「フフフ、そんなに怖がらなくても。取って食べたりしないわよ、女の子は」

そうは言っても、やはりぎこちない様子の樟美。無理もない。見た目は精悍で筋肉質な普通の男性なのだから。

「ママの所には何度か配達に來させてもらってるの。でも、こういう仕事は初めてだね」
「そうなのよ。今晚お友達のバスデーパーティー開きたいって。貸し切りで、出張料理人なんか呼んで、色々注文付けられたわ。ま、その分お代は弾んでくれたんだけど」
「それで、飾り付けのご要望は？」

「そうね……。お店全体を使って、カウンター席は控え目で、テーブル席を華やかに。あとは天葉ちゃんにお任せするわ」

挨拶もそこそこに、天葉は打ち合わせに入る。無論、詳細は契約前に詰めているので、念のための確認になるのだが。

装飾作業において初めに把握すべきなのは、その部屋の間取りについて。

お店の敷地は15坪。この手のテナントバーは10坪前後の極小物件が多いので、比較的広い方だと言える。

詳細を見ると、カウンター席が八つに、四人掛けのテーブル席が四つ。カウンター席の奥にある調理スペースと、細い通路の先のお手洗い。小ぢんまりとしているが、貸し切りだとするならちよつとしたパーティーぐらいは十分可能だろう。

「じゃあ、肝心のお花を運び込もうか。このビル、エレベーターが広いから助かるよ」

仕事に取り掛かるべく、天葉は樟美を連れて一旦バーを離れる。最悪の場合、階段を使って商品を持ってくる事態もあり得たが、ここではその心配は要らなかつた。

鉢植えに花輪に切り花に。飾りとして用いる花は多岐に渡つた。

それら全てを何回かに分けて店内に持ち込んだところで、天葉たちはとある人物とばつたり出会う。

「……鶴紗たづささん？」

調理場に繋がる扉からひよっこり出てきた金髪の女性に、樟美が意外そうな声を上げた。私服だが、調理場から出てきたということは、店の関係者なのだ。

「ごきげんよう、鶴紗さん。樟美にはまだ言つてなかつたね。彼女、ここで働いているんだ」

「どうも。まあ、昼だけのバイトですけど」

店の主とは正反対に、愛想の乏しい人物。

安藤鶴紗はかつて、一柳隊の一員としてアールヴヘイムと交流があった。と言っても、天葉には鶴紗個人と交流と呼べるほどの付き合いがあったわけではない。鶴紗は元々大勢の人間とつるむようなタイプではなかったのだ。ただ、壺や樟美は同じ動物好きとして、彼女とそこそこ仲が良かった。

「うちは、昼間は軽食を出してるの。鶴紗ちゃんにはコーヒー淹れてもらってるのよ」
ボトル棚を整理していたママが振り返って口を挟んだ。

「鶴紗ちゃんのパーテン姿、女性のお客さんに好評で。正直助かってるわ」
「過大評価ですよ」

「でも前はここ、女性に避けられてた気がするのよねえ。どうしてかしら？」
「店長のせいでしょ」

好対照な二人のやり取りを目の当たりにし、天葉たちは沈黙した。

昔は樟美より少し背が高い程度だった。それが今では天葉と同じかそれ以上に伸びていた。長い金髪もストレートに下ろしており、大人びた印象をより強く抱かせる。そんな鶴紗がワイシャツと黒ベストをきっちり纏おうものなら、人気が出るのも納得だ。

ややあつて、驚きから立ち直ったのか、樟美がおもむろに会話へ交ざる。

「バリスタだね。素敵」

「そんな大層なものじゃないから。料理の方はあんまりだけど、コーヒーなら多少は自

信があるってだけ」

鶴紗の口振りからして、謙遜でなく本当にそう思ってるらしい。

もつとも、専門店ではなくとも他人に出せる腕前なのだから、実際大したものではある。

「それより店長。パーティーに使う食材、準備だけはしておいたから」

「ああ、ありがとねえ。もう上がっちゃっていいわよ」

先程、鶴紗は「昼だけ」と言っていた。つまりバー本来の時間である夜間には勤務しないということだ。

その点について天葉たちが疑問を抱いたと思ったのか、鶴紗が付け足すように言葉を続ける。

「別に、私は夜も出られるんだけど」

「ダメよくダメダメっ。こういう所で女の子が遅くまで働いてたら」

「いつの時代の人ですか」

本人としては本気で鶴紗のことを心配しているのだろう。口調のせいで、そうは見えないのが玉に瑕である。

「鶴紗ちゃんだったら、お金持ちなハーフのお嬢様と同棲してるっていうのに。お仕事頑張っちゃうんだから」

「それとこれとは関係ないです」

「ま、頼り切りになりたくない気持ちには分かるけどね。ウフフ」

癖の強い、強過ぎる職場だが、信頼関係はあるらしい。

しかし初めて訪れた樟美にとつては、まだ解せない部分もあるようだ。

「あの……鶴紗さんはどういう縁で、こちらのお店に？」

「紹介だよ。代行の」

樟美のからの問いに、鶴紗が短く答えた。

百合ヶ丘女学院の元理事長代行。理事長の復帰により代行職を辞し、一理事として活動している今でも、当時の生徒たちは敬意を表して代行と呼び続けている。

「昔ね、咬月こうげつさんにお世話になって。こうして自分の店を持てるようになったのも、そのお陰。鶴紗ちゃんにここで働いてもらってるのは、ほんのちよびつとでも恩を返せたらいいな〜って下心なのよ」

「恩……」

「実際はこちらも助かってるから、『恩返し』なんて胸を張って言えないのよねえ」

そう言つて笑うママの顔には、台詞とは裏腹に、自虐的で後ろ向きな色は見られなかった。

「店長はこう言ってるけど、私は恩に着てるつもり」

「あら、そうう。だったらその恩は、いつかどこかで、他の誰かに渡してあげて」
「代行が店長にしたように？」

「そういうこと。その上で私に感謝してくれるのなら、今度からママって呼んでね」
「分かりました、店長」

「鶴紗ちゃんのいけずう〜」

そんなこんなで、天葉たちはお店の飾り付けに移るのだった。

祝い事で花と言ったら、花輪や花束ブーケが真っ先に思い浮かぶだろう。パーティーを造花で彩るのもよくある話である。

しかしバーを飾り付けるとなると、最初は樟美も緊張した。そのような場所とあまり縁がなかったのが一因である。

それでも、天葉の指示の下で時間内に仕上げることができた。店内で落ち着ける余裕すらあった。伊達にフラワーアレンジメント教室の開講を夢見ているわけではないの

だ。

「ふう……」

仕事を終えた樟美は店内のお手洗いを借りていた。

奥まった箇所、狭い通路の先。お花を摘んで再び廊下に出てくると、ちょうど隣の扉も開くところであった。

隣の扉、即ち男子用WCから現れたのは店の主だった。

身の丈185cmに、丸太の如き二の腕と鋼の如き胸板。改めて見ても大迫力だ。不意に遭遇したら、樟美でなくとも身構えてしまっだろう。

ところがこの時、樟美は威圧感以上に気になることがあった。

「ママさん、男性用を使われるんですか？」

言うまでもなく、お手洗いのことである。

「そりゃあそうよー。確かに私はハートは乙女だけど、それは私自身の問題であって、他の子たちには何の関係もないことだからねえ」

意外そうに見つめる樟美に対し、店長は薄っすら微笑んで答える。

「例えば樟美ちゃんだって、天葉ちゃんと一緒に銭湯で楽しんでる時。殿方のおじさんお兄さんが乱入してきたら、どう思う？」

「嫌、です」

「でしよう?」

「普通に犯罪ですよね」

「そうね。でも世の中には、口実さえあれば何をやつても許されると考えてる人たちが居る」

店長は樟美から視線を外し、心なしか遠い目になる。まるで直接その目で見てきたかのような口振り。いや、恐らくは、実際に見てきたのだろう。

「男であれ女であれ、最低限のラインは守らなきゃ。性別がどうこう以前に、私たちは会社の一員なんだから」

そんな会話を交わしつつ、二人はお手洗いからホールへと移動する。狭い廊下を逆戻りしていく間に、元の気さくな雰囲気の間長へと変わっていた。

そうしてカウンターの内側に立つなり、店長は天葉と取り留めの無い話を始める。

「ところでさあ、天葉ちゃんの所も客商売でしょう? 顔が広いでしょう? ジャニ系のイケメン君知ってたら紹介してよ」

「ええ? うーん、うちは花屋だから、男のお客さんはあまり……。ガテン系のコワモテ君なら三人知ってるけど。……と言うか、ママって見た目に反してミーハーだよな」

「んまあー! あんなお人形さんみたいなお嫁さん貰った天葉ちゃんには言われたくないわ!」

否、当人にとっては取り留めのある話かもしれない。

ともあれ、樟美はそのやり取りを意識から遠ざけ、自分たちで飾った店内を改めて見渡した。

陶器のケースに活けられた花がカウンターを彩っている。こちらは注文通り、控え目に。一方でホールには大きな花輪が設置され、テーブル席に置かれた花瓶と共にパーティー会場を華やかに演出する。壁に張られた紐からは幾つもの花飾りが吊るされ、見る者を祝福してくれることだろう。

「ふふっ」

樟美は一人、静かに笑みを零した。自分と天葉で作り上げたこの空間を誇らしく思っていたのだ。ささやかな自画自賛である。

百合ヶ丘の卒業生である彼女らが、代行に救われたという人物から仕事を受ける。蝶の羽ばたきが巡り巡って、遠いどこかで突風を生み出すかのような不思議な感覚。しかし、人の縁とはこうして受け継がれていくものなのかもしれない。

第24話 世界の行方

起伏の少ない平地の中に黒色のアスファルトがどこまでも伸びている。片側二車線の道路上では車間を取って何台もの車が走り、人の営みが復活したことを証明してみせた。未だトラックなどの営業車が目立つものの、人の息吹が確かに感じられる光景だった。

鎌倉府と東京都を結ぶ一般国道。路面とその近傍こそ整備良好だが、本線から遠く離れた草地には倒木やコンクリートの塊が無造作に転がっている。そんなアンバランスさも、復興途上のこの地の現状を表していると言えた。

国道、東京行き上りの走行車線をグレーの大型乗用車が駆ける。その後部座席に座る老齢の男性がタブレット端末に視線を落としていた。

御年80歳に達しようかという御老体の名は、高松咬月。病床にあつた姉が百合ヶ丘の理事長に復帰したので、代行職を降りて一理事に収まった人物だ。

南極戦没者遺族会活動表

咬月が目を通す端末の画面にはそのような文字が載っていた。

南極は、対ヒューズ戦争初期に決戦が惹起された地。若かりし日の高松姉弟も参加し

た戦場だ。

敵に関する情報も曖昧で、装備も戦術も確立とは程遠い有様で。そんな中、戦果も挙げたが被害もまた多く、肩を並べた仲間を大勢亡くしてしまう。極寒の海に吞まれて回収できなかつた遺体も少なくない。

当時の戦没者遺族の相互扶助活動に、咬月も微力ながら力添えしていた。

(ふむ……。あの子は上手くやれているようじゃの)

咬月はとある遺族へ思いを馳せる。

亡くなった戦友の息子で、昔に勤め先を世話した者。その彼が今や自分の店を独立開業するほどに成長し、人を雇う立場へ。百合ヶ丘の卒業生を一人、従業員として面倒を見てもらっている。

それは咬月にとつて感慨深いことだった。決して、年を取つて情動の抑制が効かなくなつたわけではない。

ふと、手元の端末へ通信が入っていることに気付く。

そのまま通信を繋ぐと、目の前の虚空にホログラフのディスプレイが投射される。映っていたのは、鎌倉の理事会事務所に勤める事務員の男性だった。

「失礼します、高松先生。先生の御令孫を名乗る少年が訪ねてきておりました」
若干困惑した様子の事務員が状況を説明する。

百合ヶ丘女学院は世界的にも有名なガーデンだ。そこで理事長代行を務めていた咬月も名を知られている。取り分けガーデンの外、リリイ以外の人間からしたら、姉以上に有名かもしれない。

そんな咬月であるが故に、何かしらの意図を持って近付こうとする者が存在した。これが初めてのケースではなかったのだ。

「それで、幾ら要求しているのかね？」

「いえ、金銭は望んでおりません。直接は」

「ほう」

「ですが、百合ヶ丘への保護を求めているようで……」

珍しいパターンだった。しかし、これもまた初めてというわけではない。

古来より、やくざ者が身寄りのない子供を利用して悪だくみを企てるのはよくある話である。百合ヶ丘は多大な影響力を持つ一方、政敵も少なくないので、謀略を仕掛ければとても不思議ではなかった。それが巧みか稚拙かは別として。

「鎌倉府警に連絡したまえ」

「はい、承知しました」

咬月は迷うことなく対応を指示した。

本当に保護が必要なただの子供なら、まず最初に対応すべきなのは警察だろう。裏に

反社会的勢力の思惑があるなら、やはり警察の出番である。言うまでもないが、訴えている通り咬月の親族という線は無い。今の今まで孫の存在に気付かないほど、彼はまだ毫碌してはいなかった。

それにしても、どうして姉である理事長ではなく自分のところに話を持ってくるのか。もしや、同じ男である自分の方が理解してくれるとでも思っているのか。だとしたら、浅慮と言わざるを得ない。咬月は溜め息を吐いた。

そんなこんなで通信を終えようとする咬月だが、ホログラフに映っている先が騒がしいことに疑問を抱いた。

「何かトラブルかね？」

「それが、件の少年なのですが。『自分は異界の神の使いだ。この世界を救うために自分を百合ヶ丘の教導官にしろ』と騒ぎ出したのです」

「……バックにいるのは、宗教団体か」

これは府警どころか、公安の案件かもしれない。咬月は軽く目眩を覚えた。それはきつと、年のせいではないはずだ。

咬月を乗せた車は県境を越えて、東京都心にあるビル群に到着した。

訪れたのは、民放テレビ局のスタジオの一つである。高い天井に広々とした空間だが、テーブルも出演者の数も多くはない。どこか閑散とした雰囲気があった。

今、一介の理事となつた咬月が精力的に取り組んでいることは二つある。

一つはコネクションを活かした政界・官界との折衝。そしてもう一つが一般の市井に對する宣伝。

本日咬月がテレビ局にやって来たのは、安全保障政策に関する討論番組に出るため。この機に百合ヶ丘のガーデンとしての姿勢を示そうと考えたのだ。

咬月は番組開始前に改めて討論の場を確認する。そこは長テーブルが三つ、コの字型に配置されたコンパクトな討論場だった。司会進行役として局の人間が二人。肝心の論客は咬月を含めて三人だけである。

人数が少ないなら、少なくとも良い。むしろ、そちらの方が深く突っ込んだ議論になるかもしれない。ただし人選については些か疑問であった。

論客の内、咬月を除いた二人の男女はいずれも50代の野党議員。それぞれ別の党に属しており、主義主張は正反対と言ってもいい。

奇妙なことに、政府与党関係者は出席していない。代わりに咬月が居るのだが、彼の主張も厳密には国とは異なっていた。この人選には咬月も邪推してしまふ。

(極端な主張、センセーショナルな論戦で耳目を集めたいのか。与党の人間よりは、わしの方が話題にはなるな)

悪く言えば、視聴率稼ぎ。

しかし、多くの人に自分たちの考えを知ってもらうのは咬月も望むところである。だからこそ老骨に鞭打って東京までやって来たのだ。

「さて、お集りの皆様、本日はよろしくお願い致します」

番組が始まった。司会の男性が淡々と口上を述べる。人選の基準はともかくとして、番組自体は地に足の付いた性格のものらしい。

「今回皆様に論じて頂くのは今後の安全保障政策、その指針に関して。現在我が国における対ヒュージ戦争は好調に推移しており、新たな段階に入りつつあります。本土奪還後、どこへ、どのように向かうべきか？ 例えば欧州連合におきましては、沿岸防衛に注力しながら大西洋上の島々を解放すべきという海洋派と、劣勢に立たされているアフリカ・中東を救援すべきという大陸派。これら二つが喧々囂々けんけんごうごうの議論を戦わせています。では我が国では一体どのような選択肢があるのでしょうか？ 忌憚なきご意見を
お聞かせください」

司会がまず初めに意見を求めた相手は咬月だった。

椅子の上でも背を曲げることはない咬月。彼は他の出演者を見渡すようにしてからゆっくりと口を開く。

「議論の前に、一つ皆様方に申し上げたい。確かに我が国の状況が好転したのは事実。一時は虫に食われた葉物の如く蹂躪された国土も、その多くを取り返しております。しかしながら、敵はケイブを用いて戦況を一変させることが可能。エリアディフェンスもご承知の通り、万能ではありませぬ。依然として勝ち戦などと呼べる状況ではないことを、お忘れなきよう願います」

咬月は抑揚を抑えた低い声で前置きをした。

幾分か大袈裟な言い方をしたのは、ブラフの意味も込められている。楽観的になられて万が一にも足元をすくわれるより、杞憂でも気を引き締めてもらう方がよっぽどいい。

「それを踏まえた上で、今後我々はどうすべきか。国内及び周辺部のヒュージネストを順番に潰していき、新たなネスト営巣を確実に防がなければなりません。この地球上にある全てのネストが消え去らない限り、敵が勢力を盛り返す可能性は常に存在し続けるのです」

ここで咬月はある種の積極論を展開した。しかし本来、彼は海外への外征については

慎重派だった。若い頃の苦戦の記憶があるせいかな、守備的な方針を支持しがちなのである。

とは言え、守るだけでは終わりが訪れないのは明らか。ならば優勢な内に少しでも敵を削り取るべきだと判断したのだ。

「そのご意見には賛成できません」

真つ先に異を唱えたのは女性議員の方だった。

「それでは戦線が際限なく広がるし、あちこちに派兵しなくてはなりません。ネスト討伐をお題目にして、歯止めが効かなくなるでしょう」

眼光鋭く切り込んでくる。その女性が所属している政党を、咬月はよく知っていた。

ヒュージ出現当初、国内に現れたばかりのスマール級を「ちよつと凶暴な猛獣」だの「自然の怒り」だのと表現したのがその党だった。治安出動した部隊の発砲を激しく咎め、自衛隊の防衛軍再編に最後まで反対したのもそうだ。ラージ級が日本に上陸し、県一つが丸々落ちる事態になると、流石に従来の主張は引つ込めた。最近では、台湾外征を強く糾弾していたのが記憶に新しい。

「無論、身の丈に合わぬ外征が自滅の呼び水となるのは承知しています。攻めに転じて守備範囲を侵されては本末転倒。その匙加減は地域に応じて、各々のガーデンや地方横断風紀委員会が見極めること」

「高松さん、それこそが問題なんです」

「……と仰ると？」

「ガーデンやリリーの判断が徒に戦線を広げていると、そう懸念しているのです」

次に女性議員が何を言い出すか予想がつきながらも、咬月は視線で相手に先を促す。

「先日の台湾派兵が最たるものでしょう。十分な議論が尽くされない内に強行されてしまいました。派兵を決めたリリーたちも、それに煽られた国も、誤った前例を作ったんですよ」

「議論は十分に為されたと認識しておりますが……」

「かねてより、ガーデンの専横には目に余るものがありました。武力を背景にチャームメーカーや地方政府と結託する姿は、まるで軍閥。卒業したリリーをそれらの関係組織に採用させているのは縁故主義に他なりません」

「彼女ら自身の能力によって引き上げられたとは考えられないのですか」

安全保障にまつわる議論の**はずが**、少々おかしな方向に傾き出した。と言つても、ここまではまだ想定**の範囲内ではあるが**。

「この問題で最も危険なのは、リリーが極めて悪質な手法で世論を扇動した点です。リリーがその容姿で、性的魅力セックスアピールで男性の**歓心**を買い、派兵を実現させた。日本のガーデン出身のとある台湾リリーに至つては、雑誌に写真を載せてまで男性に媚びているそうで

はないですか」

この発言には、咬月も目を細める。

「我が校のOBに対する誹謗中傷は看過できません。一体どのような根拠に基づき仰っているのか」

「多くの大衆は欺けても、一部の冷静な市民たちの目を欺くことはできません。こちらの週刊誌に詳細な分析が示されています」

「は？ 週刊誌の記事で糾弾している？」

「そもそも、疑惑を持たれる振る舞いに問題があるのでは？ 否定されるのなら、疑惑を払拭する根拠を提示してください」

咬月は眉間に皺寄せ首を左右に振りたくなるのをどうか押し止めた。

この手の番組は大まかな議論の道筋が決まっているものだが、個々の細かな発言は打ち合わせにはない。やらせでない限り、当たり前なのだが。

「これはまた、とんでもない事実誤認がありますな」

その時だ。今の今まで「我関せず」と涼しい顔で沈黙していた男性議員が口を開いた。

咬月は彼のことを知っている。以前は与党におり、防衛族議員として親軍的な主張を掲げていたはず。それがある時を境に少数野党へ転向し、一転して政府や軍を批判し始めた。変心の切っ掛けとなったであろう出来事も、咬月は把握している。

「……何が事実誤認なのですか？」

「前提からですよ」

ギロリと刺すような視線を向けられるものの、男性議員は飄々とした様子で答える。

「そもそも貴方、ちゃんと調べてないでしょう？ 件のリリイが出てるとかいう雑誌、あ

れは女性誌なんですよ。そりゃあ、男が女性誌を買っちゃあいかんという法律は無いで

すがねえ。それにしたって、わざわざ女性誌だけを選んで出てるのに『男に媚びてる』な

んて言われたら、堪ったもんじゃないでしょ」

人を小馬鹿にしたように、皮肉げに口元を曲げて男性議員が続ける。

「その手の言い掛かりを考慮して、日本の政府も外務省も相手方を日本に呼びつけて実

務協議を続けていた。実際に現地に足を運んで台湾リリイの接待を受けたのは、教導官

やりリイといったガーデン関係者。つまり彼女らが媚びてたとするならば、男ではなく

女に媚びてたというわけですな。はっはっはっ」

全くもって、身も蓋もない言い方。

援護射撃されているはずだが、咬月は複雑な心境で聞いていた。

「そうそう、確かおたくの党は、過去にも『制服のスカートの丈が短い。男へのアピール

か』と色んなガーデンに抗議してましたな」

「実際、おかしい制服のガーデンが多いでしょう」

「女子校なんだから、女へのアピールに決まってるじゃないか。それを、男がどうこうなんて思う男が居るとするなら、まるでデパートのアパレル店員に『この女、俺に気があるな』と妄想する自意識過剰おじさんだ」

ピリピリと焦げ付くような空気の中で、咬月は改めて台本の必要性を実感する。嘘も方便、というわけではない。やらせを肯定しているわけでもない。ただ、何事にもある程度の筋書きという物が欠かせないのだ。

「しかし、ガーデンが危険なことには変わりありません。武力機関たる彼女らの強い独立心は、戦禍を拡大しかねない」

「そのことについても、杞憂と申し上げましょう」

咬月がようやく議論に復帰する。

「あなた方はガーデンの独り歩きを危ぶんでおられるようですが。しかし、如何に有力ガーデンが工廠を備えていると言っても、チャームを作る原材料は降って湧いたりしません。アーセナルは錬金術師などではないのですから。土塊からレアメタルを生み出すはしないのです」

チャームという分かりやすい例を挙げたが、その他の物資に関しても事情は同じ。どんな強豪ガーデンだろうが大企業だろうが、自分たちだけで全てを賄うなど土台不可能である。地方政府と組んだところで、それは変わらない。

補給の担保が無い状態で、一体どうやって独立するのだろうか。

「ガーデンの自主性については、対ヒューズ戦における柔軟な対応と、リリース個々人の尊重のためのものだとご理解頂きたい」

そう締め括ったところで、議論は一旦休憩を挟むことになった。

第25話 希望

ヒュージとの戦いにおいて、従来の軍事常識が通用しない事態は幾らでも見られることだった。ケイブというワームホールが存在が戦線を掻き乱し、大量の大型種が物理法則を無視して飛び回る。マジが尽きたら動きを止めるので補給の概念はあるのだが、その兵站システムはやはり常識では測れない。

だからこそ、ヒュージに抗する側も従来の戦略から転換せねばならなかった。しかしそれを認めさせるのには少なくない労力を費やす必要があった。実際の戦場を知る者に対してなら、話は早い。だがそうでない人間に対して説得する場合、同様にはいかなかった。

その間に払われた犠牲の数々を、戦争の生き証人とも言える咬月が忘れることはないだろう。

「コマーシャルと昨今の戦況を解説するVTRを流した後、スタジオにて討論が再開した。」

議論の口火を切ったのは、先程皮肉げな物言い、女性議員を閉口させた男性議員である。

「高松さん。勝つて兜の緒を締めるその姿勢、私は賛成だ。ただし現状の態勢は見直すべきだとも考えているのです」

テーブルの上で両手を組みながら、男性議員が冷静な調子で話を続ける。

「今現在、配備されているチャームの多くは射撃兵装に大火力を有している。あ、これは通常の小火器に比べてのことですが」

「ヒュージはタフですから。必然的にそうなりますな」

「ごもつとも。しかしですね、もう少し火力を抑えて取り回しの良い、使い勝手の良いチャームも開発・配備すべきではないでしょうか。併せて市街戦や不正規戦の訓練も、より濃密に取り入れたら申し分ない」

最初、咬月は男性議員の意図が読めなかった。だが程なくして一つの可能性に思い当たった。それは最悪の可能性であり、しかしごく一部では実現済みの可能性でもあった。

「……もしか、貴方はリリイを人間同士の戦争に駆り出せと仰るのか？」

咬月の問い掛けに、男性議員が言葉で直接返事をするとはなかった。だが無言で浮かべたしたり顔のような表情が、答えを雄弁に物語っている。

「議員、それはいけません。許されることではない。第一、国際条約違反でしょう」「確かに。けれども他の国全てがそれを守るとは限らない」

リリイを国家間紛争に投入する行為は条約で禁止されている。無論、咬月が反対したのは条約だけが理由ではない。もつと根元的な、道義的な理由によるものである。

しかしながら、咬月がこの男性議員の提案に反対するのは筋の通らない話であった。と言うのも、百合ヶ丘を始めとした幾つかのガーデンは、秘密裏に对人戦を想定した特務レギオンを保有しているのだ。ゲヘナの違法な人体実験からリリイを救うために。確かにゲヘナの主流が穏健派となつて以降、活動の機会は減った。それでも極少数ながら、隠れて実験に及ぶ者は存在する。その手の輩は実験体のヒュージを所有しているケースがあるので、リリイでないと対処が難しい。

そういうわけで、咬月の言行は矛盾している。明らかな矛盾である。

だがたとえ矛盾していても、咬月は男性議員の主張を認めるわけにはいかなかった。世界全体がそういう方向に向かう事態を否定しなければならなかった。必要悪は、どこまでいっても必要悪でしかないのだから。

「議員はリリイの戦力を見誤っておられるようだ。彼女らの真価が発揮されるのは対

ヒュージ戦闘のみ。彼女らは機甲部隊や航空部隊を代替し得ない。通常の軍隊において彼女らが果たせる役割は、精銳の軽歩兵が精々といったところでしょう」

「高松さん。これからの時代、国家間の全面戦争などそうそう起きませんよ。起きるとするならば、少数部隊での局地戦やゲリラ戦ぐらい。それこそリライたちの得意とする分野なのでは？」

男性議員は自論を曲げない。その様は確信を持っているように見えた。

「我々が学生である彼女らを矢面に立たせているのはヒュージという存在があつてのこと。その前提を忘れてはならない」

「切っ掛けは、確かにヒュージでしょう。だが今となつてはヒュージのことを考えているだけでは済まなくなつた。現に、リライたちは強大な力を持つに至つてしまつた。そうなつた以上、力の扱いを見直さなければならぬ」

「見直した結果が、戦争への投入だと仰るのか」

「高松さん、貴方が何を危惧されているかは察しがつきます。くだらない利権や見栄のためにリライが利用されるのではないか、そう危ぶんでおられる」

「然り」

「私としては、直接国の下につけず、今まで通りガーデンやガーデン間の連合組織に任せ、て良いと考えています。むしろ、彼女たちの権限を今よりも強くすべきだ」

迷わず言い切る男性議員に対し、咬月は一瞬だけ言葉が詰まった。

咬月は改めて彼の来歴を思い出す。かつては安保政策に明るい防衛族として与党に属し、そこから一転、小數野党に加わつて国を批判する立場へ。批判の内容は大抵の場合、防衛省の重い腰や四角四面な対応を糾弾するものだった。

咬月は彼が転向した理由を知っている。そしてその理由こそが、彼を真の意味での力の信奉者へと変えたのだろう。

「随分と国に、いや、軍や防衛省に不信を抱いておられるようだ」

「当然です。高松さんだつて同じはずだ。50年前から戦つてきた貴方なら」

それまで平静に見えた男性議員の顔に、感情という火がチラつき始める。

「未知の敵を前に手をこまねくのは分かる。手探りで進まざるを得ないのも分かる。仕方ないことだと、他人事のように考えていた。昔は」

それは怒りか悲哀か懺悔か、どれが根本にあるのか他人である咬月には判断できない。しかしその重さを察することはできた。

「だが、やり様はあつた。ガーデンやリリーの運用を間違えなければ。口先だけは達者な大人の『ガキの会議で決まるのが気に入らない』などという、尻を拭く紙よりも薄っぺらいプライドのせいで、出さなくてもいい被害がどれだけ出たことか……っ！」

今でこそ臨機応変な対応が認められているリリーだが、昔からそうだったわけではな

い。昔は国定守備範囲から出るだけでも一苦勞だった。リリイに対して疑心暗鬼が残っていた時代のことだ。そのために咬月たちは苦しめられてきた。

しかしその上で、咬月は口を挟む。

「議員は、戦禍の中でご家族を亡くされたそうですな。以降、与党から野に下つて現在に至る」

「……今、私自身の話は関係ないでしょう」

「失礼。ですが一つ言わせて頂きたい。リリイもリリイの力も、意趣返しのための道具ではないのです。無論、国防とは相手のあるもの。あらゆる事態を想定して議論すべきでしょう。しかしそれを差し引いても、貴方は少々性急過ぎる」

リリイを戦地に送る側である自分を棚に上げて、よくも殊勝なことが言えたものだ。そんな内心での自嘲をおくびにも出さず、咬月は年のせいじゃがれた声を上げる。

「高松さん、貴方はリリイ第一世代として黎明期を戦い抜いて、晩年は後進の育成のため身を粉にしている。称賛されるべきことだ」

「……………」

「二人の人間として、貴方を尊敬します」

それは、恐らくは本心なのだろう。年の功がある咬月でも、政治家という生き物を完全に推し量るのは難しい。しかし部分的になら、理解することは不可能な話ではなかつ

た。

「だが納得できん！ 今貴方が仰っているのは理想論の綺麗事に過ぎない！ 幾ら取り繕おうとも、力は力だ！」

悲鳴にも似た訴えに対し、咬月がすかさず反論する。

「たとえ理想論でも、たとえ綺麗事でも。我々大人が範とならねば、子供たちは一体何を見て歩んでいけば良いのか。後の世代に示せるビジョンが鉄と血の世界だけというのは、あまりに無情ではありませぬか」

それは自戒の言葉であった。

自戒の念がなくなれば、理想論は理想にすらならないだろう。

番組が終わり、カメラはその機能を止めていた。

スタジオの出演者たちはそれぞれ席から立ち上がる。

「高松さん、本日はありがとうございます」

「いいえ、こちらこそ」

「また機会がありましたら、よろしく願います」

「その時はお手柔らかに頼みますぞ」

女性議員が礼儀正しく挨拶してくる。

番組が終わればこんなものだ。政治の世界もテレビの世界も。それ以前に、そもそも討論とは論破合戦でも口喧嘩でもないのだが。

「私もこれで失礼します、高松さん。ご一緒できて良かった」

「このような老体でよろしければ、また付き合いますよ」

男性議員とも別れの言葉を交わし、咬月はスタジオのただっ広い空間をあとにする。

これから幾つか東京各所で所用を済ませ、翌日の朝に鎌倉へ帰ることになっていた。

メディアや市井への宣伝は重要ではあるが、本来は理事の仕事ではない。理事としての仕事は鎌倉で待っている。

(新講義の開設と新教員の招聘についての承認会議か……。あ奴め、またどこぞで口説き落としてきたな)

咬月は理事長である姉の所業を思い、一人苦々しく眉を顰める。

軍事分野以外に関する講義の強化。それは良い。リリイたちの将来を考えれば、教育機関として正しい姿勢だ。

ガーデンを卒業した元リリーの教員を採用する。それも良い。生徒にとっても教師にとっても、互いのためになるだろう。

問題は、理事長自らスカウトしてきた点である。

（年寄りには年寄らしく、必要が無い限りは裏方に徹するべきじゃろう。何が『若い娘に囲まれていると若返った気分』じゃ。年を考えてくれ、恥ずかしい。見てくれだけは無駄に良いから、余計にタチが悪い）

理事長は強化リリーだ。80歳手前の咬月の姉だが、訳あって若い頃の容姿を保ち続けている。

理事長を慕い、あるいは崇拜するリリーや教職員は少なくない。何かあれば諫めるのは自分の役目だと咬月は思っていた。

（あ奴が、せめて引退するまでは、わしも死んでも死に切れぬ。全く困ったものじゃ）
手に持った杖でコツコツと床を叩きながら、局内の廊下を歩き去っていく。

翌朝、往路と同じ国道をグレーの乗用車が走る。

窓から見えるのは、遠方の草地に集積された倒木やコンクリート片。来た時と変わらない景色が広がっていた。相違点を挙げるとするならば、昨日よりも道路の交通量が多いことぐらいだろう。

咬月は後部座席のシートに深く腰を沈め、目蓋を落としている。一晩寝た程度では疲れが落ちないのは仕方のないことだった。

「先生、この先の故障車両で渋滞しているようなので、経路を変更します」

運転席からそんな言葉が聞こえてきた。咬月が短く「うむ」とだけ了承を返す。

自分より20ほど年下のこの運転手とも長い付き合いになる。時間的にはまだ余裕があるので急ぐ必要はないのだが、咬月は彼に任せることにした。

メインの国道を外れて支路へと移る。道幅が細く、少しばかり路面が荒れているが、通行に大した支障はなかった。

帰るべき鎌倉の街まであと少し。遠目に人家がぼつぼつと見えてくる。

「左手をご覧ください」

ふと、運転手からそんなことを言われ、咬月はゆっくりと首を曲げた。

背の低い草原が広がる開けた土地。そこに鮮やかな黄色い花卉が列を成している。それは花畑と呼ぶには些かコンパクトだが、走行中の車内からでも目を引かれるのに十

分だった。

「ほう、珍しい。冬向日葵か」

咬月は感嘆の声を上げた。

ビニールハウスでもない限り、向日葵は夏に咲くものである。寒さに弱く、日照量を必要とするためだ。

ただし品種改良された冬咲きの向日葵も存在する。今、目の前に見えている物が、そうなのだろう。

真夏に咲く向日葵と比べたら、流石に花は小さく背も低い。それでも頭上の太陽に向かって真つすぐ茎を伸ばしている。太陽花と呼ぶに相応しい光景と言えよう。

「百合ヶ丘の卒業生の方々が植えられたそうですよ」

「そうか」

卒業生で、花と聞いて、思い当たる節はある。雑誌に載ったほどの有名人なのだから、ガーデンを出た後も覚えられていて当然だ。

「花か」

車窓から風に揺れる黄色を見つめながら、反芻するように言葉を漏らす。

鉄と血以外の世界を少しは見せられたらどうか——

そんな希望を一時は抱くものの、咬月はすぐに思い直す。

見せられた、とするのは傲慢だろう。彼女らは自分の意志で未来を見据え、実現させたのだ。多少はガーデンの力があつたとはいえ、本人の意志が無ければまず間違いなく成し得なかつた。意志無き力に意味は無い。

ガーデンが、咬月たちがしてきたことは幾ばくかの後押しと言つたところか。それでも無意味だとは思わないし、今後も止めるつもり毛頭無い。

「やはり、まだ死ねぬなあ。死ぬまでは死ねぬ」

閉め切られた車内で発されたその台詞には、希望の音色が含まれていた。

第26話 贈り物

天葉が夕食の洗い物を終えて戻ってきた時、リビングはやけに静かだった。それもそのはず。樟美はソファの端っこにちよことんと座り、黙々と読書に耽っていたからだ。

時折ページを捲る音だけが聞こえてくる中で、騒がしくしないよう、天葉はゆつくりとソファの反対側へ腰を下ろす。樟美の手元に視線を向けると、彼女の読んでいる本が漫画雑誌であることが分かった。月刊リリィプリンセスという女性向け雑誌。主に恋愛・日常ものを扱っている。樟美が特に好むのは日常系の漫画であった。

白くてモコモコなニットセーターに身を包む樟美。セーターはロング丈なので、彼女の小さな体は上半身がすっぽりと完全に収まっていた。ついでに言えば、袖も手首まで隠れている。

そんな姿でじっと雑誌を見つめる様は愛らしい。そんな樟美を横目で眺めつつ、天葉は少し前に依奈と交わっていたメールのやり取りを思い出す。

『樟美へのプレゼント、迷ってるんだけど』

『樟美といったら、動物ね』

『でも、動物を飼うのは難しいかも。世話の面で』

『大丈夫よソラ。私にいい考えがあるわ』

『付け耳と付け尻尾で、ウマ女です♪とかは却下で』

『えー？ 絶対可愛いのに』

『樟美は動物に、そういうのは求めてないのよね』

『そういうの（オブラート）』

『漫画は無難過ぎるし。何かあつと驚くサプライズがいいなあ』

天葉は悩んでいた。パートナーへの贈り物に。

無難でありきたりな物は避けたいという思いから、何を贈ろうか決めかねていたのだ。

相手の好みとサプライズという点では、何かしらのペットがベストなのは間違いない。だが依奈に説明した通り、それは少々難しい。共働きであるため動物の世話は負担になるだろう。せつかくのマイホームが勿体ない話ではあるが、飼う以上は中途半端にしたいくない。

天葉が黙りこくって考え込んでいると、不意に、樟美の手の中にあつた雑誌がテーブルの上に置かれた。それから樟美がすぐ隣まで寄ってきて、天葉の頭を撫で始めた。無言で見つめ続けていたものだから「構って欲しがってる」と思われたのだろう。

悩みはちつとも解決してないが、せつかくなので天葉は構ってもらうことにした。体

を傾け、自分のほったたを樟美のほったたにくつつける。そのまま樟美にもたれかかり、ゆっくり少しずつ力を抜いていくと、二人揃ってソファの上で真横に倒れ込んだ。「も、もう！ 天葉姉様！」

「構って〜」

結局、天葉は悩んだ末、サプライズについては諦めた。それは直前まで隠し通すことを諦めたというだけであり、樟美を喜ばせる点に関しては十分だった。

それから数日後。

定休日の早朝に天葉は自宅の玄関から外へ出る。陽は未だ昇り切っておらず、住宅街は薄闇に包まれてひっそりと静まり返っていた。

天葉も後に続いて出てきた樟美も、ブラウンのお揃いの——無論サイズは違うが——コートを羽織って防寒対策としている。夏は暑く冬は寒い、関東地方の過酷な環境。何年も住んでいる地元民だとしても、慣れることは難しいだろう。

「寒いねえ」

楽しそうにそう言いながら、天葉は手袋を外した右手で樟美の頬を何度も撫でる。冷たさとくすぐったさで身を振りつつも、樟美は顔を綻ばせた。

「今日は、ありがとうございます」

「どういたしまして。実は私も結構、て言うか、かなり楽しみにしてたんだ」

「私も姉様に、何かしてあげたいです。物だけじゃなくて」

「そっか、物以外で……」

提案を受け、天葉は顎へ手を当て考え込む。しかしすぐさまにつこりと深い笑みを浮かべた。

「それじゃあ今日から、行ってきますのキスは樟美からしてもらおうかな」

「っ!?!」

飛び出てきた言葉に樟美は驚き目を見開く。

店に出勤する度に毎回してきたことではある。だが樟美の方から、それも人目につく可能性がある玄関外ですするというのは、彼女にとって相当勇気の要る行為なのだ。

「ううっ……」

樟美は低く唸った後、キョロキョロと辺りを見渡してから、もう一度低く唸り声を漏らす。

やがて天葉と目を合わせ、何かを決意したように口を開いた。

「お、おはようとお休みの時なら、私からしますっ」

「いいよ！ お願いなねー」

即答。待つてましたと言わんばかり。

天葉も別に周りへ見せつけたいわけではないので、してもらう場所は重要ではない。重要なのは樟美からしてもらおうという点なのだ。

「よーし、そろそろ行こっか。ん——」

「——んっ……はい」

取り決めに従い、今までと同じく天葉から行ってきますのキスをして、二人は自宅の門扉をくぐり抜ける。

もつとも、二人とも同じ場所へ一緒に向かうのだから、行ってきますも何もないのだが。しかしそれはいつものことであり、気にするような者もこの場には居なかった。

お店に寄って花に水やりしてから、天葉たちは駅へと赴いた。

朝早くから鎌倉の街を発ち、途中で電車を乗り換えて、相模線を走る。相模原市の中でも鎌倉寄りの駅で降り、目的地まで少しばかり徒歩で進む。

そこそこ大きな駅の近くだというのに、前方には緑が広がっていた。その緑が広がる空間こそ、天葉たちが目指す場所である。

そこは動物園だった。ヒュージの侵攻以来、営業停止状態に追い込まれていたが、近年になって無事復活を遂げた相模原の代表的な動物園だ。

木々の緑に沿って歩いていくと、入場口であるゲートが見つかった。料金を払ってゲートをくぐり、いよいよ園内へと足を踏み入れる。その先には、区画分けされ整然とした草原や何棟かの建物と、それらの間に伸びる並木道が見えた。

「元々は動物と触れ合える自然公園だったらしいね。入場自体は無料だったとか。それを、ヒュージを追い出した後、規模を大きくして本格的に動物園にして。それが見事に

ヒットした」

天葉が軽く調べたこの施設の来歴を語る。

今のご時世、この手の話は珍しくない。商業施設の復興は、それだけ人々の暮らしが豊かになった証だろう。

動物目当ての天葉が動物園を選ぶのは必然。だが、それだけではない。他にもっと具体的な、決め手になった要素がある。

園内を道なりに歩く内、頑丈な木の柵に囲まれた草原の前までやって来た。柵の内側の光景を、樟美が食い入るように見つめている。

「馬……」

「馬だね」

「はい……」

長い首を下ろして水飲み場の水を飲み、筆の毛みたいなフサフサの尻尾を左右に揺らす。

紛れもなく馬だった。幼少期の樟美が故郷で毎日見ていたであろう光景だった。

馬と言っても、その体は小振りで脚や首もそこまで長くない。ポニーと呼ばれるタイプの馬である。

それでも馬であることに変わりはなく、腰よりも高い柵のすぐ外で、樟美が目輝

かせていた。

ステイック人参のパックを購入し、二人は柵の内側へ。人に慣れているためか、ポニーたちに驚いた様子は見られない。

すぐ傍でポニーと触れ合える。それがこの動物園最大の売り。リニューアル以前から引き継がれたコンセプトであった。

天葉に見守られる中、樟美が一頭のポニーへ近付いていく。その子はちょうど、木板で作られた水飲み場から離れたところだった。背後から近寄って後ろ足に蹴られるような真似はしない。斜め前から静かに距離を縮め、右手を伸ばしてステイック人参を口元へ差し出す。

ややあつて、大きな鼻息と軽い嘶きの後、咀嚼音が響いた。樟美の手からポニーの口へと人参が移ったのだ。

「私の祖父の頃は、まだどうにかやつていけたんですよ。でもヒュージの影響で閉園せざるを得なくなつて。動物たちも、運べる子は東北や北海道の施設に疎開させたんです」

一方、天葉は係員のお姉さんと話をしていた。

「ヒュージに直接襲われたりしなかつたんですか？」

「うちは大丈夫でした。ただ、最寄りの駅が砲撃の流れ弾を受けて……。今の駅は建て

替えたものなんです。新しかったでしょう？」

「ああ、そう言えば」

天葉と同じ年ぐらいであろうお姉さんは、昔から家族でこの辺りに住んでいたそう
だ。

鎌倉府5大ガーデンの一角、相模女子高等学館の守備範囲だけあって、居住区への被害は軽微だったらしい。人が無事なら、建物はいつか立て直せるし、商売も再開できるかもしれない。この動物園を運営する者たちはそれを実現させたのだ。

「本当はもつと早く再開したかったんですけど。もう一度動物たちを集め直すのに、思ったよりも手間取っちゃって」

「生き物はナイーブだから、仕方ないですよ。うちは仕事で花を扱ってるけど、気を遣うことが多くて」

元々話好きなのか、たまたま天葉と気が合ったのか、係員のお姉さんは色々と教えてくれた。曰く、目玉であるポニーたちを手に入れるのに一番苦労した。北海道の牧場から纏まった数を呼び寄せて、ようやくこの触れ合いコーナーを復活させることができた。

小振りとは言え、やはり馬。輸送の問題などは花よりもずっと難しいに違いない。

「ふふっ、ふふふっ。くすぐりたい」

楽しいな声が聞こえてきたため、天葉は樟美の方に目を向け直す。

ポニーが面長の横顔を樟美の頬に擦り付ける。白銀色の長い髪が乱れるが、彼女は構わずポニーの顔を慈しむように撫で続けていた。

「そろそろ乗馬体験、してみませんか？」

顔を綻ばせた係員からの提案。樟美は一も二もなく首を縦に振る。そのためにもカートではなくジーンズを履いたパンツスタイルで来たのだから。

「鞍の真ん中に手を置いて、ゆっくりでいいので背中を跨いでくださいねー。……あら、お上手」

指示するまでもない樟美の鮮やかな手際に、係員は目を丸くした。木製の簡易な踏み台からポニーの鞍と鐙へ乗り移る。一連の動作を、樟美は日頃の習慣と見紛うようにやってのけたのだ。

一見するとお淑やかで大人しく、運動神経が良いようには見えない。そんな樟美だから、リリイとしての彼女を知らない人から驚かれるのも当然だろう。

隣で手綱を持って先導する係員に続き、乗客を乗せたポニーが歩き出した。

鞍の上の樟美は背筋をピンと伸ばす。すると踵、お尻、背中、頭と綺麗な一直線ができる。これにより重心の取れた安全な乗馬が可能となっていた。

一步一步、蹄鉄が大地を踏み締める軽快な音が響く。その歩みは緩慢で、競走馬や軍

馬などとは比べるべくもない。だがそれでも、騎手の表情を見れば彼女が十二分に満足していることが分かる。

「よかったね、樟美」

「はい。天葉姉様も……」

「んー、私はいいかな。見てるだけで。樟美は目一杯楽しんでよ」

少しだけ考えてから、天葉はこのまま樟美の乗馬姿を長め続けることにした。

見ているだけでも実際楽しい。それは本心の一つである。しかし天葉にはもう一つ別の思いがあった。この場では全く表に出さなかったが。

それは園内にある小さなレストランで遅めの昼食を取ろうとした時のこと。

窓際のテーブルに着こうと近付いていったところ、天葉の目に知り合いの食事風景が映る。

「天葉お姉さん、樟美お姉さん」

相手もこちらに気が付いた。ロングの薄紫——まるで桃色と黒色の合いの子みたいな薄紫の髪を持つ女の子が、隣のテーブルから天葉たちを覗き込む。

結梨と、その向かいの席にもう一人。色素の薄い、くせつ毛の女の子。結梨の外見年齢と同程度の歳だろうか。彼女が結梨の話に出てくる藍という子であった。

「結梨さんたちも、やつぱりポニーが目当て?」

「うん。お昼食べてから、もう一回行くの」

この動物園は樟美も体験したようにポニーの乗馬が目玉である。だが逆に、それ以外に関しては力の入れ方が弱いのも事実。他にヤギやヒツジやウサギなどを飼っているが、規模は決して大きくない。これはリニユール以前から続く傾向のようだ。

「私はウサギが一番可愛いと思うな」

平皿の上のオムライスをスプーンでつつきながら、藍がそんなことを漏らす。

ちなみに結梨の方はカレーライスを注文していた。

「ウサギは朝の最初に見たでしょ。あとでもう一度行くから」

「はい」

どうやら結梨はポニー派で、藍がウサギ派らしい。しかしいずれにせよ、別々に行動する選択肢は無さそうだ。仲が良いのは良いことである。

「お姉さんたちもデート?」

「そうだよ」

藍の問い掛けに、天葉が即答した。

「結婚しても、こういう場所でデートするんだ」

「勿論するよ。仕事があるから、いつでももってわけにはいかないけど」

「ふーん。結婚って、人生の墓場じゃないの？」

「間違つてはないよ。お墓まで一緒って意味だから」

藍相手に自論を披露する。傍らの樟美が満足そうに口元を緩めたのは、天葉の気のせいではないだろう。

すっかり話し込んでしまったが、天葉と樟美は結梨たちのテーブル近くの席に座る。

「お腹減っちゃった。何かお勧めのメニューがあったら、私と樟美にも教えて欲しいな」

「カレーがいいよ！ 今、からーい辛口に嵌まつてて」

「えーっ？ カレーは断然、家で食べる方が美味しいよ。だからオムライスにしよう。

ほら、玉子トロトロ」

スプーン片手に力説する結梨と藍。食の好み、あるいは考え方にも相違あるらしい。

これだけ違う二人だが、上手くやっていけている。違うからこそ上手くいく点もあるのかもしれない。自分たちも、傍から見たら同じように映っているのだろうか。ぼんやりとそんな風に思う天葉であった。

夕刻。目一杯遊んで鎌倉の街に帰ってきた時、辺りはすっかり薄闇に覆われていた。途中、夕食に並べるため出来合いのおかずを買ってきた。あとするべきことは、ご飯を炊くぐらいのものか。冷蔵庫を覗いてみたら、一品か二品、簡単なおかずを用意できるかもしれない。樟美なら何かしら作ってくれるはず。

玄関の中、コートを畳んだ樟美を背中から、すっぽりと包むように天葉が抱き留めた。すると樟美は首だけ振り返って瞬きする。

「天葉姉様……」

「やっぱり、うちで動物は飼えないかもね」

「え？」

「だって、今日、ポニーに樟美を独占されちゃったから」

そう言うところ樟美は天葉の気持ちに気付いたのか、視線を伏せて彷徨させた。が、すぐに頬を膨らませて抗議の意思を示す。

「姉様だって、係員のお姉さんと楽しそうでした」

「そうだったっけ？ ふふふ」

樟美は膨れっ面のまま廊下を進んでキッチンに向かおうとする。ところがいつまで経っても前に進まない。天葉の両腕がガツチリと抱えているのだから当然だ。

「お夕飯、準備するんです！」

「もうちよつと」

「ダメ、です！」

玄関前で押し合い圧し合い。

最終的に、空腹によって天葉の腹の音が響くまで、この攻防は続くことになった。

第27話 昔語り

「はい！ というわけで、今晚のおかずを求めてスーパーにやつてきましたー」

「どういうわけよ」

両手をパンと叩いて元気よく宣言したのは月詩。ほぼほぼノータイムで突っ込んだのは弥宙であった。

鎌倉市街中央区、とある大型スーパーの一角にて。夕飯の食材を買いに来た月詩と樟美に引つ張られる形で、弥宙と辰姫まで店内に足を踏み入れる羽目になっていた。

またもや鎌倉に出張してきた技術者二人が巻き込まれたのは、ただの偶然ではない。彼女らが外食を予定していると知り、樟美と月詩が共謀してここまで連れてきたのである。

「辰姫ちゃん、体に良いもの食べないと」

「魚は体に良いわよ。頭にも良いし」

「魚以外も、ね」

「うえ〜」

左腕に買い物カゴを提げている樟美が、同じくカゴを手に持つ隣の辰姫へ指摘する。

今回の件、主導したのは樟美の方である。まともに自炊する気が見られない二人に対し、遂に強硬策へと及んだのだ。月詩は半ば面白がって同行しているのだろう。

「買い物はいいけどさ。何を作るのよ？」

「今日はシチューを作るよ。材料とレシピ、教えてあげるから。弥宙ちゃんたちも、家でちゃんと作ってね」

続いて樟美は弥宙に釘を刺す。と言つても、材料さえ買つてしまえば何かしら作らざるを得ない。腐らせたら勿体ないし、邪魔になるからだ。

「人が一杯……酔つてきた」

眼前に広がる食料品売り場の光景を見て、人混み嫌いの辰姫がげんなりとする。夕刻のタイムセール直前だけに、その混雑ぶりは推して知るべし。

「鳥のもも肉、じゃがいも、人参、玉葱、ブロッコリー。あと、勿論クリームシチューのルーも。辰姫ちゃんの所、サラダ油は置いてる？ 無ければそれも買つて行ってね」

旧友の悲痛なる訴えも、何のその。樟美は調達すべき物をすらすらと挙げていく。

弥宙と辰姫が出張中に泊まるホテルはキッチン付きのホテルであった。大方、二人の上司である麻嶺の差し金だろう。これで「作る場所が無い」などという言い訳は使えない。

そうして四人は樟美を先頭にして、過密地帯へと乗り込んでいく。そこは家庭を預か

る者にとつて、戦場にも等しき空間だ。現に今も、陳列棚の一角に大人数が殺到しつつある。

「くすみん、くすみーん！ どこお!?!」

「月詩ちゃん、こつち……」

早速、前途多難であつた。

人の津波に揉まれ攫われ、ようやくの思いでレシピに記された品々を手に入れた。

一行は売り場から離れると、店内隅っこにある休憩スペースの長椅子に腰を下ろす。今すぐ帰る必要は無いし、何よりも先程の買い物で疲労困憊の人間が居たからだ。

途中、同じように食材の調達に来ていた壺と合流して五人になつた彼女らは、買い物袋を脇に置いてお喋りに興じ始めた。

「こんな感じで、すぐ横の壁にドンつて手をついて——」

「あかねえがそんなことするわけないでしょ」

「それで耳元で『月詩、私のモノになりなさい』って。キヤーっ！」

「記憶を自己改変してる……」

過去に思いを馳せ盛り上がる月詩と、それを訝しむ弥宙。

ちなみに月詩の右肩には、精も根も尽き果てた様子の辰姫がグダつと寄り掛かっていた。人混みの真っ只中に放り込まれた結果である。

「それじゃあ、そう言う弥宙ちゃんと辰姫ちゃんはどくなのさ？ どっちが告白して付き合いましたの？」

「……別にいいじゃない。そんな昔のこと」

「だってー！ 結局、今まで教えてくれなかったじゃん。付き合う切っ掛けとか」

月詩の言うことはもつともだと、やや距離を置いて聞いていた樟美も思う。百合ヶ丘時代、実際の事実を聞かされただけで、そこに至る経緯に関してはぼかされていたからだ。元々近しい友人同士だったこともあり、当時は深く詮索しなかった。弥宙と辰姫。何となくそういう関係に発展したとしても、疑問を抱くメンバーはアールヴヘイムに居なかった。

だがそれはそれ、これはこれ。一度話題に上がると気になってしまう。

「それ、私も知りたいかも」

「壱っちゃんまでっ」

弥宙にとって予想外だったのか。委員長の壺まで同調したのは。口元を歪ませた弥宙は今にも「ぐぬぬ」と唸り出しそうであった。

一方、ついさつきまでグロッキーだった辰姫が急に月詩の肩から離れて背筋を伸ばす。顔色も幾分か良くなった気がする。

「皆そんなに知りたいの？ いいわ、辰姫が教えてあげる」

「ちよつと辰姫！」

「滅るものじゃないし、いいじゃない。弥宙の可愛いところを知ってもらおうのよ」

「……あなたの勘違いが、はつきりするだけよ」

結局は、弥宙も渋々ながら了承する。こんなやり取りを見せられたら、余計に子細が気になるというものだ。

そんな相方の反応は対照的に、辰姫は喜び勇んで口を開く。

「あれはね……ほら、百合ヶ丘に滅茶苦茶強い特型ギガントが攻めてきたことがあったでしょ？ あの時に壊れた皆のチャームを直してる時——」

数十人のリリイによるノインヴェルト戦術。その前代未聞な連携攻撃により、対マジ結界やノインヴェルト模倣といった規格外のヒュージを討つことができた。

しかし代償として、マギスフィアのパス回しに参加したチャームのほとんどが大きな損傷を受けてしまう。百合ヶ丘女学院工機科は総力を挙げて損傷機の修理に努めた。それこそ寝る間も惜しむ勢いで。

「んんんんんっ——」

工機科、とある工房内にて。赤く眩い光が金属の作業台を照らす。チャームのフレームに当たる金属を溶接している最中だった。

長い管で繋がれたレーザー射出機を右手に保持しながら、辰姫はくぐもつた唸り声を上げた。それは誰にも聞かれることはない。単に工房に他人が居ないだけでなく、溶接面によって口元を含む顔全体を覆っていたからだ。

「はあ……」

射出機のレーザーを切り、顔から溶接面を取り外して、辰姫は大きく息を吐き出した。溶接の完了したそのチャーム——アステリオンは依然として小さな傷が見られたものの、機能に支障を来さないまでには修理されていた。

普段は自分のチャームばかり弄っている辰姫だが、流星に今回はそんなことを言える

状況ではない。何せ数十機を超えるチャームが一度に使用不可となったのだ。学院存亡の危機である。

とは言え、幾ら事情があつても疲れるものは疲れる。これで少なくとも丸二日はベッドと縁が無い。椅子の上で少々うたた寝したぐらいだろう。

今は昼なのか、夜なのか。ここに籠っていると、そういった感覚さえ麻痺してくる。

「辰姫―」

機械式の扉が開閉し、辰姫と同じ工廠科制服を身に纏う小さな少女が現れた。彼女は返事も待たず無遠慮に中へ入ってくる。眠たげな釣り目には辰姫同様にくまができていた。

「弥宙―」

「ほら、購買行ってきたわよ」

丸椅子に深く腰掛けボーッと呆ける辰姫へ、弥宙の手が白い物体を差し出してくる。よく見ると、それは透明なビニールに包まれていた。更によく見ると、それは三角形をしたパン切れであつた。

明瞭としない頭のまま、辰姫はそれを受け取つて頬張る。辛うじて、ビニールの包みを取り外すことは忘れなかつた。

「……エビサンドが良かった」

「我が儘言うんじゃない」

辰姫がサンドイッチの中身に不平を漏らす。ハムとレタスとトマトと玉子しか入っていないから。

とは言え、具に塗り込まれていたマヨネーズの塩気が刺激になったのか、少しずつ思考がはつきりし始めた。

「今、お昼？」

「そうよ」

「弥宙だけ？ 百由様、終わったたら手伝ってくれるんじゃないの？」

「百由様なら、ミリねじとインチねじが混ざって発狂してたわ」

「うわあ……」

そんな会話を交わす中、弥宙は別の丸椅子を引っ張ってきて辰姫のように座り込む。

彼女の右手には紙パック。ストローを通っている黒い液体はコーヒーだろう。

「辰姫も喉が渴いた」

「あつ、しまった。もう一本買うの忘れちゃった」

「あーっ！」

「悪かったわよ」

「あゝあゝあゝあゝあゝ」

「分かった、分かったから！」

魂の奥底から叫ぶ辰姫。弥宙は幾分か逡巡した後、紙パックを辰姫の口元に向けて突き出した。

不意に伸びてきたストローを、辰姫はほとんど反射的にくわえ込む。そのままチュウとコーヒートを吸い上げる様は、さながら乳飲み子のようなだった。母親よりも図体のでかい乳飲み子だ。

「コーヒート、ブラックなのに甘い。弥宙ったら、餡でも舐めてたのかしら」

自身の舌の感覚から、想像する。想像している内に、辰姫の頭は熱を帯びてきた。チャームの弄り過ぎでオーバーヒートしたんだと、脳内で素っ頓狂な自己分析をする。

「あんたね、どうしてサンドイッチで口の周り汚すのよ」

コーヒートの後にサンドイッチの残りを頬張っていると、弥宙から口元を指差された。

「んー、どこだろう」

「そこ、マヨネーズ。ちよつと待ちなさい……ハンカチは、無い。あーつ、もうっ」

拭く物が見当たらない。業を煮やした弥宙は椅子から身を乗り出し、辰姫の顔に接近する。細く小さいながら、まめが潰れて硬くなった弥宙の指が、頬つぺたと唇の中間辺りをサツと拭う。

拭われた微量のマヨネーズは、辰姫の目の前で弥宙の口内へと消えていった。口の隙

間から頭を出した赤い舌が、人差指の先端から舐め取ったのだ。それは時間にする瞬間の光景だった。にもかかわらず、辰姫はその瞬間を見逃さなかった。

普段の弥宙なら絶対に見せないであろう行儀の悪さ。彼女は彼女で、疲労が思考を妨げているに違いない。

とつくに口元から離された弥宙の指先を、辰姫は暫く見つめ続けていた。

「もうちよつとなんだから。さっさと終わらせて、ゆつくり寝るわよ」

先に食事を終えていた弥宙はそう言うと、もう一つの作業机に向かう。弥宙も当然自分の工房を持っているのだが、一人で黙々と作業していると睡魔に負けてしまうので、こうして一つの空間で取り組んでいた。

前回の戦いで破損した分だけ直していれば良いわけではない。それ以外のチャームを維持するためのメンテナンスや予備機の調整等、やるべきことは他にもある。故に工廠科のアーセナル総出でも逼迫しているのだ。

とは言え、いずれ終わりは訪れる。あれから数時間、気を紛らわせるための無駄話を挟みながら、二人は遂に割り当て分のチャームを直し切った。

「終わった」

見事にハモる感慨の台詞。

色々と湧き上がる感情もあるし、色々とやりたいことも思い浮かぶ。

しかし真つ先に辰姫が選んだのは、机に突つ伏して意識を手放すことだった。不幸中の幸いか、工具類を隅に寄せるだけの分別は健在だった。

このような非常時の場合、受けるべき講義については便宜が図られる。後に日を改めて講義を開いたり、あるいは成果を以つて受講を免除したり。リリイやアーセナルにとって、当たり前前の配慮である。

そういうわけで、辰姫たちも遠慮なく休息が取れた。もつとも、遠慮しようと思つても、とてみできるような状態ではなかったが。

目を覚ました時、辰姫がまず初めに感じたのは顔と頭に伝わる心地好さ。次いで、現状に対する疑問。硬い机の上で眠りに就いたはずなのに。

「全く、寝坊助ね」

呆れたような、それでいて優しげな声が頭上から降ってきた。ここで辰姫はようやく状況を理解する。工房の端にある仮眠用のソファへ横になり、弥宙の膝を枕にしていることに気付いたのだ。

寝惚けて自分の足で移動したのか、もしくは弥宙に引き摺られていったのか、それは定かではない。しかし今、贅沢極まりないベッドの上に居ることは確かであった。

小柄で痩せ型の弥宙も、太腿は鍛えられており肉付きが良い。こんなことを本人に言うとうと烈火の如く怒るだろうが、柔らかで程よく弾力があり、離れることを躊躇わせてく

る。

それでも辰姫は誘惑を振り払い、一旦起き上がろうと決めた。

「ふあくあ……」

「これ以上、よだれ垂らさないでよ。拭くの大変だったんだから」

いつも通りの軽口。だがいつもよりずっと穏やかに思えた。薄らと湛えた微笑は他のどのリリイよりも美しく見えた。

辰姫はこんな弥宙を以前にも見たことがある。それは辰姫が強化リリイの副作用に苦しんでいた頃、ベッドの上で度々呻き声を上げていた頃。足繁く部屋に通っていた弥宙はベッド脇で辰姫の話し相手になってくれたり、手を握ってくれたりした。今の弥宙はちようどその時の彼女みたいだ。

「ちよつと、まだ寝る気？」

上体を起こした後もボーっとしてしていると、弥宙が辰姫の顔を覗き込んできた。左の頬に手を添えられて、ぱつちりと大きな釣り目が文字通り目と鼻の先まで近付いてくる。

未だ覚醒し切っていない、ぼんやりとした思考のまま、辰姫の頭は急速に熱を高めていく。その結果、彼女は蜜を前にした蝶のように、薄い桃色の唇に吸い込まれた。

チユ

直後、弥宙は目をパチパチと瞬かせ、口を半開きにした。辰姫もまた、自分自身の行

為に目を丸くして驚いた。

「えっ、えっ？ な、何で……!?!」

「何でだろ……」

弥宙の問いに、すぐには答えられない。

「でも柔らかくて、温かくて、気持ち良かった」

その心地よさの確認も兼ねて、辰姫は再び顔を近付けようとする。

ところが、密着していた体を両手で精一杯押され、距離を離されてしまう。

「待つて待つて!」

慌てふためく弥宙の顔を、辰姫はキョトンとして見つめる。まるでお預けを食らった

犬のようだ。

「どうして?」

「どうして……」

「辰姫はまたしたいわ」

「っ! 私たち、別に付き合ってもないのに。その……するのは、良くないわよ」

真つ直ぐ正面から相手を見据える辰姫と違い、弥宙は微妙に視線を逸らしていた。

「つまり、弥宙は辰姫と付き合いたいからね!」

「は!? 何でそうなるのよ! あんたが、そういうことしたいって言うから、付き合う付

き合わないって話になるんじゃない」

「でも、弥宙もしたいでしょ?」

「……知らない」

「それなら、ちよつとだけして確かめてみましょう。嫌だったらすぐに止めていいからね?」

端から見ると、無理筋な提案。辰姫本人は根拠なき自信を湛えているが、普通に考えれば難しいことは分かるだろう。

しかしながら、弥宙の反応は辰姫にとって悪くないものだった。

「好きにすれば」

素っ気なくそう言われた。素っ気ないが、了承には変わらない。

辰姫はこの時、欲に駆られて理性をかなぐり捨てる真似はしなかった。彼女の頭にかつてルームメイトから聞かされた言葉が過っていた。彼女の頭に、

『いいこと?』辰姫。女の子と付き合う時は、相手が本当に嫌がっているのか、そうでないのか、慎重に見極めないといけないわ。それから、貴方は体が大きい方だし力も強いんだから、小柄な子と触れ合うならデリケートにね。ちよつとチャームのコアを扱うみたいにするといいわ』

当時は意味がよく分からなかったため、話半分に流した。だが今なら少しは理解でき

る。ほとんど直感的なものではあるが。

ともかく、辰姫は助言に従い慎重に行く。ソファに座り込んだまま、弥宙の体を抱き上げ自身の膝の上に跨らせる。すると身長差のある二人の顔が、ちようどよく見つめ合う位置にきた。

その体勢のまま、辰姫は顔を前に突き出す。お互いの唇の先端が軽く触れる。ふにっとした感触を覚えた直後、また顔を下げて距離を取る。

本当に先っほの先っほだけが接しただけ。これでは辰姫も満足できなかつた。最初の内は。

ところが何度か繰り返している内に、これはこれでいいものだど気付く。こそばゆく焦れたい感覚が口元から広がって、辰姫の熱情を煽ってくるのだ。火元にふいごで空気を送り込むかの如く。

先程からジツと固まって黙している弥宙も、辰姫と同じ気持ちなのだろうか。

「弥宙、どう？ 気持ち良い？」

「……よく分らない」

「えー、仕方ないわねえ」

相変わらずの仏頂面。にもかかわらず、辰姫は自信を確信へと変えていた。

(この反応、弥宙は辰姫のことが好きなのね。素直じゃないんだから)

口角が自然と持ち上がり、内心の感情が笑みとなつて滲み出る。

もう少しだけ押しを強くしようと、辰姫は弥宙の顔を両手で挟み込むよう包む。

「目ぐらいい、閉じなさいよ」

弥宙はムスツとした様子で注文こそ付けてくるものの、抵抗はしてこない。なので要求通りに目を閉じて、辰姫が再び顔を寄せる。

「またも軽く触れるだけのキス。しかし今度はすぐに離れない。唇同士を密着させたまま、動きを止める。」

「積極姿勢の辰姫だが、実の所、経験も何も無い出たとこ勝負であつた。彼女のルームメイトは知識こそ授けてくれたものの、決して実践で教えたりはしなかつたのだ。故に辰姫が攻める匙加減は、ほとんど直感によつて決められていた。」

10秒、20秒、30秒と過ぎていく。

「やがて弥宙の方から勢いよく唇を引き剥がした。直後に荒げた息が小刻みに吐き出される。」

「はっ、はっ、はあっ」

「鼻で息すればいいのに。鼻息が掛かっちゃうの、恥ずかしいのね。弥宙つて照れ屋なんだから」

「うっさいー！」

「それで、どうかしら。気持ち良かったでしょ」

そう尋ねると、やはりと言うか、弥宙は辰姫から視線をずらす。

「別に……」

「じゃあドキドキしたでしょ。絶対してるはずだよ」

不意打ち気味に、辰姫の右手が弥宙の胸元に伸びた。工服制服の上から弥宙のお淑やかな膨らみを、円を描くように撫でて探っていく。鼓動の位置は程なくして判明した。激しい振動が指まで伝わってきたからだ。

自身の主張を証明した辰姫。だが彼女は胸元から手を離そうとしない。

「んっ……ふうっ……」

辰姫の長くしなやかな指に胸を攻められる度、きつく締められたはずの弥宙の口からぐぐもった声が漏れた。両目も同じくギュッと閉じている。両手は辰姫の制服へしがみつくように強く掴んでいる。

必死に我慢する姿をもつと見ていたい。辰姫はそう思った。

「あつ、直したチャーム、持って行かないきゃ」

「あんたが寝てる間に、持ってたわよ」

「そっか。それなら、まだまだゆっくりできるわね」

「胸はっ、駄目だってばあ」

「じゃあまたキスしましょー！」

何度目かの口づけ。しかし先程の言葉とは裏腹に、口づけの最中にも辰姫は宇宙の胸を撫で続ける。それどころか、スカートから伸びる太腿へ、もう片方の手を伸ばす始末。

「こんな小さな胸触って、何が楽しいのよ」

「大丈夫、そのうち大きくなるわ」

「なるか！」

時折口論を交えながら、二人だけの時間が過ぎていく。

工房に来客が訪れるまで、今しばらく時間があつた。

「ねえ、続きは!?」 辰姫ちゃん、続きは!?

盛り上がった月詩が傍らの辰姫を揺さぶって昔話の続きを強請る。

しかし当の本人は語り終えて満足したらしく、得意げに胸を張るばかりであつた。

「えっ、結局どつちが先に告白したことになるのよ?」

壱が疑問を呈する。

「弥宙よー」

「辰姫でしようが！」

互いに「相手が先だ」と譲らない。今の話を聞いたただけだと微妙なところである。

だが樟美には、一つだけ断言できることがあった。

「どっちでも良いんじゃない？ すっごく仲良いのは分かったし」

「それもそうね」

壱も同意する。これにて過去の詮索は終了となるのだった。

「でも、普段弥宙がリードしているように見えるのは、人前だからなのね」

「うん。辰姫ちゃん、人見知りだから。でも二人きりだと、凄いい」

尚も言い合っている二人を横目に、壱と樟美は感心しながらその関係性を分析する。

何だかんだ言って、彼女らも親友の惚れた腫れたには興味があるのだ。

「弥宙ってば、昔から涼しい顔して本当は辰姫のこと大好きなの、知ってるんだから」

「とんだ勘違いよ。『あばたもえくぼ』ってやつ」

「素直じゃないなあ」

「あんたのは素直と言うより、単純なの。あと思い込みが激しい」

付き合う前でも、付き合ってからでも、弥宙と辰姫の噛み合っているのか噛み合って

ないのか分からない掛け合いは健在である。

この状態の二人に進んで話し掛けようとする者はそうそう居ない。今は例外的に一人だけ声を上げているようだが。

「ねえねえ、続きー！ つづづききーい！」

第28話 思い出の花

アマノ店内の一角にて、天葉は店に訪れた一人の女性と対面していた。

現在、平日のお昼前で客足は少ないが、歴とした営業時間である。

ところが、その女性に花を購入しようという素振りは見られない。代わりに手帳とペンを握り締め、天葉の言葉を一言一句も聞き逃すまいと真剣な面持ちで耳を傾けている。

「——ていうわけで、それが初めて樟美にプレゼントした花なんだよ」

「成る程、成る程。カキツバタ。花言葉は『幸せの到来』ですか。当時の樟美さんを励ます意味が込められていたんですね」

「私としては、励ますと言うよりも、癒したいと思つてたかな。どつちも似たようなことかもしれないけど」

「あつ、いいいえ！ その違いは重要です！ 訂正しないと……」

些かオーバー気味なりアクシヨン。明るい茶髪を後ろで三つ編みに纏めた、幼さの残る小柄な女性。彼女はアマノとその店主の天葉に取材を申し込んだ新聞記者だった。

手元で一生懸命ペンを走らせる小さな記者に、天葉は温かい視線を送る。

カウンターでは樟美が店番をしているが、今のところ暇なので取材のやり取りを眺めていた。時折、無言のまま頬を赤らめていたのは、気恥ずかしい昔話を耳にしたせいだろう。

天葉は記者へ受け答えしながらも、横目で樟美の様子をチラチラと窺っていた。趣味が悪いと言われるかもしれない。だが樟美の可愛らしさの前では、体裁も勝てないというものだ。

「ふう……。ありがとうございます、天葉様。質問は以上です」

「どういたしまして。素敵な記事を期待してるよ」

メモを取り終えた女性記者——ふたがわふみ二川二水が大きく一礼した。そんな彼女に、百合ヶ丘のOBとして先輩に当たる天葉は朗らかに笑い掛ける。

雑誌に出演経験のある天葉からすると、取材はこれが初めてではない。また二水にしても、学生時代から新聞を発行してきたこともあり、リリイへの取材は慣れたものである。そういうわけで、花屋でのインタビューは滞りなく終了した。

「流石に一面とはいきませんし、スペースも小さいですけど。でも、見る人に興味を持って頂ける記事にします！」

取材の最中にも感じたが、二水は新聞というものに並々ならぬ拘りがあるようだ。学生時代はともかく、大人になってもそれを持続できるのは尊敬に値するだろう。

しかしそのような場面の中、天葉は二水の異変を察知する。

「本当、お疲れ様。無理はしないでね。何だか疲れてるように見えるから」

「あはは、お恥ずかしい。実は来週から海外出張で、その準備もあるんですよ」

「それは、まだ新人なのに凄いいじゃない!」

二水は照れ臭そうな、それでいて若干困惑したような笑みを浮かべる。

実際、短大を出て入社したばかりだというのに、大抜擢だ。本人でさえ戸惑う程に。

その海外行の直前に別の取材に取り組んでいるのだから、彼女のバイタリテイも大したものである。だからこそその抜擢なのかもしれない。

「ちなみに、これがさっき言ったカキツバタの花ね。春から夏にかけてが旬だから、写真しかないけど」

「へえ、こうして見ると、やっぱり派手な花ではないですね。逆にそこが良いのでしょうか」

天葉は携帯の画面に映る紫の花を見せる。花卉はそこまで大きくはなく、色合いもどちらかと言うと地味な方だろう。二水の言った通り、派手さや華やかさは無い。

同じカキツバタでも園芸用に品種改良を重ねたものには、もう少し鮮やかな種もある。だが天葉は敢えて、こちらの地味なものを当時の落ち込んでいた樟美に贈ったのだ。

「そうそう、それからこの話の続き。カキツバタを贈ったその日、特別寮の部屋で——」

「ねっ、姉様！」

「ウソウソ、冗談だよ」

慌てる樟美の咎める声が飛んできた。

「うーっ……非常に非常に興味深いお話ですが、もう時間が無いので、お暇します。残念です……」

後ろ髪を引かれるような顔をして、小さな新聞記者は去っていく。

某全国紙に『リリーのその後』というテーマの記事が掲載されるのは、それから少し経つてのことだった。

後日のアマノ。

「あらまあ！ 鎌倉の街にこんな素敵な場所があつたのねえ」

「街の郊外だから、中々見かける機会が無いんですけどね」

店内で、天葉のタブレット端末の光景を見たお客が目を見張る。そこには開けた草原と向日葵畑が映し出されていた。

「そうなの。私の体だとそこまで行くのは難しいから、残念ねえ」

「お婆ちゃん……。ごめんさい、写真しなくて」

「いいえ。こうして眺めているだけで、とつても楽しいわ」

お客は、杖をついた高齢の女性だ。元々小柄な上に、背を丸めているので尚更小さく見える。樟美と同じぐらいの背丈だろうか。言も動も穏やかで品の良い老婦人である。

店の中で和やかに話していることから分かるように、彼女は常連のお客であった。比較的近くに住んでおり、時々来店しては何かしらの花を買ってくれる。

「冬は確かに他の季節より寂しいけど。でも、ハウス栽培に頼らなくても結構な花が見られるでしょう?」

「本当ねえ。家に籠っているだけだと気付けないわ。ありがとう、店員さん」

そう笑い掛けると、老婦人はタブレットから目を離して店内の陳列棚を鑑賞し始めた。

この馴染みのお客に対し、天葉は懸念を抱いていた。体調についても心配なのだが、それだけでなく、彼女が足繁く花屋に通っている理由が気掛かりなのだ。

（何かの花を探しているのは間違いない。前に聞いた時は笑顔で誤魔化されたけど。一体、何の花なんだろう？）

天葉は首を傾げる。アマノは決して大きな店ではない。全ての花が手に入るわけでもない。しかし、どんな花なのか分かれれば取り寄せることが可能ではなからうか？

そんな風に考え事をしていたところ、天葉はもう一人の客の存在を思い出す。目の前で声を掛けられては、嫌でも思い出すというものだ。

「店員さん。店員さん？」

「ああ、亜羅椰。ごめんごめん」

「さっきから話し掛けてるのに。客を放置なんて酷いですわ」

「客っていうなら何か買ってよね。あ、樟美は売ってないから」

カウンター越しに湿った視線を送ってくる桃色髪を、軽くあしらう天葉。

その視線というのも、本人からしたら他意は無いのだろう。それでも湿度たつぷりに感じられてしまうのは、どうにも避け難い事象と言える。

「お悩み事ですか？」

「うーん、私じゃないんだけど……いや、私になるのかな？」

「はつきりしませんわねえ」

「花屋としてまだまだだなんて思ったんだよ」

亜羅椰に対してとぼけても、あまり意味が無いのは天葉もよく知っている。この後輩、一見奔放なようであり、他人のことをよく見ているのだ。それは色恋沙汰に限った話ではない。

「私も花については素人ですが。そこまで手に入れ難い花というものが存在するのですか？」

「それは、そうだよ。昔より物流が良くなったのは事実だけど。それでも日本だと珍しい種もあるし。ヒュージに占領されて生態系が変わった地域もあるだろうからね」

「でしたら、おいおい見つかるでしょう。その種自体が消え去っていない限りは」

亜羅椰の言葉に、天葉は「まさか」と危惧を抱く。常連の老婦人が幾ら探しても見つけれない理由。その可能性の一つを恐れる。

「またもや考え事をしている天葉の耳に、樟美の声が飛び込んできた。

「あの、お婆ちゃん。お婆ちゃん？」

不安げな声。それは天葉を呼ぶものではなく、件の人物を指すものだった。

「お婆ちゃん！」

不安が、焦燥と悲痛な叫びに変わる。

天葉は一も二もなく駆けつける。

その場で蹲って目を閉じた老婦人の背を、樟美がゆつくりとさすっている。

「どうしましょう、天葉姉様……」

「救急車を呼ばないと。でもその前に、奥に運んだ方がいいね」

売り場である店頭から、事務室かバックヤードへと移すべきだろう。そう判断した天葉だが、実行するのを躊躇ってしまう。背負って運ぶにしても、この状態で背中に掴まってもらうのは酷かもしれない。

天葉が立ち止まって考え込んだのは、実際にはごく短時間のことだった。しかしその僅かな時間の内に、後からやって来た亜羅椰が天葉より前に出てくる。

「天葉様はお店があるのでしょ？ 私にお任せください」

そう言うのと亜羅椰は涼しい顔して老婦人を抱き抱えた。背中と両膝の裏を支える形で。そのまま店の奥に向かって歩き出すので、樟美も後ろからついて行く。

「ごめんなさいねえ、お嬢さん。お手数お掛けします」

「フフフ、お気になさらず。羽よりも軽いですわ、お婆様。お食事はしっかりと取ってくださいな」

結局、老婦人に大事だいじはなく、病院から自宅に移って静養することになった。

後日、店の定休日に天葉と樟美はお見舞いしようの家を出る。

常連さんは、割とご近所さんでもあった。徒歩で10分も歩かぬ内に、目的の日本家屋が見えてくる。

門扉に掲げられた木の表札には、行書体で書かれた『間宮』という文字。それが老婦人の姓であった。

「この度は、家内が大変ご迷惑をお掛けしました」

天葉たちを出迎えたのは老婦人のご主人だ。奥さんとは対照的に背が高い。更に高齡にもかかわらずピンと伸びた背筋のため、余計に大きく見える。物にたとえるのは失礼だが、柱時計を思わせる人物だった。

畳の客間。目の前の机の上には日本茶。

若輩にも礼儀を欠かさない品のある老紳士に対し、天葉は踏み込んだ質問を決意する。

「お加減は如何ですか？」

「何か大病を患っているというわけではないのです。ただ、如何せん歳が歳ですので

……」

「そうですか……。奥様には、ご鼻屑にして貰っています。有り難いことに。ですが、体の不調を押してまでうちに通われているのは、何か事情があるのですか？」

問われた相手は少しの間だけ目を閉じた後、ぽつぽつと語り出す。

「家内が探しているのは恐らく、かつて私が彼女に贈った花でしょう。私たちがまだ子供だった頃、初めて贈った花です」

「その花というのは？」

「捨小蒜です」

花の名を聞いた瞬間、天葉は「見つからないわけだ」と得心がいった。

捨小蒜^{ステゴビル}——ヒガンバナ科のネギ亜科。

かつては関東地方の河川沿いに群生していた野花だが、土地開発の影響によって絶滅危惧種に指定されて久しい。対ヒュージ戦争による戦禍も相まって、今ではすっかり見かけなくなった希少植物だ。

「姉様、ステゴビルって……」

「私も実物を見たことはないね。昔の東京や鎌倉には保護区が設定されてたらしいけど」

「どんなお花なんですか？」

「細い茎から、小さい、本当に小さくて白い花を咲かせるんだ。注意して見ないと気付か

ないぐらいに」

天葉は以前、写真で目にしたステゴビルの姿を思い浮かべた。

「仰る通りです。見た目はただの小さな野花。本当なら贈り物にするような花ではありません。しかし幼かった私たちの目には、それは大層美しい花に映ったのです」

「奥様がどうして私たちに黙っていたのか、分かりました。希少種だから、こちらに負担を掛けまいと気を遣われていたんですね」

事情を知れて、天葉は胸のつかえが一つ取れたような気がした。

だが、あくまで一つだけ。この問題をどう解決しようかという、一番重要な課題が残っている。

もつとも、今この場で天葉がジタバタしても、好転するものは何もない。取りあえず今日のところは、寝室で休んでいる老婦人をお見舞いして帰ることにした。

「間宮のお婆ちゃんの具合、思ったよりも悪くなさそうで良かったよ」

帰り道。民家の立ち並ぶ住宅街を二人が歩いている。

天葉と、天葉の斜め後ろに付く樟美。樟美の方は手に持った携帯の画面を見つめながらの帰路である。

「それにしても、子供の頃の思い出を、何十年も過ぎた今になっても探しているなんて」
言われた直後は天葉もいまいちピンとこなかった。遠大な話であり、想像がつかなかったのだ。

けれども、己のこととして考えたらどうだろうか。

「例えば、毎年決まった日に一輪ずつカキツバタを贈るっていうのはどうかな？ それなら何十年経っても忘れないし、希少種になりそうだったら自分で育てればいいし」

何の気なしに提案する。天葉にとって、何十年先でも隣に樟美がいることは、全く疑いようのない確定事項も同然だった。

ところが、先程から当人の反応が鈍い。

「……樟美？」

「うーん……」

「樟美」

「んー……」

「チュツ」

「ひゃあ!？」

「歩きながら携帯見ちゃ駄目じゃない」

横から頬に口づけされて、樟美は飛び上がらんばかりに体を震わせる。

その後、頬を膨らませて抗議してくるかと思いきや、樟美は携帯の画面を天葉に見せてきた。そこには白い花卉の小さな花が咲いている。

「あの、私これ、見たことある気がします」

「えっ、ステゴビルを? どこで?」

「えっと、前に姉様と一緒に登った丘の麓で。小さな池の近くだったと、思います」

天葉は記憶の糸を手繰り寄せる。

鎌倉市街より南。以前に樟美と共にハイキングへ赴いた小高い丘陵地帯。住民が退去し半ば打ち捨てられたその場所は、草木が思い思いに繁茂する地となっていた。

「樟美、その池の大体の場所は分かる?」

「多分、分かります」

樟美が頷いたのを見て、天葉は次の休日の予定を決めるのだった。

再度訪れた間宮邸の客間で、天葉はタブレット端末を開いていた。テーブルの前に正座する老婦人と傍らに寄り添う老紳士が、タブレットの画面を静かに見つめている。

タブレットが流す動画は時間にして1分ほど。その間、老夫婦の様子は本当に穏やかなものだった。逆に天葉と樟美の方が何か喋りかけるところであった。

「確かに、確かにこの花よ。間違いないわ」

やがて、老婦人がおもむろに口を開いた。その口振りは感極まってという感じではなく、やはり穏やかな印象を受ける。彼女のご主人も黙って頷いた。

「取り引きが制限されている希少植物なので、実物は取ってこれませんでした。だけど環境省の地方事務局に連絡を入れたので、保護されて数を増やして、その内——」

「いいのよ」

天葉の言葉を、老婦人は優しく遮る。

「私が貴方のお花屋さんにお邪魔したのは、未練を誤魔化すためなの。もう一度目に見えるなんて思ってたわ。だから、まだどこかであの花が咲いていると知れただけで、十分なのよ」

「お婆ちゃん……」

「それだけで、私たちの思い出は色づくから。だから、本当にありがとう」

元々丸まり気味だった背を更に丸め、老婦人は頭を下げる。

「わざわざ野山を探して下さったのでしよう。たとえ見つからなかったとしても、そのご厚意自体があの日^ごの思い出を明瞭にしてくれるというものです」

続いてご主人にも感謝されると、流石の天葉も照れ臭くなってきた。結局実物は得られなかったので、力になれた気があまりしなかったのだ。

では、自分たちに当てはめてみたらどうか？

この老夫婦のように、いつまでも色褪せない思い出にできるだろうか？

その点に関して、天葉は全く躊躇うことなく首を縦に振ることができた。

第29話 新人記者 二川二水 ①

二川二水は新聞記者である。

百合ヶ丘女学院卒業後、短大を出て、某新聞社に入社した。

しかし本来、彼女が志望していたのはリリイ専門雑誌の出版社。試しに受けてみた大手新聞社から内定が出たところ、家族による熱心な説得を経て、最終的に入社を決めたのだ。

大手の新聞社ならリリイ関連の取材も多いだろう。専門誌に拘る必要も無いのではないか。それに運が良ければ海外のリリイと関わるチャンスもあるかもしれない。

そんな風に気楽に考えつつ、二水は東京での勤務をこなしていた。時折リリイを扱った記事を書かせてくれたので、実際悪いものではなかった。

故に新たな辞令は彼女にとって、全く寝耳に水のことだった。

東京都心部、某大手新聞本社ビル。

「へえ!?! わ、私が欧州出張ですかあ〜?!」

国際部の広いオフィスに、何とも間の抜けた調子の声が響く。声の主は、子供みtainな低身長と幼さの残る顔立ちをした女性記者だ。大きな瞳でパチパチと瞬きしている点から分かる通り、彼女、二川二水は本当に驚いていた。

「ワハハ! 大抜擢だぞ、二川君!」

背が低く——流石に二水よりは高いが——小太りの、眼鏡を掛けた中年の人物が二水の両肩をバンバンと叩く。ピンクのスーツにピンクのスラックスという出で立ちだが、歴とした国際部部长である。ベリーショートとも言うべき短髪にこのような言葉遣いだが、歴とした女性である。

「ですが部長! 私みたいな新人が、いきなり海外で取材だなんて……」

「そうかい? 君のフィジカル、メンタル、知識に対する貪欲さ、そして何よりも好奇心。私は買っているんだがね」

賛辞を浴びても、納得のいかない二水。その様子を見ていた部長が話を続ける。

「今回の件、リリースオタクとして、元リリースとしての観点から取材に臨んで欲しいんだ

よ」

「一体、何の取材なんです?」

「ここでようやく二水は肝心の案件について尋ねた。」

「シルテ沖海戦。二川君も知っているだろう」

「はい……。痛ましい事件でした。北アフリカから欧州へ向かう避難民の船団が、ベンガジ湾ネストを出撃したラージ級ヒュージに襲われて、五千人を超える死者が出てしまったという」

「先週の話だから、当然現地支局が第一報を報じている。だがその後、北アフリカで活動中の我が社の特派員が負傷してしまった。二川君には欧州域内で取材を続行してもらいたい」

成る程、ヒュージ絡みならば元リリーの二水は適任だ。それに加えて、人手不足という事情もあるのかもしれない。色々と話題に事欠かない欧州向けに、記者は幾ら居ても足りないというものだろう。

「それで、どなたと向かうんでしょうか」

「いや、出張するのは君だけだ」

「はい? 私、だけえ!?!」

「欧州各支局にサポートさせる手筈だ。心配要らない」

「ええええええ……」

「来週までに準備を済ませて、それから日本を発つてくれ。では頼んだぞ、二川君！」

翌週、予定通り二水は単身欧州へ飛んだ。まず空の便で半日ほどかけてイタリア、ローマ支局に渡る。そこで現地スタッフからレクチャーを受け、それから海路でシチリア島に移動する手筈である。

日本での準備期間の間、そしてローマ支局において、二水は改めて今回の事件についておさらいした。

北アフリカ、リビアのシルテ湾沖にて生起したシルテ沖海戦。劣悪な環境下にあるアフリカ地域の避難民を欧州に受け入れるという人道上の作戦の結果、ヒュージに補足されて大損害を被った戦いである。4隻の貨客船に詰め込まれていた避難民の大半は地中海に散ってしまった。言うまでもなく、作戦は取り繕う余地の無い大失敗である。

欧州連合内で今回の作戦を主導したのはドイツだが、実際に船団の護衛に当たったのはイタリア・スペイン両海軍だった。今、二水が目指しているシチリアで、そのイタリ

ア海軍を取材する予定である。アポはローマ支局が既に取っていた。

客船による船旅は快適なものだった。ここシチリア以北は人類の勢力範囲に帰しており、到着時刻が30分ばかり遅れた点を除くと、トラブルも何も無かった。

(12月なのに、暖かい。流石は地中海性気候)

イタリア半島のすぐ南、シチリア島に降り立った二水の最初の感想がそれだった。日本と同様、南北に長いイタリアは寒暖差が顕著であり、南部では冬でも10℃を越える日が珍しくない。二水はローマでは手放せなかったセーターを、この場所では仕舞っていた。

そんなシチリアで初めに訪れたのは海軍の基地ではなかった。取材の前にやるべきことがある。そのために二水はシチリア島最南端の地に足を運んだ。

途中、軍の要塞を横目に見る。南の海を睨むその威容は、遠方の二水に対しても小さくない存在感を示していた。

「遠隔操作式の無人砲塔と無人銃架を土囊や掩体壕で囲った警戒陣地。多角形の防壁に守られた主力陣地。典型的な対ヒュージ要塞だ」

分析が自然と口をついて出た。

要塞は海岸沿いにハリネズミの如く設けられた機関銃や砲台と、やや内陸に位置し、壁に囲まれた司令部・兵舎・物資倉庫等から成る本丸で構成されていた。戦略的要地で

しばしば見られる大規模複合型の要塞である。

この要塞の存在は、シチリア以南が依然として混沌とした状況にある事実を物語っていた。

とは言え、ここは今回の取材対象からは外れている。撮影なども許可なしにはできない。二水は立ち止まることなく目的地へ進む。

やがて、いよいよ島の際までやって来た。青く澄んだ地中海を臨む、シチリアの南端。切り立った岸壁の手前に、小さな石碑が一つ佇んでいる。件の海戦を悼む慰霊碑だ。

慰霊碑とその周りに供えられた献花を除くと、何も無い場所だった。ヒュージさえやって来なければ、砲声も轟かない静かな空間だった。

慰霊碑の前、冬の地中海に吹く湿った風を浴びながら、二水は目を閉じて祈りを捧げる。黙祷など、リリイ時代に何度も経験してきた。しかしどれだけ繰り返しても、中々慣れたりしないもの。

「……………ふう」

これより、本当に二水の取材がスタートする。

イタリア王立海軍シラクサ基地。シチリア島の東に位置する最前線の軍港だ。しかしその割には、港湾に駐留する艦隊の陣容が寂しい。戦闘艦艇の呼べるものは2隻のフリゲートと4隻の哨戒艦ぐらいだろう。残りは軒並み支援艦艇ばかりである。

二水が招かれた応接室は、コンクリート造りの頑健な建物の中にあつた。昔は趣あるレンガ建築だったが、戦闘で呆気なく失われたとか。

「ようこそ、日本の記者さん。本土からのクルージングは快適だったでしょう?」

「はい。取材をお受け頂きありがとうございます。既に弊社の特派員にお話されてるとは思いますが、改めてよろしく願います」

広報を担当する女性士官が、湿気た空気を吹き飛ばさんばかりの笑顔で出迎えてくれた。英語ならば二水でも不安なくやり取りできる。

「シルテ沖海戦、でしたね」

「そうです。海戦の要因と経緯について、お聞かせください」

実際に取材内容へ話が進むと、女性士官も流石に表情を引き締めた。

二水は二水で、身を硬くして相手の言葉に備える。ペンや手帳を握る両手にも力が入ってくる。

「言い訳がましいようですが、初めから困難な作戦でした。避難民で溢れ返った貨客船を守りつつ、地中海の中央部を北上するというのは。ベンガジからラージ級ヒュージが先回りしていたのは不運としか言いようがありません。ですが、あの戦闘結果は必然なのです」

それを聞いた二水は内心驚いていた。作戦自体を批判する物言いだったから。

無論、女性士官個人の考えではないはずだし、海軍独自の主張でもないだろう。これはイタリヤ政府としての見解なのだ。即ち、避難計画を主導したドイツに対するイタリヤの態度を表している。

二水も事前の調査でイタリヤ側の主張は把握していた。が、実際に面と向かって話を聞くと、改めて驚いてしまう。

「記者さんは、ヒュージ勢力圏内における海上輸送戦の定石はご存じですね？」

「はい、勿論です。高速輸送船を用いた独航か、あるいは少数船団での輸送が理想でしょう。狭い船上では戦闘能力が制限されるので、リリイは港湾部での守備に就きます。船舶というものは、入港と出港の瞬間が最も無防備と言いますし」

基本的に、リリイが船団に直接乗り込んで護衛するケースは無かった。そもそも運航の度にリリイを乗せられるほど余裕は無い。そうするぐらいならば陸上拠点の防衛に回すだろう。

もつとも、二水と彼女の仲間たちは現役時代、佐世保沖にて艦上での戦闘経験があった。しかしそれは、特定の敵を撃滅するという明確な目標があつての話。目標を倒せばあとは撤退すれば良い。海上護衛とは任務の性質が大きく違うのだ。

「記者さんの仰る通り。海上護衛においては、機動力の高いスモール級やミドル級は艦船の防御火器で撃退し、通常兵器の効かないギガント級は優速を以つて振り切る。護衛側にとつて最も脅威なのは、通常兵器が通じない上、ギガント級より数が多くて足も速いラージ級ヒュージなのです」

「確か、ベンガジ湾周辺に複数のラージ級が遊弋しているのは前々から知られていましたよね？ そんな状況下で、作戦を実行したのですか……」

「欧州連合内でも、我が軍でも、当初は賛否両論でした。けれども、人道を守るための作戦と言われて最後まで反対できる者は、そうは居ません」

その結果、人道の代わりに多数の人命が失われてしまった。あまりに大きな代償だ。「それで、実際に敵と接触した際には、どのように対応したのでしょうか？」

「ラージ級を振り切れないと知った艦隊司令部は、輸送船団をバラバラに退避させました。これはこれで危険な行為ですが、船団を組んだまま戦闘に巻き込まれるよりは生存性が高がる」との判断によるものです」

「鈍足で脆弱な貨客船が密集しては、ヒュージのレーザー射撃で一網打尽にされか

ねませんからねえ」

「ただ、結果的に輸送船団は全て追い縋るラーズ級によつて沈められました。敵は初めからの大きい貨客船を狙っていたと、我々は分析しています」

無理もないことだと、二水は思う。ラーズ級以上のヒューズはマジによる防御結界で通常兵器を無効化してしまうのだ。大質量をぶつければ気を逸らす程度は可能だが、足の遅い貨客船を逃がすのは至難の業であろう。そうでなくとも、護衛部隊はイタリアとスペインから各2隻、合計4隻のフリゲートしかいなかったのだから。

それから幾つか細かな質問をして、ここでの二水の取材は終了した。

最後の最後、女性士官は一瞬だけ目を伏せてから口を開く。

「一つ、断言しますが……。我らシラクサ艦隊も、友邦バルセロナの艦隊も、無力な民間人を見捨てるような真似はしていません。絶対に」

その静かなはずの声が、二水の耳にやけに響くのだった。

二水が海軍の基地を去つてシラクサの街に着いた時、ちようど良い具合にお昼時になつていた。

（うゝゝゝん、お昼は何にしよう？ 王道の Pasta か海の幸か、ピザという手もありますねえ！）

頭の中でイタリア料理の数々を想像し、胸躍らせる。

取材中は気を引き締めていたが、それはそれ、これはこれ。オンオフの切り替えは社会人の重要スキルである。

そんなことを考えつつ、シラクサの街を歩く。狭過ぎず広過ぎない石畳の道。その両脇には、石造りやレンガ造りの建物が並ぶ。2階建てや3階建てばかりで高層ビルなどはないが、だからこそ風情と情緒を感じられる光景だった。

街を行き交う人々の中に、セーラー服によく似た白の制服を見つめる。地元ガーデンのリリイだ。哨戒中か、はたまた制服姿で遊びに繰り出しただけなのか。チャームケースを背負つてはいるが、前線の街なので常に持ち歩いている可能性もある。

「取材、したい……でもお昼……」

社会人としてオンオフを切り替えできるが、リリイオタクとしては話が別だった。二水は前方から歩いて来る金髪碧眼のリリイに話し掛けたい欲求に駆られてしまう。道路の端に立ち止まってキョロキョロソワソワする様は、二水の子供っぽい容姿がなけれ

ば不審者同然であった。

すると、どういいうわけか相手の方から二水に声を掛けてきた。イタリア語は即席で不完全ながら勉強してきたので、会話はどうか成立した。どうやら二水をランチに誘いたいらしい。

(これは、同年代だと思われてる。まあ仕方ないか。日本人はただでさえ童顔だし。私だし……)

今の二水はダウンジャケットの下に白のブラウス、ボトムスは黒のロングスカートという、割とフォーマルで落ち着いた格好だった。にもかかわらず子供だと思われて、少しかだけ残念な気持ちになる。落ち込みはしなかったが。

それはそれとして、ランチのお誘いは受けることにした。仕事は抜きにしても、何かしら面白い話が聞けると考えたからだ。

二水と金髪のリリイは大通りから分かれた細い道へと移る。レンガの建物が狭くひしめき合った路地裏のような道。その先にある小洒落たレストランへ、二水はエスコートされるようにして入っていく。

二水のイタリア語はたどたどしい。だがそれでも金髪のリリイとの会話は盛り上がった。

本日、彼女は非番である。ガーデンの制服の方がモテるから制服で出歩いていたそう

だ。

最近、海の方は大騒ぎだが、陸にはスモール級のヒュージが飛んで来るぐらいで大事にはなっていないらしい。

今のチャームの流行りはどうだ。どこそこのガーデンの制服は可愛い——

そんなこんなで食事を終えて、店を出たところで解散という雰囲気になった。

いや、そう思ったのは二水だけらしい。店の外の閑静な小道で、金髪のリリイが二水を引き留める。これから街で遊ばないかという提案をしてくる。

次の取材地に向かうため、二水もこれは流石に断った。直後、スツと距離を詰められたかと思つたら、腰に腕を回され引き寄せられた。

（おおつ、流石はラテン系の国。情熱的ですなえ）

などと能天気な調子の二水。

すると今度はもう片方の手で、顎をそつと持ち上げられる。

（んんっ？ 何だか近くないですかね？）

自分よりも三つほど年下の、しかし頭一つ分は背の高い少女に抱き寄せられて。細められた青い瞳と桃色の唇が近付いてくる。

ところが、一旦は縮まった両者の間合いが再び広がった。不意に二水の体が後方に引き寄せられたのだ。

突然のことに目を丸くする二水。彼女の胸元は後ろから長くしなやかな腕に抱かれ、背中には弾力感と軽い圧迫感。主張し過ぎない仄かな香水に、鼻の中をくすぐられる。「失礼。これからわたくしたち、大事な予定がありますの。ごめん遊ばせ」

自らを抱き留める者の声を聞き、二水は首を回して振り返る。するとウェーブがかつたレッドブラウンのロングヘアが視界に飛び込んできた。

「楓^{かえで}さん！」

嬉しそうに口角の持ち上がった二水の口が、旧友の名を呼んだ。

第30話 新人記者 二川二水 ②

「全く……。貴方には危機感というものがありませんの？」

シラクサの街外れ、港に程近く人通りの少ない道で、楓が呆れたような声を上げる。

楓・J・ヌーベルジョアン。日仏ハーフで二水と同輩の元リリイ。百合ヶ丘卒業後は故郷で

あるフランススに帰国していた。

「流石に私だつて初めてのの国に来たら気を付けますよ。夜は出歩かないとか、怪しい場所には近付かないとか」

「その割に先程は随分と無防備でしたけど？」

「いやだなあ、楓さん。ただの挨拶ですよ、きつと。欧州ではよくあることでしょう」

「……わたくしも欧州人ですが」

「へっ？ 知ってますよ？ 当たり前じゃないですか」

ポカンとした二水を前に、腕組みした楓は眉と頬を微妙に引き曇らせる。

「老婆心ながら申し上げますが。二水さん、貴方取材を終わらせる前にどこぞで手籠めにされますわよ」

「あはは、何言ってるんですかあ。私みたいなちんちくりんをどうしようなんて、そ

んなことあるわけないですって」

「世の中には、そっちの方が良いという者も存在するのです」

「ええっ。楓さん、お巡りさんのお世話になるような真似は止めてくださいね」

「わたくしではありませんわ!」

何やら懐かしくなるやり取りに、二水の顔は自然と緩む。

卒業後も一柳隊の面々は連絡を取り合っていた。だが頻繁に会うというわけには中々いかない。遠く海によって隔てられた楓は尚更だ。

「はあ……。それで、次の取材先はどちらですか?」

「今回の作戦を主導したというドイツに向かうつもりですが」

「分かりました。では参りましょうか」

背を向けて歩き出す楓。まるで先導するかのような彼女へ、二水が慌てて声を上げる。

「ちよ、ちよつと待ってください。参るって、一体どこに?」

「ついさつき二水さん自身が仰ったでしょう。ドイツに、と」

「一緒に来てくれるんですか!?!」

「このままでは、寝覚めの悪い事態に発展しかねませんから」

前を進む楓が背を向けた状態で言ってきた。

一見すると素っ気ない態度。しかし、素っ気ないのは本当に外形だけのこと。それを誰よりもよく知っているが故に、二水の顔は緩みつばなしだった。楓に見られていたら、小言の一つも貰いそうな程に。

純白の大型客船が一隻、マリンブルーの海原を行く。船首に掻き分けられ水飛沫を上げる波濤の勢いは、船足の早さを物語っている。

イタリア本土とシチリア島とサルデーニャ島に囲まれたティレニア海。この地に多数存在する風光明媚な観光地も、ヒュージの跋扈により一時は大打撃を受けた。

しかし苦心の末に全てのヒュージネストを破壊して以降、商業と観光の要地としての姿を徐々に取り戻しつつある。

客船の上階、広く開放的なバルコニーを備えたスイートルームから、二水が手に構えたカメラのシャッターを切った。写すのは水平線。時折、遠方に船のシルエットや海鳥の群れが見えるが、大方は変わり映えの無い景色である。

「ところで、楓さんはどうしてシラクサに？ 会社のご用事ですか？」

ふと思いい出したように室内へ振り向いた二水が問い掛けた。

楓はパリの大学に通う傍ら、父親が総帥を務めるチャームメイカー『グランギニョル社』の仕事を手伝っていたのだ。

「違いますわ」

ソファに身を預けた楓が事も無げに答える。

「以前から懇意にしている日本人記者の方から、『本社が欧州にやって来る』と聞きましたので」

「それって、うちのパリ支局の特派員のことですよ。それで、わざわざ……。忙しいのに……」

二水は楓に対して申し訳なく思うと同時に、顔を熱くなるのを自覚した。

そんな二水の心境をどこまで察しているのか、楓がソファに腰掛けたまま脚を組み直して言葉が続ける。

「まあ観光のついで、ですわ。特に目新しい物は無かったので、こうして二水さんに付き合っているわけです」

最初にシラクサで出会った時には聞いていない情報が加わっていた。しかしだからと言って、それを指摘するような野暮はしない。今の二水は感慨で胸が一杯だったか

ら。「楓さんは相変わらず楓さんのままだ」と。

「時に二水さん。貴方、避難民輸送作戦の背景についてはどこまで把握してますの？」
楓によって、話が取材の内容へと移り変わる。

二水もまた、舞い上がっていた己を自制し頭を切り替えていく。

「あの作戦、軍事的には非常に疑問の残るものでした。護衛が不十分なままで、輸送に用いる貨客船も鈍足で。時間を掛ければ、そのどちらの問題もクリアできたと思うんです」

「軍事的観点からは、理解に苦しむと。ならば、他の観点からは？」

「それは——」

口を開いたところで一度立ち止まり、二水は頭の中で言葉を吟味する。真つすぐに視線を送ってくる楓に対し、下手な発言はできないと思ったからだ。

「作戦が実行されたのは提案者のドイツが強く主張したためです。そのドイツは欧州内でも『大陸派』の最右翼。アフリカ大陸からの避難民を受け入れられたら、彼ら大陸派の正当性を高めることに繋がります。つまり、あれは政治的観点から強行された作戦でした」

「そうですわね。アフリカと中東方面の解放を主張する大陸派にとつて、人道目的の本作戦は是が非でも実行したかったことでしょう。故に焦り、強行させ、完全に裏目に出

てしまった。シルテ沖での敗北が、どちらかと言えば大陸派よりだったイタリア・スペイン両国を心変わりさせたのです」

「その結果、欧州では沿岸防衛と大西洋奪還を重視する『海洋派』が優勢になったんですよ。海洋派の中心は北歐諸国。フランスも、そちら側でしょうか」

「ええ。当たり前ですが、欧州連合も一枚岩ではありません。今後は旗色も大きく変わっていくでしょう」

「すらすらと論じる二水ではあるが、全てを理解しているわけではない。むしろ分からない部分の方が多いだろう。まさに欧州情勢複雑怪奇。」

「しかしながら、分からないまま、怪奇なままにしておくことはできない。二水は新聞記者で、記事を書くためにこの欧州までやって来たのだから。」

「それで、次の取材先はドイツでしたわね？」

「はい」

「二水さんはそこで、どのような記事を書きたいんですの？」

「私は……………このままだと通り一遍の記事になっちゃいます。だけど、部長は私に元リリイとしての取材を期待していました。だから私は私ならではの記事を書きたいです。具体的な内容までは、まだ思い付かないんですけど」

二水は今思っていることを一息に吐き出した。段々と、捲し立てるかのように早口に

なつてしまった。二水の悪い癖だ。

「ならば、まず初めに足を運ぶべき場所がありますわ」

「——で、——というわけで、引き続きドイツで取材に当たります」

「そうかそうか！ 中々順調のようだな、二川君！ 以後も体に気を付けて励んでくれ
たまえ！」

「ところで部長」

「何だい？ 二川君」

「かえ……グランギニョル社の件は、やっぱり部長のお陰なんでしょうか？」

「いや、ね。幾らヒュージ討伐が好調で比較的治安の良い欧州といえど、海外に一人送り
出すのはどうかと思つたんだ。だけど下手な人間を付けても意味が無いし、現地の民間
軍事会社^Mを雇うのは何か違うだろう」

「ピツ、P M C!?! そんな大袈裟なっ！」

「二川君はグランギニョルの御令嬢と同期だったらしいから。あわよくば、と考えて君の出張について話してみたんだ。パリ支局を通してね」

「はあ……」

「でもまあ、流石に御令嬢本人がエスコートしてくれるとは想定外だったよ。ワハハ！」
「それは私も同感です」

「では欧州を満喫しながらも取材に勤しんでくれ！」

東京本社との国際通話を終えて、二水は携帯を鞆の中に収める。

途中経過を報告したは良いものの、上司から具体的な指示は何も無かった。二水本人の裁量に任せるといことだろう。欧州内の、支局の活動範囲内で、という制約については改めて念を押されたが。

「作戦失敗後、ドイツの現状についてご存知かしら」

すぐ隣の座席から、楓が確認するように問い掛けてくる。

二人はイタリアからドイツへ空路で渡った後、楓が呼びつけた乗用車で移動していた。ヌーベル家お抱えの、黒塗りの高級車だ。いつの間に手配していたのか。用意のいいことである。

「作戦を強行した現政府は国内外から激しく非難され、レームダックと化しています。次回選挙では海洋派の野党が勝利するのは間違いないとか」

日本を発つまでの間、二水もその辺りに関して調べていた。無論、十分な調査ができたとはいえない。やはり最後には自らの足を動かすべきである。

「二水さんの仰る通り。その流れはもはや変えられないでしょう。では何故ドイツ政府は、大陸派は、そこまでして作戦を押し進めたのか」

「その答えが、ここにあってしょうか？」

二水は車が徐々に速度を落としたことに気付いた。

やがて完全に停車。楓にやや遅れて、二水も後部座席のドアを開けて車外に出る。

ドイツ西部、フランス国境に近いとある街。二人が降り立ったのは、ホテル正面に設けられた車寄せであった。

街の中心部にあるホテルだ。観察する意義は大いにある。

ところが楓はチェックインだけすると、早々にホテルを出てしまう。二水は異を唱えず後に続いた。街を直接見た方が早いということだろう。長い付き合いなのだから、それぐらい察するのは容易かった。

ドイツの冬は厳しい。シラクサとは大違いだ。二水は一度は仕舞ったセーターを着込み、上にはコートを羽織っている。楓も似たような格好だった。

ただし、似ているのはあくまで格好だけ。纏う人間の姿は正反対。片やファッションモデルにも劣らぬメリハリのついたスタイルに、東洋人・西洋人の良いところ取りをした

ような美貌。片や日本基準でも中高生に間違われかねない幼い見た目。

(楓さん、会う度に綺麗になってる。私と並んでいると、お姫様と侍女みたいだあ……)
二水は決して自身を卑下しているわけではない。そういうことは百合ヶ丘時代に止めていた。ただ、客観的な評価を素直に下しただけ。少なくとも二水本人はそのつもりである。

斜め前に行く楓にチラチラと視線を向けていたが、暫くすると思っ直して頭を切り替えた。せつかく親身になって協力してもらっているのに、自分が雑念を抱いてどうするのか。

「……何だか街中なのに活気が無いような」

二水が道すがら覚えた違和感を口に出す。

最初のホテル周辺はまだいい。けれども中心部を遠ざかると、空気が変わっていくのを実感する。人通りが減り、その減った人々もどこか暗くて無機質な印象だ。言葉は悪いが、死に体という表現がよく似合う。

更に進んだ所で、二水は自分の感想が正しかったことを思い知る。

周囲を囲む高いフェンスと立派なゲートを備えた広い土地。そこに巨大な箱型建築物がそびえていた。

「これは、工場でしょうか。閉鎖されていますが」

「ええ。人の姿が消え役目を失ったこの工場が、街の実態を象徴しているのですわ」

「欧州全体で労働力が不足しているとは知ってました。ドイツは特に深刻なんですからね。他にも似たような街が少なくないでしょう」

「それを取り越えるための欧州連合。賃金を上げれば域内から人を呼び込めるかもしれません。ですが安価な労働力となれば、欧州内で供給するのは難しい」

「だから避難民の受け入れを焦っていた、と」

二水はこれまでの事前調査や取材で得た情報を整理する。

ドイツにおける大陸派の議員のバックには、鉄鋼業や化学工業など重厚長大産業の影があった。一方で、海洋派の議員は電子産業やチャーム関連産業への転換を主張している。

「海洋派の主だったスポンサーはゲルトナーにシンケル、そしてグロピウスといったドイツ貴族。彼らはガーデンやチャームメイカーなどに投資していますわ」

「つまり、少なくともドイツ国内では、産業抗争が両派の対立の根本にあるんですね」

楓の言わんとするところを二水は理解した。単なる噂レベルの話ではなく、楓からの情報なので確度は高いと言える。個人的なコネクションも記者の武器。故に二水は遠慮なく活用していた。

大筋の方向性が定まってくる。あとは、そこに住む人々から実際に見聞きすること

で、記事は肉付けされていくだろう。

そういうわけで、二水は取材を開始する。

この街の市井は大陸派と海洋派で半々といったところ。それもはっきりと色分けできるといふ状態ではない。

従来の産業や思想に固執する者、固執せざるを得ない者。新たな産業構造に機を見出す者、見い出さざるを得ない者。当たり前だが、人の数だけ事情というものがある。

その最中、二水はふと駅構内の売店に目が止まった。新聞コーナーの一角で、地元紙に紛れて隣国フランスの新聞が平積みされていたのだ。

「そっか。国境が近いから、フランスの物も珍しくないんでしょね」

二水は飲み物——ドイツ発祥のフルーツ炭酸飲料——と一緒にフランス紙を一部買って読んでみる。いの一冊に目を引いたのは、現ドイツ政府と大陸派を激しく非難する記事だった。「人道問題を口実に体のいい奴隷を得ようとした」などと書かれている。

耳の痛い話だった。日本にも似たようなケースがあったから。

「フランスメディアはどこも主張がストリートですねえ」

そんなことを呟きながら、二水は駅のロビーまで歩いていく。そこでは壁際の椅子に座った楓が紅茶を楽しんでいた。

「こんな寒い日に冷たいジュースですの?」

「暖房の効いた屋内で、あえて冷たいのを飲むのが良いんですよ!」

二水が食い気味に答えると、楓は肩を軽くすくめてからティーカップに口を付ける。カップの中からは薄っすらと湯気が立ち昇っていた。

その後、二水も楓の対面の椅子に腰を落とす。新聞紙をローテーブルの上に広げ、小気味良い音を鳴らして炭酸飲料の栓を開ける。目は紙面の文字を忙しく追っていた。

二水は外国語を話すよりは、外国の文字を読む方が得意だった。

「二水さん、お次は?」

「えっと……うちのパリ支局に行つて記事を纏めようかと」

「あら、次でお終いですね。残念ですわ」

楓が物足りなさそうにそんなことを言うものだから、一度は忘れた振りをしていた疑問が二水の中で再び大きくなってきた。

「あの、楓さん。大学の方はいいんですか?」

「心配ご無用。取るべき単位はちゃんと取っています」

「おうちの方が心配するんじゃない……」

「ちようど良い機会だからヨーロッパ旅行にでも行つてきなさい、ですつて。お父様もお母様も、旅行などと、失礼ですわ」

その答えに、二水は次に何と言おうか、何と言うべきか逡巡する。

すると二水の考えを察したのか、楓がフツと口元を緩めた。

「まあ、お邪魔なようならわたくしはこれでお暇しますが」

「それはないです！」

「でしたら、何も問題ありませんわね」

「ない、です」

本当にない。あり得ない。

だつて、名前を呼ばれば心が満たされるし、ふとした瞬間に体が触れたら暖かくなる。

(だけど、私は楓さんに何も返せない。私じゃ何も返せない)

それだけが二水にとって、小さくも消えることのないしこりとなっていた。

第31話 新人記者 二川二水 ③

全力を尽くした果ての結末ならば、残る悔いなどありはしない。

それは、二水の尊敬する人物の言葉だった。

二水の尊敬する人物は強かった。強く、誇り高く、見ている世界が広い。だからこそ他人に気を配れるし、自分に自信を持っている。

しかし彼女にとって万事が万事、順風満帆とはいかなかった。傷付いたりもしたはずだ。

力になりたい、たとえ及ぶ物が無い非力な身でも——

二水がそう願うのは当然だった。彼女が尊敬する人物も、きつと立場が同じならば同じように願うだろう。

もつとも、二水の場合は願うことしかできなかつたのだが。

ホテルで夜を明かした後、二水たちは独仏国境を越えてパリへと向かった。イタリアを発つた時にも言えるのだが、国を跨ぐ道程はあつという間である。

欧州連合、その域内では人・物・情報の行き来がスムーズなのだ。柔軟な戦力移動が求められるヒューズとの戦いに際し、それはプラスに働いていた。

パリ支局にて楓と別れた二水は早速記事の作成に取り掛かる………前に支局内で情報収集に努める。

情報自体は幾らあつても良いと考えていた。精査する手間暇さえ惜しまなければ。

『仏米英葡艦隊集結、アゾレス諸島解放作戦発動！』

地元紙で最も目を引いたのが、多国籍の艦船が一堂に会している写真であった。場所はフランス西端ブレスト軍港。同国最大の海軍基地で、大西洋反攻の策源地となる重要拠点である。

海軍部隊がクローズアップされる一方で、本来主役であるはずのリリイたちは扱いが小さかった。10機近いガンシップが発着場に居並ぶ写真は壮観だが、記事に割かれたスペースについてはそれ程でもない。

(これも今だけ。実際に戦闘が始まれば、新聞はリリイ一色になる)

二水がそう予測したのは、彼女が記者だからとか、元リリイだからとか、何かしら特

別な事情によるものではない。大規模作戦が展開する直前は決まってそんなパターンなのだ。

逆に言えば、こういった機会でもないと軍が脚光を浴びることはない。少なくとも一面記事はリリイたちに譲るはめになるだろう。

「つと、それはともかく……」

二水はタブレット端末に映し出した電子版の記事を閉じ、支局のデータベースから本題のデータを探す。

欲していたのは大陸派と海洋派の支持基盤を裏付ける情報で、それは労せずして見つかった。

ドイツの時と、大方の傾向は一緒だと判明する。欧州のチャームメイカーやガーデンはほとんどが海洋派で、造船を除く重工業関係や旧来の軍需産業には大陸派が多く見られた。

それから二水は更に突っ込んだ調査に入る。

二つの派閥がリリイをどのように見ているのか。それは元リリイの二水にとっては気になる点だった。

ガーデンやガーデン関連企業から成る海洋派はリリイの損害を嫌う傾向が強い。リリイの親族や関係者が多く勤めているので感情的な理由もあるのだが、当然ながら実利

も絡んでいゝ。リリーの数はチャーム配備数や彼女らを対象とした支援事業の規模に直結するので、リリーが多ければ多いほど関連企業の仕事も増大するのだ。

それに対して大陸派はリリーの損耗が予想される大規模な地上侵攻を望んでいる。だがそれはアフリカや中東を解放し、労働力や製品市場を確保するという経済的な意思以外は無いように思えた。実際、大陸派からリリーを直接害するような主張はほとんど見られない。

(うーん……。やっぱりこの問題、企業間の代理戦争なのかな。リリーはあまり関係ない?)

それが分かっただけでも、楓にあの街へ連れていってもらった甲斐があった。

もつとも、元リリーならではの記事からは遠のいてしまったが。

(それにしても)

支局でフランス紙の記事を読み漁った二水は改めて思う。この国のメディアは歯に衣など着せぬし、オブラートに包んだりもしない。

保守系メディアもリベラル系メディアも、こぞって大陸派を叩いている。

とある大手新聞社に至っては『肥え太った巨大な豚が地中海にバスタブの如く浸かり、アフリカ大陸へ手を伸ばして果実にかじりつく』という辛辣な風刺画を載せていた。

“豚”は大陸派に与する大企業や資本家を表しており、“果実”は労働者や資源のこ

とを指しているのだろう。

これもお国柄、この国の歴史的経緯が市民社会の公器たるマスメディアを鋭利に研ぎ澄まさせていた。無論、反論権を担保した上で。

「……ちよつと、休憩」

煮詰まった頭を冷やすべく、二水は借り受けたデスクから立ち上がって支局のオフィスを抜け出した。

「ん—————」

支局の広い廊下の真ん中で、二水が小さな背と細い腕を思い切り真上に伸ばす。

記者の仕事は両極端で、取材のため外を駆けずり回るか、デスクで端末や紙の書類と日がな一日睨めっこするか。二水はどちらか選べと言われたら、前者の方を選ぶタイプの人間だった。ただ、後者も決して嫌いではない。

広くがらんだとした廊下に二水以外の気配は無かった。皆、先程までの二水の如く

オフィスに缶詰であったり、あるいは外に出払っていたり。

二水が派遣されるのも分かるぐらいに人手不足だった。

とは言え、そんな彼らの働きがあるからこそ、二水は記事の執筆に活かせる情報が入手できているのだが。

情報と言えば、正直なところ、まだまだ集め足りないと感じていた。

単純に労力が掛かっているのだ。主に翻訳面で。

二水も小さな頃から外国のリリイ関連の論文を読み漁ってきたが、それでもネイティブみたいな完全な読解には苦勞する。

端末に翻訳機能が付いてはいるが、機械任せでは微妙なニュアンスが伝わらない可能性があった。記事を書く上で、それは困る。

そこで二水は携帯電話を取り出した。困った時は上司に相談するに限る。

「……………あつ、二川ですー。お疲れ様ですー」

「どうしたんだ、二川君！ 取材は順調なのかい！」

数度のコール音の後、耳をつんざく大音量が轟いた。

二水は携帯を耳から少々離して通話を続ける。

「実は、少し行き詰ってて……。それで、部長に折り入ってお願いがあるのですが」

「ふむ、何かな？」

「部長は欧州勤務が長かったんですよね」

「うん、若い頃は特派員として、欧州中の支局を渡り歩いたものだ！」

戦局優勢な現在ならばともかく、あちこちで戦火が吹き荒れていた頃の欧州で特派員を務め切る。それは並大抵のことではない。生きて帰って来ただけでも自慢に値するだろう。

「欧州市民の中では、リリイがどんな風に映ってきたのでしょうか。いえ、表面的な部分
は分かったんですけど……。それより深い事情になると……」

「確かに、過去の記事やデータからは読み取れない空気というものはあるね」

ただでさえてんてこ舞いな支局の記者に尋ねるのは憚られた。

勿論、国際部部长が忙しくないはずがないのだが、こちらは自分の上司なので二水は頼ることにした。

「二川君も欧州がリリイ脅威論発祥の地であることは知っていると思う」

「はい」

「ヒュージの侵略を受けている最中に、愚かな話と呆れるだろう」

「はい……」

一時期世界で、そして日本でも騒がれたことだった。ヒュージと同じマジを操るリリイが人間の脅威になるという主張。

「欧州においてあの思想が台頭したのは、歴史的な背景があつてのことなんだ。ソ連邦の崩壊と中国の市場経済化によってイデオロギー闘争に敗れた活動家が、次に錦の御旗として掲げた自然回帰主義。その中でも殊更に過激な者たちがリリイを槍玉に上げた」

「マジによつて変質した、自然に反する存在。地球と人類を脅かす存在。リリイをそう非難したんですよね……」

「今でこそ陰謀論と一笑に付される思想だけど、当時はそれなりに信じられてしまったんだ。当然、リリイを支持する勢力はそれに反論する。こうして生まれた対立構造が今日の大陸派と海洋派へと引き継がれてきたわけだよ」

「えっ？　でも、待つてください。今の海と陸の対立って、企業同士の産業構造に関わる対立じゃないんですか？　リリイ脅威論みたいな思想の問題とは、性質が違ふと思うんですが」

柄にもなく淡々と語る部長の言葉に、二水は疑問を抱く。部長の言う過去の対立と、自分がこれまで調べてきた今の対立の間に、繋がりが見つけられなかった。

「そうだねえ……例えば、かつて我が国にあつた薩長閥の争いは、藩閥問題が解消した後も陸海軍の対立として引き継がれてしまっただろう？　それと同じようなものさ」

「はあ、そういうものなんでしょうか」

二水の反応が微妙だったせいなのか、少しの沈黙の後、電話の向こうの部長が再び話

し掛けてくる。

「君もよく知ってる通り、未だにリリイ脅威論を信じているのはごく一部の政治家と軍人、活動家ぐらいのものだよ。ヒュージを倒した次は人間対リリイの戦争が起こるぞ、なんて彼らの願望は妄想に過ぎないと証明された。今の日本や欧州を見ればそれは明らかだろう」

部長の言うように、国土奪還を果たしつつある日欧でも脅威論者は盛り返してない。依然として少数の陰謀論者という扱いだった。

「彼らは世論を扇動して騒乱を作りたかったようだけど。民衆を愚民と見下し民主主義を嘲る彼らの思惑に、人々は乗らなかつたんだ」

それは人間の理性の勝利と言えた。

確かに研究機関の手で違法な人体実験が秘密裏に行われていたが、裏を返せば、秘密裏にしなければならぬだけの分別はあつたのだ。

それにしても、部長の物言いは元リリイの二水を氣遣っているように感じられた。

普段はよく言えば豪快、悪く言えば大雑把な部長だが、そこは流石に管理職を務める人物。部下へのフォロワーは怠らない。

「さて、以上のことを踏まえた上で、リリイへの優遇措置に対する不満があるのは事実だよ。富裕層、上流階級の子がリリイになると特に目立つからね」

「はい、私の母校もそうでした」

「だけどそれはあくまで経済上の問題であつて、脅威論者の言説とはやはり別物なんだ」
リリーが手放して称賛されるだけかと言うと、それもまた違うというわけだ。

だが仕方ない。社会に貧困がある限り、摩擦は付き物だから。百合ヶ丘に入るまでだの庶民だった二水にとっては、すんなりと理解できる話であつた。

「部長、ありがとうございます。記事の方、何とか書けそうです」

「そうかそうか！ それは良かった！ 完成を楽しみにしているよ！」

「電話代は凄いことになりそうですが。あはは……」

「気にするな！ 経費で落ちるから！」

それはそれで気にしてしまうのだが、二水は申し訳なさを覚えつつも通話を終了した。

そして踵を返し、オフィスへと戻っていく。

日本に帰るまで待てない。鉄は熱いうちに打てと言わんばかりに、早速タブレット端末を立ち上げる。

以前よりも、画面をタッチする二水の指は軽やかだった。

「もう遅いので、今日のところは帰ってください！」

支局のスタッフに遮られるまでは。

翌朝、二水は宿泊中のホテルから再び支局に足を運ぶ。言うまでもなく、執筆作業を続けるために。

「今日は何だかお巡りさんが多いような？」

道中で見たパリ市内、街角の所々を黒い制服の警察官が巡回警備に当たっていた。元々日本よりも治安の悪い街ではあるが、それを差し引いても少し物々しい。

これは、局内に籠っていた方が良さそうだ。初めからそのつもりだが。

二水はオフィスのデスクにつき、机上にタブレットを置いた。そこから先は話がかかった。

ひたすらにディスプレイ上のキーをタッチしていき、文章を構築する。

時折、資料を参照し、一度だけ小休憩を取った。

そうして正午まで通して作業を続け、遂には記事を完成させた。正確には、日本に持ち帰って上司の承認を得なければならないが、それでも一応の完成と言えるだろう。

「ふあ~~~~つ」

大きな欠伸が二水の口から漏れ出てくる。

記事ができた直後に強く感じたのは、達成感よりも睡魔であつた。空腹感もあるが、まずは睡眠欲が優先だ。

こんな時間からこんなに眠たい理由、それは有り体に言つて因果応報である。

昨晚ベッドに入つてからも、記事の文章を頭の中で推敲し続けていたのだ。

いつ頃眠りに就いたのか定かでない。寝落ちして、気付けば朝だつた。

「仮眠してきます」

周りにそう宣言すると、二水はふらふらと立ち上がつて廊下へ出る。

覚束ない足取りで休憩室を目指す。

昨日と同様、妙に閑散とした廊下。睡魔のせいで朧な意識では、果てなく伸びているかのように錯覚する。

無論、現実には果てがあるので、そのうち二水は休憩室の前まで辿り着けた。

二水の手がドアノブへ触れる寸前、轟音と共に彼女の体が上下に跳ねた。否、跳ねる錯覚に襲われた。

足を激しく揺らす衝撃。それでも立つていられたのは、過去の経験のお陰か。先程の轟音が爆発音であることにもすぐに気が付いた。

「なっ、何がっ……い！」

睡魔は一瞬で吹き飛んだ。

廊下の先へ向けられた二水の面目に、変わり果てたエントランスホールが映り込む。

第32話 新人記者 二川二水 ④

鼻をつく火薬の臭い。脚が折れてあちこちに散乱した椅子や机。床には守衛を含めた数人の人間が倒れ伏している。

朝に見た時とはかけ離れた光景だった。支局のエントランスホールに現出した惨状に、二水は後ずさるどころか前へと進む。

「携帯……通じないっ。助け、呼ばなきや」

電波の状態が悪いのか、携帯電話が繋がらない。

そこで二水はそのまま正面の出入り口をくぐろうとする。

倒れているスタッフたちは皆、息があるようだった。すぐにも救急車を呼ばなければ。

とは言え、考え無しに飛び出たりはしない。三年ほどのブランクがあつても二水は元リリイだった。ガラスが割れ骨組みばかりとなった扉を、慎重に動かし開けていく。

二水は元リリイだ。不用意に建物内から飛び出さず、外の様子をジツと窺う。

ところが、いざ小さな体が外へ出た直後、押し戻されて支局内に逆戻りしてしまう。

「何をしていますのー！」

直前まで本当に気付かなかった。

故に二水は誰かに抱き締められ押し戻されたことに驚き、その相手の顔を見て更に驚いた。

「楓さん！ どうしてここに!？」

目の前に広がる豊かな膨らみ、その上の険しい顔を見上げて二水が尋ねる。

「パリ市庁舎に、テロをほのめかす脅迫状が届いたのですわ。ターゲットまでは不明だったので、警察が市内を警戒していたのですが」

「へえ、流石はグランギニョル、情報が早いですねえ……って、そんな状況で歩き回ったら危ないですよ!」

「危ないのは貴方でしょうが!」

楓が眦を吊り上げて美しい顔を歪ませる。絵画や彫像の如く整っている分、余計に威を放って見えた。

「真つ先に新聞社が襲われた以上、下手人の狙いはメディア関係者と見て間違いないでしょう。それなのにノコノコと建物を出ようとして。いいカモですわ!」

「それは……」

そんなことはない。自分なりに警戒していたし、救急車を呼ぶという優先事項もあった。

しかし、現に楓の接近に気付けないなど迂闊な点も否定できない。二水は反論の言葉を失った。

「心配せずとも、警察と救急は出動済みですわ。それより今の貴方は、ご自分の身を守るのが先ではなくて!？」

「うっ……」

正論だった。

楓の言うことは大抵の場合、正論だった。昔から。

「大体、二水さんは——」

「確かに！今の私はもうリリイじゃありません。だけど、それを言うなら、楓さんだつてリリイじゃないでしょう！それなのにつ、楓さんは、他人のことばかりで……」

思わず感情をさらけ出す二水。

尻すぼみになったのは、自分でもよく分かっているからだ。自分自身の幼さを。子供っぽい、意地のようなものであることを。

二水が心の内を吐き出すのを待ってから、一度は沈黙していた楓がゆっくりと口を開く。

「二水さん」

「……はい」

「リリイだからこそできることは、確かにあるでしょう。ですが大切な人を案じるのに、リリイかどうかは左程重要ではありませんわ」

「だから、それは楓さんも一緒なんじゃあ……」

「わたくしたちは、わたくしたちらしく戦う。前にも言ったはずですよ」

楓の言葉の意味を考えようとする。

しかしいつまでもこうしているわけにはいかない。

携帯でどこかとやり取りをした後、楓が今度は外へ出るように促してくる。

「もう大丈夫なようです。参りましょうか」

「どこに、ですか？」

「絶対安全なグランギニョル本社……とりたいところですが、二水さんは日本大使館に保護して頂くべきですわね」

二人が話している間に、ストレッチャーを押す救急隊員たちがエントランスに入ってきて救助活動を開始した。

不幸中の幸いか、派手な爆発の割には命に別状は無さそうだ。

隊員の一人に「治療は必要ですか」と問われ、楓は丁重に断った。そうして徒歩で歩き出した彼女の背中が眩しいぐらい堂々として見えた。

支局のビルから出てきた二水は騒然としたパリ市街の光景を目の当たりにする。

道路脇に武骨な装輪装甲車が鎮座し、街のあちこちで黒い制服と防弾チョッキの集団がサブマシンガンを抱えて目を光らせていた。内務省隷下、国家警察所属の保安機動隊である。

更に注意深く周囲を窺うと、二水は幾つかのビルが自分たちの支局と同じような被害を受けていることに気付いた。恐らくは、全て新聞社やテレビ局。マスメディアを標的にした同時多発テロ。

「そんな、こんなことが起きるなんて」

二水が想像を超える事態に息を呑む。が、取り乱す程でもない。もつと酷い惨状は幾らでも見たことがあるから。

辺りを見回しながらも、前を歩く楓の後ろに付いて行く。そんな二人の四方をいつの間にか囲んでいた黒服たちは、楓を警護するグランギニョルの人間だろう。

「そのちっこいの、ブンヤだな？」

突然掛けられた声に、二水は立ち止まる。

声の出どころは一行の前方7〜8メートル先、建物と建物の隙間の路地裏から出てきた人影だった。両脇をそれぞれ白人と黒人の機動隊員に囲まれ引き摺られた東洋人の男である。

状況からして、一連のテロの犯行グループか、その容疑者だろう。

その痩せ気味の男は目を吊り上げ二水を睨み付ける。

二水の首には社員証の他、紐付きのカメラがぶら下がっていた。

無視すべきか反応すべきか二水が迷っている内に、男は捲し立てるように話し続ける。

「お前らが悪いんだ。あること無いこと面白おかしく書きやがって。おまけに、あんな舐め腐った風刺画まで……。喧嘩を売ってきたのは、お前らの方だろう」

男が何のことを言っているのか、二水はすぐに見当がついた。ついさっきまで仕事で取り組んでいた、タイムリーな話題であった。

「なあ、お前らブンヤは海洋派から幾ら貰って書いてんだ？ クソ貴族どもから幾ら貰ったんだ？ 言ってみろよ！」

フランスメディアからのバッシングに腹を立てた大陸派のシンパ、と言ったところだろうか。

二水も彼の言いたいことは分かったが、反論の仕方が思い浮かばない。どんな言い方をしても余計に怒らせる気しかない。そもそも相手にしなければ良いのだが。

とは言え全く無視するのも気が引けたので、二水は当たり障りの無い話で誤魔化すことにした。

「いや、随分と流暢な日本語ですねえ。びっくりしましたよ」

「流暢も何も、その方恐らく日本人ですわよ」

「えっ!? 日本人が何でこんなこと……」

「さて? 旅行中にテログループに感化されたか、移住したはいいものの職を失って路頭に迷っていたところを勧誘されたのか。何にせよ、些末なことですわ」

身も蓋もない楓の指摘を受けて、男の目線が動く。矛先が変わったのだ。

「お前……知ってるぞ。何とかって会社の娘で、貴族だったな。お前の会社も海洋派なんだろう?」

「あら、流石わたくし。有名人ですわね」

「ハッ! 汚いこととして金稼いで、それをブイヤードにも揉み消させているってわけか。上流階級様の考えそんなことだ」

「想像力が豊かなのは結構ですけど。もう少し建設的な方向で活かしては如何?」

両腕を機動隊員にがちり拘束されたまま、男は口だけを盛んに動かす。

楓は真正面から怨嗟を浴びながらも、涼しげな様子で流している。

流せずに男のペースに乗せられたのは、むしろ二水の方だった。

「待つてください。私たちはそんなことしていません。楓さんは、そんなことしません」

自分だけならいざ知らず、楓のことまで言及されては黙っていられなかった。

「惨めだな。欧米人の顔色窺って、金持ちに尻尾振って。それでジャーナリストを名乗れるのかよ」

「グランギニョルのお嬢様だから、お金持ちだから一緒にいるんじゃないやありません。楓さんだから、一緒にいたいって思うんです」

優雅で、気品高く、よく気が回り、仲間想いで、好きな娘のことになると暴走する。それら全てひっくりくるめた上で、楓は二水の憧れだった。憧憬は理解から最も遠い感情だと言われるが、二水の場合は——少なくとも他人よりは——理解した上で憧れていたのだ。

「見苦しいんだよ。女特有の感情的な庇い合い。どうせ腹の中じゃあ、マウント取ることばかり考えてるくせに」

「貴方、妄想が過ぎますわよ」

「女の言う友情ってそういうもんだろ。それとも何か？　もしかしてお前らレズか？」

そう言って口の端を皮肉げに歪めた男に対し、楓は一瞬たりとも躊躇わずに言葉を返

す。

「わたくしはそうですが、それが何か？」

「開き直りやがった。『何か？』じゃねーんだよ。てめえだつて親父とお袋から生まれたんだろうが。その親の営みを否定するような真似して、悪いと思わないわけ？」

「思いませんわね。貴方のご家庭では、同性を愛したら磔にされ火あぶりにされるんですの？ それは大変難儀ですこと。お悔やみ申し上げますわ」

「てめえ……喧嘩ならいつでも買うぞ？ ああ!？」

口から泡を飛ばさんばかりに食つて掛かる男。全身を必死に揺さぶるが、自分よりずっと体格の良い男たちに拘束されているため、叫び声だけが威勢よく跳ね回る。

「大人しくしろっ！」

「暴れるな……暴れるなよ……！」

それまで黙っていた二人の機動隊員も、男が全力で暴れようとするので、手に力を込め直しているようだ。

「お巡りさんよお、この女どもも捕まえてくれよ。悪徳企業と、人の不幸を飯のタネにする卑しいブンヤだ。この女どもを——」

「分かった分かった。お前さんの言う通り、女つてのは悪辣な存在だ。だからお前さんのように純粹で良心的な男が近寄ったら駄目なんだ」

「男は男同士、仲良くしようぜえ」

男を左右から挟んでいる機動隊員たちが密着を強め、体を無遠慮に押さえ付けて再び暴れ出せないようにする。

挟まれている方は堪ったものではないだろう。

「さっ、触んじやねえ！」

「触らなきや逮捕できないでしょ」

「女の子とは楽しくお喋りしておいて、俺たちとは仲良くできないってのか？ それってえ、男性差別ですよね？」

そのまま二人と一人は警察の装甲車内に入っていき、やがて騒ぎ声もピタリと止んだ。

二水は呆然と立ち尽くした後、暫くして思い出したかのように呟く。

「何でお巡りさんまで日本語なんでしょうか」

「二水さん、ご存じないんですの？ フランスでは今、日本のサブカルが密かなブームですよ」

「一体どんなサブカルなんですかね……」

パリ同時多発爆破事件。

メディア関係者を中心に数十名もの重軽傷者を出したこの事件、奇跡的にも死者ゼロで終息を迎えることができた。

犯行グループのメンバーに複数の日本人が含まれていた事実は、後に欧州内の一部ゴシップ誌から『赤い軍隊以来の日禍論』と騒がれることになる。

事件直後、パリ市内の日本大使館に保護された二水。彼女は館内に小さいながら個室を宛がわれた。

個室の中、二水はベッドの上に腰掛けて気まずい想いでじっとしている。何故気まずいかというと、そのまま大使館内について来た楓が部屋の中で佇んでいるからだ。

やがて俯いていた二水が意を決して顔を上げる。

「……さつきは、すみませんでした。楓さんは私のことを心配してくれたのに、あんな子供みたいなこと言っ

て。頭が冷えたせいかな、あの時は感情的に反発してしまった二水も、ようやく素直になれた。

「共にリリイとしてチャームを振るっていた頃。『二水さんはわたくしのようなりリイにはなれない』と申し上げたこと、覚えていますか?」

楓は二水の謝罪には答えず、爆破事件の折に言いかけた台詞の続きを口にする。

「はい、勿論忘れてりませんか」

「あれは今でも同じですわ。今の二水さんはリリイでも警察官でも軍人でもなく、ジャーナリスト。貴方の得物はカメラとペン。二水さんには二水さんならではの戦い方があるでしょう」

「それは、その通りです」

「そして二水さんのような方が存分に輝ける世を維持していくことこそ、わたくしたちの務めと心得ていますわ」

滔々と語りながら、楓は二水のすぐ前まで移動してから腰を屈め、ベッドに座る二水と視線を合わせた。

二水は一瞬だけ目を逸らしそうになるものの、自分の顔を捉えて離さない青い瞳に、自分の姿があるがままに映し出す青い瞳に、すぐに惹き込まれて離れられなくなる。

(楓さん、昔と同じだ。昔と同じ、眩しいままで)

二水は言葉にはせずとも、密かに心配していた。楓が数年来の懸想の相手に失恋したことで、何か変わってしまったのではないかと。

だがそれは要らぬお世話だった。

『夢結様に愛想を尽かしたら、いつでも歓迎いたしますわ〜!』

いつの日だったか、楓が放った軽口は本当に軽口だったわけである。本当はそんな事態になるなど信じていないし、望みもしない。楓は今も昔もそういう人間なのだ。

昔から彼女のことを見ていた二水はよく知っている。確固とした自己を持ち、同時に周りの仲間たちへさりげなく気配りをする彼女のことを。

自分とは違う、自分にはできないことをやってのける。そんな彼女だから二水は惹かれたのだ。

「……………いや、でも、ちょっとおかしいですよ。テロ事件中の安否確認なんて、グランギニョルのご令嬢自ら果たすべき務めじゃないですよね?」

「……………」

「いや、勿論私としては嬉しかったんですけど。でもグランギニョルの次期総帥が、テロ発生中の街中を歩き回るのはどうかと思うんですが」

「……………全く、細かいことに拘りますわねえ!」

楓の態度が一変した。

「細かいですよお」

「細かいですわ! 小さいですわ! これだからチビツ子は!」

「チビツ子じゃないですう！ もう大人ですう！」

二水が柄にもなく一生懸命に否定する。

すると何を思ったのか、楓の顔が近付いてきた。二水の前髪を手で掻き分けると、露わになったおでこに軽く音を立てて口付けをした。

「んなっ!!? なんなんななっ」

「フフフ、この程度で真っ赤になるとは。やはりお子ちゃまのチビツ子ですわね」

二水が両の目をパチクリさせて、口をパクパクさせる。

その様子がおかしいのか、楓は不敵な笑みを浮かべていた。

「好きな人にされたら、誰だってそうなりますよ……」

「何か仰いまして?」

「いえ、何もー!」

こうして二水の欧州出張は「無事に」とは言い難いものの、一応の成功を収めることができた。

数日後、帰国して休暇を挟んだ二水は本来の職場へと出勤した。

ここで上司の承認を経て、出張の成果である記事をようやく形にできるのだ。

本社ビルの国際部、懐かしささえ覚えるそのオフィスに二水が帰還を果たす。

「あ—————っ！」

オフィスを足を踏み入れて早々、けたたましい叫びが二水の耳に飛び込んできた。

奇声の主は、この部屋の主だった。一番奥にある自分のデスクの前で仁王立ちし、天井を仰いで咆哮している。

「ぶ、部長？ これは一体……？」

「二川さん、これ見て……」

困惑する二水の横から同僚記者が新聞紙を差し出してくる。それは同業他社ライバルが発行した先日の新聞だった。

ちようど二水が巻き込まれたパリでの事件について、社説で論じているようだ。

遠くフランスで起きた衝撃的な事件から幾日か経った。

犯行グループの雑多な国籍によって当初は複雑視されていたこの事件も、全貌がだんだんと分かつてくる。

大陸派を激しく批判するフランスメディアへの報復。それが彼らの動機であった。

いかなる理由があろうとも、言論が脅かされる事態に陥ってはならない。社会の公器であるマスメディアが抑圧されるということは、その社会全体がいつ抑圧されてもおかしくないことを表していた。

この事件以降、欧州各国では大陸派が疎まれて海洋派が勢いを増している。

だがちよつと待つて欲しい。本当にその道で良いのだろうか？

未だ多くのヒュージネストの脅威に曝され、塗炭の苦しみに喘いでいるアフリカ・中東地域。そんな彼らに人道的見地から手を差し伸べようというのが大陸派の主張である。

自分たちさえ良ければいいという『自国ファースト』の風潮は、国際協調の理念に泥を掛ける行為だろう。

以前から、隣人を思いやる大陸派の人々への誹謗中傷は目に余るものがあつた。今回の事件はそういった攻撃に対する義憤の表れなのである。

いかにジャーナリストといえども無謬の存在ではない。ペンが容易く人を傷つけ得る事実を自覚し、いかなる時もファクトチェックを欠かさず実行するべきだ。それを

怠ったフランスメディアに自戒と猛省を促したい。

言うまでもなく、この問題は日本においても他人事ではなかった。

助けを求める声なき声を黙殺してはいないだろうか。

言論の自由を盾に他人を傷つけてはいないだろうか。

遠き欧州の地を他山の石として、日本人は思い遣りの精神を養わなければならない。

それについても、今必要なのは政権交代ではないか？

論説委員)

(夕日新聞

「ええ……」

社説を読んだ二水はますますもって困惑した。

文章の繋がりが所々おかしいのは、まだいいだろう。だんだんポエムと化しているのも、まあ許容範囲だ。

しかしながら、前半部分でテロを批判しつつ後半では擁護している矛盾はいかがなものか。

「確かこの新聞社って、日本の台湾外征は批判してたような」

いっそ清々しいまでの変節ぶり。記者という仕事に対してそれなりの矜持を持つ二水にとって、驚き呆れるばかり。

「二度と！ ジャーナリストを！ 名乗るんじやあないよ！」

尚も歯を剥き出しにして吼え続ける部長。

言論封殺を許容するかの如きライバル紙の論調は勿論のこと、今回は彼女たちの身内までも被害を被っている。

文句の一つや二つや三つ、言いたくなるというものだ。

とは言え、そんな突っ込みどころ溢れる文にも見るべき箇所はある。最後の方の、極々一部分の話だが。

「他山の石にしないと」

二水は自らにそう言い聞かせてから、久方ぶりに自分のデスクに着いた。

第33話 千客万来

木枯らし吹く寒空の下、アマノは今日も営業中。

12月下旬。この時期の花屋といったら、デパートやスーパー等の商業施設に対してギフト用の花を納める機会が多い。

アマノの場合、そういった取引先は少ないので、12月は比較的穏やかな時間を過ごせるはずだった。

ところが天葉たちの予想とは裏腹に、本日のお店は朝から賑やかだ。今も店頭に二人組の買い物が訪れていた。

「いきげんよう。夢結様、梨璃さん」

「いきげんよう、樟美さん」

「いきげんよう！」

カウンターの立つ樟美が挨拶の言葉を掛けると、店内に足を踏み入れた二人組が立て続けに返事をした。

長く艶やかな黒髪と、明るい桃色のセミショート。対照的な二色は仲良く寄り添うように隣り合い、時折どちらかの首が動く度、交ざり合いそうになっていた。

「今日は、お二人でお出掛けですか？」

「ええ。少し買い物に」

「クリスマス用、ですか？」

「そうなるわね」

樟美の問いに答える夢結は、台詞だけ見れば事務的で素っ気ない。しかしながら、その左腕へ抱き付くように腕を絡ませているパートナーのお陰で、端麗な顔が柔和に綻んでいる。

「やっぱり、夢結だ。梨璃さんも」

ここで店の奥から店主の天葉がやって来た。

そのフランクな態度を前に、夢結は軽く苦笑する。

「第一声がそれ？ 仮にも私たちは客なんだけど」

「それは申し訳ありません、お客様。どのような花をご希望でしょうか？」

わざとらしく尋ねる天葉に対して、今度は梨璃が答える。

「あの、天葉様。私たち部屋の中に飾るお花を探しに来たんです。クリスマスツリーの代わりに」

「ああ、それね。今、そういうの結構流行ってるみたい。勿論うちにも置いてあるよ。と言っても、目立つから既に気付いていると思うけど」

天葉は夢結と梨璃を促すように小さな店内を歩いていく。

向かった先には幾つもの鉢が並んでいた。鉢の中では赤やピンクなど色鮮やかに咲き誇る花々と、それを取り巻くギザギザの葉っぱたちが一つの芸術品を織り成している。

鉢植えを小さなクリスマスツリーに見立てたフラワーアレンジメントだ。

「人気なのはバラやガーベラだね。色は華やかな暖色系が売れ筋だけど、清純なイメージのある白も中々人気だよ」

「うわあ、周りの葉っぱも本物のツリーみたいですね」

「ヒイラギだと手を切っちゃうから、葉の柔らかいヒムロ杉を使ってるんだ。加工はしてるけど、本当に本物の針葉樹ってわけ」

「プリーザーブドという、特殊な薬液に浸して水分を抜いた加工法。これにより、生きた植物と遜色ない見た目と質感を維持しつつ、長期の保存を可能とした。」

加工処理の分、お値段の方は割高になってはいるが、そこはクリスマス価格ということでご容赦頂いている。

「お花の種類はたくさんあるから、ゆっくり選んでね」

天葉が掛けた言葉通り、梨璃と夢結は店内の一角を占めるミニツリーコーナーで吟味し始めた。

陳列棚と床の上。決して広くはない店の中に、冬の風物詩として生まれ変わった鉢植えが小さな輝きを放つ。

やがて梨璃は一つの鉢を抱き抱え、振り返って天葉へ笑顔を向けた。

「天葉様、これにします！」

「へへ、白いユリかあ。ツリーのアレンジメントとしてはそこまでメジャーじゃないけど、ユリは根強い人気がある花だよ」

天葉が感心した声を上げると、程なくして、梨璃の顔がふにやつと緩む。

「えへへ。このユリの花、お姉様みたいに上品だなーって思ってた。それで選んだんです」
照れ臭そうにはにかんだことで、梨璃の顔がいつもより幼く見えた。それは子供っぽ
いという意味ではなく、瑞々しく初々しく、そして生き生きしているという意味だった。

そんな梨璃を目の前にして、天葉の方まで照れ臭くなる。

「それじゃあ私は、こっちのピンクのガーベラを貰いましょうか」

夢結もまた、ミニツリーを一つ抱えていた。見る者を明るいきげにさせる桃色の花を
咲かせた鉢を。

ここまですれば天葉にも彼女らの意図が分かる。お互い、相手のイメージに合った花
を選び、それを贈り合おうというのだろう。

その微笑ましさに、天葉は思わず顔を綻ばせた。

無論、店を開いている以上は売り上げも大事ではあるが、花を見てくれた人が笑顔になるのは花屋にとってこの上ない喜びなのだ。

「それにしても」

確かに微笑ましい。

微笑ましくはあるのだが。

見つめ合う二人と同じ空間に居ると、天葉といえども多少のぎこちなさは感じてしま
う。

「ご馳走様って感じだねえ。ねえ、樟美」

「……………」

「樟美ー？」

お昼を回って暫くした頃、一旦客足が途切れたアマノ。

花は一定の温度管理が必要なため、店内でも暖房を思いっきり効かせるわけにはいか

ない。故に寒がりな樟美はエプロンの下に厚手の白ニットを着てカウンスターに立っている。

天葉は樟美の背後から無言で近付くと、彼女の両肩を包み込むように抱き付いた。

相手が分かっているためか、樟美は少々体を揺らせただけで、特に驚いた素振りは見せなかった。

「樟美、寒くない？」

「はい。あつたかい、です」

「私も暖かいよ」

天葉は樟美のような寒がりではない。にもかかわらず、密着して離れようとしないう。樟美の側頭部へ自らの頬をこすり付け、銀髪のさらさらな感触を楽しんでいる。

「もう、天葉姉様。お仕事中ですよ？」

「だって、今日は思ったよりお客さん多くてスキンスリップできなかったんだもん」

「家に帰ったら、してあげますから」

「待てないよー」

後ろから両腕でギュッと肩を抱き締めたまま、今度は樟美の色白の頬つぺたに頬ずりをする。

樟美も口では天葉を嗜めるものの、首を動かして頬ずりし返してくる。

学生時代、正式に結ばれるより以前から続く二人の愛情行為。その行為がいつの時点で友愛から性愛へと変化したのか当事人にも定かでないが、これまで決して欠かしたことはなかった。

ところが、そんな熱い時間も束の間。

天葉は突然に腕を離して樟美の左横へ移動する。ほんの数秒の内の出来事だ。

「ぎげんぎげんよーうーうー！」

直後、店の外から響いてきた大音声が店の中で木霊した。

店内へ飛び込むように突入してきた人物は、頭頂部から飛び跳ねた茶髪のアホ毛をゆらゆら揺らして詰め寄って来た。

「ぎげんぎげんよう、月詩ちゃん。今日も元気だね」

樟美たちの前に躍り出た月詩がカウンターの上にバシツと両手を突く。

そのままいつものように何事か捲し立てるかと思いきや、どういうわけか、月詩は不思議そうに首とアホ毛を傾げてカウンター越しに天葉と樟美を見つめている。

「んんんんんん……？」

「月詩、どうしたの？」

「んー、何か不思議な感じですよ」

「何が？」

「周りの空気が不思議な感じですよ！ 天葉様、ここで何かありました？」
「別に変ったことは無いなあ」

素知らぬ顔して答える天葉。その実、内心では月詩の直感の鋭さに舌を巻いていた。さっきの行為、月詩自身には知られても特段困る要素は無い。だがしかし、月詩のパートナーに知られては具合が悪いのだ。

「月詩、店内では騒がないのよ」

案の定、茜が遅れて入店してくる。

以前、天葉は茜に対して「時と場所は弁えている」という趣旨の大見得を切っていた。その手前、自重したのである。

「ごきげんよう、あかねえ」

「ごきげんよう、くすみん。今日はクリスマス用の花を買いに来たの」

「クリスマス用なら、ミニツリーですか？」

「それもいいのだけど、今回はブーケにしようと思って」

クリスマスの木に見立てた鉢植えがミニツリーならば、木に見立てた花束はさながらミニミニツリーと言ったところか。

こちらはこちらで需要がある。お手軽で場所を取らないのは利点だろう。

「へー、ちよつと意外かも。月詩だったら大きいツリーを選びそうなものだけど」

そんな天葉の疑問に答えたのは月詩本人ではなく茜であった。

「大きいのは、もうあるのよ」

「えっ」

「大きいツリーも一本用意して、その上で花束も欲しいっていうわけ」

「それは……毎度ありがとうございます？」

などと話している内に、月詩が早速ブーケを見繕ってきた。白い包装紙の中に包まれていたのは青いバラ。見ようによっては紫色にも見える、落ち着いた色彩の花だった。

「あかねえにはこれ！」

「ふふ、じゃあ私も選びましょうか」

月詩が満面の笑みで手にしたブーケを見せてくると、茜も陳列棚の方に向かう。

迷わず真っ直ぐ、茜とはある花の前で立ち止まった。恐らくは最初からどれにするか決めていたのだろう。

「黄色のシンビジウム。これにするわ」

丸みを帯びた小さな花卉が花芯を包むように咲いた花。それは『飾らない心』や『誠実』といった意味を持つ。

こうしてカウンターのの上にブーケが二つ仲良く並べられるのだった。

「これってやっぱり、お互い贈り合うの？」

「ええ、そうよ」

「ふーん、茜たちもか」

会計を済ませた二人は仲良く並んで店を出る。片方の腕に買ったばかりのブーケを抱え、もう片方の腕を互いに絡み合わせて。

天葉たちはその後姿を見送った。

「何と言うか、見せつけてくれちゃって。ねえ、樟美」

「……………」

「樟美ー？」

休日であるということ差し引いても、この日は客入りが多かった。

夕方——と言っても時節柄既に薄暗いが——になってようやく、今度こそ本当に来客が途絶えたに違いない。天葉はそう考えてホッと一息吐いた。

ところが、何事にもフラグというものはあるようで。

またしてもアマノの敷居を跨ぐ人影が。

「お邪魔するわよー」

「邪魔するんなら帰ってね」

「何でよ」

いかにも勝手知ったる我が家の如き空気を醸し出しつつ、依奈が天葉と軽いジャブを交わし合う。

「やや後ろの方には壺も居た。壺は自らのパートナーと天葉の間に割って入るかのようになら進み出る。」

「すみません天葉様、こんな時間に。花を見たいのですが」

「いいよ、いいよ。分かってるよー。また二人で贈り合うんでしょ？ 分かってるよー」

「ええ、まあ……」

面と向かつて天葉からそう言われて決まりが悪くなったのか、壺は目線を外し、その後カウンターから陳列棚へと移動する。

樟美もそんな壺の傍に付いて一緒に花を見始めた。

「壺ちゃん鉢にする？ それともブーケにする？」

「そうね……折角だから鉢植えにしようかな」

「色は、やっぱり紫？」

「いや、別に紫って決めてるわけじゃないわよ」

「じゃあ、花言葉で選ぶ？」

「うーん……それもちよつと」

「花言葉、知られたら恥ずかしいもんね」

花選び、壺の方は中々白熱しているようだ。花屋としては嬉しい限りである。

一方で依奈はと言うと、カウンターの前から動かず、店内を軽く見渡した後で再び天葉に向き直る。

「今日は忙しかったんじゃない？ お店」

「まあね。幾らクリスマス前だからって、ちよつと予想外だった」

「予想外、予想外ねえ。それはこつちが予想外だわ」

「え、何の話？ 気になるんだけど」

依奈は訳知り顔で、頭を抱える仕草をする。

目の前でそんなことをされて、引つ掛からないはずがない。

「ソラのお店について、噂があるのよ。この時期ここで花を買って贈り合ったカップルは、一生添い遂げられるって」

「ああ、それなら小耳に挟んだことはあるよ。でもだからって、こんなにお客さんが増えるものかなあ」

天葉は尚も疑問が拭えない。そんな他愛ない噂だけで、この小さな店にそうそう人が集まってくるものだろうか。

「もしかして、自覚が無いのね」

依奈が目を細めてジトツとした視線を送る。

「あのねえ。ソラと樟美の仲が大変よろしいお陰で噂に信憑性が出て、それでお客が増えたのよ」

「そうかなあ。ちゃんと時と場合は弁えてるよ」

「確かに人前ではベタベタしてないんでしようけど。でも空気で何となく分かるのよ。『あつ、さつきまで良い雰囲気だったな』とか。ていうか、私たちが来た時もそうだったのよー!」

「えっ、そんなことはない、こともないこともないかも」

依奈に鋭く切り込まれた天葉が言葉を濁す。言われてみれば、心当たりが全く無いわけでもなかった。

助けを求めて天葉は愛しのパートナーの方を見やる。

ところが、樟美は壺の隣で戸惑ったような微妙な表情を浮かべていた。

「その、天葉姉様、わざと匂わせてるんだと思ってました」

「匂わせて……」

「私は、そのつもりでした。姉様に、女の子があまり寄つて来ないように……」

伏し目がちの樟美が躊躇いながらも心の内を明かしていく。

いじらしい。そう思った直後には、天葉の足は動き出していた。

「樟美〜」

「んっ」

正面から樟美に覆いかぶさり、背中に両腕を回して抱き締めた。

旧友とはいえ、すぐ傍に人目がある。そのため樟美は天葉の胸元に顔を沈め、赤く染まったところを見られまいと必死にしがみついていた。

「ちよつと、時と場合はどうしたのよ」

「いや、でもこれは、カップル向けのパワースポットと宣伝すれば、更に客足が増えるかもしれないね」

「壺も何言ってるの」

「口コミの力というのも侮れない。」

結局この日、お店を閉める真際まで、アマノから来客の姿が途絶えることはなかった。

最終話 日はまた昇る

12月末日。暦の区切り、一年の終わりを告げる日である。

世の多くの人々は、特別な日の特別な瞬間を祝うべく何かしら行動していることだろう。

しかし天葉と樟美に関して言えば、そんな世間の風潮はさて置いて、自宅のリビングに置かれた炬燵から動く気配が少しも無かった。

「今日は疲れました……」

「そうだねえ。年末だけあって、注文が立て込んだからね」

二人は炬燵の一边に身を寄せ合うように入っている。少々手狭だが、より暖かくなるのでプラスマイナス差し引きはむしろプラスだった。

「まあ、その代わり正月はゆっくりできるから。お疲れ様、樟美」

「はい。お疲れ様、です」

大晦日は、続く新年に備えて正月飾りの花が求められる日。天葉たちも店頭販売に配達に、フル稼働で働いていた。

無論、正月は正月で花の需要は続くのだが、アマノの場合は休業することになっていた

のだ。

そんなわけで、夜も深まったこの時分に、二人して背中を丸めて炬燵に籠っている。目の前の机上にはミカンの皮が数枚重ねられており、部屋のテレビからは取り留めの無いニュースが音量を控え目にして流れていた。

「樟美、ミカン要る?」

「もういいです」

天葉の手の平に載せられた鮮やかな橙色に対し、樟美は首を左右に振る。

大晦日の定番、年越し蕎麦は既に食べた。差し当たってやるべきことは思いつかない。

天葉も今はほとんど惰性で起きているに過ぎなかった。年の変わり目に寝てしまうのが、何となく勿体ないと思ったから。

微睡に負けない程度にテレビを見たり、樟美の頬を撫でてみたり。

そうしていると、ふと玄関のチャイムが天葉の耳へ飛び込んできた。

「こんな時間に……」

「大体誰か、予想はつくよね。樟美はここで待ってて」

天葉はモゾモゾと体を動かして立ち上がる。

炬燵と樟美の温もりが名残惜しくなるものの、それをどうにかこうにか押し止め、玄

関へと歩いていった。

「ソラ、樟美。お参りせずに家でゴロゴロしてるって、本当だったのね」

天野家のリビングにて、両手を腰に当てながら呆れたようにそう言ったのは依奈である。

依奈が見下ろす先では、天葉がそそくさと炬燵の中へ下半身を潜り込ませていた。

「だって今日はもう仕事で疲れたし」

「初詣はいいの？」

「三が日の間に行けばいいかなって」

「ものぐさね」

依奈の言うことも分かる。折角の大晦日なのだから、家の中で過ごすのは確かに勿体ないかもしれない。

だがそれはお互い様である。

「依奈と壺こそ、ここに居ていいの？」

「最初はお参りに行くつもりだったんだけどね」

「でもやっぱり、ごろごろしたくなっただけでしょ」

「ごろごろするとは言つてないわ」

「似たようなものでしょー」

天葉と依奈とで不毛な問答が繰り返される。

直前になって「やっぱりやめた」となつても無理もない話である。何しろ一番近場の神社でさえ、そこそこの距離があるのだから。

大学生とはいえ普段から教導官資格取得のために励んでいる壺を氣遣つて、依奈が休息を優先したとしてもおかしくはないだろう。

「まあ理由はともかく、二人とも早く炬燵に入りなよ」

樟美と肩を寄せ合い引つ付いたまま、天葉は二人の客人に促した。

「お邪魔します」

「仕方ないから、付き合つてあげましょうか」

壺は素直に、依奈は不承不承といったポーズを取りつつ、天葉たちの陣取る位置から見て左方と右方にそれぞれ腰を下ろす。ちょうど依奈と壺が向かい合つて座る形となった。

天葉と樟美みたいに、くつついて座つたりは流石にしない。あれは樟美ぐらい小柄だからできることであつて、依奈と壺ではギョウギョウ詰めになり休むどころではなくなるだろう。

「ミカン、食べますか？」

「頂こうかしら」

「ええ。ありがとう、樟美」

机の上で半ばオブジェと化していたミカンが客人たちに手渡された。

依奈はゆつくりと丁寧に皮を剥く。壺はテキパキと、それでいて几帳面に？く。

誰も一言も言葉を発さず、黙々とミカンの実を露わにしていく光景は、奇妙だが不思議と落ち着くものだった。

「あつ！ 見て見て、人が一杯。今行かなくて正解だったよ」

テレビに目をやった天葉が唐突に声を上げた。

画面には鎌倉府内のある神社が映っており、そこにひしめく人々の波が夜闇を物ともしない盛況ぶりを物語っていた。

「これを見てると、確かに足が億劫になるわねえ」

「そうですね」

依奈と壺のやり取りを聞いていて、天葉は一つ疑問を抱いた。

「尅はこういう行事、きつちりやる方じゃなかった？」

「無理に今日行かなくても、明日お参りすれば十分です」

「ふくん、そういうものか」

あつさりと後輩がそう答えると、天葉は少々意外に思う。

大人になったことでの余裕の表れだろうか。良い傾向だ。

「ほら、尅もこう言ってるし。ゆつくりしようよ、依奈」

「はいはい、だからこうしてミカンを食べてるじゃないの。……甘い」

一切れのミカンを咀嚼しながら、依奈は口元に手を当てる。

取り立てて高級な代物ではない。極々普通の一般的なミカンである。

寒い冬、炬燵に入りながら、静謐な夜更けに。そのように積み重なったシチュエー

ションが本来の味を引き立てているのだろう。多分、恐らく。

「そうだ。まだ今日の新聞、読んでなかったんだ。見せてもらってもいいですか？」

「ちよつと待つてね、尅っちゃん」

天葉が頷いたのを見て、部屋の隅にある本棚から樟美が新聞を取ってくる。

朝の内に一通り目を通した天葉から見て、特に大事は載っていないかった。

印象に残った記事と言えば、一つは東北地方の要衝である津軽要塞が解体されて、その資材が民生利用される件。解体に当たるのは、建設を請け負ったのと同じ業者——今

やスーパーゼネコンの一角を占めている白井建設であった。

そしてもう一つは、少し前まで陥落指定地域だった台北の復興事業に日米の資本が投下され始めた件。「自国の復興も途上なのに」という意見もあるが、日本も欧米からの資本投下を受けているので、何事も人のためならずというわけだろう。

印象に残ったニュースがどちらも良いニュースだったということは、即ち本日は良い日なのである。

平和だった。少なくとも天葉たちを取り巻く周りは。

故に気が付けば依奈も、すぐ傍の樟美も、うとうとと船を漕いでいた。

天葉が意識を手放すのは、それから間もなくのことである。

次に目を覚ました時、日付はとうに変わった後だった。

灯っていたはずの部屋の灯りは消えており、辺りは薄暗いものの、今が深夜ではなく明け方なのは何となくわかる。

年越しの瞬間を寝過ごしたのだ。

勿体ないと思う気持ちも無いでは無いが、過ぎてしまったことは仕方がないと、天葉は気分を新たにしていって仰向けになった体を起こそうとする。

ところが、起き上がれなかった。物理的に不可能なわけではない。自身の左肩に、樟美が顔を埋めて眠っている状態に気付いたからである。

「あつ、天葉様、ごきげんよう。客間のお布団、勝手に使わせて頂きました」

壺がドアを開けてリビングに入ってくる。そう言えば、彼女も依奈も先程から姿が見えなかった。

壺の顔はいつも通りキリツと引き締まっております、声も抑えているが口調はしつかりしている。寝起きとは思えない。

「ごきげんよう。壺は早起きだね」

「はい。依奈様は昨夜運んでおきました。天葉様と樟美は、その、くつついていたので……。炬燵のままですみません」

「いいよいいよ。ありがとね」

壺はぼつが悪そうに眉尻を下げている。

天葉もいつまでもこのままでは格好がつかないので、樟美を起こすことを覚悟して炬燵から抜け出ようと決心した。

天葉の肩が揺れたがために、くつついていた樟美も体を軽く震わせる。何度目にしても飽きることのない寝顔が、天葉の見つめていている前で、瞳と口をゆっくりと開ける。

「ふぁ……あ、朝?」

「おはよう、樟美」

「ごっ、ご飯、作りますね」

「ご飯もいいけど。その前に、ちょっと外に出てみない?」

寝起きで頭が回らないのか、慌てる樟美。

そんな樟美と壺に対し、天葉はカーテンに覆われた窓を指差した。

「ほら、依奈も呼んで。ね?」

「依奈様も、もうじき起きてくると思いますけど……そうですね、心配なんで起こしてきます」

天葉の目配せに気付いた壺がそそくさとリビングを出ていく。

少し申し訳ない気もしたが、それはそれとして、天葉は再び樟美へ向き直る。

無言でじつと樟美を見つめる。

樟美も最初は見つめ返してきたが、やがて壺の出でいったドアへ視線を送り、また天葉の顔を見て、またドアを見て、また天葉を見て、また天葉を見て。

数回そんなことを繰り返した後、樟美は意を決して天葉の唇へ口づけした。

「ご、ごきげんよう、天葉姉様」

「ふふ、ごきげんよう。壺の前だと恥ずかしいのかな」

「ううっ……」

「じゃあさ、依奈と壺にも横で同じことしてもらって、それなら恥ずかしくしないでしょ？」

「知りませんっ!」

炬燵から出て床にぺたりと脚を崩して座り込んだまま、樟美は膨れてそっぽを向いた。

「揶揄い過ぎちやった、ごめんね」

そっぽを向かれたその頬に、天葉は謝りながらキスをする。

たとえ喧嘩——言うほど喧嘩ではない——をしても、すぐに素直に謝るのが夫婦生活ふうふうの秘訣なのだ。

「ごめん……チュッ……ねえ」

「んっ」

キスをしたり、頬ずりしたり、キスをしたり。5セットしたところでやっと樟美からお許しが出るのであった。

「結局、何もしなかった……」

四人で玄関をくぐり抜けて、家の外の小さな庭までやって来た。

四人とも部屋着の上から何かしら外套を羽織っている。それでもまだ寒いぐらいだが、今はその寒さすら清々しさに変換される……ような気がした。

ところがそんな中でも、依奈には不満があるようで。

「大晦日の夜にしたことが、せいぜい炬燵に入ってミカンを食べて、ちよつとお喋りしただけってどうなのかしら」

どうやらあのまま寝落ちしてしまったのを悔やんでいるらしい。

起きていたからといって、家の中で何か大層なことができたとも思えないが、こういうのは気分の問題なのである。

「まあまあ、たまにはこんな年越しも悪くないんじゃない？」

「そんなこと言っていると、来年も再来年も似たような年越しになるわよ」

「来年の事を言えば依奈が笑う」

「誰が鬼か」

冗談めかして言う天葉だが、実際、次の大晦日や次の次の大晦日がそうなったとしても構わないと思っていた。

何か特別な年越しにしたいなら、したくなつた時に実行すれば良いのだから。

それこそ、次の次のそのまた次の大晦日あたりにでも考えれば事足りる。

「焦らなくなつて、正月は何度でも来るんだから」

一昔前ならば無責任と咎められかねない天葉の言葉。次の年を、明日を無事に迎えられるとは限らないからだ。

だが今は違う。

「そうね。一寸先が闇になるような、そんな後輩たちには育ててない」

依奈もそれには同意した。

現役時代、数多くのリリィを導いてきた彼女が言うと言説得力がある。

「それに、これからは壺が育ててくれるしね。ね、未来の教導官殿？」

「ハードルを上げないでください」

依奈が壺の左腕に抱き付いて寄り掛かる。

台詞に反し、壺も満更でもなさそうだ。

ちなみに天葉と樟美は外に出てきた時から既に腕を絡ませ合っていた。

上に羽織つても寒いものは寒い。もっとも、寒くなくても引つ付くのが彼女たちなのだが。

千、千、千、千

薄明かりの中、遠くで小鳥の囀りが響く。それは朝の到来を告げる音だ。

「天葉姉様、初日の出、です」

樟美に釣られて天葉は東の方角を見やる。

住宅街の一角なので絶景とは言い難かったが、白んだ空は太陽の存在を確かに伝えていた。

今日も明日も来年も、日はまた昇る。